

三成同志を
糾合す

以てす。吉隆、其非計を極言す。三成、肯せず。吉隆、乃謀れ去りて、低回すること、之を久しくして曰く、「吾れ治部と共に太閤に仕ふ。舊相好し。今、其事克たざるを知りて、之を棄つるは義に非ず」と。乃還る。三成、大に喜び、長束正家と皆大阪に赴き、増田長盛を見て議を定む。秋、遂に書を遠近に移して曰く、「内府、罪あり。嗣君、命じて之を討たしむ。苟も太閤の恩誼を念ふ者は、直しく來りて力を戮すべし」と。毛利輝元以下の侯伯、來り會する者四十餘人。時に東西諸侯の妻子、皆大阪に在り。三成、之を城中に收め、輝元、長盛をして、大阪を守らしめ。浮田秀家、小早川秀秋、津島義弘等は、四萬人に將として伏見城を攻め、小野木重勝等は、二萬人に將として田邊城を攻め、毛利秀元は、長束正家、僧惠瓊と、三萬人に將として阿濃津を攻め、京極高次等は、一萬人に將として北陸を徇へしむ。吉隆は敦賀に在りて、北莊、大正寺、小松の三城を招きて之を下す。前田利長は、弟利政と、徳川氏の爲に攻めて大正寺を抜き、遂に北莊を攻めんと欲す。北莊、援を敦賀に乞ふ。吉隆、自將として赴き援けんとす。或人曰く、「堀尾氏の兵、府中を守らる。而して我が後に在り。先これを取らざれば、則進退皆難からん」と。吉隆曰く、「北莊、陥らば、則小松は孤立なり。府中の若きに至りては、則必しも取らざるなり。亦取る可からざるなり。即取る可きも、兵を分ちて之を守らざる可からず。分たば則兵寡し、寡を以て衆に對す。是れ難と爲すのみ。且、彼れ必敢て我を要せず。是れ我れ敵をして城を守らしむるなり。我れ既に北兵を卻けて、諸城を存せば、則彼れ攻めずして下らん」と。即夜五更、馳せて北莊に至る。利長の姉夫中川宗伴、京師に在り。將に北陸に赴かんとす。吉隆、要して之を執へ、書を爲りて利長を給かして曰く、「内府、西上す。將士多く之に叛き、大阪の兵、逆へて之を美濃に擊ちて、之を走らす。遂に舟師を發し、將に加賀を取らんとす。公、宜しく早く之が備を爲すべし」と。利長、書を得て疑懼し、兵を引き退く。府中、果して遂に吉隆に降る。高次等の至るに會し、兵を合せて大正寺を復し、遂に越前を定め、守を置きて南す。吉隆、三成をして、織田秀信を招かしむ。秀信、岐阜を以て降る。是に於て三成、諸將を導きて大垣に至る。秀家等、伏見を抜きて來り

吉隆

家康下野に
在りて變を
開く

會す。徳川公、下野に至り、變を聞きて爲に驚かず。然れども諸將の質の大阪に在るを以て、頗之を疑ひ、人をして其去就を問はしむ。諸將皆奮ひて、三成を撃たんと欲す。乃誓ひて曰く、「公、苟も太閤の約を渝へず。善く嗣君を視ば、則僕等力戦して必治部を梟せん」と。諸將、乃先發し、首として岐阜を攻めて、之を下す。三成、島津義弘と之を援へども及ばず。東軍、赤阪に陣す。秀家、夜、之を襲はんと欲す。三成、聽かず。秀元、阿濃津を抜き、來りて南宮山に陣す。秀秋、來りて松尾山に陣す。初め秀頼、生母淀君と大阪に居り、而して嫡母淺野氏、北、應と稱して、京師に居り、庶母京極氏、松城君と稱して大津に居る。北、應の兄を木下家定と曰ふ。家定の子を秀秋と爲す。兵起るに及び、北、應、人をして秀秋に戒めて曰く、「内府、秀頼に不利ならば則力めて之を拒け。然らずば、則之に負く勿れ」と。秀秋、遂に款を江戸に送る。松城君の弟を京極高次と爲す。高次、封を大津を受く。徳川氏の嗣子と、並に淀君の妹を娶る。又款を江戸に送る。岐阜陥るに及びて、吉隆、北陸の諸將を召して、大垣に會す。高次、後れて發し、馳せて大津に歸り、兵を擧げて徳川氏に應ず。立花宗茂、筑紫廣門は、大垣に赴かんとして、石部に至る比、之を聞き、返りて勢多に陣す。毛利秀包等の大阪より來るに會し、則兵を合せて高次を攻む。淀君、二女を遣し、松城君及び高次の夫妻に諭さしむれども肯せず。宗茂等、攻めて其郭を奪ふ。而れども城未だ下らず。

徳川公、兵を分ちて二と爲し、自、一軍に將として海道よりし、其嗣子秀忠をして一軍に將として山道よりせしめ、彈正少弼に命じて、之を助けしむ。關西、風に従ひて靡き、先を争ひて款を送る。山道の軍、進みて小室に至り、眞田昌幸を招く。初め昌幸、會津に赴き、犬伏に至りて、大阪の檄至る。長子信幸曰く、「吾れは關東の殊遇を受く。請ふ、東せん。西軍、即敗れなば、吾れ父弟の爲に命を乞はん」と。幸村曰く、「太閤の舊誼背く可からず。寧西して死すとも、東して生きじ」と。昌幸曰く、「東せん」と欲する者は東せよ。西せん」と欲する者は西せよ。而れども我れは西に與する者なり」と。乃、信幸を遣し江戸に之かきしめ、而し

北、應
松城君

家康兵を二
分して進む
【小室】信濃
【犬伏】上野
眞田幸村

【上田】信濃

て自幸村の兵三千を以て上田に歸る。東軍三萬、小室に陣す。信幸、從ひて其軍に在り。書を以て其父弟を招けども肯せず。居ること四日、東軍來りて上田を攻む。城、川を帶ぶ。昌幸、其上流を壅ぎ、兵を險阻に伏せ、出で戦ひ、伴りて走る。東軍、争ひ追ひて、伏に陥りて亂る。乃其壅を決る。水大に至る。東軍、繼ぐ能はず。幸村、突騎を以て之を燈め、遂に大に其軍を破り、進むを得ざらしむること三日。其海道の軍、之を俟ちて、亦遅回すること數日。其久しく至らざるを以て、乃獨進みて赤阪に陣す。秀家、三成と計り亦伏を設けて戦を挑み、其前軍を敗りて退く。

關原合戦

【松尾】美濃

【悪疾】癩疾

是に於て、諸將大に戦を決せんと議す。秀家、吉隆、固く大垣を守りて、田邊、大津の兵を俟たんと欲す。島津義弘、夜、赤阪を襲はんと欲すれども、三成、其衆を恃みて皆聽かず。出でて關原に戦はんと欲して、夜、南宮に赴き、秀元に東軍を夾み撃たんことを請ふ。秀元、素より款を東軍に通ず。伴りて之を諾ふ。三成、遂に松尾に赴き、秀秋を誘属す。秀秋、已に東軍と内應を爲さんことを約す。亦伴りて之を諾ふ。吉隆坐して、其左右に戒めて曰く、「敗るゝに及ばず、速に我が頭を斬れ」と。且日、兩軍大に關原に戦ひ、辰より未に至る。東軍數卻く。而して秀元、秀秋、みな觀望して戦はず。東兵、窪島某、馳せて徳川公に白して曰く、「秀秋、約に背くに似たり。請ふ、更に計を爲せ」と。徳川公、驚きて曰く、「我れ悔ゆるは小兒の爲に賣らる」と。窪島をして、松尾山に向ひて礮を發してこれを促さしむ。黒田長政も亦、人をして秀秋を責めしむ。秀秋、乃、兵八千、銃手六百を以て、山を下りて吉隆を撃つ。吉隆、怒り、呼びて曰く、「豎子恩に背き義を忘る。舍す可らず」と。六百人を以て、直に其麾下を衝く。戸田重政、平塚爲廣、吉隆を助け、大に秀秋を破り、東軍の監使奥平貞治を斬る。而れども脇阪、朽木、小川、赤坐等、皆秀秋に應ず。東將藤堂高虎、織田長孝等と、三面より之に逼る。重政、爲廣、みな戦死す。吉隆、隊長湯淺五介、退きて之を吉隆に告ぐ。吉隆曰く、「吾れ以て死す可し。敵に吾が元を傳へしむる勿れ」と。遂に自殺す。五介、之を

吉隆秀秋と戦ふ

吉隆自殺す

義弘

直政

【鱈尾嶺】近江
三成伊吹山に匿る

吉政三成を捕ふ

到ねて、侍臣某をして、之を泥中に藏さしめ、而して駢びて高虎の陣を冒して死す。吉隆の二子吉胤、吉行姪頼繼、みな力戦し、返りて空轡を見て、相泣きて死せんと欲す。從者之を諫む。乃走りて敦賀を守らんと欲す。肯て納るゝ者なし。遂に大阪に走る。頼繼、尋いで病みて死す。東軍、秀秋の内應を以て、勢に乗じて齊しく進む。西軍、遂に大に敗る。秀家、怒りて秀秋と決闘せんと欲す。明石守重、諫めて曰く、「君は元帥たり。何ぞ自匹夫の行を爲すや」と。秀家曰く、「吾れ翅秀秋を惡むにあらざるなり。輝元、親出でず。元も亦兩端を持す。事知る可し。吾れ一死もて太閤に報ゆる有らんのみ」と。守重曰く、「縦諸將みな叛くも、君宜しく獨其國に據りて、以て嗣君を輔く可し。徒に死して何をか爲さん」と。秀家、乃走る。其將長河内某、之に死す。秀秋、義弘に薄る。義弘、撃ちて之を走らす。曰く、「吾れ敗ると雖、肯て卻き走らす」と。殘兵五百を以て東軍に薄りて南す。東軍、爲に動く。東將井伊直政等追躡す。又撃ちて之を走らす。敵衆、尾して止まず。阿多盛淳、義弘に代りて死す。義弘、間を得て、鱈尾嶺を踰えて去る。三成、走りて伊吹山に匿れ、從者を散じて曰く、「吾れ大阪より航して、薩摩に赴き、以て再舉を計らんと欲す。汝等宜しく伏匿して、以て時を待つべし」と。三成、遂に探拾して饑に充て、行くこと四日、泄を患ひ、石橋村に至り、知れる所の農夫某に就く。某、これを舍匿す。或人、某を戒めて曰く、「聞く、子は治部を匿すと。今、田中吉政、井口に在り、之を索むる甚急なり。事露れなば、子、必、禍に逮ばん」と。農夫曰く、「之なし」と。三成、障を隔て、之を聞き、農夫に謂て曰く、「吾れ遂に脱るべからず。汝盍ぞ出でて告げざる」と。農夫、之をして遁れ走らしめんとす。三成曰く、「吾れ病めり。寸歩する能はず。汝を累すを恐る。汝第速に自首せよ」と。農夫、乃、井口に之きて吉政に告ぐ。吉政、卒を遣して之を捕ふ。初め三成、權を握るや、吉政、之に事ふること甚、恭し。三成、既に捕へられて、吉政を呼ぶこと故の如し。曰く、「吾れ先君の知遇に報いんと欲して、上杉、毛利等と共に事を擧げ、一敗此に至る。命なり。願くば速に自殺するを得ん」と。吉政、之を徳川氏に請ふ。乃醫に命じて其疾を治せしむ。其父晴茂、兄重成、子重家、姪頼成、皆澤山に在

淺野幸長

りて自殺す。長束正家、走りて水口を保つ。東兵、來り逼りて、之を誘出して、迫りて自殺せしむ。僧惠瓊も亦、捕へられ、我東營に囚せらる。諸將帥、争ひて三成を折辱す。獨、淺野左京大夫、之を視て惘然たり。其病襖を脱て之を衣せて曰く、「子は我が仇なりと雖、同じく豊臣氏の臣たり。吾れ其困に乗じ、加ふるに無禮を以てするに忍びず」と。徳川氏、之を聞きて、心に大夫を憐憫す。

宗茂

義弘、南に走るや、伊賀、大和を経て、行土兵を破りて大阪に至り、輝元、長盛と俱に城を守らんと欲す。二人答へず。乃其質を取りて航して薩摩に歸る。是より先、田邊、大津、みな下る。立花宗茂、兵を引きて東し、草津に至りて敗を聞き、還りて京師に入り、人をして木下家定に謂はしめて曰く、「貴息の事、言ふ可からざるなり。子、猶嗣君を右けば、則請ふ、共に大阪を守らん」と。家定曰く、「子、先往け」と。乃門を閉して自守る。宗茂、遂に大阪に至り、輝元に謂はしめて曰く、「公、苟も城を守らば、願くは一面を打がん」と。輝元曰く、「議して而して後に答へん」と。宗茂、罵りて曰く、「今日復たをか議せん」と。乃、その國に歸らんと欲す。將士曰く、「公の豊臣氏に酬ゆる所はは足れり」と。因りて徳川氏に降るを勸む。乃降を送り、亦航して柳川に歸る。秀家、近江を経て、土兵に困しめられ、獨、二人を從へて土窟の中に竄る。捕者至ると聞き、自殺せんと欲す。從者之を止め、其寶刀を請ひ、出でて東軍に告ぐるに、秀家、既に死するを以てし、刀を獻じて證と爲す。秀家、大阪に至り、其國已に覆没すと聞き、薩摩に走る。其妻前田氏は、利長の妹なり。加賀に大歸す。後數年にして、利家、問ひて其實を得、之を江戸に告ぐ。乃前に告げし者を責む、告、し者死せんと請ふ。之を釋す。島津忠恒、請ひて秀家の死を宥し、八丈島に流す。前田利政は、能登に據り、九鬼嘉隆は志摩に據り、並に東軍に航す。利政は籍を除かれ、嘉隆は自殺す。

秀家

是の役や、小西行長、首として三成に應ず。三成、其事、更るを以て、之に倚頼す。行長、人と爲り自殖して士に薄し。士之が用を爲すを樂まず。敗るゝに及びて、陣亂れて禁す可からず。乃走りて糟川に至り、僧

【糟川】近江

三成等斬ら

林藏主と云ふ者に逢ひて曰く、「吾は攝津守なり。吾れ汝に徳せん」と。僧曰く、「公、蓋ぞ自刃せざる」と。行長曰く、「吾れ耶蘇教を奉ず。自刃す可からず」と。僧乃執て之を告ぐ。是の歳冬、三成、真瓊と、皆京師に斬らる。

加藤清正、初め三成の必事を擧ぐるを知りて、徳川氏の東行するを止むれども聽かず。乃其國に歸る。大阪に檄するに逢ふ。曰く、「是、倭豎、幼主に託して以て其私を濟すなり」と。乃兵を發して小西氏の城邑を攻めて、盡く之を并す。黒田孝高、近國に攻略するに會ふ。因りて兵を合せて筑紫廣門等を降し、遂に薩摩に臨む。島津義久は已に徳川氏に降る。森勝信、其弟勝永は、小倉を出で、走りて土佐に匿る。上杉景勝は、伊達政宗、最上義光と戦ひて之に勝つ。佐竹義宣、觀望して出でず。上國の敗を聞くに及びて、皆徳川氏に降る。

徳川氏既に捷つ福島正則

日岡關

是より先、徳川氏既に捷ちて、將に京師に入んとす。諸將、先進みて大津に至る。福島正則、議して曰く、「吾が輩、三成の事を擧ぐるは、郎君の意に非ざるを知る。故に内府を右けて之を討つ。今、三成、既に敗る。内府、或は遂に郎君に不利を謀らば、則吾れ死を以て之を拒がん」と。淺野、加藤等、皆之を然りとし、乃京師に入る。徳川公、大津に至り、關を日岡に置き、其臣伊奈圖書を以て、之を守らしむ。正則、使を大津、使し、關吏に辱めらる。使者、復命して自殺す。正則、怒り、其首を以て井伊政直に贈る。政直、驚き、關卒數人を斬りて之を謝す。正則、愈怒りて曰く、「百卒一士に直らず。必圖書の頭を得ん。如許されず。ば吾れ將に我が爲さんと欲する所を爲さんとす」と。圖書之を聞きて自殺す。既して徳川公、大阪に入り、秀頼を問はずして、遂に大に慶讓を行ふ。毛利輝元の六國を削り、増田長盛を高野に放つ。眞田昌幸、子幸村、亦高野に遁る。秀秋の功、最大なるを以て、浮田氏の故地に封す。尋いで狂を病みて死し、國除かれ、其父家定も邑を削らる。兄勝俊、利房、皆封を奪はる。兄延俊、獨豊後に邑す。

七道將士江
戸に會す

【岸和田】和
泉

八年
家康大將軍
と爲る

十年

家康、秀頼
の來見を促
す

十三年

金馬
十五年
方廣寺再建

是の時に當りて、徳川公の威權益熾なり。七道の將士、皆江戸に會し、其孥を留めて質と爲す。而して秀頼、獨攝津、河内、和泉の六十餘萬石を食む。初め片桐且元、小出秀正、諸奉行の事を擧ぐるを憂ふ。而れども制する能はず。東西の軍未だ接せざるとき、二人、亟に使者を發して、關東に赴かしめ、其意を分疏せんとす。諸奉行、之を要して阿濃津を攻めしむ。使者も亦、怯避の嫌あるを恐れて終に之に従ふ。徳川公、怒る。秀正、退きて岸和田に居り、尋いで病みて卒す。

且元、獨傳たり。心を盡して輔導し、未だ嘗て左右を離れず。

八年三月、徳川公、大將軍となる。四月、秀頼、内大臣に陞り、從一位に叙せらる。七月、將軍、其孫女を以て秀頼に妻す。且元に命じて之を迎へしめ、大阪をして、且元に封萬石を加へしむ。且元、嗣君の幼なるを以て、辭して受けず。尋いで江戸に如く。將軍、面して、封を辭する勿れと諭す。

十年四月、秀頼、右大臣に遷る。將軍、職を其嗣子秀忠に讓る。五月、前將軍京師に在りて、北廳に諷して、秀頼をして來り見えしむ。淀君、母子相依り、分離するを欲せず。又其變あるを恐れて、固く辭して遣らず。

十三年二月、秀頼、痘を患ふ。福島正則、安藝より馳せ至り、日夜看護す。是より先、正則、結城秀康に謂て曰く、「公は太閤の養子、大阪の郎君に於ては兄弟たり。將軍百歳の後、公善く郎君を遇せよ。老奴も亦、當に力を竭して周旋すべし」と。秀康、其異志あるを疑ひて、之と絶つ。

初め秀吉、金馬數十を造る。一馬は銀金十枚に當る。之を大坂城中に藏めて、軍須に備ふ。十五年、秀頼、東旨を以て、再方廣寺を興し、以て先志を繼ぎ、且元を以て役を監せしむ。費す所鉅萬なり。多く金馬を鎔して費に充つ。

是の時、關東、工役數起る。福島、加藤、淺野、池田の諸家、毎に其役を助く。清正、江戸に起くとき、多く士卒を率ゐる。又必過りて秀頼を省る。因りて邸を大阪に置くこと故の如し。凡邦俗、男子必其親將を刺

清正三諫を
退く

十六年

秀頼二條城
に入る

(加藤清正
肖像)

清正卒す



る。而るに清正、長髯自喜ぶ。前將軍、一親將をして、其私を以て之に謂はしめて曰く、「予を以て公を觀るに去る可き者三あり。髯一なり。大阪の邸二なり、東行の從兵三なり」と。清正曰く、「吾れ戎服して銅面を着く。髯ありて之が藉と爲せば、則肅然として搖撼の患無し。大阪の邸を撤するは是れ太閤の舊誼を弁つるなり。兵を以て自從へすば、緩急事に及ばず。皆去る可からず」と。

十六年三月、前將軍、京師に在りて、織田長益をして來り諭して、秀頼を招見せしむ。淀君肯はず。北廳、清正及び淺野左京大夫をして之を促さしむ。二將、因りて啓して曰く、「臣が輩、死を以て郎君を守らん。必慮ること無けん」と。且元も亦、京師より馳せ還りて、之を苦諫す。淀君、乃、秀頼を遣す。二十八日、淀を溯りて京師に入る。二將、弓銃を以て岸を夾みて北す。福島正則、疾と稱して大阪を守る。前將軍、其二子義直、頼宣をして之を東寺に迎へしむ。二將以下二十一人、徒歩して輿を護り、二條城に入る。前將軍、出でて之を門に迎へ、正殿に相見る。前將軍は南に郷ひて坐し、關東の將士、及び諸侯伯は左右に擁衛す。秀頼は北に郷ひて坐す。二將、其後に在り。秀頼、前將軍に贈るに、名刀二口、駿馬一匹、黄金三百枚、及び錦鍛若干を以てす。其公族、將領に皆遣る所あり。前將軍、答ふるに、二刀、三鷹、十馬を以てす。饗畢る。清正曰く、「淀君、歸を遲つ。請ふ、辭せん」と。前將軍、其女婿池田輝政をして、酒を三將に賜ふ。既に罷む。秀頼を扶け、出で、北廳に謁し、豊國廟を拜し、方廣寺の役を視て、伏見より舟に上る。清正酒を獻じて賀す。其邸に歸り、短刀を懷より出し、泣きて曰く、「吾れ今日、聊太閤の恩に報ず」と。四月、義直、頼宣、大阪に來り、秀頼の北上に報ず。秀頼、迎へて之を饗す。

六月、清正、病みて卒す。清正、嘗て人に謂て曰く、「前田利家、晩く儒學に志し、吾れ及び浮田秀家、淺野幸長を招き、語次に論語の託孤寄命の

十八年
大野治長

十九年

方廣寺成る

鐘銘

板倉勝重
片桐且元

章を擧ぐ。我れ爾時、其何の謂なるかを知らざりしなり。乃者讀みて之を思ふに、略曉る所あり。今の世に當りて、此語を念はざる者は、恐らくは不義に陥らん」と。清正、既に卒し、淺野父子、相繼いで病みて卒す。十八年、秀頼、東旨を以て、片桐且元、大野治長に、祿各五千石を賜ふ。且元、木村重成、薄田兼相、及び七隊長と、遺命を以て秀頼を保護し、關東に服事すること甚謹む。而して治長は淀君の乳母の子なり。織田長益は、淀君の季父なり。皆親信せられ、寔且元と相軋る。十九年正月、彗星、東方に見る。二月、大阪の天主閣烟起る。衆趨り救へば則無し。韓人李文長をして之を筮せしむ。良の益に之に遇ふ。曰く、「兵を尋るて疆を失ひ、其貞良を喪ひ、我が殺郷を敗る」と。再筮して臨の坎に之に遇ふ。曰く、「人面鬼口、長舌斧の如く、珊瑚を斷破し、殷商後を絶つ」と。秀頼、大に懼れ、巫に命じて之を穢はしむ。

四月、方廣寺成る。乃、洪鐘を鑄る。東福寺の僧清韓に命じて之に銘せしむ。五月、片桐且元を遣して駿河に赴き、成を告げて慶を請はしむ。前將軍曰く、「右府、願主たり。宜しく親往きて之を慶す可し」と。因りて其親臣本多正純に命じて、女を以て且元の婦と爲さしめ、慰勞して遣歸す。且元、大に喜びて復命す。八月三日を下して、公卿以下皆會す。四方の民を縱して儀を觀しむ。將に行を發せんとす。會、前將軍、鐘銘の稿を覽て大に怒る。曰く、「銘に國家安康の句あり。是れ我が名を載るなり。序に、大小の釋迦、迭に主伴と爲るの語あり。是れ我に代らんと欲するなり。秀頼、何の意ぞ。乃敢て我を誣ふか」と。徳川氏の京尹板倉勝重をして、馳せて之を且元に告げ、其慶會を停めしむ。且元、大に驚きて曰く、「是れ右府の知る所に非ざるなり。之を清韓に託し、偶然此に及ぶのみ。臣、不學なり。成りて即工に附す。罪逃るゝ所なし、今、大儀成るに垂として、萬衆已に聚る。而るを遽に之を停めば、恐らくは民の耳目を驚かさん。伏して願くは且に禮を畢へ、尋いで銘文を毀滅し、然る後、臣、甘心して誅に伏すとも、悔母きなり」と。勝重肯せずして曰く、「是れ詛を成すなり」と。遂に儀を停む。物情驕然たり。且元、召して清韓に問ふ。清韓、服せず。

【鞠子驛】駿河

淀君二女を贈る

且元二女と議す

三策【婦翁】秀忠

淀君怒る

乃、清韓をして、駿河に赴きて陳謝せしめ、而して自其弟元重、大野治長と繼ぎて之に赴く。前將軍、清韓を執へ、板倉重昌に命じて京師に如かしめ、五山の僧をして銘文を註疏せしむ。僧多く其詛を證す。且元、鞠子驛に至り、留りて敢て入らず。九月、命あり。治長を遣歸し、而して、獨、且元を召して之を詰責す。且元、陳謝すること甚力む。淀君、且元等の見るを得ざるを聞き、其乳母大藏、尼正永とを遣して赴き謝せしむ。二女專銘辭を辯せんと欲して、急に其句讀を習ひ且誦し且行く。至れば則召し入れ、温言慰藉して、復銘辭に及ばず。江戸に往きて、夫人淺井氏を省せしむ。二女大に喜びて意外に出づ。既にして駿河に還り、且元と、皆歸を告ぐ。之を許す。二女、答書を請ふ。曰く、「既に之を面諭す」と。乃皆辭して途に上る。命あり。獨、且元を留め、本多正純、僧天海をして之に言はしめて曰く、「將軍の意、終に解く可からず。右府、何を以て信と爲し、其他なきを表すや」と。且元曰く、「願くは教を受けん」と。二人答へず。且元曰く、「請ふ、江戸に赴きて將軍の旨を取らん」と。二人入りて白す。曰く、「將軍の意も亦、我と同じきのみ。汝、宜しく歸りて之を熟籌すべし」と。且元、遂に辭し去り、馳せて二女に土山驛にて及ぶ。二女、乃悉く之に語るに、前將軍、懇諭の狀を以てす。曰く、「國事復慮るに足る者莫し」と。且元曰く、「吾が聞く所は、則大にこれに異なり。前將軍、我に逼るに右府の信を表すを以てす。吾れ其意を揣るに、蓋し三策あり、淀君、東して妹氏と同居するは、上策なり。右府往きて婦翁に依るは中策なり。大阪を避け他に徙るは、下策なり。三策一を行はば、庶幾くば無事ならん」と。二女言はず。退きて相言て曰く、「前將軍、豈此に至らんや。是れ市正、我が君を賣らんと欲するなり」と。密に書を馳せて大阪に告げて曰く、「且元の形迹疑、可し」と。且元、之を知らざるなり。二女をして、先還らしめ、自京師に入り、板倉勝重と事を議す。淀君、二女の報を聞き、憤恚して曰く、「吾れ太閤の妾なりと雖、右府に於ては生母たり。何ぞ關東に屈辱せられんや。寧右府と城を枕にして死せん」と。乃、且元を誅し、遂に兵を擧げんと欲す。治長、長益、力めて之を贊く。已にして且元、至り、秀頼に謁して三策を陳ぶ。秀頼、之を淀君に稟す。淀君、人をして且元、諭さ

淀君讒を信

兵士片桐氏に集る

且元述懐

【壯】三十歳
茨木城

しめて曰く、「後日を俟ちて面議せん」と。期に至り、且元、朝腹して將に出でんとす。會其臣小島某、外より來り告ぐ。曰く、「淀君、讒言を信じ、公、關東に貳ありと猜ひ、兵を伏せてこれを要し、遂に大事を擧げんと欲す」と。且元、大息して曰く、「噫、年少の輩、我が君を誣誤し、自滅を速くのみ」と。治長、内旨を傳へて之を召すこと甚急なり。且元、遂に疾と稱して出でず。治長、謀泄れたるを知り、懼して曰く、「彼れ素より管鑰を掌り、城内の有無を諳す。即兵を起して城を奪は、悔の可からざるなり。先發して之を誅するに若かず」と。乃七隊長をして起きて、之を攻めしむ。七隊長、皆肯はずして曰く、「市正は忠勇比なし。之を誅せば、是れ嗣君の手足を絶つなり」と。是に於て、二城大に擾る。兵士の片桐氏に聚る者三百餘人。治長、之を患へ、其兄弟を離間せんと欲し、元重に諭して且元を攻めしむ。元重答へて曰く、「家兄、誠に携貳を懐かば、吾れ將に大義、親を滅さんとす。必しも公等を煩さず。公等、忠臣を忌害し、又人をして双を同氣に推さしむ。未だ令を奉ずる能はざるなり」と。秀頼の近臣今木某、潜に來りて且元に説きて曰く、「内城の八門、公其六を管す。今夜、兵を潜めて城を奪ひ、治長の兄弟を逐ひて、命を關東に請へ。關東猶釋さずば、則我が君を翼けて兵を擧げんのみ。願くは公、速に之を斷せよ」と。且元、懇願して曰く、「吾れ獨讒人の來り攻むるを待ちて自殺せんと欲するなり。苟も公の言ふ所の如くせば、則長く反名を被らん」と。因りて部下に令して曰く、「即し戰に及ぶも、矢を内城に擣くる勿れ」と。明日、七隊長、且元を諭し、質を納れ兵を弭め、退きて其邑に就かしむ。且元、之に従ふ。

十月朔、治長と質を交へ、盡く城門の管鑰を獻じ、事を致して去る。七隊長、送りて大和川の上に至り、質を還して訣飲す。且元曰く、「吾れ苦心して籌を運し、豊臣氏を利せんと欲す。吾が上策にして聽されば、吾れ則地を請ひて第を江戸の郊に築き、故に其規模を宏にして、以て數年を延べん。我が君未だ壯ならず。前將軍、大に蓋す。吾が策亦善からずや。區々の心、未だ盡く明すに違あらず。乃卒に此に至る」と。因りて相擁ひて泣哭し、願望して別る。且元、遂に其邑の茨木城に歸る。遠近、騷擾す。前將軍、遂に令を天下

治長建議

諸方の士來り集る

【竹範】竹篋

大阪の防禦

幸村建議

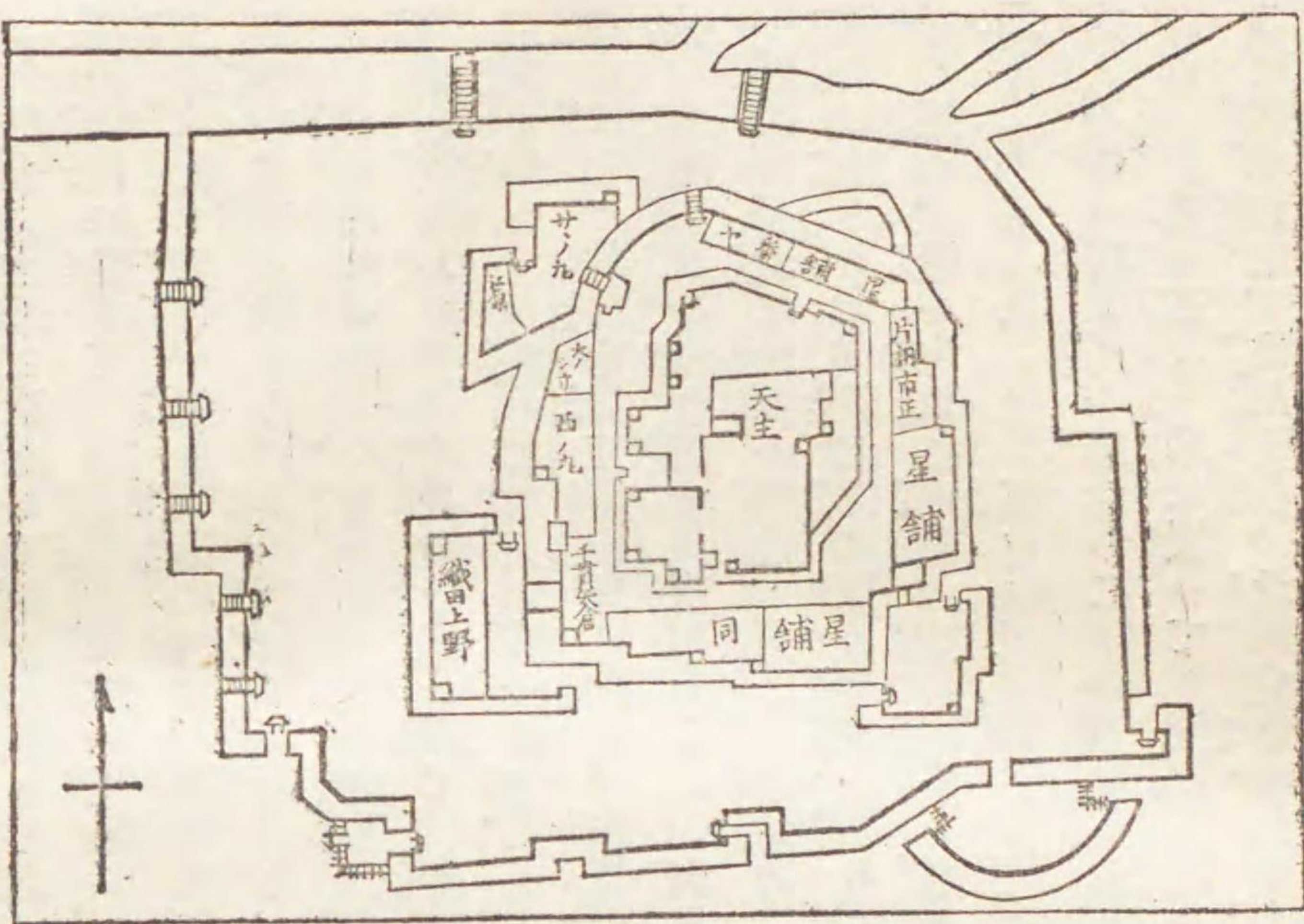
に下して、共に大阪を攻めしむ。秀頼、諸將を召して拒守を議す。是より先、七隊長、更、駿河に候す。治長等、之を疑ひ、頗其兵を收む。隊長皆怨望す。是に於て、出でて其議に參せず。速水守久、之を和解す。乃出づ。治長、建議して曰く、「宜しく急に事を擧ぐべし。天下、比年、土木に苦しむ。擧りて皆亂を思ふ。西の諸侯に至りては、驟皆先君の恩澤に浴す。誰か來り援けざる者ぞ」と。遂に城下及び界浦の漕粟、及び火藥を買ひ、櫓を西方に移す。關原の敗後、所在に潛匿する者、若くは諸國の罪を獲て亡命せし者、先を争ひて來り聚まる。眞田寺村は高野より、長曾我部盛親は京師より、後藤基次は南都より、森勝永は土佐より、其餘内藤政勝、小倉行春、明石守重、御宿政友、塙直次、仙石宗也、岡部則綱、山川賢信、長岡興秋、北川宣勝等數百人なり。治長、竹篋を以て、金馬を鎔して、兵を募る。飢寒の士、姓名を偽り募に應ず。旬日に五萬を得たり。而して有土の將士は一人も應ずる者なし。秀頼、手書して諸國主を招く。前田氏以下、皆使者を縛し、其書を以て徳川氏に獻す。治長等、意大に沮す。而れども中止す可らず。乃隱言して曰く、「諸侯伯、皆陰に款を我に通す。東軍來らば、夾みて之を撃たんのみ」と。遂に守備に修む。壘の高さ丈餘、十歩に一樓あり。北に淀河を帶び、長柄、神島の二島に柵し、東は大和、木津の二川を控へ、鶴野、今福より以南、鷺島に至るまで、皆汚田に臨みて壁を爲る。西は横湊に據りて、砦を川場、博勞淵、葦島、磯多、道頓の諸處に連ね、艦を海口に列ね、南は空濠を穿り、材木を濠内に交錯して、以て敵の馳驅を沮む。七隊長曰く、「寨は廣くす可からず。廣ければ、則守り難し。況や一城を以て天下に抗するをや。日を曠しくし久を持して、市人を驅り糧食を糜することを爲す母れ」と。治長、聽かず。眞田幸村、人の約束を受くるを喜ばず。乃別に偃月城を玉造、阜に築きて、東西二門を開き、信濃の遺民を募りて、百五十人を得たり。秀頼、又附するに伊木遠雄、山川賢信、北川宣勝等五千人を以てして之を守らしむ。幸村、因りて策を獻じて曰く、「臣聞く、徳川氏、天下の兵に激して來りて我を攻む。吾れ坐ながら之を俟つ。他の奇道なし。度るに關東北國の兵、強半未だ至らず。宜しく此時を以て、大旗を天王子に出し、勝永と臣とを以て先鋒と爲し、山崎に赴き、

基次

家康西上す

(大阪城の
正則秀頼を
諫む

正則其老丹
波を戒む



盛親、基次をして、大和路に出で、宇治橋を扼し攻めて伏見を抜き、火を京師に縦ちて、大に天下の衝路を關さしめば、則西國の諸侯必來り屬する者あらん。是れ一奇なり。基次曰く、「計善しと雖、萬全の者に非ず。本城の莊固匹無し。天下の兵を受くと雖、三五年を支ふ可し。此の如くば則必内變あらん。諸侯、先世の恩を被る者、必款を我に歸せん。何ぞ必遠く出でん」と。衆之を然りとす。

前將軍、將軍、諸侯伯を率る、相繼ぎて西上す。獨、福島正則、黒田長政、加藤嘉明、平野長泰、谷衛好を江戸に留め、軍に従ふことを許さず。正則、潜に大阪の需に應じ、其封の安藝より粟五萬石を輸る。其二姪正守、正鎮、みな城に入りて守る。故を以て最も疑はる。竹中重信、命を受けて駿河より江戸に赴き、旨を正則に諫す。正則、因りて書を以て秀頼を諫めて曰く、「郎君、事に因りて關東の旨に忤ひ、遂に兵馬を動かす。是れ自亡滅を速くなり。願くは其圖を改め、淀君を關東に奉じて、以て無事を計れ。不らざれば則老奴、東軍の先鋒と爲り、一舉にして城を抜かん。君、其れ悔ゆる勿れ。豊臣氏の安危、將に此に決せん」と。願くは之を熟計せよ」と。前將軍、遂に其書を覽るも、遂に従ふを許さず。秀頼、書を得て亦對ふる所なし。重信、復命を受けて安藝に赴き、正則の子正勝をして兵を治めて師に戒めて曰く、「汝が輩、我が兒を輔けて、郎君に應ぜよ。我を以て爲す莫れ。郎君にして事を成さば、吾れ死すとも恨みず。然らざれば、則吾れ何を以て太閤に地下に

且元僅に免

藤堂高虎
【一島】長柄
神崎

幸村治長議
合はす

見えんや」と。丹波、命に従はんと欲す。石見、之を争ひて曰く、「吾が儕の主公に於けるは、猶主公の右府に於けるが如し。吾が儕何ぞ主公に禡す可けんや」と。遂に正勝を擁して、東軍に會す。蜂須賀家政、既に老す。首として東軍に迎へ調す。

片桐且元、嘗て其貲を界浦の人宗薫に託す。宗薫、城兵來りて界浦を掠むるを告ぐ。且元、乃兵二百を遣し之を援く。尼崎、城に至りて舟を索む。尼崎の人疑ひて許さず。大阪の兵、出で、且元を撃つ。城兵も亦援けず。且元、退きて神崎を守る。土民、其大阪に叛くと聞かや、争ひ起りて之を要し、城兵と合撃して、遂に其兵を盡にす。且元、僅に免る。是に於て、前將軍、京師に至りて之を召見す。且元、辭して曰く、「臣、輯和を計りて、乃大隙を開く。何を以て見ゆるを爲さん」と。前將軍曰く、「兵の起るは、汝が罪に非ず。宜しく亟に此に來りて、更に後圖を爲すべし」と。

藤堂高虎、東軍の先鋒たり。來りて住吉に陣す。郡良列、其孤軍なるを窺ひ、之を襲はんと欲す。議、調はずして止む。良列、又間諜を遣し、火を兩將軍の營に縱たんと欲す。亦用るす。東軍、二島の渡り難きを患へ、其上流を壅ぐ。城兵、出で、之を争へども克たず。

十一月、池田氏の兵、神崎より濟る。城兵出で、距けども利あらず。幸村、基次等、建議して曰く、「將軍、不日、天王寺に至らん。其未だ陣せざるに及びて、これを襲は必克たん」と。治長曰く、「是れ之を小戦に用る可し。今、天下と戦ふ。始めに合せて利を失はば、復振ふ可からず。之を堅城の下に致して、其鋒を挫くに若かざるなり」と。幸村曰く、「寡を以て衆を撃つ。奇を出すに非ざるよりは、何ぞ勝つことを得んや」と。良列も亦之を勸む。終に聽かず。已にして東軍、悉く至りて、營を四外に列す。大凡五十萬許。治長、間使を發し、舊屬の諸將を誘ふ。諸將、皆其使を捕へて、之を前將軍に獻す。前將軍、書を城内に遣り、和を請はしむれども肯ぜず。

幸村の叔父信尹、從ひて東軍に在り。前將軍、之をして入りて幸村を諭して之を降さしむ。幸村、答へて曰

家康幸村を
召す幸村應
ぜす

木村重成

徳川氏前記豊臣氏下
五八二
く、關原の役に臣の父子、西軍に屬し、寡兵を以て大師に抗し、敗るゝに及びて遁逃し、山野に伏匿す。右府、臣の陋劣を以てせず、臣に授くるに數千の兵を以てし、一面に將たらしむ。是れ臣を知るなり。士は已を知る者の爲に死す。臣死すとも負く能はず」と。信尹、復命す。再遣して之に説かして曰く、「苟も降らば、則封するに信濃の地を以てし、世絶つこと母けん」と。幸村曰く、「我が爲に前將軍に謝せよ。臣、一死もて右府に報ず。其他を知らず。東西兵を弭むるが如きこと有らば、臣、當に叔父に寄食すべきのみ。然らば、則日本を半を受くと雖、而も命を奉ずる能はず。願くは叔父復來る勿れ」と。
前將軍、木村重成の父重茲と故あり。又之を招き降さんとす。重成應ぜず。
薄田兼相、穢多崎を守る。蜂須賀至鎮、來りて之を攻む。兼相、倡家に飲む。其兵留守し、支へずして走る。兼相、深く以て耻と爲す。
已にして鶴野の柵は上杉景勝の爲に破られ、今福の柵は佐竹義宣の爲に破らる。
木村重成、急を聞きて、單騎出で、義宣を拒ぐ。渡部尙、七隊長と出で、景重を拒ぐ。秀頼、城樓より之を望見し、基次を顧て、往きて重成を援はしむ。基次、即起つ。從士、鎧を取りて之に京橋に及ぶ。擲して馳す。重成に謂て曰く、「公、勞せり。僕、請ふ、之に代らん」と。重成曰く、「事、方に般なり。將を代ふれば、則陣亂れん。公は兵に老けたる者。何ぞ是の言を爲すや」と。基次、乃其後に陣し、舟を澤中に泛べ、柵を排し銃を放ちて、横さまに義宣の陣を撃つ。重成、因りて大に之を破り、其老澁江政光を斃す。尙等も亦景勝の前軍を撃破し、竟に利あらずして退く。重成、基次も亦、兵を收む。基次、丸に中りて其左肋を傷く。之に捫して曰く、「吾が創、死に至らず。右府の命厚し」と。已にして柵守り難きを以て、弃て、城に入る。片桐且元、入りて備前島に軍す。而して蘆島、博勞淵、前後にしてみな陥る。池田、淺野、蜂須賀の諸將、西北より進む。七隊長曰く、「吾が輩、固より曰く、「廣きものは守り難し」と。偶以敵の氣を増すのみ。宜しく天満、川場、道頓港の三寨を棄て、之を内地に約すべし」と。治房、萬人を以て道頓港を守りて、獨肯

花房職之

前田利光

天王寺口

ぜす。即夜、諸將、軍議に託して之を召し、基次等を遣して諸壘寨を燒く。治房の部下、驚き走りて城に入る。基次、死士を伏せ、誡めて曰く、「備前の軍、其將年少にして氣銳なり。必此に來らん。汝が輩、突起して之を取れ」と。池田忠繼、福島に在り。火を望み、果して馳せて川場に入らんと欲す。其將花房職之曰く、「後藤は謀多し。必伏あらんと。乃止む。伏兵徒に歸る。基次曰く、「花房未だ死せざるか」と。
十二月、東軍、三寨に入る。即夜、大野治長の第、火を失す。東軍、城兵に内應する者ありと意ひ、京橋口より進む。城兵堅く拒ぎて之を拒ぐ。
幸村、前田利光と壘を對し、銃手を城外の林中に出し日敵兵を斃す。利光の前鋒奥村某、林を奪ひて功と爲さんと欲す。幸村、謀して之を知り、潛に其兵を收む。奥村、至るに一人を見ず。城兵、銃眼より指して笑ひて曰く、「公等、狐兔を索むるか」と。奥村、怒り、濠を踰えて壁を攀づれば、則銃矢交發して、數百人を殺傷す。
南條光明、南壁に在り。其叔父藤堂高虎と相識る。高虎、書を矢に約し、壁上に射て之を招き降す。叔姪、謀を合せて、高虎の兵を導かんと欲す。四日の黎明を期す。事覺る。秀頼、諸將と議して、之を族誅し、而して其職を更めず、銃を列ねて俟つ。黎明、藤堂氏、井伊氏、兵を合せて壁に傳く。加賀、越前の兵も亦幸村の壘下に逼る。皆銃に遇ひて敗る。會樓上火を失す。敵二百人、之に乗じて登る。幸村、撃ちて之を盡しす。是の日の戦、卯より午に至る。而して城兵は一人をも損せず。
織田長頼、星谷口を守る。其卒私鬪す。東軍、喧に乗じて、疾く攻む。秀頼、北川宣勝等を遣して、援け撃たしめ、東軍を卻く。東軍、是に於て、天王寺口より、地に穴して進む。城兵も亦、地に穴して之を拒ぐ。東軍、戦を休め、毎夜、砲を發して関す。城兵も亦、砲を發して関す。前將軍、數書を織田長益に遣りて、和を勸む。三事を要して曰く、「羅城を毀ち、周池を填めん。若くは封を大和に徙さん。若くは淀君を以て質と爲さん」と。皆肯はず。然して城兵、和議起ると聞き、守備頗怠る。而して其使の至ること愈頻なり。

鳥津氏

秀頼且元を
和成る

長益、治長、秀頼の旨を以て使をして之に答へしめて曰く、「果して和を成すと雖、而も諸の客兵は之を棄つるに忍びず。願くは封を益すを得ん」と。議乃輟む。

塙直次、長岡貞安、大野治房に請ひて曰く、「圍を受くること日久し。一たび出で、戦はずば、軍氣何ぞ振ふを得ん。今備前、阿波の兵、本街道の南北に陣す。宜しく兵を分ちて之を襲ふべし」と。治房曰く、「吾も亦之を欲す。夜戦は寡に利あり。寡くして之を分たば、恐らくは克つ能はじ。宜しく專其一軍を襲ふべし」と。乃壯士百餘を揀び、暗令を申べ、直次、貞安を以て之に將とし、出で、阿波の營を斫り、其將中村重勝を斬る。治房、御宿政友と出で、之を橋上に迎へて還る。是の時に當りて、天下の諸侯皆東軍に従ふ。未だ至らざる者は、獨鳥津氏のみ。京極高次の子忠高、從ひて城を攻む。其母常光、京師に在り。前將軍、其淀君の妹たるを以て、人をして之を迎へしめ、以て和議を講ぜしめ、又陰に城兵を誘ひ降す。淀君、遂に治長、長益をして秀頼に勸めしむ。秀頼、七隊長、及び新附の將士を召して議す。或人曰く、「關東の謀、測る可からざるなり。宜しく城を要ること二三年、以て敵の變あるを俟つべし」と。或人曰く、「諸侯の援くる者なし。而して城兵貳ある者あり。貳ある兵を以て、援け無き城を守る。而して城内の糧仗、以て三年を支ふるに足らず。和を講じて後圖を爲すに若かざるなり」と。治長、長益、和せんと欲し、秀頼に説くこと甚力む。秀頼曰く、「片桐且元、我が爲に忠を盡して、無事を計れり。汝が輩、乃之を沮み、我に勸めて事を擧げしむ。今何ぞ前言に相反くや」と。會常光氏、至りて淀君に德憑し、數往復して東旨を傳ふ。終に約して客兵を逐ひ、周池を填め、長益は子尙長を出し、治長は子治徳を出して質と爲す。十九日、和成る。翌夜、茶臼山の下、火を失し、二十餘營を延焼す。幸村曰く、「敵、新に和して備を懈る。宜しく之を掩撃すべし」と。治長等、許さず。二十日、前將軍、板倉重昌を遣し、將軍は阿部正次を遣し、入りて誓に蒞ましく。秀頼は木村重成を遣し、出で、誓に蒞ましむ。而して郡良列を以て之と副と爲す。重成、年少くして風儀あり。盛服して馬に騎り、茶臼山の營に抵り、轅門より馬を下る。關東の諸將、臚を幕中に設け、重成を引く。重成

重成

血書

搦を填む

治長弄せらる

元和元年

揖せずして入る。永井直勝、土井利勝、之を擯けて、下坐に坐せしむ。重成、願ずして進み、秀頼の旨を叙し、然して後退きて伏す。前將軍曰く、「是れ常陸介の子か。何ぞ酷父に肖たるや」と。因りて其齡を問ふ。曰く、「二十二」と。曰く、「然らば則右府と同年なり。往日、鶴野、今福の戦、壯勇無雙なり」と。重成、慨然として對へて曰く、「臣、遺憾あり」と。已にして誓書出づ。押血糺糊たり。重成曰く、「淀君は婦人なり。恐らくは疑ふこと有らん。敢て請ふ、更に面のあたり鮮血を刺せ」と。前將軍、指に鍼して曰く、「年老いて血枯る」と。重成、聞かざる爲して、遂に血書を取りて、拜謝して退き、諸將に禮して乃還る。旦日、東軍卒十萬人を發して、外城を墜ち、空壕を填め、吏七名を以てこれを監せしむ。是の日、鳥津氏、始めて兵庫に至り、居ること二日、治長、長益と俱に往きて兩營に謁す。前將軍、治長を見て面のあたり之を稱揚して曰く、「卿、年少くして、能く秀頼の爲に事を擧ぐ。何ぞ其れ壯なるや。吾れ上野介をして將軍に事ふることを猶卿の如きを欲す」と。上野介は、本多正純なり。因りて正純に命じて、其上衣を請はしむ。遠近傳へて榮と爲す。治長、意氣益驕る。其夜、前將軍、遽に京師に入る。吏、壕を夷ぐるの淺深を請ふ。前將軍、晒ひ對へて曰く、「三歳の小兒をして上下するを得べからしめんのみ」と。初め城中の諸將、周池を填むるを約し、以爲らく、西南の外壕に止る」と。居ること數日にして、外壕既に埋め、遂に内壕に及ぶ。城中大に驚き、みな治長を咎む。治長、人をして、出で、監吏を詰らしむ。吏對へて曰く、「吾が輩命を受けて周池を填む。以爲ふに、周池とは内外を周るの謂なり」と。是の時、將軍、猶岡山に在り。治長、自馳せて岡山に赴く。岡山の將吏、みな曰く、「是れ大御所の命のみ」と。治長、乃使を馳せて、板倉勝重に因りて之を請ふ。勝重曰く、「本多正純、此事を主る。我が與らざる所なり」と。還りて正純に詣る。正純、疾と稱して出でて面せず。往復すること數回、而して東軍、益卒を興し、晨夜、督責して、明春に至り、壘壘みな夷ぐ。獨牙城を存するのみ。

元和元年正月、兩將軍、みな東歸す。諸國の兵、罷めて國に之く。淀君、游嬉恬安なり。而れども荒殘

幸村進言

の餘、將士、給を仰ぐ所莫し。物議囂然たり。三月、青木一重、及び大藏、正永をして、賑を關東に請はしむ。關東、報せず。客兵、交、秀頼の母子に、再舉を勸めて曰く、「去歲、天下、舉りて我を攻む。而れども取る能はず。是れ世の共に知る所なり。今にして再舉せば、必歸する者有らん」と。乃、遠近に召募して、十二萬人を得たり。上下大に喜ぶ。是に於て、大に戦備を議す。數日にして未だ決せず。真田幸村、進みて曰く、「今日の事、兩言にして決せんのみ。戦ふ可きなり。守る可からざるなり。獨急に京師を襲ひ、天子を挾みて、天下に令すること有るのみ」と。治長兄弟、聽かず。七隊長、乃、説きて曰く、「城壕濠廢せり。誠に前役に比す可からず。此地、三面水に迫り、而して南平野に接す。敵、常に南より至る。請ふ、我が兩軍を以て、彼の兩帥を迎へ、直に麾下に衝突せん。其勝敗は天なり」と。議、終に決す。乃、急に守備を繕ふ。外城の舊趾に柵し、塹を穿ること二尺。

東軍先鋒京師に至る

四月、東軍の先鋒已に京師に至る。兩將軍、程を兼ねて西上す。諸侯に檄を飛ばし、復急に大阪に赴かしむ。一重等を留めて遣らず。常光氏をして來り言はしめて曰く、「兵を弭めて大和に徙ること七年ならば、則吾れ大阪を修むること故の如くし、之を還予せん」と。答へず。

秀頼三軍を指揮す

是に於て、軍を分ちて三と爲し、大野治長、一軍を領し、七隊長及び後藤基次、之に隸す。大野治房、一軍を領し、長曾我部盛親、森勝永、仙石宗也、之に隸す。木村重成、一軍を領し、真田幸村、渡部尚、明石守重、之に隸す。秀頼、旗鼓を具へ、親南郊を按視し、茶臼、岡山に上り、三軍の嚮ふ所を指揮す。士氣、頗奮ふ。然るに治長の矜持太甚しく、洗君の命を以て諸將を抑沮し、軍議屢變ず。長益父子、京師に出奔す。治長、益、專なり。治長、一夜、櫻門の前を過ぐ。人あり、之を刺す。中らずして走る。治長の卒、追ひて之を殺す。旦日、戸を検すれば、治房の部卒なり。城中相猜防せざる莫し。前將軍、潛に人をして、重成を招かしむ。重成、應ぜず。其女兄夫猪飼某、城中の召募に應じ。創病にて郷に歸る。重成、書及び物を遣り、之に訣して曰く、「城中の近狀、復觀るに足るなし。諸の謀議みな母氏に決

家康重成を招く重成應ぜず

【母氏】淀君

家康秀忠京師に至る

【樫井】相泉

基次

【國府嶺】河内

薄田兼相

す。我が輩の陳ぶる所、一切聽かれず。天下永く家康の有と爲ること知る可きのみ。家康、僕と舊あり。板倉伊賀をして、數僕を招かしむれども、僕、先君の命を受けて、嗣君に屬す。而して二心を懷藏するは、心の安ぜざる所なり。故に一も聊頼する所無しと雖、且、因循して此に在り。特に速に戦死を願ふ。復何をか言はん。此刀は僕の常に佩服する所、數十戦を経て、未だ嘗て蹉跌せざる者なり。今以て公に贈る。幸に之を愛護せよ」と。諸將、皆治長の故を以て、快々として樂ます。皆重成の意の如し。兩將軍、既に京師に至る。大阪の間細、之を狙撃すれども、皆成らず。乃、大野道見を遣し、火を界浦に縱ち、東軍の據資を奪はしむ。大野治房を遣し、萬人を以て大和に入り、郡山を攻めしめ、其守將筒井定慶を走らす。淺野氏、紀伊の軍を擧げて至ると聞き、因りて其國民を誘ひ、虚に乗じて、兵を起さしむ。紀伊の軍、乃、還り救ふ。治房、之を尾す。先鋒塙直次、樫井に戦ひて戦死す。治房、赴き援へども及はず。既にして東軍、大和、河内より來る。水野勝成、藤堂高虎、井伊直孝、伊達政宗、先鋒たり。諸隊長、前議を執りて、之を南郊に迎へんと欲す。基次、可かずして曰く、「野戰の勝敗は、衆寡を以て決す。今、寡を以て衆を撃つ。之を險阻に邀ふるに若かず。臣、請ふ、萬人を以て國府嶺に扼し、撃ちて其先鋒を挫かん。先鋒既に挫げば、後軍は必退きて南都、郡山に傾り、輒く進むこと能はず。吾れ其變に因りて、其勝を制せん。大軍を曠原に受くるに至りては、臣の知らざる所なり」と。之に従ひ、基次に兵一萬四千を授けて、平野に陣せしめ、又薄田兼相、渡部尚を遣して、之に繼がしむ。兩將軍、人をして基次を誘はしめて曰く、「苟も東兵を啓かば、則封するに播磨を以てせん」と。基次、拜謝して曰く、「今、東西戰を決す。西強く東弱からしめば、則東に歸せん。今東強く西弱し。弱を去て、強に就くは、臣が耻づる所なり。然りと雖、東旨の辱きも、亦報ぜざる可からず。報ぜざる可からず。報するに速に死するを以てせん。臣、速に死せば、城も亦速に陥らん。報する所以なり」と。五月五日、基次、兵を勅して夜發し、道を失ひて古市に出づ。軍士恟懼す。基次曰く、「此地、林に據り、水

【古市】道明寺若江、矢尾河内

基次、兼相戦死す【柏原】河内

【譽田】河内

幸村大に戦ふ

重成死す

【山田村】河内

に臨む。戦守みな便なり。宜しく馬に飲ひ、以て且を待つべし」と。且日、治長、出で、基次を助く。幸村は、道明寺に陣し、重成は若江に陣し、盛親は矢尾に陣す。基次、敵の後繼あるを知らず。衆に告げずして進みて、片山に至りて、水野勝成と遇ひ、撃ちて之を破る。尙、兼相、來り援く。連に戦へ、も未だ決せず。陸奥、美濃、伊勢の諸軍、夾みて基次を撃つ。基次、盡く其兵を亡ひ、十一騎を以て山腹に在り、使をして兼相に訣せしめて曰く、「子、之を勉めよ。吾れ將に死せんとするなり」と。乃復進み、銃に中りて燈れ、還りて柏原に至りて死す。兼相、前役の敗を耻ぢ、亦奮撃して死す。治長、來り援けて大に敗れ、大谷吉胤戦没す。幸村、急を聞きて馳せ至る。尙、人をして迎へて、之に告げしめて曰く、「吾が衆創殘す。子、請ふ、之に承け」と。幸村、諾して進み、横さまに陸奥の軍を邀ふ。陸奥の軍、騎戦に長ず。勁騎八百、馬上に銃を發し、烟に乗じて馳突し、摧破せざる無し。伊達氏、毎に此を以て志を東國に得たり。幸村、之を諳知す。乃兵を引きて譽田の東阜に上る。阜中に凹處あり。就きて陣を布き、其兵に命じて、皆背を脱ぎ槍を委てて坐し、以て指麾を俟たしむ。陸奥の軍、稍近づく。幸村、令して曰く、「背せよ」と。相去ること數十歩に及びて、令して曰く、「槍を執れ」と。敵、銃を發し且馳せ至る。槍に遇ひて沮む。又令して曰く、「皆起て」と。敵兵、大に潰え走る。幸村、轉じて南阜に陣し、兵を收めて尙と更、殿して退く。盛親、矢尾堤に上りて藤堂氏の旗を望み、乃退きて堤下に伏す。敵の先鋒の二將、以て走ると爲すや、田を徑り堤に上れば、則、盛親、大に呼び起り、撃ちて之を走らす。重成の游兵も亦、來り援け、遂に其二將を斬る。重成、井伊直孝と若江堤に相距ぎ、撃ちて其前隊を破る。重成、槍を揮ひ挺でて進む。尙、所皆靡く。敵將山口重信等三十餘人を斬る。而して其兵死傷して略盡く。乃隣に據りて息ふ。敵、生兵を以て之に乗す。飯島某、重成を扼めて曰く、「盍ぞ城に還らざる」と。重成、頭を掉ひて進み、遂にこれに死す。直孝の部兵、其頭を取りて之を前將軍に獻す。前將軍、之を檢するに背纓に餘無し。而して頭髮に香あり。前將軍、嘆惜して曰く、「是れ豫死を決する也」と。重成の伯父宗明、山田村に戦ひ敗れ退く。

井伊氏、藤堂氏、勢を合せて盛親に過る。盛親も亦、敗れ退く。増田盛次、止り戦ふ。盛次は、長盛の子なり。嘗て尾張に仕へ、前役には東軍に従ふ。東軍勝たば、則、憂ひ、敗れば、則、喜ぶ。是の後に城に入りて盛親に屬す。父猶在るを以て、名のらずして死す。

増田盛次死す【三處】道明寺若江、矢尾城中色を失ふ
幸村一策を建つ
木村重成決死奮戦之圖

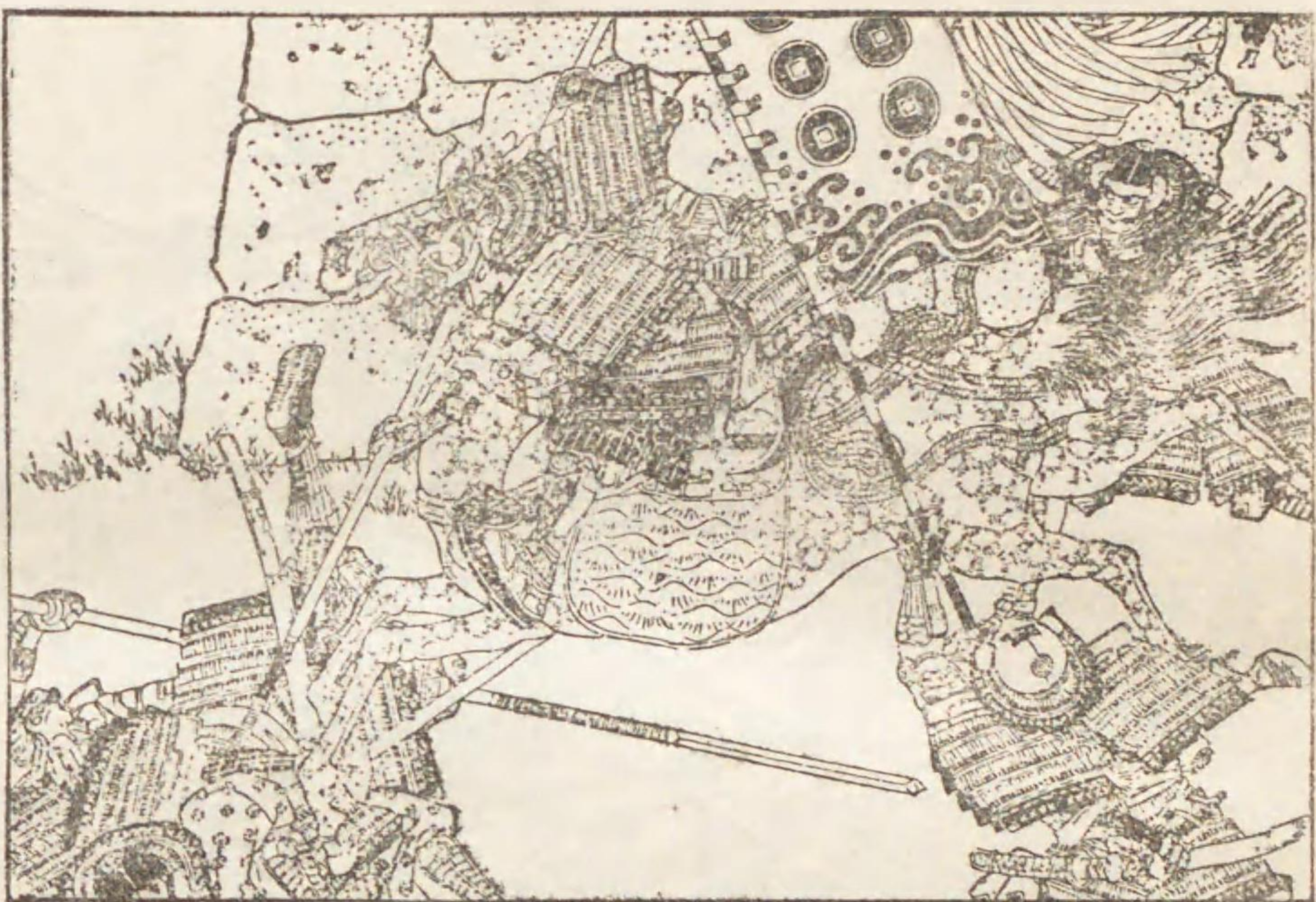


親に屬す。父猶在るを以て、名のらずして死す。盛親、幸村等と、平野より退き、火を聚落に縱ちて城に入る。三處の軍、皆敗れ將帥多く死す。城中、色を失ふ。諸將、議して曰く、「今日、機會みな失ひ、各自、戦を爲す。志を得ざる所以なり。明日、諸軍、力を合せて一戦し、以て雌雄を決す可きなり」と。秀頼、之を幸村に諮る。幸村曰く、「臣請ふ、茶臼山に陣して、敵を誘ひ、明石掃部をして、川場より今宮の南に出で、火を敵の背に擧げしめ、其中軍を夾み撃ち、而して主公、旗鼓を建て、之に繼がば事或は克たん」と。之に従ふ。且日、幸村、渡部尙、大谷吉之等と、出で、茶臼山に陣し、森勝永、竹田永應は天王寺の南に陣す。郡良列は、桐號の牙旗を執りて、其後に在り、治長は、七隊長と、毘沙門池の南に陣し、治房は御宿政友と、岡山に陣す。津川左近は金瓢の馬表を執りて、其後に在り、東軍、山野に彌漫し、左右並び進む。前將軍は左を統べ、將軍は右を統ぶ。少將直忠、前田利光、本多忠朝、小笠原秀政等、先鋒たり。前將軍、候騎を召して敵狀を問ふ。對へて曰く、「其陣甚堅

治徳
【川場の軍】
明石守重
秀頼出づ

(眞田幸村
奮戦の圖)

大助



明さん。蓋そ右府に殉せざるや」と。大助、涕を攬ひて去る。敵兵、益逼る。而して中軍及び川場の兵、皆至らず。幸村、大谷吉之に謂て曰く、「事皆賤けり。是れ我が死日ののみ」と。兵を麾きて進み、縦横に血戦す。

又秀頼の親出づるを待ち、頗闘志あり」と。乃質子大野治徳に命じて、書を作らしめ、其父の治長に贈らしむ。治長、時に巡視して茶臼山に至る。幸村曰く、「天下の事、今日に決す。公宜しく主公を促して出でしむべし。主公出でば、則軍氣自倍せん。川場の軍、亦當に赴くべし」と。治長、諾して城に反れば、則秀頼已に櫻門に在り。緋甲を撰ぎ錦袍を穿ち、千槍十旌、左右に列を成し。馬に鞍おきて俟つ。秀吉東征の儀の如し。將士踴躍す。俄にして治徳の書至る。曰く、「城中内應を約する者あり。右府の出づるを俟ちて、事を擧げんと欲すと聞く。謹みて出づること勿れ」と。治長、危惧して秀頼を止め、而して又往きて幸村と議せんと欲す。東軍の左先鋒已に來り逼る。勝永等、銃手を以て相挑む。幸村、之を止め高きに登り、望みて曰く、「中軍何ぞ來らざるや」と。因りて其子大助を召して曰く、「吾が族、東に在り。治長、常に我を猜ふ。我れ當に此に死すべし。汝、往きて右府に侍し、以て吾が貳心無きを明せ」と。大助、時に年十六。止りて俱に死せんと請ふ。幸村、叱して曰く、「汝にして死せば、誰か我が志を

【約】茶臼山
に會する約

和を議す

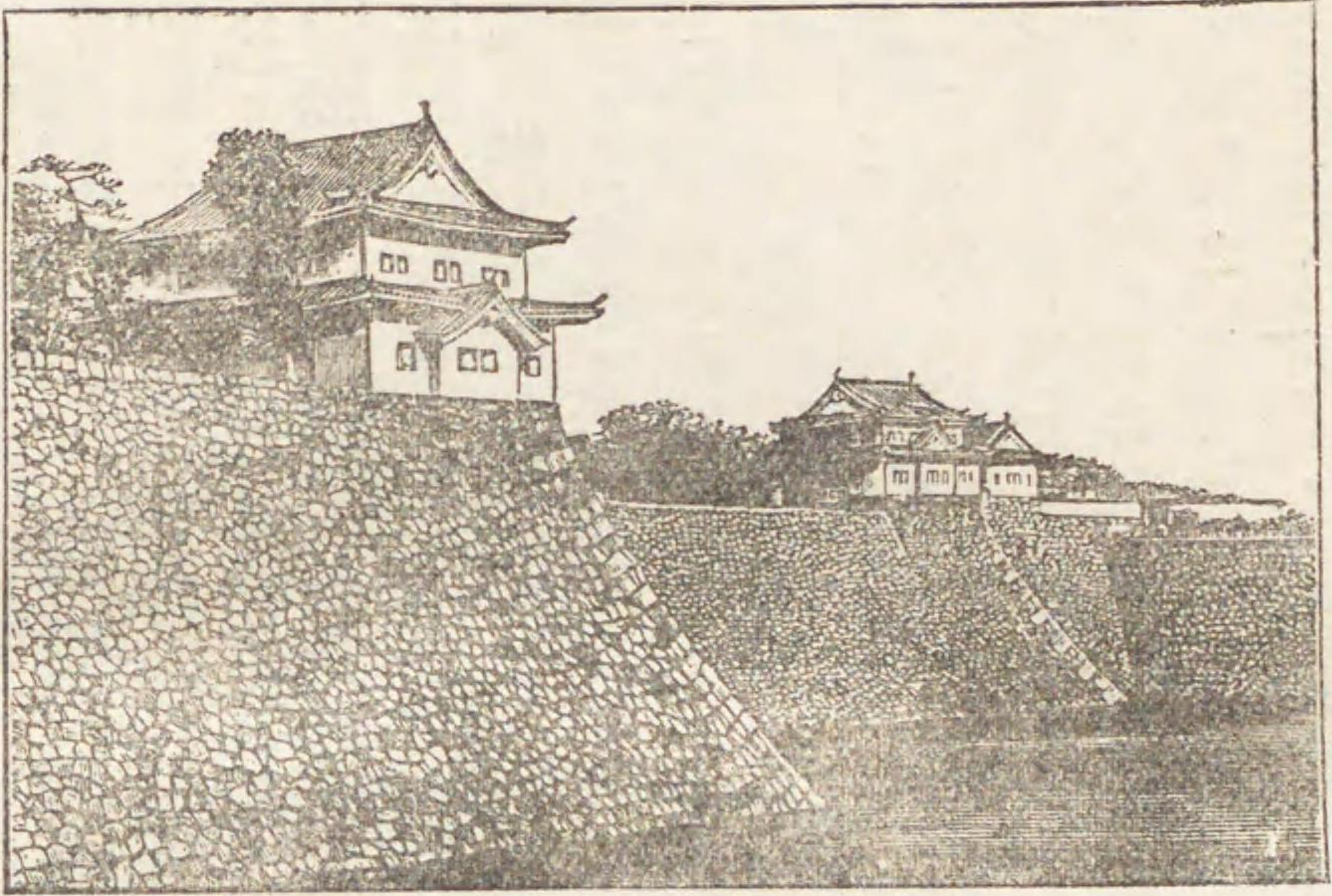
【千席館】俗
に千疊敷
大阪城火く

敵衆交至る。幸村、終に之に死す。年四十六。吉之等みな死す。御宿政友、初め越前に仕へ、後大阪に歸す。是に於て、書を忠直に遺りて曰く、「臣、善馬なし。君、猶舊情を記せば、則願くば一疋を賜へ。以て戦死せん」と。忠直、之に予ふるに馬を以てす。政友、騎りて岡山より幸村の營に至れば、則戦ひ已に酣なり。曰く、「此れ亦以て死す可からざらんや」と。馬を躍らし、陣を冒して死す。勝永、忠朝と戦ひ、撃ちて大に之を破り、忠朝を斬り、遂に永應を助け、秀政と戦ひて、又之を斬る。明石守重、騎騎三百を以て、川場より約に起き、東將水野勝成と遇ひ、交綏きて南す。茶臼山の敗を聞きて、則轉じて生玉に出で、阿部氏、高木氏と戦ひ、利あらずして走る。東軍の右先鋒、岡山に逼る。治房、撃ちて其先隊を破り、轉じて將軍の麾下に逼る。勝永、永應も亦、前將軍の麾下を犯す。井伊氏、藤堂氏、横さまに勝永を撃つ。勝永、退く。治長の軍代り進み、要するに銃手を以てすれども遏むる能はず。七隊邀へ戦ひて之を走らす。

時に日己に午を過ぐ。前將軍、人をして城に入り、和を議せしむ。曰く、「封を大和に徙さば兵を弭めん」と。淀君、乃秀頼をして、治長及び速永守久を召し還さしむ。二人、旗を旋して城に入る。諸軍望み見て、相驚擾して曰く、「城中、變あるなり」と。東軍、乃齊しく進む。城兵、大に潰ゆ。秀頼、櫻門に在り。胡床に據りて、治長、守久を迎へ見る。大助も亦至り、幸村の遺命を叙ぶ。語未だ畢らざるに、潰兵、大に至る。秀頼曰く、「我れ將に出で戦ひて、死を決せん」と。守久、之を止めて曰く、「潰兵、路に墮つ。出で戦ふ可らず。徒に徒隸の手に死せんよりは、寧壁に嬰りて固守し、力窮りて死するも、未だ晩からずと爲す」と。秀頼、之に従ひ、返りて千席館に坐す。東軍、鼓噪して城に逼る。城中、之に應ずる者ありて、大野治長の第を焚く。京口門先破る。我が庖人、大隅某、反を謀り火を庖に縱つ。延いて殿宇に及ぶ。城兵、大に擾れ、諸門みな破る。郡良列、津川左近、馬表、牙旗を擎けて千席館に至り、駢び跪き、稽首して言て曰く、「臣等當に城外に死すべし」願ふに、掌る所の表幟は、先君以て主公に傳へし所、五畿、七道、四海の外、

良列腹を刺して死す其他將士自殺する者多し

景(大阪城之)



大阪落城 秀頼自殺

と欲す。四將、銃を倉中に發して絶を示す。倉中みな哭す。秀頼、凄然として、守久、勝永に謂て曰く、「吾れ太閤の嫡子たり。而るに此に至るは天なり」と。乃自刃して薨す。年二十三。勝永、之を到ぬ。淀君、秀

頼も目有る者は、親て之を識らざる無し。之を敵人に委ね、傳觀播弄せしめば、將に羞を萬世に貽さん。故に謹みて奉還するのみ」と。良刻、將に自殺せんとす。願て守久に謂て曰く、「去歳の役に、吾れ策を獻じて敵の前軍を襲ひ、火を牙營に縱たんと欲せり。而れども公等聽かず。是れ終天の憾なり。事已に此に至る。之を言ふとも益なし」と。因りて甲を卸し、其母衣を脱ぎ、之を床上に置いて曰く、「是れ先君、賜、今にして之を致す。吾が事畢れり」と。遂に腹を割きて死す。其子兵藏又死す。眞野宗信、中島氏種、相繼ぎて自殺す。野々村吉安、將に内城に入らんとす。火熾にして前む可らず。乃二城の橋上にて自殺す。堀田正高、纒に第に歸るを得。妻子を手刃して出づ。加賀の兵、廳に侵入するに遇ひ、乃健闘して死す。秀頼、淀君を奉じ、將に天主閣に自殺せんとす。守久、之を止めて曰く、「勝敗は常なり。請ふ、暫く之を待て」と。乃觀月樓より東櫓に上れば、烟燄隨ひて至る。治長、之を園莊の倉中に徙し、守久、勝永と、共に之を護る。治長、猶和議を待み、書を兩將軍に致して曰く、「群臣願くは自殺して、右府母子の命を全くせん」と。因りて人をして、夫人徳川氏を奉じ、東軍に送致せしむ。東軍、既に夫人を取り、四將をして來りて倉外を監護せしめ、片桐且元に命じて、倉中の人を録せしむ。秀頼母子を出さん

淀君死す

士二十餘人 婦女十人 殉死す

大助殉死す

秀頼の胤を絶つ

頼の首を抱きて悲號し、又氏家道喜をして己を殺さしむ。是に於て、道喜、治長、守久父子、勝永兄弟、津川左近、竹田永應、及び堀、伊藤、成田、森島、加藤、高橋、土肥、寺尾、片岡、垣原、小室、淺井、中高の二十餘人、みな之に殉す。治長、重成、渡部尙、並に母あり。北畠氏、湯川氏等の婦女十人と、皆死す。秀頼の未だ死せざりしとき、眞田大助、其之く所に隨ふ。衆、之を諭して曰く、「舊臣すら且逃るゝ者あり。子は客將の子なり。必しも之に殉せんや。蓋ぞ出で走らざる」と。對て曰く、「我が父、我に命せり。必右府と偕に死せよ」と。終に倉外に就き、藁を藉きて坐し、食はざること一晝夜、秀頼の死を俟ちて、乃自殺す。東軍の諸將、争ひて牙營に赴き、戰捷を賀す。小出三尹は、秀正の子なり。時に前將軍の側にて侍す。前將軍、城中の火を指し、之に謂て曰く、「如何」と。三尹、警然首を俛して曰く、「臣視るに忍びず」と。諸將、或は愧色あり。秀頼、一男一女あり。皆庶出なり。未だ所在を知らず。東軍、金を懸けて大に之を索む。男を國松と名づく。甫めて八歳なり。其保田中某と、伏見の農人橋の畔に匿る。或人、其美質を睹て、捕へて之を獻す。六條磔に斬る。田中、之を持して號慟し、竟に之に殉す。京極氏、捕へて其女を獻す。蜂須賀氏、長曾我部盛親を男山に捕へ、命を受けて之を二條城の西門に縛すること數日、磔に斬り、徇へて之を梟す。大阪の市尹水原石見、二條城の側に匿る。藤堂高虎、之を捕へんとす。石見三人を殺して死す。渡部尙、治長と後圖を爲さんと約し、走りて近江に至り、秀頼、薨すと聞き、乃自殺す。治長の任子、後に皆死を賜ふ。治長の弟治氏、初め兄と協はず。往きて前將軍に仕ふ。是に至りて自殺す。人をして暴疾を以て聞えしむ。治氏の弟道見、界浦に磔せらる。治氏の兄治房、明石守重、仙石宗也と逃れ去る。伊東長次、青木一重並に赦さる。眞田幸村の妻は、紀伊に在り。捕へて獻する所と爲り。亦赦されて、髪を削りて尼と爲る。其餘大阪の遺臣

大坂軍の餘黨を滅す

且元卒す

七十二人、卒六人、諸出でて質と爲れるもの、及び款を城中に通ぜし者、皆誅夷せらる。増田長盛、子の故を以て死を配所に賜ふ。兩將軍、城内の燼餘を收めて、金二萬八千枚、銀二十四萬兩を得たり。金馬各二を以て、井伊直孝、藤堂高虎に賜ひて、其功を賞す。片桐且元の爲に邸を駿府に置き、徙り居らしむ。且元、愧懣して疾を成し、未だ至らずして卒す。是の役に加藤嘉明、黒田長政、皆請ひて従ふ。木下利房、功を立て、自贖ひ、其邑を復することを得たり。松下重綱も亦、功を以て其邑を益すことを得たり。重綱の祖父之綱は、即ち秀吉、微なりし時に仕へし所の者なり。之綱、死して子の吉綱嗣ぐ。關原の役に、徳川氏に屬す。其子を重綱と爲す。是に至りて再、邑を益し、二萬石に至る。

二年 家康薨す

正則末路

寛永八年 豊臣氏亡ぶ 豊國廟を毀つ 高臺寺

凡前後の役に、豊臣氏の舊臣の從ひて城を攻めし者甚衆し。獨、福島正則、從はず。二年、前將軍、薨す。五年、正則、封を褫はれ、信濃に放たる。時に正則、江戸の邸に在り。將軍、京師に在りて、使者をして來りて第に就き、命を傳へしむ。正則、默然之を久しくして曰く、「前將軍をして在らしめば、則ち吾れ將に一言せんとす。今復何をか言はん」と。乃ち起ちて内に入る。内中騷擾す。久しくして、其女子を挈けて出で、流涕して使者に謂て曰く、「吾れ足下と死を決せんと欲し、將に先女兒を殺さんとすれども、終に双を加ふるに忍びず。當に甘心して命を受くべし」と。因りて配所に赴く。將軍、又使をして、山陽、南海の諸侯を率ゐて、其封安藝、備後を收めしむ。其老臣、廣島城を留守し、命を奉ずるを肯せず。正則の書至るを俟ちて、乃城を致して去る。其弟、正頼は、大和宇多の城主たり。先だつこと四年、封を褫はる。寛永八年、故加藤清正の子忠廣も亦、其封肥後を奪はれ、出羽に放たる。十四年、故小西行長の遺臣、兵を肥前に起して誅に伏す。豊臣氏既に亡ぶ。令あり、豊國廟を毀ち、獨、東方廣寺、及び高臺寺を存す。高臺は北廳建て、秀吉の冥福を祈りし所なり。加藤、福島氏、其親屬たるを以て役を助く。秀吉の爲に一小祠を立て、秀吉の在りし時、嬖する所ありと雖、みな之を別宮に置き、獨、北廳と同居す。北廳、秀吉

太閤像 【覺羅氏】清の太祖

太閤徒手群 雄を制す

を佐して天下を定む。裨益する所多し。常にこれを戒めて曰く、「願くは良人、藁席瓦缸の時を忘る、勿れ」と。秀吉、薨するに及びて、則髪を削り、秀頼を視ること猶其自出の如し。其親屬の諸將をして之を輔翼せしめ、未だ嘗て關東と冀を開かず。北廳、諸將と前後に皆歿して、秀頼、孤立となり、以て亡ぶるに至る。高臺の祠、今に至るまで猶秀吉夫妻の像ありと云ふ。外史氏曰く、余、東山に遊び、太閤の像に高臺の祠に謁す。祠門は蓋し征韓の艦材を以て之を造れりと云ふ。嘗て韓人の紀する所を讀むに、曰く、「明、使者を遣し太閤の相貌を窺はしむるに、矮にして黒し、他の異ある無し。唯其目光炯々として人を射、仰ぎ視る可からざるを見るのみ」と。余、其像を觀るに、信に然る者如し。嗚呼、太閤をして女眞、靺鞨の間に生じ、而して之に假すに年を以てせしめば、則焉ぞ朱明の國を覆す者は、覺羅氏を待たざるを知らんや。蓋し其人と爲り、酷、秦皇、漢武に肖て、而して雄才大略は、遠く其右に出づ。夫れ漢武は豊富に乗じて區宇を馭す。論せずして可なり。秦皇は六世の積威を挾みて、衰殘の六國を馭す。太閤の徒手奮起して群雄を制服せしと孰與ぞや。然れども其民方を過用して、絶嗣の禍を取りしは、則秦と等し。彼れ累葉の烈に藉りて猶且免れず。況や匹夫を以て暴に起りし者をや。然して匹夫を以て天下を得るは、祖業を承けて之を失ふを重ざる者の如きに非ず。土地も其固有に非ず。故に其利を分ちて惜しまざるなり。人民も其固畜に非ず。故に其力を用ふるを愛しまざる也。夫れ其民力を愛しまざるは固より以て危亡を招くに足る。而して地利を惜しまざるは、又以て久安を計る可からず。此二者、其勢相持し而して其禍相因るなり。然れども其初の速に天下を得し所以の者は、愛惜する所無ければなり。譬へば閭巷の人、博して大勝を獲たるが如し。其をして勝たざらしめば、一の饗人のみ。苟も勝たば、乃大に之を揮霍し、其朋類を招き、醉飽喧呼して、務めて快を一時に取る。唯然り。故に暴に富みて、人怨みず。太閤、人奴より起りて、大國に主たり。固より已に其望みし所に踰。乃變故に遭遇し、機に投じ會に起き、動もすれば意の如きを得。皆初念の至らざる所なり。而して當時の將帥を四顧するに、皆其儔輩、或は其敢て比肩せ

太閤の政策
を論ず

征韓を論ず

速に之を得
しは速に之
を失ひし所
を論ず

ざる所なり。一旦に其上に立つ。而して常に己に服せざるを恐る。以爲らく、吾れ微賤よりして利權を司るを得たり。苟も自封殖して、人に分たざれば、人將に吾に争はんとす。而らば吾が志速に成る可からざるなりと。故に膏腴を割き、金帛を頒ち、動もすれば數州の地を擧げて以て戦功を賞し、之を視ること嘗に糞土の如きのみならず。彼れ一世の豪俊を鼓舞奔走せしめて、驟に志を天下に獲し者は此術を用ゐたればなり。然れども吾れ糞土として之を授ければ、彼も亦糞土として之を受け、未だ嘗てわれを徳とせずして、以て當然と爲せり。彼の求むる所は窮無く、我の有する所は盡くるあり。盡くるあるを以て、窮無きに供す。其勢、之を海外に取りて、以て之を塞がざるを得ず。是に於て、七道の民、其未だ癒えざる瘡痕、裹みて、知る可からざるの地に趨き、連年成る所無くして、其力竭く。而して柘肉未だ冷ならざるに、群雄各自立の心あり。蓋し惟むに足る者なし。故に太閤の民力を愛しまざりしは、其地利を惜しまざりしに由る。而して其禍遂に此に至る。皆其れ自取ののみ。然りと雖、太閤の雄才大略を以て、八歳に六十餘國を定むれば、則其餘力を以て之を海外に逞くするは、固より其れ宜なり。豈唯太閤のみ然りと爲さんや。當時の猛將、謀夫、雄傑の士、天下に布滿し、天下已に集りて、其傑驚巧狙、事を喜び功を好む心、猶未だ已まざるなり。之を鷲鷹俊狗に譬ふれば、其噬齧搏撃の力、用て餘り有れば、則必人に逼るに至る。故に朝鮮の役は、是れ天下の群雄をして、其噬齧搏撃を肆にせしめて其力を殺し者なり。然れども、徒に其力を殺して、其をして獲る所無らしめば、即彼れ復我に馴服せずして、反りて其噬齧搏撃を我に施さんとす。嗚呼、之を養ひて其術を得ざらば、安にか往きて可ならんや。能く之を飽かして之を節する能はず。之を發縱指示して、收めて之を寧する能はず。故に太閤の群雄に於ける、苟に之を一時に制服せしのみ。豈長久の計ならんや。其速に天下を得し所以は、乃其速に之を失ひし所以なり。梁の武帝、言へるあり、「吾より之を得て、吾よりこれを失ふ。復恨みる所無し」と。即太閤も其れ亦恨みる所なからんか。

外史氏曰。余遊東山。謁太閤像於高臺之祠。祠門蓋以征韓艦材造之云。嘗讀韓人所紀。

曰。明遣使者。窺太閤相貌。矮而黑。無他異。唯見其目光炯炯射人。不可仰見。今觀其像。如信然者。嗚呼。使太閤生於女真鞞鞫間。而假之以年。則烏知覆朱明之國者不待覺羅氏哉。蓋其爲人酷肖秦皇漢武。而雄才大略遠出其右。夫漢武乘豐富馭區宇。不待論可也。秦皇挾六世之積威。蹶衰殘之六國。孰與太閤之徒手奮起制服群雄。然過用其民力。以取絶嗣之禍者。則與秦等。彼藉累葉之烈。猶且不免。況以一匹夫暴起者乎。然以匹夫得天下。非如下承祖業而重失之者。土地非其固有。故不惜分其利也。人民非其固畜。故不愛用其力也。夫其不愛民力。固足以招危亡。而不惜地利。又不可以計久安。此二者。其勢相持。而其禍相因也。然其初之所以速得天下者。無所愛惜也。譬如閭巷之人博而獲大勝。使其不勝。一篋人耳。苟勝矣。乃大揮霍之。招其朋類。醉飽喧呼。務取快一時。唯然。故暴富而人不怨。太閤起八奴。而主大國。固已踰其所望。乃遭遇變故。投機赴會。動得如意。皆初念之所不至。而四顧當時將帥。皆其儕輩。或其所不敢不比肩。一旦立其上。而常恐其不服己也。以爲吾由微賤。而得司利權。苟自封殖而不分於人。人將吾争。而吾志不可速成也。故割膏腴。頒金帛。動舉數州之地。以賞戰功。視之不啻如糞土。彼其鼓舞奔走。走一世之豪俊。以驟獲志於天下者。用此術也。然吾糞土授之。彼亦糞土受之。未嘗德我。而以爲當然。彼之所求無窮。而我之所所有盡。以有盡供無窮。其勢不得不取之於海外。塞之。於是七道之民。裹其未愈之瘡痕。以趨不可知之地。連年無所成。而其力竭矣。而柘肉未冷。群雄各有自立之心。蓋無足恠者。故太閤之不愛民力。由其不惜地利。而其禍遂至於此。皆其自取爾。雖然。以太閤之雄才大略。八

歲定六十餘國。則以其餘力逞之海外。固其宜也。豈唯太閤爲然。當時猛將謀夫雄傑之士。布滿天下。天下已集。而其桀驁巧狙。喜事好功之心。猶未已也。譬之鷲鷹俊狗。其噬嚙搏擊之力。用而有餘。則必至逼人。故朝鮮之役。是令天下群雄肆其噬嚙搏擊。以殺其力也。然徒殺其力。而使無所獲。則彼將不復我之馴服。而反施其噬嚙搏擊於我。嗚呼。養之而不得其術。安往而可也。能飽之而不能節之。能發之縱指示之。而不能收而寧之。故太閤之於群雄。苟制服之一時耳。豈長久之計哉。其所以速得天下。乃其所以速失之也。梁武帝有言。自吾得之。自吾失之。無復所恨。則太閤其亦無所恨耶。

詠史十二首其十一

蜻洲在手打爲丸。黃鉞東西試錯蟠。
 楚人誰道沐猴冠。亂窮草莽英雄起。
 二世休嗤秦業短。混同六國太艱難。
 漢將猶存奴僕面。志大夷蠻肝膽寒。

改邦文日本外史卷之十七終

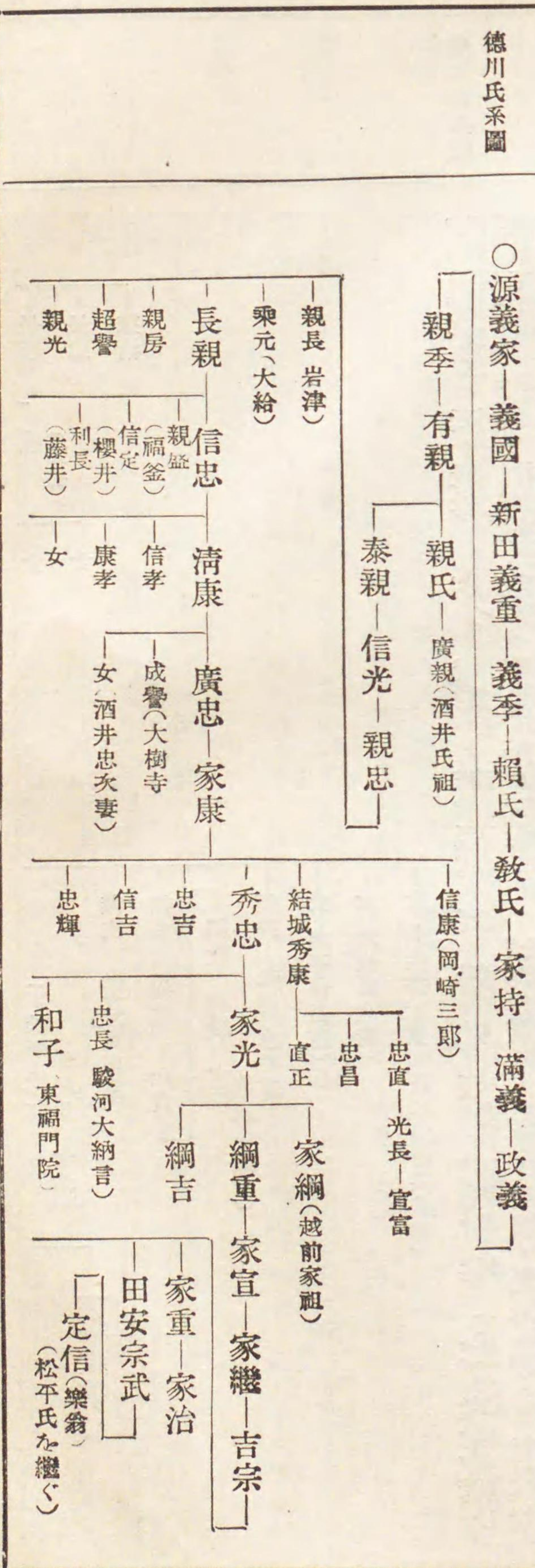
改邦文日本外史卷之十八

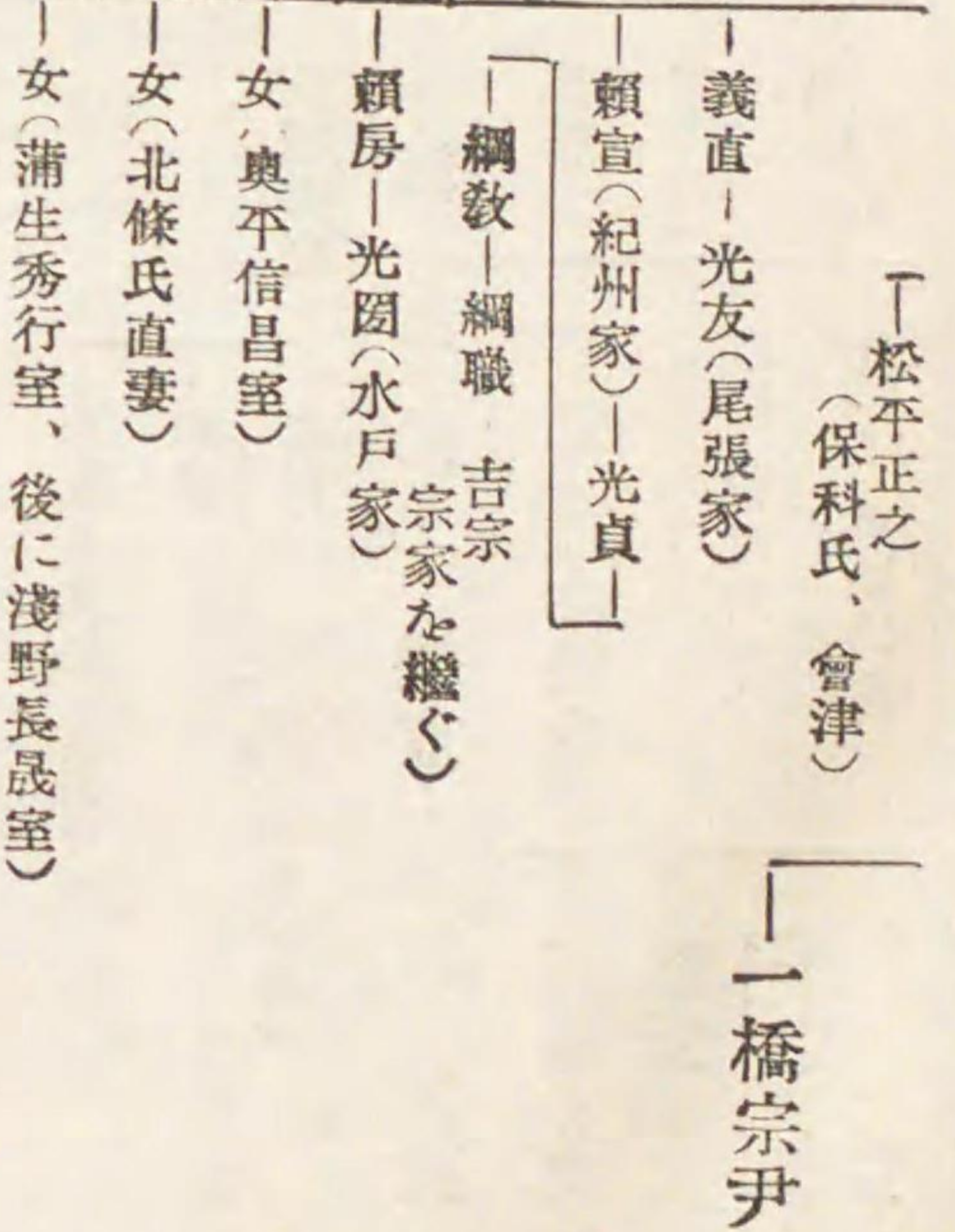
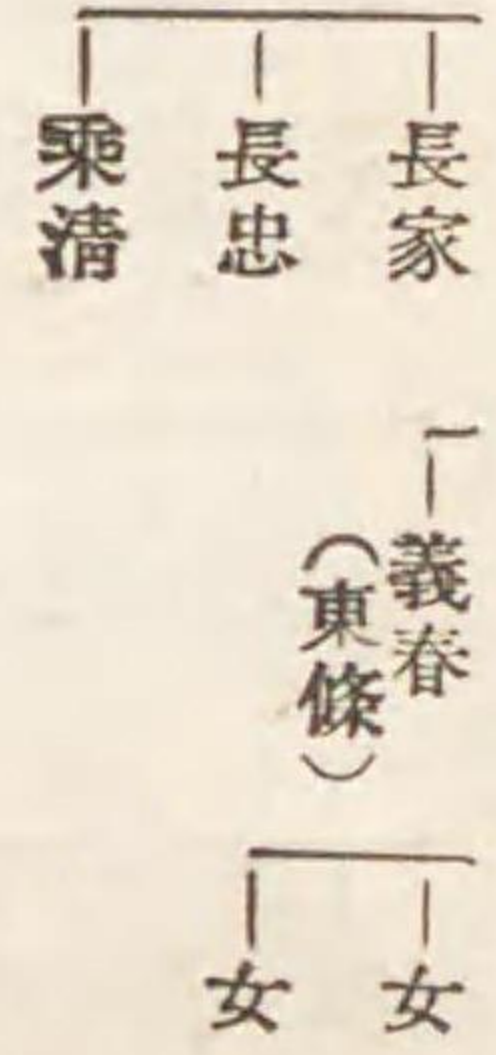
德川氏正記

德川氏一

德川氏略系

德川氏系圖





徳川氏系統

我が徳川氏は、新田義重より出づ。義重は、清和天皇八世の裔なり。天皇の孫經基、始めて姓を源氏と賜ひ、降りて武臣と爲る。其支孫は義家、義家の子は義國なり。上野に居り、新田、足利の諸邑を食む。義重及び義康を生む。義重は、新田を氏とし、義康は足利を氏とす。共に宗子源頼朝を助け、王命を以て平氏を討滅す。頼朝、征夷大將軍と爲り、府を關東に開き、義重をして、寺尾の城を守らしむ。義重、五男あり。其第四を義季と曰ふ。義季、徳川の邑を食む。因りて氏とし、徳川四郎と稱す。義季、頼氏を生む。頼氏、從五位下に叙し、參河守に任ぜられ、世良田を食む。因りて又世良田氏と稱す。頼氏、教氏を生む。教氏、家持を生む。家持、滿義を生む。滿義、政義を生む。政義、親季を生む。此の時に當りて、宗子新田義貞、後醍醐帝の詔旨を奉じて、北條氏を鎌倉に討つ。滿義、之を助け、稻村崎より入りて、賊將安東昌胤を撃破す。北條氏、既に滅びて、足利尊氏反き、天下の武人みな之に黨す。獨新田氏、族を擧げて王に勤む。官軍數利を失ひ、帝、南山に播遷す。義貞、戰没し、宗黨多く王事に死す。帝崩ると、遺詔して益新田氏を眷し、以て恢復を圖る。後村上帝、嗣ぎて立つ。義貞の子義興、義宗、義を上野、信濃の間に擧げ、克たずして

足利義滿征夷大將軍 氏滿關東管領たり

死す。政義の父子、蓋し之に殉す。尊氏の孫義滿、征夷大將軍と爲り、府を京師に開き、族氏滿を以て關東を管領せしむ。親季の子を有親と曰ふ。右京亮と爲る。元中中、宗族と同じく義宗の子貞方に從ひて、信濃に匿る。氏滿覺りて兵を遣して之を盡す。有親、貞方と脱走して、陸奥に入りて兵を起す。氏滿の大兵來り撃ち、我が衆潰ゆ。有親、其二子を挈けて、逃れて上野の祝人村に入り、舊識の民家に匿る。鎌倉の執事上杉氏、吏を遣し、新田氏の族を募り索むること甚急なるを聞き、二子を手刃して自殺せんと欲す。會僧尊觀來り過ぐ。容貌を變じ、これに從ひて西す。尊觀は、蓋し後村上帝の子なり。帝、子なし。龜山帝の孫恒明を養ふ。帝、子を生むに及び、恒明、避けて僧と爲る。是を尊觀と爲す。後相摸藤澤寺の主と爲り、諸國に週遊す。新田氏、先朝の眷する所なるを謂ひて、爲に之を保護する所以を謀る。乃權に有親及び長子を以て、己が徒弟の狀を爲さしめ、有親を徳阿彌と呼び、長子を長阿彌と呼び、皆髪を剃る。少子猶幼にして未だ髪を削らず。徳壽と呼ぶ。並に之を携へて去る。參河を過り、大濱村の寺に寓す。時に連歌を尙ぶ。寺僧近村の諸豪と歌會を爲して、尊觀を娛けしむ。松平、酒井の兩村長も亦與る。而して長阿彌を書手に充て、徳壽は周旋して事を執る。兩村長、徳壽の容止を熱視し、相語りて曰く、「是れ凡種に非ざるなり」と。微に之を尊觀に叩く。尊觀、其他なきを察して具に語るに故を以てす。村長、皆女有りて男なし。分ちて二子を贅せんと欲す。尊觀、之を許す。是に於て、徳壽は松平氏に養はれ、長するに及びて名を泰親と命ず。室を松平村に築きて、有親を奉ず。長阿彌も亦、髪を蓄へて親氏と名づけ、雅樂助と稱す。後、子廣親を生む。これを酒井氏と爲す。

泰親の養父信重を太郎左衛門と稱す。泰親、襲ぎて之を稱す。村長となり、榛莽を開き、道路を達す。性、壯武にして施すことを喜び、貧民に振貸して償を責めず。隣近、親み附く。泰親、因りて從容として衆に謂て曰く、「吾れ仇敵に迫蹙せられ、流寓して此に至り、稍く安處を得たり。願くは歲月を積み、地を開き衆を聚め、先業を興復せん。諸君、能く我を助くるか」と。衆對へて曰く、「敢て死生、之を以てせざらんや」と。

徳壽 松平氏 酒井氏

世良田氏
泰親の裔

寛正六年

親忠

【先考】信光

明應二年
大樹寺

永正三年
出雲守

其中に嘗て罪有りて死を宥されし者五人あり。衆を糾して中山の七邑を略して、之を獻す。泰親、其歳入を分ちて之を賞す。新田氏の遺臣、稍來り従ふもの多し。後花園帝、永亨中に、大納言平實照、罪を以て参河に貶せらる。泰親、善く之を視る。其赦されて歸るに及び、護りて京師に入る。實照、爲に奏して、一官を授けんことを請ふ。朝廷、足利氏を憚りて輒く許さず。後、救して州の目代に除し、遂に参河守に任じ、從五位下に叙せられ、世良田氏に復す。泰親、六男あり。長子信廣をして、襲ひて松平村に居らしむ。次子信光の武、己に類すと謂ひ、以て嗣と爲す。幼字は次郎三郎、初め岩津を守る。嗣立して岡崎に居り、和泉守と稱す。善く兵を用ゐる。大給、北給を攻めて、これを并せ、又襲ひて安祥を取る。寛正六年、額田の民亂を作す。州の守護細川成之、定むること能はず。幕府、教を和泉守に下す。二戰して之を平ぐ。和泉守、男女四十餘人を生み、親戚蕃衍す。次子親忠嗣ぐ。幼字は竹千代といひ、長じて藏人と稱す。岩津に居り、精勵し政を爲す。常に其老臣に謂て曰く、「先考嘗て謂ふ、「一士を養ふは、一邑を獲るに多る」と。然れども忠邪を混じ、賜子を濫にせば、則、徒に民力を費すのみ」と。明應二年、舉母、寺部、上野、八州、伊保の五城、兵を合せて來り攻む。藏人、三千人を以て伊田に邀へ撃ちて、之を破り、寺を鴨田に建て、大樹寺と名づけ、以て陣亡の士を用ゐる。藏人、九男を生む。親長、乘元、長親、親房、超譽、親光、長家、長忠、乗清と曰ふ。而して親長は岩津を守り、乘元は大給を守る。長親を嗣と爲す。安祥に居り、藏人と稱し、出雲守に叙せらる。西参河を定む。而して東参河は猶今川氏親に屬す。氏親は駿河の守護なり。永正三年、氏親、其將北條長氏と、大兵を率ゐて來り攻め、八月、岩津を攻む。出雲守、五百騎を將りて赴き救ふ。其騎に謂て曰く、「衆寡敵せず。如何せん」と。衆、前みて死を決せんことを請ふ。出雲守曰く、「汝等、世忠を我が家に盡す。而して我れ未だ厚く報する能はず。今亦吾が爲に死を決す。吾れ深く愧づる所なり」と。因りて大桶を以て、酒を貯へ、杯數十を泛べ、自一杯を飲み、餘瀝を桶中に濁きて曰く、「事、急なり。各人に觴するに暇あらず。交就きて之を飲め」と。衆、感奮す。夜、夜別河を渡りて、駿河の軍を襲ふ。宇都

大久保氏
信忠

大永三年
清康、聰達

忠茂
岡崎公

享祿二年
【伊奈】三河

宮忠茂曰く、「我れ必捷たん」と。果してこれに捷り、軍を西岸に收む。氏親、長氏、遁れ去る。戸田憲光、田原を以て降る。出雲守、忠茂に問ひて曰く、「何を以て捷つことを知る」と。曰く、「長氏、寵を負み士を侮る。士、鬪志なし。是を以て之を知る」と。忠茂は、新田義貞の將泰藤五世の孫なり。後、其居る所に因りて、大久保氏と稱す。出雲守、五男を生む。信忠、親盛、信定、利長、義春と曰ふ。出雲守、老し信忠嗣と爲る。仍安祥に居り、左京亮に任せらる。左京亮、政を恤へず。嬖臣事を用ゐる。國內みな叛く。群臣交諫むれども聽かず。因りて相聚りて廢立を謀る。左京亮、之を覺り、親、其一人を戮す。左京亮、三男を生む。清康、幼と雖、器局あり。宜しく以て我に代ふべし」と。大永三年、大濱に老す。清康立ち、仍安祥に居る。小字は次郎三郎と曰ふ。幼にして聰達、舊臣を見る毎に、古今の成敗戰鬪の事を訪ふ。膝に憑りて鬚を捋りて樂と爲す。或は某は何に在ると問ひ、其の死し且戰没するを聞かば、輒之を痛傷す。嘗て食に當りて調を受く。衆を呼びて之を前め、其御する所の椀を以て之に酒を飲ましむ。衆、敢てせず。清康曰く、「人生等しきのみ。或は君となり、或は臣となる。分、隔つ可けれども、情、隔つ可けんや」と。強ひて之に注ぐ。皆露醉す。退きて相謂て曰く、「今日の酒は吾が輩の頸の血なり」と。時に族松平貞親、岡崎及び山中に據りて、傍近を掠む。大久保忠茂曰く、「先山中を抜かば、則、岡崎は攻めずして下らん」と。乃、夜、山中を襲ひ取る。貞親、輒降る。岡崎は参河の要地たるを以て、徙りて之に居る。國人稱して岡崎公と曰ふ。遂に西参河の豪傑五十餘姓を徇へ下す。忠茂を賞せんと欲して、其欲する所を問ふ。忠茂答へず。強ひて後、答へて曰く、「願くは城下の市租を賜へ」と。岡崎公、之を許す。而して其貪るを疑ふ。忠茂、盡く市人を召し、君命を以て其市税を除く。四方の商旅、之を聞きて争ひ至る。岡崎終に是を以て富實なり。享祿二年、吉田の城主牧野傳藏、兵を起して西参河を并せんと欲す。岡崎公、兵を將るて之を撃ち、伊奈に出つ。伊奈の城主本多正忠、迎へ降る。正忠の先を助秀と曰ふ。豊後の本多郷に居り、子孫尾張に邑す。尋

東三河を平
葵草
【宗族】新田
三年
【宇理】参河
【高力】参河
天文二年
岡崎公夢み
海龍禪寺
公慨然志を
逃ぶ

いで参河に徙り、擧族、徳川氏に仕ふ。而して正忠、尤大なり。岡崎公、其兵を并せ、進みて火を御油に
縦つ。傳藏、吉田川を濟り、舟を毀ちて戦ふ。我が兵利あらず。本多信重、戦死す。佐野與八、退かんと請
ふ。岡崎公、肯せずして曰く、「彼れ勝ちて驕る。破る可きなり」と。乃進み戦ふ。與八、之に死す。叔父
信定等、力戦して遂に之を破り、傳藏を斬り、遂に吉田を攻む。正忠、攻めて其東門を破り、遂に之を陷
る。岡崎公、城に入り、士民を撫す。遂に叛將戸田憲光を攻め下し、東参河を平けて還り、伊奈に會飲す。
正忠、齋殺を獻じ、藉くに葵三葉を用ゐる。岡崎公、視て悦びて曰く、「吾れ凱旋に此を得たり。今より當に
此を以て徽號とすべし」と。初め徳川氏、宗族たるに因りて、中黒を以て號と爲す。是に於て三葵を兼用す。
最の歳、兵を尾張に出し、織田氏の地を略し、品野を取りて信定に賜ふ。三年、熊谷重長を宇理に攻め、自
北門を攻む。信定、從子親次を以て先鋒と爲し、南門を攻めて死す。初め我が僕人、岩瀬といふ者、人を殺
す。岡崎公、其勇を愛し、死を宥して之を逐ふ。時に城中に在り。夜、火を縱ちて内應を爲す。我が兵、遂
に城を抜き、岩瀬を賞祿す。重長、走りて高力を保ち、高力氏と稱す。遂に來り降る。
天文二年、廣瀬、寺部の二城主と、岩津に戦ひて之を破る。冬、信濃の人來り侵す。迎へ撃ちて大に之を破
る。岡崎公、嘗て夢む。文ありて、其握に在り、是と曰ふ。覺めて衆に問ふ。衆、其解を知る莫し。僧横外
といふ者あり。曰く、「是字は日下の人なり。日下、一人を以て、之を握る。將に大に興らんとす。然れども
握りて未だ啓かざれば、其子孫に在らんか」と。岡崎公、大に喜び、爲に海龍禪寺を建つ。岡崎公の威名日
に著る。甲斐の國主武田信虎、使を遣して好を通す。美濃、尾張の諸城主も亦附かんことを願ふ者あり。公
一日慨然として、將士に言て曰く、「我が家、足利氏と族望相敵す。其が爲に剪滅せられ、跡を削り勢を屈し
て此に至る。今仇家衰亂す。天下の事知る可きなり。冀くは、汝衆の力を藉り、義兵を糾合し、幟を皇都に
樹て、一たび累世の耻を雪ぐを得ん。今我れ東に今川氏あり。西に織田氏あり。先織田氏を攻めて、西上
の路を開かん。宜しく兵を勵し、糧を時み、以て吾が令を俟て」と。衆、奮躍して命を聽く。

【森山】尾張
清洲を攻め
んとす

十月、兵萬人を勸し、自、將として西上し、森山に入る。信定、上野に居り、疾と稱して従はず。初め信定
勢を負み士に驕る。落合某といふ者、事に困りて之に抗す。衆、爲に之を危む。公曰く、「士たる者は、先
公以來愛養する所。叔父之に傲るは非なり。彼れ屈撓せざるは嘉すべし」と。信定、之を叩む。親次の死す
るや、信定、救はず。又公に誚責せられて、深く慙志を懷く。是に於て、虚に乗じて亂を作さんと欲す。將
士、且く西征を止めんと請ふ。公曰く、「何ぞ意に介するに足らん。今、大舉して徒に歸り、士氣沮敗せば
悔を四隣に納る、なり」と。遂に進みて清洲を攻めんと欲す。國老安倍定吉、軍に従ひ、書を以て信定を
勸めしむ。流言あり、「定吉は信定と謀を通す」と。定吉、子の彌七に謂て曰く、「衆、我が寵を嫉みて、語言
を造作す。主公、必之を察せん。即察せずば、誅せられん。愼みて怨を爲す勿れ。宜しく時を俟ちて。冤
を鳴らすべし」と。十一月、軍中、馬逸し、衆大に騒ぐ。彌七、刀を奉じて公の側に侍す。定吉、已に殺さ
れたりと謂ひ、惶急して、刀を抜きて之を弑す。植村榮安、傍より彌七を誅す。定吉、之を聞きて將に自殺
せんとす。松平信孝、之を止む。時に出雲守、猶在り。將士喪を護りて歸り、命を請ふ。初め岡崎公、青木
氏を娶り、廣忠を生む。乃之を立つ。定吉、罪なきを以て、宥して之に傳たらしむ。織田信秀、我が内變
を聞きて、兵を擧げて來り侵す。我が見兵八百、季父康孝を以て將となし、迎へて伊田に戦ふ。植村榮安、
先進む。高力重長、及び子長安、戦死す。信秀、戦ひ敗れて、和を請ひて去る。信定、出雲守に寵あり。遂
に自立を圖る。定吉、廣忠を奉じ、出で、伊勢に奔る。信定、遂に立ちて上野に居り、自織田氏に結ぶ。定
吉、密に弟正定及び大久保忠茂の子忠俊、酒井廣親、孫正親、正親の從子忠次、石川清兼、石川數正、成瀬
正義と謀を通じ、援を今川氏に請ひて、廣忠を納れんとす。
五年冬、護りて牟呂に入る。参河の人、多く往きて之に歸す。六年、信定、來り攻む。忠俊、伴りて其軍に
從ひ、書を城上に射る。期するに四月、之を迎ふるを以てす。信定、危み疑ひ、宣言して曰く、「我れ初め
姪孫を害するの意なし。徒諸の亂人を誅するのみ」と。乃兵を引き還り、數將士と誓ふ。忠俊、三たび

五年
【牟呂】参州
六年

信定

廣忠
七年
九年
十年
十一年
十二年
十三年
十四年
【上輪田】參
河

誓書を上る。而して密に岡崎の留守松平信孝に告ぐ。信孝曰く、「我も亦之を欲す。未だ間を得ざるのみ。念ふに公等、事成らずして死せば、誰か之を繼ぐ者ぞ。吾れ且身を完くせん」と。乃疾と稱して、有馬に赴く。五月、忠俊等、密に廣忠を迎へて、岡崎に入る。將士争ひ諷す。出雲守、之を聞き、喜びて曰く、「吾れ駿河の兵の因りて我を侵すを恐る。故に之を距ぐのみ。兒は我が嫡曾孫なり」と。因りて信定に命じ、節を折りて之に事へしむ。信定、已むを得ずして來り諷す。信孝も亦歸す。廣忠、參河守に任せらる。由俊以下、賞を受く。忠次を左衛門尉と稱す。父氏次より稍く功勞を積み、是に於て、參河守の妹を娶り、尤親重せらる。七年、信定卒す。衆心、乃定まる。定吉、逆家たるを羞ぢ、自其嗣を絶つ。婢の身めるあり。出でて井上氏に嫁す。井上氏は、實に安倍氏の胤なり。

九年六月、織田氏の兵、來りて松平長家を安祥に攻む。參河守、松平康信等をして、之を援けしむ。利あらす。長家、及び松平康忠、林政縁等、みな死す。松平利長、松平忠繼、苦戦して之を卻く。十年、參河守、刈谷の城主水野忠政の女を娶る。

十一年、歳壬寅に次す。十二月二十六日、男を岡崎に生む。奇質あり、出雲守、之を視て曰く、「此兒必名を天下に揚げん」と。酒井正親、石川清兼をして、之を擧げしむ。故事に因りて幼名を竹千代と命ず。是の歲秋、織田氏、復來り侵す。援を今川氏に乞ふ。今川氏、僧大原を遣し、三萬人を以て來り救ひ、與に小豆阪に戦ふ。互に勝敗あり。冬復來り侵す。内藤清長擊ちて之を卻く。

十二年、水野忠政卒す。子、信元、叛きて織田氏に附く。參河守、今川氏の意を難り、之と婚を絶ち、再戸田憲光の女を娶る。

十三年八月、出雲守卒す。織田信秀、族敏宗を遣し、安祥を攻めしむ。敗れて去る。信秀、自、將として、代り攻めて之を拔く。佐崎の城主、松平忠倫、叛き降り、信秀の爲に上輪田を守りて、岡崎に逼る。

十四年、參河守、自、將として、尾張の兵を清原に擊ちて之を走らせ、追ひて安祥に至る。城兵と戦ひて、

十五年
十六年
【觀潮阪】遠
江

大に敗れ、殆免れず。本多忠豐、止り戦ひて之に死す。參河守、脱るるを得たり。忠豐の金扇馬表を取り、之を牙營に置きて、以て其忠を旌す。松平信定の子清定、上野に據りて叛く。初め酒井正親の兄忠尙、人を讒して遂げず。慙ぢて退居す。是に於て、往きて清定に歸す。參河守、之を攻む。利あらず。

十五年三月、近臣岩松八彌、醜し、公の寢に入りて逆を爲す。成らず。參河守、刀を抜きて之を逐ふ。八彌走り出づ。植村榮安、入りて之に橋上に遇ひ、相搏ちて濠に墜つ。松平信孝、槍を提げて來り、濠に墜みて曰く、「子、之を縦て。我れ之を刺さん」と。榮安曰く、「縦たば、則逸せん。我を併せて之を刺せ」と。信孝、猶豫す。榮安、遂に八彌を斬る。

九月、參河守、自ら將として上野を攻む。大久保忠俊の姪兒忠世、力戦す。清定、忠尙、みな降る。清定を櫻井に置き、忠尙をして上野を守らしむ。時に松平信孝、功を負みて横肆なり。親戚の死する者は、輒其邑を并す。衆、復一の信定を生ぜりと謂ふ。

十六年正月、信孝、駿河に如く。衆、其不在に乗じて、其邑を收めんと請ふ。之に従ふ。信孝至る。歸する所なし。之を今川氏に訴ふ。今川氏、參河の將士を詰る。將士故に告ぐ。信孝、乃輪田に走りて、松平忠倫に依り、終に織田氏に降る。酒井忠尙、復叛きて之に應ず。九月、我が兵、信孝を攻めて、互邑に戦ふ。鳥居忠宗、之に死す。互を以て、忠宗の父忠吉に賜ふ。忠吉、八世の祖忠景、栗生顯友といふ者と、新田義貞に事へ、敗るゝに及びて、共に互に匿る。忠吉に至りて、栗生某と俱に、出で、岡崎公に仕ふ。栗生、後、大番頭と爲る。

十月、忠倫、將に尾張の兵を導きて、岡崎を取らんとす。參河守、刺客を遣して、これを殺さしむ。織田信廣、代りて輪田を守る。六砦を益し築く。參河守、援を今川義元に乞ふ。義元、質子を徴す。乃世子竹千代を以て之に應ず。生れて六年なり。諸將士の質五十餘人と、東駿河に赴く。外舅戸田憲光、陰に款を尾張に通す。伴りて好を以て迎へ、觀潮阪に館し、使を馳て尾張に告げて曰く、「公、參河を取らんと欲せば、則

【郎君】竹千代

【大宮司】熱田大宮司

古屋

十七年

信秀敗走
長坂血槍
十八年

この質を奪ふに若くは莫し」と。信秀、大に喜び、其將林正成等を遣し、田原に赴き、錢五百貫を以て憲光に賜ふ。岡崎の人森平太といふ者、正成の部卒たり。潜に我が館に來りて、戒めて曰く、「月田氏は、郎君を以て奇貨と爲す。公等未だ之を知らざるか」と。因りて告ぐるに故を以てす。我が衆信せず。旦日、憲光來り説きて曰く、「此より駿河に至るは大川多く、雨ふりて暴漲す。海路に由るに若かざるなり」と。衆、之に従ふ。世子を護りて船上る。正成、別船に乗りて其後に從ひ、梶を轉じて熱田に至る。岸上兵あり。從船と相招く。天野康景、猶幼なり。世子の傍に在りて、變を覺り、乃其僕に謂て曰く、「平太の言信なり。岸に上るに比びて、汝亟に敵兵に混り、走りて岡崎に歸り、具に見る所を白せ」と。已にして岸に上る。正成、世子を大宮司に納る。康景の僕、走り歸りて故を告ぐ。上下大に驚く。康景の先も、亦新田氏の遺臣なり。已にして信秀の使至りて曰く、「貴息、西に在り。公、宜しく東に背きて西に郷ふべし。不らざれば、則貴息の利に非ず」と。參河守、答へて曰く、「殺さんと欲せば、即殺せ。吾れ曷ぞ一子の故を以て、信を隣國に失はんや」と。信秀怒り、世子を天王坊に緇し、其艱苦を備にす。生母水野氏、再尾張の人久松俊勝に嫁す。熱田と近し。家士平野某、竹内某を遣し、之を存問し、給するに衣物を以てす。

十七年三月、今川義元、兵を將る來り援けて、安祥に至る。參河守、其前軍を并せて、尾張の兵を小豆阪に撃ちて、之を走らす。酒井正親、敵將、鳴海大學を獲たり。而れども織田信廣、猶留りて、安祥を守る。四月、松平信孝、來りて岡崎を攻む。大久保忠俊、酒井正親等、兵を伏せて射て之を殺す。參河守、泣きて曰く、「盍ぞ之を生致せざる」と。是の月、復撃ちて尾張の兵を重原に破り、遂に八草、梅坪を攻む。信秀、自將として、來りて西野に至る。我が兵、壁を堅くして出でず。信秀、之を侮り、進みて柳河に次す。我が兵、伏を設けて雨射す。長阪信政、先之に馳す。信秀、大に敗走す。信政、素より勇を以て著る。岡崎公嘗て曰く、「長阪戦ふ毎に槍に血ぬる」と。因りて呼びて長阪の血槍と曰ふ。

十八年三月、參河守卒す。年二十四。計、熱田に至る。世子、哀慕すること成人の如し。參河守、性、猜忌

信長

【笠寺】尾張

鳥居忠吉及
び元忠

二十年
家康幼時石
戦を見る

にして、將士親まず。卒するに及びて、聚議す。或は曰く、「尾張と和し、速に世子を迎へん」と。或は曰く、「駿河は強大なり。宜しく舊好を修めて、徐に計りて之を迎ふべし」と。議、未だ決せず。今川義元、我が喪を聞きて曰く、「織田氏、孤兒を擁して參河に臨まば、參河必之に附かん」と。急に其將朝比奈泰能を遣し、來りて岡崎を守らしむ。將士乃駿河に附き、安祥を攻む。利あらず。本多忠豊の子忠高之に死す。

十一月、義元、益兵を發す。僧大原をして助けて、安祥を攻めしむ。時に信秀、已に没し、子信長嗣ぐ。兵を發して會戦す。伏に遇ひて敗走す。城兵、出で、救ふ。我が兵、援軍と夾み撃ちて、之を破る。北ぐるを追ひ、其郭を取る。信廣、厩に内城に嬰る。信長、鳴海に至りて、敢て進まず。大原、使を遣して、之に謂はしめて曰く、「公、信廣を坐規す。盍ぞ竹千代を以て之に易へざる」と。信長、許さず。林正成、平手政秀、みな諫む。乃之を許す。是に於て、尾張、駿河、笠寺に會盟し、信廣、西に歸る。而して嗣君、岡崎に歸るを得たり。居ること十餘日にして、往きて駿河に質と爲る。酒井重忠、天野康景、平岩親吉、安倍正次、高力清長、植村榮政等二十餘人、之に従ふ。義元、之を宮崎に置き、來島某をして監せしむ。其兵を遣居して、參河の諸城を守り、松平重吉、鳥居忠吉を以て、租賦を監し、之を駿河に輸さしむ。將士に諭して曰く、「竹千代、猶幼なり。吾れ當に權に國務を領し、其長するを俟ちて返し予ふべし」と。是より兵戰ある毎に、參河の人を驅りて先鋒と爲し、平時は命するに賤役を以てす。將士、敢て勞を辭せず。獨嗣君の早く國に還るを願ふ。嗣君、宮崎に在りて、供給甚薄くして衣食足らず。鳥居忠吉、家元より富む。常に錢帛を送る。又其次子元忠を遣して、之に侍せしむ。

二十年、嗣君、甫めて十歳。五月五日、出で、安原河原に遊び、兒童の石戦を観る。一群は百五十人。一群は之に倍す。觀る者争ひて其衆き者に就く。嗣君、僕の背に在りて、命じて其寡き者に就く。僕、恠みて故を問ふ。嗣君曰く、「衆き者は、自其衆を恃む。寡き者は、自其寡を知る。寡き者勝たん」と。果して其言の如し。義元、之を聞きて曰く、「謂ゆる將門將を出だす者なり」と。

二十三年
弘治元年
蟹江の七槍

二年
元信

(家康幼時
安倍河に
石戦を視る
圖)

【日近、福
釜】參河

忠吉



んことを願ふ」と。義元、之を許す。是に於て、始めて之を迎ふ。駿河の將山田某、内城に在り。嗣君、之を避けて外城に入り、以て將士を延見す。鳥居忠

二十三年、嗣君、始めて甲を撰す。弘治元年、兵を尾張に出して、蟹江を攻む。松平真乘、大久保忠俊等七人、力戦す。二年正月、嗣君、元服を加ふ。義元、賓と爲る。其族將關口親永をして髪を理めしむ。名を元信と命じ、次郎三郎と稱す。妻すに親永の女を以てす。參河の將士來り賀す。或人、駿馬を獻す。乃これを將軍足利義輝に納る。手書及び佩刀を賜ひて之に報ゆ。僧大原は、義元の庶父にして、清見寺の主たり。而して數兵を率ふる。嗣君、從ひて書史を讀み、兵法を受く。二月、松平義春、嗣君に代りて師を統べ、奥平貞延を日近に攻めて、之に死す。嗣君、之を聞き、涙を漉ぎて之を嘆惜す。左右感動す。義元、又福釜に城き、酒井忠次等の八將をして、之を守らしむ。尾張の將柴田勝家來り攻む。大久保忠世、弟忠佐等、善く戦ひて幾と勝家を得んとす。是の歳、嗣君、年十六なり。從容として義元に謂て曰く、「僕、幼にして國を離れ、尾張、駿河に流寓すること、此に年あり。一たび郷里に歸り、老人の墳墓を拜掃するを得始めて岡崎に歸る。參河の父老、聞きて大に喜び、争ひ出

元康
三年
永祿元年

二年

吉、次を離れて進み、嗣君の手を握りて曰く、「臣老いたり。驅馳を效す能はず。特に郎君の爲に倉庫を置き糧食を峙む。郎君、此を以て多く兵士を養ひ、武を四方に揚げよ。臣、或は餘年を保たば猶親しく之を目するを得ん」と。因りて嗚咽して泣く。嗣君も亦泣く。嗣君、是に於て、名を元康と改め、藏人と稱す。三年春、復駿河に如く。永祿元年、義元、嗣君に謂て曰く、「西參河は公の舊領なり。然れども其諸城多く叛きて信長に歸す。子、盍ぞ撃ちて之を復せざる」と。嗣君曰く、「固より願ふ所なり」と。二月、岡崎に歸り、盡く宗族將士を會して、戰を議す。先寺部を攻めて火を外郭に縱つ。城將鈴木重教、出で、戦へども決せず。本多重次、先登す。其一子二弟みな死す。嗣君、衆を勵し奮ひ前み、撃ちて重教を走らす。首を斬ること百餘級。郭を焚きて還り、遂に又廣瀬を攻む。信長、其將津田兵庫を遣し來り救はしむ。大久保忠世、與に闘ひて之を斬る。石川清兼、説きて曰く、「郎君、始めて陣に臨み、兩戰兩勝、斯れ已に多し。宜しく勝を全くして威を養ふべきなり」と。乃岡崎に凱旋す。松平家次をして品野を守らしむ。三月、尾張の兵、之を攻む。家次、夜、襲ひ撃ち、五十餘人を獲て、來り獻す。後、松平信一、代り守る。又襲ひて敵兵を敗る。四月、嗣君、復駿河に如く。義元、佩刀を遺りて捷を賀し、山中の邑三百貫を納る。是の冬、本多廣孝、石川清兼、天野景隆、往きて義元に請ひて曰く、「小主人、漸く長ず。願くば約の如くせん」と。義元、諾して未だ果さず。二年三月、關口氏、世子信康を生む。義元、時に西上の志あり。織田信長、之を聞き、鷺津、丸根、大高沓掛、鳴海、梅坪、寺部の諸城を修め、兵を分ちて之を守る。鳴海、大高、沓掛、みな義元に降る。義元、鷺殿長持を遣して、大高を守らしめ、岡部長教をして、鳴海を守らしむ。已にして大高、糧竭くるを告ぐ。義元、嗣君をして糧を納れしむ。而して城の左右みな敵棄なり。衆、之を難とす。嗣君、時に年十八なり。

三年丸根城

岡崎城に入る

千騎を以て運を護りて往く。信長の鳴海に在るに値ふ。鳥居信吉、杉浦勝吉等をして之を候視せしむ。信吉曰く、「敵邀へ戦はん」と欲す。勝吉曰く、「彼れ山を下らず。是れ戦を欲せざるなり」と。嗣君、之を然りとす。乃兵を分ちて寺部、梅坪に向ふ爲して火を邑里に縦つ。鷺津、丸根の兵、烟を望みて馳せ援く。嗣君、則麾下八百を以て三隊と爲し。糧を大高に納れ、兵を収めて還る。信長、我が陣の整ふを視て、敢て犯さず。是の歳、嗣君、再西參河を徇へ、復駿河に赴く。

三年五月、義元、四萬騎を將りて信長を攻めて池鯉鮒に至り、嗣君をして丸根城を攻めしむ。城兵、争ひ出づ。嗣君曰く、「彼れ我より寡し。當に守るべくして戦ふは、是れ死を決するなり。我れ撓まするに弓銃を以てし、機に乗じて之を抜く可きなり」と。既にして前鋒、戰、酣なり。麾下之に繼ぐ。遂に城將佐久間盛重を斬る。賛氏信、先登して、遂に其城を抜く。駿河の將朝日奈泰能も亦鷺津を抜く。

義元、既に諸城を取る。大高は敵の衝に當るを以て、一勇將を得て之を守らしめんと欲し、之を衆に問ふ。衆曰く、「松平藏人、其人なり」と。乃嗣君をして大高を守らしめ、而して自進みて桶狭間に陣し、勝を恃みて備を設けず。信長、風雨に乗じ、兵を潜めて間道より襲ひ撃つ。義元、敗れ死す。其諸將、變を聞きて皆走る。駿河の兵、大高に在る者も、亦逃れ亡く。我が將士、嗣君に説きて曰く、「今川公、既に死す。我獨誰が爲に守らん。兵を全くして歸るに若かざるなり」と。嗣君曰く、「當に其實を審にして、然る後師を班すべし。急遽解き去りて、事若し謬傳に出でば、則笑を天下に貽さん」と。水野信元、刈谷に在り。私に來り告げしめて曰く、「信長、義元を獲て、將に遂に諸城を復せんとす。宜しく夜に乗じて、速に去るべし」と。嗣君曰く、「水野は我が勇氏と雖、而も敵の部將なり。未だ軽く信す可からず」と。人を遣して之を偵はしむ。報じて曰く、「信なり」と。衆、争ひて還るを勸む。嗣君曰く、「夜行恐らくは道を失はん。宜しく月出づるを俟つべし。彼れ能く來らば、我も亦能く戰はん」と。頃くして月出づ。乃兵を整へて東に還る。土寇争ひ起る。本多百助、數返り戦ひ、今村に達す。將に岡崎城に入らんとす。以爲らく、「義元の在

十四年目に還る

四年 中島 參河 水野信元 甥家康

りし時、未だ我に還すの言あらず。今其死に乘じて、これを取るは不義なり」と。軍は大樹寺に駐むること三日。駿河の戌兵、城を棄て、去る。嗣君曰く、「彼れ棄て、我れ取るは、可なり」と。二十三日、遂に入る。嗣君、六歳に國を出で、十四にして復歸るを得たり。士民譁呼し、國內の諸城主來り調する者、門に相踵ぐ。而れども其織田氏に屬する者は、敢て降らず。嗣君、乃兵を將りて舉母、梅坪、廣瀬を攻む。廣瀬の兵、拂楚坂に距ぐ。我が兵、奮撃して之を走らせ、遂に杵掛を攻め、火を城下に縦ちて還る。城兵、追躡す。大久保忠俊、殿して還る。鳥居元忠、首功あり。嗣君、之を賞するに功狀を以てせんと欲す。辭して曰く、「功狀は遊士の口に藉く所以なり。臣、矢ひて二君に事へず。功狀を用ゐるを爲す莫きなり」と。

六月、信長、水野信元に謂て曰く、「吾れ既に義元を獲たり。以爲らく、子の甥は當に戰はずして降るべきに、今乃強項なること此の如し」と。信元、嫌疑を恐れ、兵を發して岡崎を攻む。嗣君、石瀨に邀へ戦ふ。兩軍皆相識る。故に接戰、尤勵し。松井忠次、股を銃に傷け、進みて其銃卒を斬る。明日、刈谷の下に戦ひ、交、卻く。復寺部、舉母を攻めて、皆之を抜き、進みて山中に至り、醫王山の寨を攻む。久松俊勝、先登す。敵、槍を以て其肩を鑽く。俊勝、刀を擧げて槍幹を截り、寨に入りて火を縦つ。衆、之に繼ぎ、遂に寨を取る。嗣君、乃人をして義元の子氏實に言はしめて曰く、「公、先公の爲に一戰せよ。僕請ふ、これに先せん」と。答へず。氏實、昏懦なり。嬖臣三浦義鎮、義鎮の生父小原鎮實、並に國政を專にし、徳川氏に異心あり。讒す。氏實、又岡崎の勢、寢く熾なるを視て、猜防の心あり。

四年二月、水野信元、來り侵す。復石瀨に邀へ戦ひて、これを破り、遂に廣瀬、伊保を攻む。板倉重定、中島に據りて下らず。松平好景を遣して之を攻めしむ。重定、退きて岡崎を保ち、遂に佐脇に走る。乃其邑を以て好景を賞す。

信長、素より霸心あり。兵を京畿に出さんと欲す。而れども武田信玄は甲斐に在り、北條氏康は相模に在りて、皆其後を窺ふ。信長、之を患ふ。會水野信元、往きて之に説きて曰く、「僕の甥、氏實の故を以て尾張に抗

織田氏と和

信長出でて迎ふ

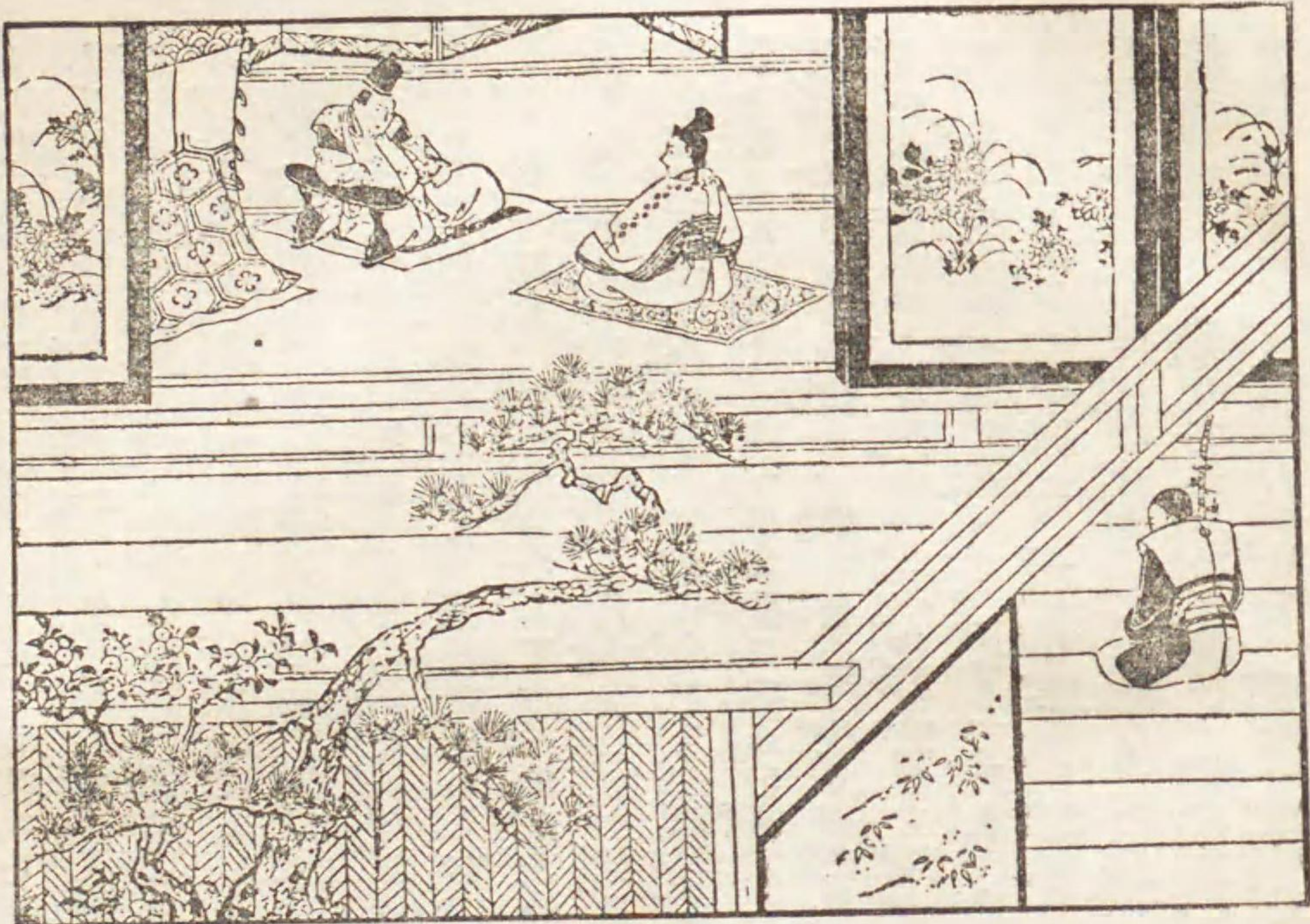
す。其實は氏實を怨む。誘ひて我が黨と爲すべし。而して彼れ少壯と雖、天質剛銳なれば、必和を請ふを肯ぜじ。公、力を以て之を取らんとせば、恐らくは歲月を費さん。我より和を結ぶに若かず。彼をして東面に當らしめて、公は專其西を略せば、霸業成らん」と。信長大に喜びて曰く、「是れ我が心を得たり」と。乃瀧川一益をして、來りて石川數正に就きて和を求めしむ。信元、又使をして來りて之を勸めしむ。嗣君、諸將士を召して之を議す。酒井忠次曰く、「我れ微力を以て二大國に介して、自立を圖る。便計に非ざるなり。氏眞、仇を忘れ武を廢して、酒色に沈溺す。與に爲するに足らざるや明けし。信長と和するは便なり」と。嗣君曰く、「念ふに固に如何ぞ舊好に背く可けんや」と。石川家成、酒井正親曰く、「忠次の言是なり。郷に義元、伴りて好意を爲し、歳に我が食を收め、月に我が兵を戰はしむ。而して毎に我を敵鋒に饒す。丸根、大高の事、以て見る可きのみ。宜しく速に尾張に許すべし。賈の駿河に在る者、之を取ること難きに非ず。氏眞、我と絶つを重す。必害する能はざるなり」と。嗣君曰く、「吾が幼時に及びて、我が舊臣多く鋒鏑に高ぬる。吾れ常に心を傷む」と。因りて泣下る。終に和を許す。信長、大に喜び、國界を定め、兵成を解き、遂に嗣君に來り盟はんことを請ふ。之を許す。酒井忠尚、上野に在りて之を聞き、其質の駿河に死するを恐るや、乃來り説きて曰く、「信長の意測り難し。和すべくして、往く可からず。今君の室家、皆駿河に在り。彼れ何ぞ我を信せんや」と。嗣君曰く、「業已に約を定む。當に背くべからず」と。忠尚、憚ばず。乃去る。左右、其反を慮り、追ひて之を誅せんと請ふ。嗣君曰く、「彼が言自理あり。且未だ必しも反せじ」と。忠尚、疾と稱して出でず。信長、道を修めて供帳す。期に至りて、嗣君、百餘騎を從へて尾張に赴く。信長、林通勝等をして、之を熱田に迎へしむ。嗣君、正海寺に憩ひ、遂に清洲に至り、城門に入る。觀る者が喧騰す。本多忠高の子忠勝、小字を平八郎と曰ふ。時に年十四。薙刀を擧げて先驅す。聲を勵して曰く、「我が君此に來る。汝が輩胡ぞ無禮なるや」と。衆皆震伏す。信長、出で迎へ、導きて内城に入る。植村榮政、刀を操りて從ふ。衛士、之を叱す。榮政、目を瞞らして曰く、「吾は植村新六なり。主人の刀を奉ず。何渠ぞ

信長寶刀を榮政に與ふ

氏眞怒る

(家康信長と和を盟ふ圖)

氏眞東參河を攻む



て、遂に戰死す。嗣君、津平、小牧に築き、松平忠次、本多廣孝に命じて、之を守らしめ、以て東條に備ふ。其虚を窺ひ、徑に中島を襲ふ。好景、還り戰ひて之を走らす。善明、堤に至り、敵の大に至るに遇ひ

家康牛窪を攻む

東條を攻む

五年

【引間城】今嶺山、五本松、夢河

五月、氏真、東夢河を攻む。諸豪善く拒ぐ。七月、嗣君、自將として牛窪を攻む。別將をして、鳥屋を攻めしむ。鳥屋陥る。本多忠勝、叔父忠真と共に軍に従ふ。忠真、縦して一人を斃し、忠勝を顧りて其首を取らしむ。答へて曰く、「孺子、人に因りて功を成すを欲せず」と。自一人を斃して之を讎る。忠真、狀を啓して曰く、「平八郎、將に、行君の用を爲さんと。」嗣君、大に喜ぶ。五月、荒川の城主吉良頼持、兄義諦と卻あり。酒井正親に因りて降を請ひ、俱に攻めて西尾を抜き、牧野成定を走らせ、遂に東條を攻む。東城の裨將富永景通、藏波噺に陣し、小牧を攻めんと欲す。忠次、廣孝、皆來りて正親に合し、邀へて景通を撃つ。景通、弓を引きて廣孝に擬す。廣孝、直に進み、刺して之を殺す。餘兵、皆走る。北ぐるを追ひて城に至り、義諦を降して還る。嗣君、義諦の邑を以て正親に賜ひ、景通の邑を以て廣孝に賜ひ、津平を以て忠次に賜ふ。鳥居忠吉、松平信一をして、東條を守らしむ。頼持に妻すに異母妹を以てす。

五年三月、嗣君、松平清善をして、西郡を攻めしむ。利あらず。更に久松俊勝、松平忠次等をして、之を攻めしむ。忠次、甲斐の間諜十八人を招き、城に入りて火を擧げしむ。外兵之に應ず。城將鶴殿長持、走る。追ひて其二子を虜にす。俊勝に命じて、西郡を守らしむ。駿河の兵、來り争へども取る能はず。氏真、我が質を殺さんと欲す。我が外家關口親永の豪宗たるを以て、敢て發せず。石川數正、往きて質を護らんと欲す。嗣君の許さざるを度り、書を留めて往く。氏真、甚、鶴殿氏の二子を惜しむを聞き、則、親永に因りて質を易へんと請ふ。之を許す。乃、使を馳せて還り報す。嗣君、大に喜び、二子を駿河に送る。數正、乃、關口氏、世子信康を奉じて歸る。已にして氏真、之を悔ひ、怒りて親永を殺し、我が將士の質を擁して、之を誘ひ降さんとす。我が將士、一人も應ずる者なし。即、盡く其質を申し殺す。嗣君、之を聞きて哀痛す。

四月、引間城、氏真に背きて來り降る。七月、嶺山も亦降る。已にして皆駿河の兵に抜かる。九月、駿河の將朝日奈泰長、來りて五本松を襲ひ、其城主西郷正勝を殺す。正勝の子、元正、月谷に在り。變を聞きて馳せ援ひ、父の已に死せしを見て、駿河の軍に赴きて死す。其弟清員は、泰長の爲に捕へらる。行萬丈谷

六年 松平好景 長澤 夢河

一向宗

一向宗徒日 刻して來

を歴、袂を奮ひて自投じ、遂に脱れて歸る。菅沼定盈に因りて狀を告ぐ。嗣君、命じて父兄の後を承かしむ。辭して曰く、「臣の兄の遺孤あり。臣請ふ、これを佐けん」と。嗣君、義として之を許す。嗣君、自將として板倉重定を佐脇に攻む。佐脇、牛窪、楡木と兵を合せて、坂井に距ぐ。我が前軍、敗走す。渡部守綱、夏目正吉、殿して戦ふ。嗣君、敗を聞きて馳せ救ひ、撃ちて重定を斬り、佐脇、八幡の二寨を抜く。

六年二月、松平忠次を遣し、攻めて岩略の寨を抜く。三月、自將として駿河の將小原鎮實と、小坂井に戦ひて、之を破る。五月、鷹を近郊に放ちて、深溝に至る。故松平好景の子伊忠、ここに在り。邀へて之を襲す。此に賜はるに鷹を以てして曰く、「長澤は要地なり。武田信玄の窺ふ所、汝に非ずば以て之に當る莫し」と。乃、徙りて長澤を守らしむ。

十月、菅沼定顯をして佐崎に城かしむ。糧儲未だ備らず。邑中に上宮寺あり。頗る資糧饒し。定顯これを徵す。寺僧聽かず。乃、之を奪ふ。僧、怒りて同宗の鍼崎、野寺、土呂の三寺に檄し、衆を合はせて千餘人を得。菅沼氏を攻め、劫剽して去る。定顯、之を訴ふ。乃、酒井正親に命じて其首謀を捕へしめ、斬りて以て徇ふ。僧徒、益、怒り、大に門徒を招衆す。將士の其宗に係り、若くは親戚を救ひて仇怨を修めんと欲する者は、往々之に歸す。矢田作十郎、馬場小平太、峰谷貞次、渡部守綱、本多正信、其弟正重等數百人なり。吉良義諦は東條に據り、其弟頼持は荒川に據り、酒井忠尚は上野に據り、松平家次は櫻井に據り、夏目正吉は野羽に據りて、一時に並び叛く。僧、之に牌を分つ。書して曰く、「一步を進めば極樂に生れ、一步を卻りば地獄に墜つ」と。日を刻して來り攻めんとす。嗣君、大に驚き、兵を分ちて諸城を守らしむ。大久保忠俊、從子忠世、忠佐以下と輪田を守り、酒井正親は西尾を守り、松平伊忠は深溝を守り、本多廣孝、松平忠次は土井を守り、松平清善は竹谷を守り、松平家忠は形原を守り、松平信一は藤井を守り、松平親俊は福釜を守る。酒井忠次は上野の傍に砦して、賊出づる毎に烽を擧げて相報す。嗣君、烽を視て即馳せ救ふ。賊、輒逃れ走る。石川數正は諸公族と上野を攻め、土井の兵は東條を攻め、藤井の兵は土呂、鍼崎を

攻む。皆功あり。深溝の兵は野羽を攻む。野羽の兵乙部某、導きて城を陥れ、正吉を擒にす。乙部、請ひて曰く、臣の導を爲す所以は、正吉を生きさんと欲すればなり」と。伊忠も亦、之を請ふ。嗣君、遂に正吉を釋して之に祿す。酒井忠次、戸田某を招き、亦以て導と爲し、野寺を攻めて、其後門を破る。

十一月、鉦崎の賊、輪田を攻む。忠俊、小豆阪に邀へ戦ふ。嗣君、馳せ救ひ。大に之を破る。阿部忠政、善く射る。渡部守綱、寛正重と皆傷く。水野忠重、蜂谷貞次を追ふ。貞次、槍を揮ひて之に返す。忠重卻く。嗣君、親進みて之に迫る。貞次、卻く。松平金助、追ひて之を誦る。貞次曰く、「吾れ主公を畏る。豈汝を畏れんや」と。縦して金助を燈し、將に誦らんとす。嗣君、之を呵す。貞次、怖れて走る。寛正重、平岩親吉を追ひ、射て其耳に中て、將に誦らんとす。又之を呵す。亦怖れて走る。忠俊、進みて鉦崎を攻め、伊田に陣す。大久保忠世、本多正重と、銃を以て相擬す。忠世、先發す。正重、傷き走る。賊、議して曰く、「争戦決せず。宜しく兵を妙國寺に分ち、其歸途を扼し、夾み撃ちて之を渾中に陥るべし」と。蜂谷貞次は忠俊の婿なり。其覆滅を痛み、獨騎して寺前に低回す。忠俊、之を悟り兵を引きて輪田に還る。

十二月、嗣君、佐崎を攻め、矢田、馬場と戦ひてこれを走らす。天野康景、馬場を斬る。閏月、本多重次、高力清長、土呂を攻め、本多廣孝、松井忠次、東條を攻む。皆功あり。功を賞し邑を分つ。忠次、松平の氏を賜ふ。尋いで砦を佐崎の傍に築く。

七年 正月三日、水野信元、來りて正を賀す。會佐崎の賊、岡、大平を焚く。嗣君、之を望み、信元に謝して馬に上りて、出づ。信元、去るに忍びず。其卒を以て從ふ。嗣君、上輪田の兵をして鉦崎に當らしめ、直に小豆阪に出で、賊と遇ふ。近藤新一、射て嗣君の轡に中つ。嗣君、怒り、親賊陣を陥れ、信元の兵と、合撃して其二將を斬る。土呂、鉦崎、野寺の賊、合して輪田を攻む。忠俊、忠世、防戦して創を被る。嗣君、單身赴き援ふ。踵ぎ馳する者三十八騎なり。鶴殿康孝、戦死す。賊黨渡部守綱、進みて嗣君に逼る。其甥内藤正成、側に侍す。呼びて曰く、「事已に此に至る。私親を恤ふる能はず」と。乃射て之を仆す。賊兵、稀突

近藤新一 七年

土屋長吉

して進む。嗣君、甚危し。賊黨土屋長吉、其儕輩に謂て曰く、「吾れ門徒の故を以て、敢て主君に敵す。今其危きを祝るに忍びず。吾れ寧地獄に墮らん」と。乃鋒を倒にして、嗣君の馬前に當り、賊を防ぎて戦死す。會日暮る。兩軍交綏く。嗣君、還りて其甲を脱するに二銃丸を得たり。命じて長吉の尸を收めて輪田に葬らしむ。

二月、西尾の兵、水野氏の援軍に合し、櫻井、野寺に戦ひて之を破る。嗣君、自、野寺の賊を討ち、伏を設けて之を破る。數日にして佐崎の賊三百可り、矢田を以て將と爲し、岡崎を犯す。嗣君、密に鉦隊を戒めて曰く、「賊の我を困しむる所以は、矢田あるを以てなり。彼れ勇を負み、毎に士卒に先だつ。宜しく之を狙撃すべし」と。戦ひ交はるに及びて、矢田、丸に中りて斃る。餘賊、潰え走る。是より賊衆、沮喪し、互に相悔責す。本多正信、蜂谷貞次を勸めて、降を請はしむ。貞次、大久保忠俊に就きて乞ふ。忠俊、因りて嗣君に説きて曰く、「方今、群雄、務めて兵を勵し地を拓く。而るに我れ内變あり。國兵の半は仇讎と爲る。隣國に乘じて來り侵すが如き有らば、傾覆すること踵を旋らさず。其自新を容れて、各力を効さしむるに若かず」と。嗣君、之を聽す。貞次、乃衆と議し、三事を請ふ。曰く、「將士は祿を復せん。」曰く、「僧徒は安堵せしめん。」曰く、「渠帥は死を減せん」と。嗣君曰く、「請ふ所皆允さん。獨、渠帥は赦す可からず」と。忠俊泣きて諫めて曰く、「去歲以來、臣の宗族幾ど殲く。公、恤みて之を賞せんと欲せば、願くは此輩の命を賜ひ、以て前鋒と爲し、吉良、荒川を攻め、功を立て、罪を償はしめよ。則、疆土、日に拓けん」と。水野信元も亦、以て請を爲す。嗣君、勉めて之に従ふ。貞次、守綱以下を輪田に召し、盟を徴し書を賜ふ。石川家成をして鉦崎の降將を率ゐて土呂に赴き、呼びて之を諭さしむ。賊、兵を投じて降る。佐崎、野寺、相繼ぎて皆降る。乃正信等の五人、及び諸惡僧を逐ひ、其餘を以て先鋒と爲し、東條、荒川を攻めしむ。義諦、頼時、降を請へども許さず。皆西に走る。是の役や、榊原康政、上野に先登す。康政の先は、仁木義長と曰ふ。伊勢の榊原邑に居る。其裔清長、參河に徙り、藏人親忠に仕ふ。康政は、其孫なり。幼より沈深にして書を

蜂谷貞次 榊原康政

家康西参河を定む
 氏眞復出で
 吉田を攻む
 八年 家康参河を定む
 佛高力、鬼作左
 名を家康と改む
 九年
 十年

喜む。是の歳、甫めて十六。成瀬正義、弟正一と戦ふ毎に功あり。二人嘗て罪を獲て、甲斐に出奔す。已にして來り歸す。嗣君、之を待たざること故の如し。二人感激す。故に戦最も力む。嗣君、既に西参河を定む。三月、兵を東参河に出す。四月、小笠原康元は幡豆を以て、牧野定成は牛窪を以て、戸田重定は榎木を以て皆下る。乃、砦を一宮に築き、本多信俊をして、これを守らしめ、以て吉田、田原に逼る。五月、氏眞、兵一萬を將る。佐脇、八幡の二邑に陣す。其五千を分ちて、一宮を攻む。信俊に急を告ぐ。嗣君、自二千人に將として赴き援く。二邑の間を過ぎて、本能原に至る。部伍嚴整にして、兵鋒甚鋭し。氏眞、敢て犯さず。其兵の一宮を圍む者、解き退く。信俊、尾撃して之を破る。明日、嗣君、復氏眞の營前に逼りて還る。氏眞引き去る。是より復出づる能はず。

六月、嗣君、酒井忠次をして、牛窪、榎木、幡豆の兵を率ゐて、吉田に攻めしむ。本多忠勝、先登す。蜂谷貞次、戦死す。城將小原鎮實、終に城を致して去る。以て忠次に賜ふ。本多廣孝、田原を攻めて、其郭を取る。城將朝日奈元智も、亦、城を致して去る。以て廣孝に賜ふ。六月、酒井忠尚、また叛く。廣孝、忠次に命じて之を討つ。城兵其數、叛くを醜み、相率ゐて出で降る。忠尚、駿河に奔り、尋いで死す。是の歳、御油、寺部を攻め、皆之を取る。長篠、築手、段嶺の三邑皆降る。

八年春、嗣君、盡く参河を定む。乃、奉行三人を置きて、國內の政刑を掌らしむ。作左衛門、本多重次、與左衛門高力清長、三郎兵衛天野康景を以て、之に充つ。重次は剛直なり。清長は慈祥なり。康景は沈重にして善く謀る。民之が語を爲して曰く、「佛高力、鬼作左、彼此偏なきは天野三郎」と。是より先、嗣君、既に今川氏と絶つ。元康の名は、義元の命じたる所なるを以て、名を家康と改む。遠祖義家の偏名を取らる。鳥居忠吉、嗣君の爲に京師に奏して、先世の官爵を襲がしめんと請ふ。九年十二月、詔して、從五位下に叙し、参河守に任ぜらる。

十年五月、参河守、世子信康の爲に、織田信長の女を娶る。信長、佐久間信盛をして、來りて女を送らしむ。

武田信玄
 十一年 久能を攻む
 西近江
 【箕作城】近江
 馬伏、高天神
 掛川
 奏して徳川氏に復す
 十二年

参河守の國を定むるや、武田信玄、使をして好を修めしむ。是の歳、其將山縣昌景をして來り言はしめて曰く、「請ふ、力を盡せて氏眞を滅し、我は大井河以西を取らん。公は大井河以西を取れ」と。参河守、之を諾す。十一年正月、詔して参河守を遷して左京大夫と爲す。三月、大夫、兵を遠江に出して、久能を攻む。高力清長をして、城將宗能に説きて之を降さしむ。松下、二股、高敷の三族、皆降る。進みて堀川を攻めて、之を抜く。遂に宇津山を取り、見附に城く。八月、信長、西近江を略し、來りて援兵を乞ふ。大夫、松平信一をして、二千餘人を以て往かしむ。信長の將木下秀吉等、箕作城を攻む。城固くして抜けず。信一、疾く攻め、矢石を冒して進み、大に呼びて曰く、「参河の人、松平信一、先登す」と。一隊、繼ぎて登る。城、遂に陥る。信長、面のあたり信一を褒めて曰く、「卿、膽に毛を生ずと謂ふべし」と。桐號の胴服を賜ふ。

十二月、大夫、遠江に入り、井伊谷を取らんと欲す。谷中の豪族井伊直親、讒言を以て氏眞の爲に殺さる。其故部菅治、近藤、鈴木の三族、皆大夫に屬す。大夫、遂に刑部を取る。是より先、引間の城主飯尾某、密に款を我に通す。事覺れて殺さる。其部下、城を以て來り降る。又事を争ひて相殺す。是に於て、大夫、引間に入りて、其壘壁を益し、立どころに、根柢と爲す。遂に馬伏、高天神の二城を招き降す。

是の時、武田信玄、已に駿河に入りて、氏眞を逐ふ。氏眞、遠江に奔る。朝日奈泰能、掛川城を守りて之を迎ふ。三浦義鎮、小原資久、氏眞を棄て、獨、華澤を保つ。甲斐の將秋山晴近、大井川を濟り、久能を招く。久能、下らず。奥平、菅治を迎へて見附に戦ふ。我が兵利あらず。大夫、人をして晴近を誚めしめて曰く、「汝、何ぞ敢て約に背くや。亟に引き去らざれば、我れ親出で、之を撃たん」と。晴近、惧れて引き去る。大夫、遂に掛川を攻む。城、險にして食足る。輒く抜く可からず。乃、砦を連ねて之に備へ、退きて見附に陣す。是の歳、奏して徳川氏に復せんと請ふ。十二年正月、詔して、報可す。是より徳川を宗と爲し、松平を族と爲す。是の月、復掛川を攻む。使をして信玄に謂はしめて曰く、「掛川は、則僕力にて能く之を擧げん。前日の約如何」と。信玄答へて曰く、「敢て渝えず」と。大夫、即徙りて天王山に陣し、以て掛川に逼る。氏

掛川を攻む
【氣賀】遠江
氏真走りて
人となす

【戸倉】伊豆
家康遠江を
取る
【金谷】遠江

元龜元年
濱松

眞、久能宗能の父宗明に暗かに利を以てし、我が軍を夾み撃たんと欲す。宗明、諾して之を宗能に告ぐ。宗能、従はず。氏真の使、復至りて期を戒む。宗明父子、密に大夫に謁して之を告ぐ。大夫、伴り期せしめ、而して夜兵を城外に伏せて、敵の出づるを候ひ、起ちて闘ひ、其五將を獲、尾して城に入る。城兵、堅く拒ぎて入るを得ず。二月、退きて見附に陣し、濱名、都築の二城を降す。
三月、復掛川を攻む。泰能等、出で、西宿に戦ふ。我が諸將、撃ちて之を破り、走るを追ひて城に至る。竹楯を以て環り攻む。城兵、舟師を以て我が軍後に出づ。鳥居元忠、榊原康政等、遑へ撃ちて、之を走らす。大夫、退きて引間に入り、三奉行をして、令三條を下さしめ、鹵掠を禁じ、士民を按據す。會、氣賀、盜起る。兵を遣して其首謀を誅し、盡く餘黨を赦す。遠江の民、心を歸す。氏真、掛川の終に守る可からざるを度り、走りて北條氏康に依らんと欲す。氏康は其舅なり。乃酒井正親、石川家成に因りて和を乞ふ。大夫、答へて曰く、「某、幼きとき、尊翁に扶持せらる。敢て舊誼を失はず。讒者に聞せられ、以て兵を構ふるに至る。今、信玄、駿河、遠江を併せんと欲す。公、若し遠江を以て某に附せられば、某、當に氏康と謀り、公を駿河に納るべし」と。因りて誓書を送る。五月、松平家忠をして、氏真を護送し、戸倉に至り、之を北條氏に授けしむ。大夫、是に於て、遠江を取り、掛川を以て、石川家成に賜ふ。自五百人を従へ、郡縣を巡視す。甲斐の將山縣昌景、兵三千を將りて、駿府より金谷に至り、大夫に遇ふ。馬を下りて拜し、我が寡軍を親て心動き、忿争に託し、反りて之れを襲ふ。大夫、走りて險隘に就き、撃ちて其前鋒八騎を斬る。昌景、引き去る。大夫、大に怒り、兵を遣して、駿府を攻めしむ。昌景、壘を棄て、走る。乃使を氏康に使し、氏真を復せんと謀る。氏真の舊臣岡部正綱等、府城を修めて之を守る。六月、天方、飯田、我が令を奉ぜざるを以て、攻めて之を取る。十一月、信玄、氏泰と戦ひて之に勝ちて正綱を降し、駿河を取り、兵を分ちて小山に據る。大夫松平眞乗をして掛川を授け、以て小山を攻めしむ。
元龜元年正月、遠江、既に定りしを以て、徙りて引間に居り、名を濱松と改む。世子をして岡崎に居て、

【二國】參河
遠江
家康信長と
京師に入る

【龍鼻】近江
近江に陣す

稻葉通朝

參河を撫せしむ。大夫の威名、大に振ふ。稱して海道第一と爲す。是の月、信玄、攻めて華澤を抜く。小原資久、三浦義鎮、高天神に奔る。城主小笠原長忠、之と故あり。而れども大夫の深く二人を惡むを知り、斬りて其首を獻す。大夫、賞せず。二月、信長、人をして、來りて二國の平定せしを賀せしむ。且援兵を請ひて、朝倉義景を撃たんとす。三月、信長、先京師に入る。大夫、兵一萬を將りて之に繼ぐ。四月、將軍足利義昭、信長及び大夫を變す。遂に越前に赴く。信長は近江より、大夫は若狹より敦賀に會し、攻めて手筒を抜き、遂に金崎を下す。會、淺井長政、叛きて義景に應じ、信長を夾み撃たんと欲す。信長、危惧し、大夫に問ひて曰く、「之を爲す如何」と。大夫曰く、「公、第馳せて京師に入れ。長政、事を見る遅し。必未だ歸路を扼せじ。義景の如きに至りては、則ち一猛將を留めて、某と力を合せば、必尾する能はじ」と。信長、乃羽柴秀吉を留めて、夜、京師に走る。數日にして、大夫、秀吉と殿して退く。信長の將丹羽長秀、明智光秀、若狹に在りて、歸る能はず。大夫、兵を分ちて之を援ふ。皆朽木に達す。行士寇を撃ちて京師に入る。五月、岡崎に歸る。
六月、信長、淺井長政を撃つ。復來りて援を乞ふ。大夫、兵を將りて之に赴く。朝倉義景、族景健をして、長政を援けしむ。信長の兵三萬五千、大夫の兵五千、龍鼻に陣す。長政の兵八千、景健の兵一萬五千、大崎に陣す。信長、夜、戦を議す。大夫曰く、「某、年少、混戦するを喜ばず。願くは一面に當らん」と。信長曰く、「然らば、則ち長政に當れ。願ふに公は兵寡し。我れ當に兵を分ちて之を援くべし」と。大夫曰く、「某、小國を領し、寡兵を用るるに慣ふ。且縱、援兵を賜ふとも、素より撫循せるに非ざれば、何ぞ用を爲さんや」と。信長曰く、「公をして獨敵に當らしめば、吾れ將に天下の笑と爲らん。請ふ。一隊將を附せん。誰か可なる者ぞ」と。大夫、乃稻葉通朝を請ふ。信長、通朝を召して曰く、「汝、徳川に讒拔せらる。榮、これより大なるは莫し」と。因りて一槍を取りて大夫に贈りて曰く、「相傳ふ、是れ鎮西八郎の箭鏃なりと。公は源氏の胄胤なり。詰朝、其れ此を以て指麾せよ」と。大夫、喜びて之を受く。是に於て、兵を分ちて四と爲す。酒

姉川

井忠次等を前鋒と爲し、石川數正等を次隊と爲し、大夫、自、中軍と爲り、榊原康政、本多廣孝を左右翼と爲し、稻葉通朝を後拒と爲す。且日、長政は東より、景健は西より、來りて姉川に至る。信長、又人をして來りて謂はしめて曰く、吾れ深く長政を憎み、甘心せんと欲す。願くは公、景健に當れ」と。大夫曰く「諾」と。忠次、諫めて曰く「我が嚮ふ所已に定る。乃之を易へば、部伍必亂れん」と。大夫曰く「西は衆にして強し。東は寡にして弱し。東を捨て、西を取る。吾が願ふ所のみ」と。乃兵を引きて西し、景健と姉川を夾みて陣す。景健、兵百餘を縦ちて先濟る。本多忠勝、中軍に在り。請ひて曰く「彼れ我が横を撃たんと欲す。我れ當に逆へ戦ふべし」と。大夫曰く「善し」と。忠勝に命じて馳せ撃たしむ。大久保忠隣、安藤直次、踵ぎて馳せ、撃ちて之を走らす。景健、全軍を以て進む。我が前鋒卻く。次隊之を承け、河中に戦ふ。大塚又内、敵の槍を攪りて相挽き、遂に奪ひて之を殺す。内藤正貞、鎧を敵中に遺し、馬を回して之を取る。松平忠次、敵に射られ、矢、左手を貫く。矢を抜きて反し射て、之を登す。次隊卻く。敵進みて、直に麾下に逼る。麾下の將士、挑ぎ戦ひて決せず。大夫、怒り、鎧を奮ひて指麾し、左右翼を縦ちて、夾み撃ちて、大に之を破る。願て信長の軍敗る、を見、川に沿ひて東し、後拒と俱に長政を撃ち、又大に之を破る。北くるを追ひ、大崎に至りて還る。信長、大に大夫の功を賞し、目するに武門の棟梁を以てす。本多正信、渡部守綱等、亡けて越前に在り。悔いて來り歸し、是の役に從ひて首功あり。

八月、大風、稼を傷く。我が國最も甚し。三奉行に命じて之を賑恤せしむ。九月、信長、一向の賊を攝津に攻む。淺井、朝倉、六角氏、並び起りて其歸路を絶つ。大夫、酒井忠次、石川家成をして、赴き救はしめ、數六角氏を撃つ。事平きて乃歸る。是の時、信長、已に近畿十餘州を取る。而して大夫は屢に參河、遠江を定むるを得たり。強敵と壤を接するを以てなり。

改邦文日本外史卷之十八終

信長信玄を畏る
元龜元年
徳川氏武田氏と難を構ふ
二年
【三族】松下二股、高敷

改邦文日本外史卷之十九

徳川氏正記

徳川氏二

初め信長、深く武田信玄を畏れ、之に事ふること甚謹めり。而して信玄、常に其兵を西せんと欲し、議して曰く「信長、家康をして我に當らしめて、自取り易き地を取りて、強大を致せり。今先家康を獲ば、則信長、手に隨ひて亡びん」と。是の時に當りて、信玄と勁敵たる者は、唯北條氏康、及び越後の國主上杉謙信あるのみ。是の歳冬、氏康卒す。子氏政立つ。和を信玄に請ふ。信玄、其今川氏眞を庇ふを以て之を難み、氏政をして之を殺して意を表さしむ。氏眞、懼れ海に航して來奔す。大夫、給するに邑を以てし、善く之を遇す。氏眞、素より謙信と好を通ず。大夫に勸めて之に幣を修めしむ。謙信、喜ひて之に答ふるに、夾きて信玄を攻めんことを約す。大夫の異父弟久松義勝、駿河に質たること數年。信玄の爲、奪はれて甲斐に幽せらる。是に至りて、逃れ出で、雪を踏みて歸る。足指皆墮つ。大夫、厚く之を視る。信玄、是に於て、意を決し我と絶つ。而して徳川氏、武田氏と始めて難を構ふ。

二年正月、大夫、從五位上に進み、侍從に遷る。二月、信玄、遠江に入る。三月、高天神を攻む。小笠原長忠、堅く守る。乃兵を引きて去る。其將秋山晴近をして、東參河を侵さしめ、三族を招き降す。獨菅沼定盈降らず。四月、參河の諸城多く陥る。我が民、叛きて信玄に應じて岡崎を襲はんと欲す。侍從 青山忠

信長家康に書を送る

三年

内藤信成 大久保忠世

(本多忠勝 肖像)

忠勝

【唐道】長毛 着兜の上に 垂れて飾と するもの



門を遣し、撃ちて之を平く。忠門、戦死す。侍従、出で、吉田に陣し、兵を遣して信玄の將山縣昌景を撃ちて、之を走らす。信長、我が信玄と兵を交ふるを聞き、甚之を危む。而れども敢て來り援はず。人をして來り言はしめて曰く、「聞く、信玄、敷貴國を侵すと。其れ當に赴き援けて去歲の勞に報ゆべけれど、而も西事の殷なるを以て、未だ之を果さざるなり。願ふに濱松は敵の衝に當る。宜しく避けて岡崎に徙るべし」と。侍従、謝して曰く、「某請ふ、徐に之を討らん」と。使者出つ。侍従、笑ひて近臣に謂て曰く、「吾にして此を去らば、當に刀劍を踢み折りて復用ざるべし。信玄、何ぞ畏るゝに足らんや」と。

十二月、信玄の兵、吉田、榑木を侵す。侍従、自、將として之を距ぐ。敢て戦はずして罷む。三年正月、侍従、駿河に入る。三月、上杉謙信、兵を將るて信濃に入り、以て我が聲援を爲す。十月、信玄、兵三萬餘を將るて來り侵し、韃、飯田、二城を拔きて、袋井、見附に陣す。内藤信成、大久保忠世、四千人に將として、西島に至り、信玄と遇ふ。信玄曰く、「敵兵、輕しく出でば、一人をも還らしむる勿れ」と。兵を麾きて來り逼る。信成曰く、「濱松八千の兵、其半此に在り。而れども衆寡敵せず。一敗地に塗れば、何を以てか再戦せん」と。乃退く。侍従、前鋒の危きを聞き、自出で、馬籠に陣し、本多忠勝をして精騎を率ゐり往きて之を援けしむ。忠勝、一言阪に至れば、信成等退かんと欲す。甲斐の兵之を尾し、結びて解けず。忠勝、善く鎗を用ゐる。愛する所の一槍、名づけて截蜻蛉と曰ふ。是に於て、忠勝、鹿角冑を戴き、截蜻蛉を掲げ、單騎馳せて兩軍の間に入る。兩軍、乃開く。終に兵を收めて退き、卒に命じて薪を阪頭に積み、而して銃を其側伏す。敵至る。銃發して火起る。敵復尾する能はず。時に我が兵多く唐首を蒙る。信長の貽る所なり。甲斐の人之が語を爲して曰く、「家康に分て過ぐる者二あり。唐首なり、平八なり」と。已にして信玄、其子勝頼等を遣して二股を攻め、馬場信房をして我が援路に備へしむ。侍従、赴き援ひて、

江【三形原】遠

井伊谷

信玄・家康 大に戦ふ

天龍河を渡り、敢て戦はずして歸る。敵、筏を河上に結びて、以て城の汲道を絶つ。守將、城を致し、收めて濱松に入る。我が諸城多く叛きて信玄に降る。信玄、兵を合せて濱松に逼る。乃松平清善をして、往きて宇津山に距がしむ。濱松の諸將、援を織田氏に請はんことを勸む。侍従、之を欲せず。諸將曰く、「信長の富、我に五倍す。而れども連に我に援を請ふ。我れ二國を以て強敵に抗し、未だ嘗て援を請はず。今にして一たび請ふとも、何ぞ不可ならん」と。侍従、之に従ふ。十一月、信長、乃佐久間信盛、平手汎秀等を遣し來り援はしむ。相持して月を踰る。

十二月、信玄、兵四萬を部し、三形原に陣し、火を濱松の城外に縱つ。侍従、怒り、出でて之を撃たんと欲す。信盛、其衣を牽き、諫めて曰く、「寡君、臣等を戒めて曰く、「信玄、老將なり。其兵精強、天下に敵無し。徳川、出で、戦はんと欲せば、汝當に固く之を止むべし」と。侍従曰く、「嚮に信玄、小田原に入り、旗を其門に摩す。而れども氏康、出でず。世傳へて之を嗤ふ。今、敵、我が城下を踏藉す。而して敢て一矢を發せざるは、丈夫に非ざるなり。果して然らば、則吾れ當に髪を削りて縊を被むるべきのみ」と。諸將、固く諫めて止む。二十二日、信玄、退きて井伊谷に入る。侍従、遂に北に出でて三形原に陣す。日已に哺なり。兵八千を分ちて九隊と爲し、鳥居忠廣を遣し、往きて敵狀を視はしむ。返り報じて曰く、「信玄、軍を返して來らん。陣堅く勢鋭し。戦必利あらじ。請ふ、速に兵を收めよ」と。侍従、聽かず。更に渡部守綱をして往かしむ。亦報じて曰く、「與に戦ふこと勿れ」と。侍従、叱して曰く、「人、我が閨に入りて我が枕を蹴るとも、猶臥して較せざる者あらんや」と。大久保忠佐、柴田康忠に命じ、戦を挑ましむ。守綱、之を止むれども、肯かすして馳す。石川數正、本多忠勝、榑原康政と、共に敵將小山田昌行を撃ちて、之を走らす。侍従、麾下を以て、酒井忠次、大須賀康高と、山縣昌景を撃ちて、之を走らせ、北ぐるを追ひて進む。勝頼、馬場信房と、傍より速み我が麾下に逼る。昌景、昌行、皆之に返す。信玄、自奇兵を縱ちて、横に我が軍を撃つ。軍亂る。信玄、乃全軍を鼓して徐に進む。山岳爲に震ふ。我が軍終に大に敗る。信盛は走り、汎秀は死す。

夏目正吉

畔柳武重

數日、松平家忠と止り戦へども支へず。侍従、切齒口沫、衆を勵して返り撃つ。成瀬正義、本多忠實、安藤基能、鳥居忠廣等、死する者凡二百餘人。敵兵益逼る。侍従、自脱れざるを度り、返りて死を決せん。欲す。士、多く馬を喪ひ歩して従ふ。夏目正吉、濱松に在り。急を聞きて馳せ至り、諫めて曰く、「勝敗は常事のみ。此れ大將、命を授くるの日に非ず。君、第速に走れ。臣請ふ、之に代らん」と。乃其馬を扣へて南に向け、鎗鐵を以て馬を策つ。馬走る。正吉、畔柳武重を呼びて曰く、「子、我が君を以て免れよ」と。武重止り共に死せんと欲す。正吉、揮ひて之を去らしめ、自鎗を奮ひ敵を拒ぎ、苦戦して死す。侍従、間を得て走る。

家康大に敗る

忠世 天野 康景

忠世をして旗を犀崖に樹て、敗軍を收めしむ。敵以て大將と爲し、争ひて之に赴く。侍従、因りて城に達するを得たり。城門闔つ。武重、大に呼びて曰く、「君歸れり。蓋ぞ開かざる」と。開きて入る。一城、敗を聞きて大に擾る。高木廣正、一髯首を得て還る。侍従、命じて之を刀鋒に貫き、徇へて曰く、「兩軍鬪亂れ、吾れ信玄を獲たり」と。衆、乃定まる。侍従、馬を下り鎗を杖つき。慨然として従者に謂て曰く、「吾れ恨むらくは、尾張人に沮まれて、戰其時を失ひ、乃此挫衄を取りしことを」と。腰間の扇を取りて武重に賜ふ。都築秀綱の妻、豫粥を煮て士卒を餉ふ。之に衣服を賜ふ。時已に昏し。或人門を關さんと請ふ。侍従曰く、「後る、者、安にか歸らん。且敵に怯を示すは、計に非ざるなり」と。命じて諸門を開き、火を篝し、而して自ら飽食酣睡し、鼻息雷の如し。敵、方に北ぐるを追ひて城に逼る。門の開きたるを見て、其伏兵有るを恐れ、敢て入らず。鳥居元忠、渡部守綱等三百人、門を出で、戦ふ。敗兵、敵軍の後より謀ぎ還る。信玄、乃退き舍す。忠世、康政、行きて敵兵を破り、城に入る。本多重次、馬を喪ひ、敵の一騎を登し、其馬を奪ひて還る。初め重次、多く糧仗を儲ふ。是に於て、衆頼りて以て之に安す。侍従、諸將を召して、守禦を議す。忠世曰く、「敵、新に勝つ。當に其鋒を挫き、以て我が軍氣を振はすべし」と。侍従、之を然りとし、城内の銃手を收め、十六人を得、忠世及び天野康景を以て之に將とし、五更、犀崖に登りて甲斐の營を亂射す。

馬場信房

天正元年

村松城中に笛を吹く

信玄創を疾む

營亂れ、多く谷に陥りて死す。信玄曰く、「家康の兵、何ぞ強項なる」と。會石川家成、掛川より入りて援ふ。我が軍稍振ふ。侍従、城樓に上り、甲斐の軍を望み、富永某を顧て曰く、「汝、以て敵の去留如何と爲す」と。對へて曰く、「軍に輻重なく、竈に烟を見ず。是れ必去らん」と。明日、信玄、果して去りて、刑部に陣す。馬場信房、之に謂て曰く、「臣、敵の戸を檢するに、北首なる者は俯し、南首なる者は仰ぐ。以て家康の訓練を見る可し。向に主公をして家康と和し、結ぶに婚姻を以てして先鋒と爲らしめば、則天下何ぞ圖るに足んや」と。天正元年正月、將軍足利義昭、教を信玄に下し、信長及び侍従と和せしむ。信玄、肯せず。兵を引ききて野田を攻む。菅沼定盈、援將松平忠正と堅く守る。敵、竹樞を蒙り、龜甲車を用ふる。外城陥る。乃退きて内城を保つ。敵、鹿砦を環し地道を鑿りて井泉を絶つ。侍従、自將として之を救ふ。甲斐の軍、犯す可からず。退きて吉田に次し、使を馳せて援を信長に乞ふ。信長、敢て出でず。城中、笛を善くする者に村松、銃を善くする者に鳥居あり。村松、夜、樓に上りて笛を吹く。敵の數騎、城外に來りて之を聞き、竿を標して去る。鳥居、晨に起きて之を見て曰く、「聞く、信玄、音を喜ぶと。是に非ざるを得んや」と。密に準を定めて銃を安き、夜に逮びて村松をして復笛を吹かしむ。敵復來り聽く。銃發して一騎を墮す。旦日、敵中傳へ言ふ、信玄、疾あり」と。來りて城を致さんことを諭す。定盈、忠正、城を出で、自殺して士卒を免さんことを請ふ。信玄、之を許す。城を出づるに及びて、伏起り、虜へられて長篠に囚せらる。誘ひて之を降さんとす。二人屈せず。初め奥平道文、菅沼正員、菅沼刑部等、質を濱松に置きしに、叛きて甲斐に降る。是に於て、二人を歸し、以て其實に易へんと請ふ。信玄、乃人をして來り言はしむ。侍従、之を許す。二人の節を守るを嘉し、其采邑を加ふ。二月、信玄、創を疾み、兵を分ちて去り、我が叛將をして、七城を守りて濱松に逼らしむ。侍従曰く、「敵をして我が近郊に在らしむ可けんや」と。三月、世子信康、石川家成、平岩親吉、久野宗能をして、其五城を

信玄卒す
勝頼嗣ぐ
【城山】遠江

鳳來寺
奥平道文

【黒瀬】遠江

【瀧山】遠江

【質】貞能の
少子
勝頼濱松を
構く
二年

【乾城】遠江
勝頼進み來

復せしむ。餘は皆解き走る。
四月、信玄、創復發し、國に歸る。途にして卒す。勝頼、國に當り、秘して喪を發せず。五月、侍従、駿河を徇ふ。六月、二股を巡り、城山に壁す。七月、菅沼正員を長篠に攻め、火箭を以て其城を焚く。正員、退きて子城を保つ。乃ち壘を熊山に築き、兵を留めて還る。八月、勝頼、來り援け、熊山を攻む。侍従、自將として遂へ戦ふ。甲斐の諸將、退きて險阻を保つ。侍従、兵を伏せて伴り遁る。敵、敢て出でず。遂に去る。城陷る。正員、出で、甲斐に奔り、敵將還りて之を助け、鳳來寺を成る。又奥平道文を助けて作手を成る。道文の叛くや、其子貞能、之を諫む。信玄の去るに及びて、道文危疑す。貞能の子信昌、略書志に渉る。爲に之を筮す。縊に曰く、「蛇年の人死す」と。道文、謂へらく、「信玄の生歳は辛巳なり。必既に死せるならん」と。遂に意を決して款を歸る。勝頼、黒瀬に在り。質を貞能に徴す。貞能、拒むこと能はず。其少子を遣す。或人、貞能、異心ありと告ぐ。武田信豊、之を召す。即往く。從者を戒めて曰く、「未だ我が首を見されば動くこと勿れ」と。入りて信豊を見ゆ。信豊、之を詰る。貞能、笑ひて曰く、「公、反間を信する莫れ」と。信豊、意解け、之と碁を圍み、局を畢へて出づ。勝頼の軍監、城道壽、之を招きて飲しむ。又往く。道壽、人をして出で呼ばしめて曰く、「奥平氏、誅せらる」と。從者動かす。貞能、出で、城に歸り、乃ち擧族來り奔る。甲斐の成將、之を追ふ。侍従、本多廣孝、松平伊忠を遣し、之を瀧山に迎へて追兵を撃ち破り、進みて作手の下に戦ひ、又之を破る。勝頼、怒りて其質を殺す。十月、勝頼、諸將を遣して濱松を構く。留守本多重次等、迎へ撃ちて之を卻く。侍従、乃還る。勝頼、出で、見附に陣し、戦はずして去る。
二年正月、侍従、正五位上に進む。三月、上杉氏、來りて好を修む。侍従、長篠城を修め諸の亡地を復す。四月、乾城を攻め、雨に遇ひて引き還る。城兵、尾撃す。殿の軍、死する者多し。
五月、勝頼、大舉し來りて、野田を攻む。城壁未だ修らず。菅沼定盈、城を棄て、退く。六月、勝頼、進みて高天神を攻む。侍従、援を信長に乞ふ。信長、信玄の定死を聞きて、乃肯て來り援ふ。勝頼、疾く攻め、

天龍河

三年

井伊直政

大賀彌四郎
【文無害】刑
法を用ひる
ことを公平な
るを云ふ
【字理】參河

【二城】岡崎
濱松を鋸刑
に附す

利を以て城將小笠原長忠を誘ひ降す。長忠、遂に降る。信長、之を聞き、止りて吉田に次す。侍従、赴きて謝す。信長も亦、其信玄を打ぎし勞を謝し、黄金二袋を贈りて去る。侍従、長忠の邑を以て大須賀康高に賜ひ、馬伏の壘を守らしむ。
九月、勝頼、兵二萬を將りて來り侵す。侍従、兵七千を將りて天龍河に陣す。我が兵を分ちて二と爲し、一は上流に在り、一は下流に在り。敵の渡るを俟て之を夾み撃たんと欲す。甲斐の諸將、我が陣の犯す可からざるを視て、勝頼に勸めて退き去る。
三年正月、天野康景、吉夢あり。以て甲斐に克つ兆と爲し、之を獻す。二十日、因りて連歌の會を命ず。著して恒例と爲す。二月、侍従、出で、城下に獵し一成童を見る。容貌秀俊なり。之に問ふ。對へて曰く、「井伊直親の孤子、名は直政、幼字萬千代、繼父松下清景に育はる」と。侍従曰く、「我に仕ふるや否や」と。直政曰く、「命を奉ぜん」と。乃載せて歸り、遂に其舊邑井伊谷を賜ひて、故の部曲を統べしむ。是の月、長篠を以て奥平信昌に賜ふ。井伊氏、奥平氏は皆南朝の時、官軍に屬せし者なり。侍従、信昌の用ゐる可きを知り、松平伊昌をして之を助けしめ、益守禦を修めて勝頼に備ふ。
四月、勝頼、宇理を侵す。我が吏人大賀彌四郎、文無害を以て岡崎の胥徒より起り、二十餘邑の稅務を司るに至り、竊に異圖を懷き、其黨、小谷、倉地、山田の三人と謀りて、款を甲斐に通じて曰く、「臣、岡崎の管鑰を掌る。城の有する所に世子と諸將の質とのみ。請ふ、大師を啓かん。質を扱みて濱松に臨まば、降らざること無からん」と。勝頼、大に喜ひ、期を刻して來り襲ふ。山田、中ごろ悔いて世子に自首す。世子、人をして其臥内に伏して、之を聽かしめ、盡く其實を得て、急に之を濱松に報ず。倉地、小谷、事覺れたるを知りて逃る。捕へて倉地を斬り、終に大賀を執へ、窮治して罪に服せしめ、乃馬上に反接して之を二城に徇へ、先其妻子を斃し、然る後之を地に生理して、其首を鋸す。勝頼、兵を潜めて榎木に至り、大賀の敗を聞き轉じて榎木、牛窪を掠む。侍従は吉田を距ぎ、世子は法藏寺を距ぎ、撃ちて之を卻く。

長篠
鳥居強右衛門

五月、勝頼、大舉して長篠を攻め、壘を鷲巢山に築き、兵を分ちて其饗道を絶つ。信昌、伊昌と衆を勵して堅く守る。侍従、小栗大六をして、援を信長に乞はしむ。信長、出するを果さず、奥平貞能、自往きて固く請ふ。信長、之を許す。未だ至らざるに、信昌、出で戦ひて敵を卻け、其竹柄を焚く。勝頼、攻めて其壘城を奪ひ、益攻其を修め、地道を鑿り、塹柵を環し、攻撃すること晝夜に連る。信昌、其衆に謂て曰く、「孰か能く出でて援兵を促す者ぞ」と。鳥居勝高、素より倔强、強右衛門と稱す。進みて曰く、「臣請ふ、往かん」と。信昌、之を許す。夜、縋して出で、侍従の營に至り、信昌の命を致して曰く、「城兵未だ疲れず。鉛硝も亦具す。欠くる所は糧のみ。急に之を救はざれば、則ち信昌、自殺して士兵を免れしめん」と。侍従、召見し、之を慰勞して曰く、「信長、既に途に在り。吾も亦、將に明日を以て出でんとす」と。因りて勝高を留めて自從へんとす。辭して曰く、「城中、領を延べて報を遣つ。臣留まるに忍びざるなり」と。即夜、馳せ歸り、將に柵を踰えて城に入らんとして、敵の選兵に執へらる。勝頼、命じて縛を解き、之に諭して曰く、「汝往きて城兵に語けよ。『信長、家康、來る能はず。宜しく速に出で、降るべし』と。則ち吾れ厚く汝を賞せん」と。勝高曰く、「諾」と。乃ち甲士十餘人をして、刃を露して之を擁し、城下に至らしむ。勝高、城を仰ぎ、大に呼びて曰く、「諸君、努力せよ。大兵來り援はんこと三日を出でじ」と。言未だ畢らざるに、刃叢りて死す。勝頼、益防備を嚴にし、索を濠上に張り、以て城兵の逃れ出づるを防ぐ。十八日、侍従、騎卒二萬を以て先進みて高松に陣す。信長、長子信忠と、五萬の衆を合せて設樂に陣す。信昌、之を望見し、書を作りて曰く、「城猶堅守するに足る。請ふ、輕しく進みて兵を損ふ勿れ。敵若し急に攻めば、當に鐘を鳴して之を報ずべし」と。鈴木金七をして、齎して往かしむ。夜、濠を踰え、短刀を以て索を截り、泗ぎて來り達す。侍従、書を獲て信長に告ぐ。信長、甚甲斐の人を憐り、重柵を植て、塹を穿ち、守るに鳥銃を以てし、侍従をして亦之に倣しむ。大久保忠世、其弟忠佐、命を奉じて、銃手三百を以て先鋒と爲る。參河の卒小栗某、奔りて甲斐に在り。是に於て、勝頼の爲に上國に使用して還り、竊に歸志を懷き、本多忠勝に過る。忠勝、携へて調す。

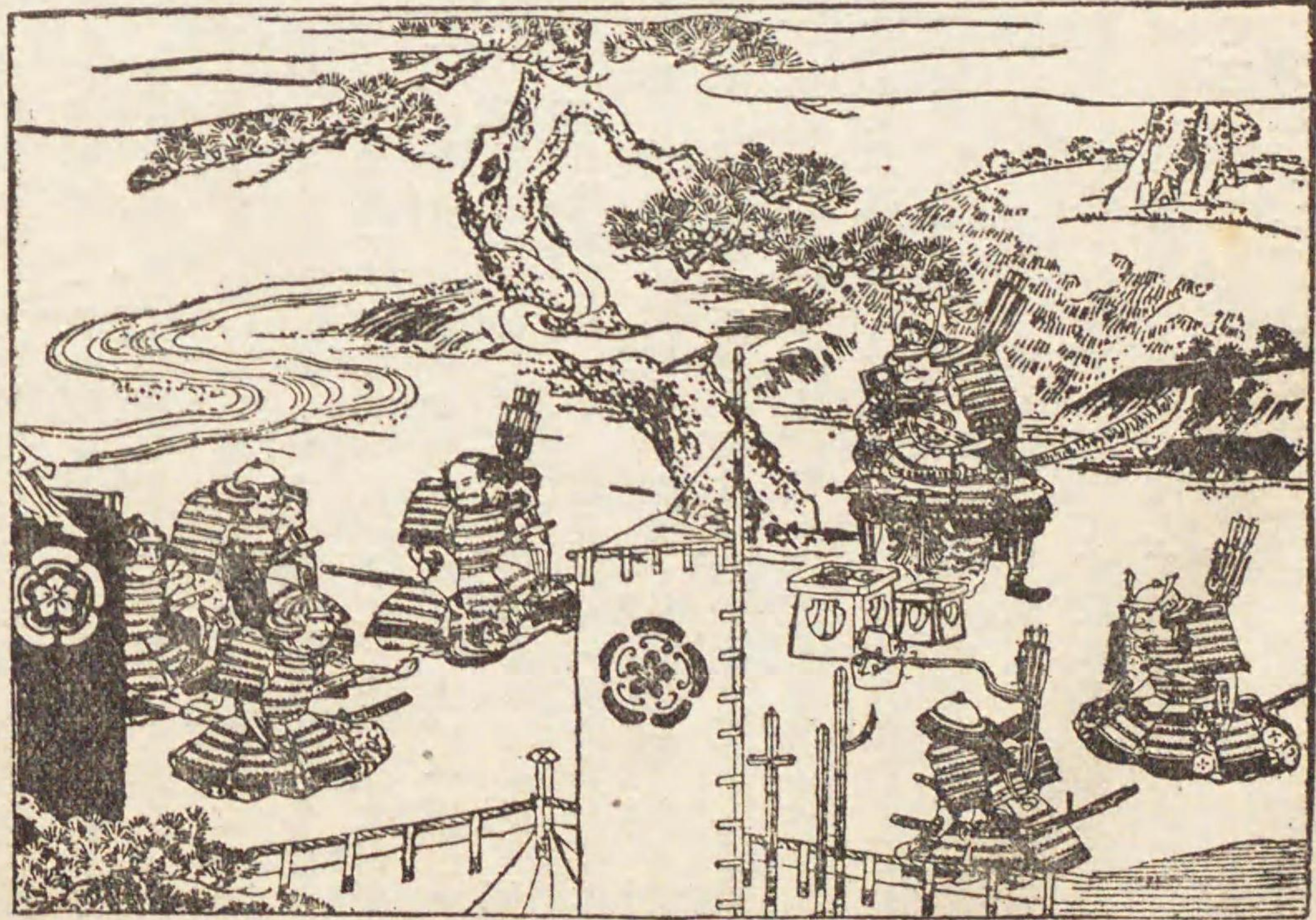
勝頼、織徳
二氏と戦は

侍従、之に密謀を授け、歸りて勝頼に告げしむるに、援軍與し易き狀を以てす。勝頼、大に喜び、戦はんと欲す。將佐みな諫むれども聽かず。乃兵を分ちて城に當て、武田信實をして鷲巢山を守らしめ、自進みて濠澤を渡り、兵を勦して十三隊と爲す。本多廣孝、酒井忠次、相謂て曰く、「我れ敵を誘ひ、死地に入らしめん」と。成瀬正一、嘗て甲斐に在りて、敵の旗幟を記す。侍従、之を召し、甲斐の軍を指して、問ひて曰く、「左なるは誰なるや」と。曰く、「山形昌景なり」と。其右なる者を問ふ。曰く、「馬場信房なり」と。其中なる者を問ふ。曰く、「公族なり」と。忠次、因りて説きて曰く、「敵鋒、我に嚮ひ、鋭甚し。請ふ、兵を分ち繞りて其背に出で、鷲巢の壘を焚き、敵をして後を顧さしめば則ち克たん」と。侍従曰く、「善し」と。未だ信長に告げず。信長、數候騎を發して數を候ふ。皆曰く、「兵衆にして整ふ。犯す可からざるなり」と。一軍色を失ふ。二十日、信長、諸將を召して計を問ふ。諸將、氣沮し、敢て言ふ者なし。忠次、進みて曰く、「臣、人をして間に敵兵を視しむるに、寡贏なり。敗兆みな備る。請ふ明日決戦せん」と。信長曰く、「汝の勇、果して聞く所の如し」と。因りて酒を命じて忠次に賜す。之を信忠に傳へしめて曰く、「聞く、汝、撈蝦舞を善くすと。我が爲に一たび之を爲せ」と。忠次、起ちて舞ふ。衆、箆を敲きて之に和す。舞ひ畢りて、復戦を議す。忠次、復進みて曰く、「是の役は寡君の國事に係る。臣敢て辭讓せず」と。因りて鷲巢を襲ふべき策を進む。信長、心に之を善す。而して其漏泄を恐れ、伴り叱して忠次を斥く。忠次、憚ばすして罷む。已にして信長、陰に之を召し還し、兵五千を附して往かしむ。侍従、松平伊忠、其子家忠、本多廣孝、菅沼定盈、阿部定次、奥平貞能に命じ、三千人を率ゐて忠次を助けしむ。約して曰く、「至らば則ち燧を擧げん」と。忠次、舍に歸らずして發し、夜に乗じて險を踰え、五更、壘下に達す。伊忠、家忠に謂て曰く、「我れ必戦死せん。汝、軀を全くして主公に事へよ」と。家忠、泣きて共に死せんことを請ふ。伊忠、叱して曰く、「國恩未だ報ぜず。又先祀を絶たば、忠孝安に在る」と。乃兵を分ちて之に附し、諷飲して去る。味爽、忠次、燧を擧げ、大に喊して壘に逼る。信實、惶遽して出で拒ぐ。伊忠、力戦して之に死す。終に信實を破殺し、遂に諸

伊忠、家忠

徳川氏佳士
多し
（酒井忠次
建策之圖）

岩を焚く。甲斐の軍、驚動す。我が兵、燧を視て大に喜ぶ。織田氏、將に挑み戦はんとなす。忠佐、忠世に謂て曰く、「我れは主、彼は客。彼をして先戦はしむるは、我が耻なり」と。忠世曰く、「然り」と。乃共に柵外に出で、敵を誘ふ。敵、左陣の突騎三千を先縦つ。我が銃隊、撃ちて之を卻く。敵の中軍繼ぎ至る。忠世、忠佐、周馳して健闘す。信長、其背旗徽號を望み、人をして來り問はしめて曰く、「一人は蝶を以て徽と爲し、一人は鏡を以て徽と爲す。其衆を督すや、臂の指を使ふが如きは、敵か我か」と。侍従、對へて曰く、「蝶は兄なり。鏡は弟なり。皆僕が家の舊臣なり」と。信長、歎じて曰く、「徳川氏、何ぞ佳士多きや」と。是の時に當りて、二人の爲に擊破せらるる者、皆轉じて信長の前軍に赴く。敵の右陣も亦、銃を肩して直に進む。信長の前軍、走りて柵内に入る。柵殆ど破れんとす。敵、其麾下に逼る。侍従、騎を馳せて、信長に告げて曰く、「公、諸隊をして齊しく銃を發せしめよ。我が軍、鎗を用ひて横撃せば、以て克つ可きなり」と。信長、令を傳ふ。敵兵、大に沮む。本多忠勝、松平忠正、鳥居元忠、榊原康政等、鎗を擡めて接戦す。甲斐の諸軍、遂に大に潰ゆ。信昌、伊昌、長篠を出で、夾み撃ち、幾と勝頼を獲んとす。勝頼、厩に免



勝頼、厩に免

武田氏宿將
殆ど盡く

康親
牧野城

【二城】光明
諏訪

大井河

る。是の日、卯より午に至るまで、戦凡五十八合、斬首一萬餘級なり。武田氏の宿將、精兵、略此に殲く。侍従、往きて信長に説きて曰く、「今、大勝の威に乘じ、長驅して北ぐるを追は、則甲斐、信濃、一擧にして取る可きなり」と。羽柴秀吉、從ひて軍中に在り。亦之を進む。信長、聽かずして去る。侍従、信昌を見て、其堅守を賞し、采邑を加賜し、女を以て、之に妻すを許し、遂に大に將士を賞す。數日にして親岐阜に往きて謝す。信長亦、謝して曰く、「卿の君臣、寡を以て衆を撃ち、吾が爲に東面を打ぐこと數年なり。不らずば則吾れ、安ぞ京畿を定むるを得んや。今、勝頼一敗して氣を襍れ、復頭を出す能はじ。卿宜しく駿河を取り、遂に甲斐、信濃に及ぶべし。吾も亦當に相助くべし」と。因りて扨從の將士を見て曰く、「長篠の將、何ぞ來らざる」と。蓋し忠世を謂ふなり。忠佐、扨從に在り。對へて曰く、「家兄、故有りて拜趨するを得ず」と。信長曰く、「吾子の兄弟、長篠の戦に絶類逸群と謂ふ可し」と。手づから衣服を賜ひ、又忠次の功を賞して薙刀を賜ふ。侍従、辭して歸る。

六月、侍従、二股を攻め、忠世をして麓原の砦を守りて、之に當らしめ、轉じて掛川に至り、光明城を攻め、諸將をして其前に逼らしめ、而して自兵を潜めて其後を襲ひて、之を下す。七月、世子信康と諏訪原を攻め、八月に至りて之を下す。城は田中、高天神の間に在り。其守を難んず。松平忠次、守らんと請ふ。乃偏諱を賜ひ、改めて康親と名づけ、周防守と稱す。城を名づけて牧野と云ふ。武田氏を以て般糾に比するなり。是より勝頼、數出づれども、遂に深く入る能はず。侍従、遂に小山を攻む。酒井忠次曰く、「我れ已に二城を得、師暴し兵疲る。戦めずばある可からず。勝頼の慄悍父に過ぐ。我れ小山を攻めば、必來りて之を援はん。前に堅城あり。後に強敵あり。敗を取るの道なり」と。康親、往かんことを勸む。遂に往く。九月、勝頼、兵二萬を募り、大井河の上に陣す。侍従曰く、「果して忠次の言の如し」と。乃河に循ひて師を班す。城兵出で、躡す。世子信康、殿して退く。勝頼、敢て逼らず。是より世子常に軍に従ふ。

十月、大久保忠世、榊原康政をして、二股を攻めしむ。月を躡えて之を下し、遂に伯耆塚、八荒山を取る。

佐久間信盛
水野信元
【有村】美濃

信長、復岩村を下す。佐久間信盛、水野信元と欲あり。信盛、信元、岩村に通ずしと譜り、之を殺さんと欲す。信元、懼れて來り奔る。侍従、固く之を有さんと請ふ。信長、聽かず。遂に死を賜ひ、信盛をして其邑を取らしめ、盡く信元の族人を逐ふ。蜀其季子、留りて参河に匿る。

四年

四年春、侍従、城を横須賀に築き、大須賀康高をして之を守らしめ、久世廣宣、阪部廣勝、渥美勝吉を以て之に屬す。勝頼、糧を高天神に納る。侍従、自出で、芝原に相距ぎ戰はんと欲す。内藤信成、諫め止む。乃交綏く。上杉謙信、兵を上野に出して、遙に應援を爲す。勝頼、敢て南に出でず。侍従、乃今川氏眞を駿河に納る。松平康親、松平家忠をして、並に其政を視しむ。八月、自將として樽井の砦を抜き、安倍光眞をして之を守らしむ。

【山梨】遠江
濱松城を修築す

五年八月、侍従、山梨に入り、甲斐の將穴山信良を撃ちて、之を破る。甲斐の兵、又樽井を攻む。光眞、撃ちて之を卻く。十月、侍従、濱松城を修築す。十二月、侍従、從四位下に進み、右近衛少將に遷る。

【國安河】遠江

六年三月、少將、駿河を徇へて、田中を攻む。井伊直政、軍に從ひ、戰ふ毎に衆に先じ、諸將と其外郭を破りて還る。八月、大須賀康高、甲斐の兵を國安河に破る。少將、駿河を侵掠し、持舟に至りて還り、田中を過ぐ。其兵の出で、尾するを恐れ、城を攻むるの狀を爲す。敵、敢て出でず。我が兵、乃還る。十一月、勝頼、小山に陣す。少將、馬伏に陣し、總社に徙る。世子、夜、潜に水を濟りて、敵營を覗ひて歸り、之を撃たんと欲す。少將曰く、「險に據る敵は、輕しく撃つ可からず」と。復交綏く。

勝頼小山に陣す

七年正月、勝頼、又遠江に入る。少將、出づと聞きて乃去る。四月、三子長丸、濱松に生る。母は西郷氏。故水野信元の孤子、土井利勝を以て其侍臣と爲す。利勝、其母に從ひて土井氏に依り、遂に之を冒す。初め世子信康、人と爲り剛厲にして、近臣を手刃するに至る。酒井忠次、大久保忠世、數諫むれども聽かず。所生の關口氏、妬悍を以て廢せられて、岡崎に居る。其婦織田氏、亦妬にして男無し。又姑氏の爲に離間せられ、憤怨す。是の歳七月、織田氏、遂に書を作り、姑氏の陰事を以て信長に告ぐ。因りて世子の十二罪を疏

信康

す。會忠次、安土に赴く。信長、示して之を問ふ。對へて曰く、「信なり」と。信長怒り、歸りて少將に告げしむ。曰く、「關口氏、勝頼と通じ、卿を除きて世子を立て、遂に我を滅さんと欲す。卿其れ亟に之を計れ」と。忠次、岡崎を過ぎて入らず。世子、憂悸す。八月、少將、岡崎に至り、世子を大濱に放ち、後命を俟たしむ。其明、世子親、來りて哀訴す。聽さず。平岩親吉、傳たり。請ひて曰く、「世子、材武あり。今遽に之を殺さば、後、必之を悔いん。臣、傳と爲りて母狀あり。願くは臣が首を斬りて信長に謝せよ」と。少將泣きて曰く、「我、良臣を喪ひて、兒終に免れずば、悔史に甚しからん」と。數日にして世子を堀江に遷し、遂に二股に遷し、忠世をして之を護らしめ、關口氏を誅す。信長の意、未だ解けず。九月、望、終に世子を自殺せしむ。年二十一なり。世、忠世の輩の少將の意を曉らざるを咎む。初め少將の姫人永見氏、孕みて罪を獲、出でて其郷に産す。世子、潛に之を擧げ、荻丸と呼ぶ。三年にして之を見る。少將子とせざるなり。本多重次、抱持して賀して曰く、「酷君に肯たり。君は戰國に處す。宜しく子多かるべし。臣請ふ、之を育しん」と。世子、卒す。時に荻丸、甫めて六歳、而れども長丸を立て、世子と爲す。

【大濱】参河

【堀江】遠江

信康自殺
【望】十五日
少將の意
世子を通が
れしめんと
なり

上杉氏
織田、徳川、
北條の三氏
盟約す

是より先、上杉謙信卒す。義子景虎、從子景勝と國を争ふ。景勝、武田勝頼に賂ひ、合攻して景虎を殺す。景虎は、北條氏政の弟なり。氏政、怒りて勝頼と絶ち、遂に來りて好を修む。是に於て三國交に盟ひ、約して曰く、「武田、伊豆を侵さば、則徳川、兵を駿河に出さん。遠江を侵さば、則北條、兵を上野に出さん。美濃を侵さば、則徳川、北條、並に甲斐に向ひ、織田をして東顧する母らしめん」と。是の月、勝頼、氏政、黄瀬河に相持す。少將、之を聞き、自將として駿河に入る。酒井忠次、諫めて曰く、「險を踰えて深く入るときは、其危測られず」と。少將曰く、「約違ふ可からず。且二人相持す。而して我れ其弊に乗せば、必利あらん」と。忠次を留めて瀬戸に陣せしめて、進みて田中城を過ぎ、持舟を攻めて之を抜き、火を縦ちて由井に至る。勝頼、兵を引きて來り迎ふ。氏政、敢て尾せず。少將、之を逆へ撃たんと欲す。諸將諫めて曰く、「勝必ず可からず。而して敵城背に在り」と。乃還る。忠次、殿と爲る。十一月、松平家忠、兵を瀧阪に

八年

九年
大河内政局

十年

沿道風を望
みて徳川氏
に歸降す
天目山
【五州】駿河
甲斐、信濃、
上野、下野

伏せて、甲斐の兵を撃破す。
八年正月、少將、從四位上に進む。三月、高天神を攻め、皆を連ねて之に逼る。五月、田中を攻め、侵掠して還る。持舟の兵、出で、之を躡す。返り戦ひて、大に之を破る。七月、復田中を攻む。岡田元次曰く、「天將に雨ふらんとす。大井必漲らん。請ふ、速に兵を收めん」と。少將、乃河を濟りて還る。其夜果して雨ふる。勝頼、我が田中を攻むるを聞き、疾く驅りて至る。河漲りて濟るを得ず。
九年二月、高天神の兵、力屈して逃る。我が兵邀へ撃ちて、守將岡部與行を斬る。初め小笠原氏、叛きて甲斐に降る。我が監軍大河内政局從はず。武田氏、利を以て誘ひ降さんとす。政局、唾罵して顧す。石窟に幽せらるゝこと八年。此に至りて出づることを得。瘞えて起つ能はず。少將、之を賞賜す。少將、遂に織田氏と議し、大舉して甲斐を攻む。

十年二月、信長、信忠を遣し、前軍に將として信濃に入りしめて、自之に繼ぐ。少將、騎卒三萬五千を將る。駿河に入り、牧野に陣し、兵を分ちて遠目、鞠子、持舟、久能の諸城を攻め、みな之を陥る。甲斐の將穴山信良、江尻に在り。少將、長阪血槍を遣して、説きて之を降す。信良、潛に來り謁し、走りて其邑に還る。乃進みて江尻に陣し、人を遣して田中の守將依田信蕃を降す。肯ぜず。乃信良をして書を以て之を諭さしむ。三月、信蕃、城を致して去る。府中の守將武田信龍、守を棄て、遁る。少將、信長を以て郷導と爲し、市川より甲斐に入る。過ぐる所、毫毛も犯さず。沿道、風を望みて歸降す。是の時に當りて、信忠、已に信濃の諸城を下し、進みて甲斐の古府に入る。北條氏政、兵三萬を以て境上に臨む。勝頼、逃るゝに之く所なし。乃殘兵を以て天目山に棲む。織田氏の兵、逼りて之を殺し、首を信長に獻す。信長、罵りて曰く、「豎子、乃公をして枕を高くするを得ざらしめしこと數年。今果して何の狀ぞや」と。傳へて我が營に至る。少將、胡床を下り、禮を加へて曰く、「公、五州の主將を以て遂に是に至る。豈天に非ざらんや」と。甲斐、信濃の士民、之を聞きて、皆竊に心を徳川氏に歸す。信長、初め武田氏の諸將を誘ひて叛かしめ、勝頼の死

諏訪會合

瀧川一益關
東を鎮む

惠林寺を焚く

光秀の亂

忠勝

するに及びて皆之を誅し、令を下して逮捕し、遺類なからんことを期す。少將、潛に之を庇ひ、免るゝを得たる者多し。依田信蕃、久しく田中を守りて、我が兵に抗す。少將、最之を嘉し、收めて部下に隸す。是に於て、少將、信長に諏訪に會して、戰捷を賀す。信長曰く、「長篠の戰に其爪牙を奪ふ。今日固より力を爲し易し。皆卿の力なり」と。遂に武田氏の地を分ち、少將に駿河を取らしむ。少將曰く、「今川氏眞、僕の所に寓居す。願くは其半を割きて之に予へん」と。信長、許さずして曰く、「子、兵力を以て駿河を取る。何ぞ之を一寓公に分たんや」と。遂に甲斐の一部を割きて穴山信良に賜ひ、我に之を統屬せしむ。瀧川一益を上野に置き、關東を經略せしめ、河尻鎮吉を甲斐に、森長可等を信濃に置き、皆我が節度を受けしむ。四月、信長、惠林寺を焚きて、其僧徒を塵にし、遂に海道より西に歸る。少將の供給甚豊なり。
五月、少將、西、安土に往く。穴山信良、之に従ふ。信長、吏に命じて道を除し、明智光秀をして饗を掌らしめ、高雲寺に饗し、親之に饋る。信良、及び酒井、大久保、石川、井伊、本多、榊原の六將をして侍食せしめ、優人を召して樂を爲さしむ。因りて少將に謂て曰く、「卿、盍ぞ京畿を游觀せざる。吾も當に踵きて往くべし」と。少將、信良と、小隊を以て發す。信長、長谷川秀一、京商、茶屋晴延をして之に従はしむ。京師を經て大阪に至る。織田信孝、將に南海を略せんとし、大阪に屯す。迎へて之を饗す。少將、遂に界府に往き、晴延を遣し京師に入りて、信長を候はしむ。
六月二日、將に還りて京師に入らんとす。本多忠勝、先發して牧方に至り、一騎の來るに逢ふ。近づけば則晴延なり。回り指さして、忠勝に謂て曰く、「公、夫の烟を見ざるや。明智光秀、亂を作し、右府、已に弑せらる」と。忠勝、大に驚き、馬を回して返り報ず。少將、已に飯盛山に至り、二人を望見して、其異あるを察し、從隊を留めて、獨五將と挺で、前む。二人、變を告ぐ。少將、晴延を前めて悉く之を問ふ。秀一も亦來る。十騎、馬首を聚む。計出づる所なし。少將曰く、「吾れ義として當に立所に光秀を討つべし。而れども、從兵至りて寡し。今は獨京に入りて自殺するのみ」と。乃隊を引き北上し、忠勝をして前行せしむる

越智支蕃
【普賢谷、草内渡】山城

本多正信
【信樂】近江

家康伊賀に入る

參河大濱

【二國】美濃尾張
秀吉光秀を誅す

こと數里。忠勝、響を回し、五將に謂て曰く、「僕、敢て異議を獻せんと欲す。今、光秀、方に志を得、大軍を擁して要地に據らん。吾れ漫に戦ひて禽を貽、徒に笑を天下に取る。曷ぞ國に歸りて兵を擧げ、徐に誅討を圖るに如かんや。願くは公等、之を主公に勸めよ」と。酒井忠次、石川數正曰く、「老成の慮、乃少壯の人に、吾が輩、慙愧す」と。乃之を少將に勸め、且曰く、「光秀已に衢路を扼せん。宜しく間道を取るべし」と。少將曰く、「我れ地利を諳せず。必士寇の爲に困しめられん。終に自殺するに若かず」と。秀一曰く、「此間の土民、素より臣が使令に慣る。臣能く之を導かしめん」と。晴延も亦、金を散じて之を募る。大和人越玄蕃、其臣吉川某をして郷導を爲さしむ。士寇、夜に乘じて起り、我が輜重を侵す。高力清長、數返り戦ひて之を攘ふ。穴山信良、自猜疑を懷き、同行を欲せず。普賢谷より道を分ちて去り、草内渡に至りて、村民に殺さる。明日、少將、木津に至る。渡る可からず。二舟有りて來る。呼びて乘らんと欲す。舟人肯せず。忠次、銃を擬して之を脅す。舟人怖れ、艤して之を載す。既に濟り、忠勝、鎗鏃を以て其舟を撞き破りて、追者を防ぐ。織田氏の將山岡景隆、衆を帥りて來り迎ふ。已にして光秀、少將の逃去を覺り、兵を諸路に出して之を要す。本多正信、少將の厄に當るを聞き、馳せて宇治河に至り、景隆と議して、茶商、上林を誑し、土人を發し、護りて信樂に入り、鱒尾氏に館せしめ、土人をして馳せ還りて、篝火を河上に設け、徳川公、將に此に來らんとす」と宣言せしむ。光秀の斥兵、之を聞き、萃りて之を俟つ。而して少將は已に伊賀に入る。初め信長、伊賀の人を盛にす。獨、我が管内に匿るる者は、免る、を得たり。是に於て、其父兄相告げ來り、護りて伊勢に入り、白子浦より舟に上り、七日にして參河の大濱に達し、永井直勝の家に入る。將士迎へ賀す。即日、少將、兵を管内に徵し、光秀を討たんとす。美濃、尾張、將士、使をして款を送らしむ。或人勸む、「急に二國を取れ」と。少將曰く、「右府の故國なり。吾れ亂に乗じて之を利す可けんや」と。十七日、陣を熱田に進む。羽柴秀吉、山陽の兵を以て入りて討ち、光秀已に誅に伏すと聞き、乃師を班し、畿道捍衛の功を論賞す。

河尻鎮吉

上杉
北條

【音骨】信濃

【若巫】甲斐

是の時に當りて、四方、變を聞きて騷擾す。河尻鎮吉、初め信長の威權を藉りて國人を凌轢し、事毎に新法を行ふ。國人、嚮然たり。信長の薨するに及びて、鎮吉、恇悸し走らんと欲して、敢てせず。少將、參河に至る日、本多百助を遣して鎮吉を護らしめて曰く、「子、西に歸らんと欲せば、宜しく道を我に借るべし」と。國人、流言して曰く、「本多、河尻を圖る」と。鎮吉、乃、百助を饗し、醉はせて之を殺す。國人之に乗じ、攻めて鎮吉を殺す。森長可等、皆守を棄て、西に走る。是に於て、甲斐、信濃、空虚にして主なし。上杉景勝、北條氏政、並に兵を出して之を争ふ。少將、鎮吉の死するを聞き、酒井忠次、大須賀康高、成瀬正一を遣して甲斐に入らしめ、武田氏の降將依田信蕃、岡部正綱を以て介と爲し、旗を柏、阪嶺に立て、國人を招き來す。武田氏の骨鯁の臣横田尹松、城昌茂等、相踵ぎて來り歸す。凡千餘人。少將皆之に印信を予へ、安堵故の如し。大村某といふ者、氏政の兵を導きて甲斐に入らんと欲す。穴山氏の部兵、擊ちて之を平ぐ。又大久保忠世、石川康通、本多廣孝を遣し、兵を將りて繼ぎて往かしめ、諏訪頼忠、小笠原信嶺を招きて、皆之を降す。七月、少將、兵を留めて駿河の諸城を守らしめ、親將として甲斐に入る。甲斐の父老、争ひて芻糧を供す。進みて古府に陣し、降附を撫循し、諸要を分守す。忠次、忠世以下を遣し、兵三千を以て信濃を徇へ、高島城を圍ましむ。

八月、氏政、子氏直を遣し、四萬騎に將として佐久郡に入らしむ。諸將、之を聞き、退きて音骨に屯し、遂に引きて還る。初め諏訪頼忠、忠次に服せず。少將、更に忠世を遣す。乃服す。二人頗卻あり。是に於て、殿を争ひて決せず。衆、之を和解し、六將、更、殿して退く。氏直、之に尾す。行くこと七里の間に十餘合す。我が兵、一人をも損せず。氏直止りて若巫に陣す。少將、乃、伏を措き、自數百騎を將りて、淺生原に出づ。氏直敢て進まず。少將、鳥居元忠、水野勝成、松平清宗、三宅康貞をして、古府を守らしめ、而して自新府に陣す。氏政、弟氏忠、族氏勝を遣し、數千騎を將りて郡内に入らしむ。氏直、潜に使を遣して、之を告げしめて曰く、「古府の兵寡し。子、攻めて之を取らば、則新府隨ひて潰え、家康、當に下山より遁る

氏忠、氏勝
大敗す

【豆生田】甲
【三枚橋】伊

べし。乃夾みて之を殲さん」と。古府の四將、謀して其謀を知り、二千人を以て邀へて之を撃つ。氏忠、氏勝、大に敗れて遁れ去る。少將、塵を望みて曰く、「我が兵勝てり」と。已にして四將、首級三百を以て還り獻す。命じて之を新府の郊外に梟せしむ。氏直の兵之を視るに、皆其子弟親戚なり。乃悲駭して鬪ふを欲せず。少將、四將を賞し、元忠に賜ふに郡内を以てす。氏直、豆生田に砦す。參河の人久世廣宣、甲斐の人曲淵吉景、皆功あり。氏政、又弟氏規を遣して駿河を窺はしむ。松平康親、三枚橋を守り、本多重次、沼津を守り、氏規を撃ちて之を破る。氏直、數甲斐の人を招く。甲斐の人、使を斬りて其書を獻す。信濃の人眞田昌幸、保科正直、初め北條氏に降る。

氏政和を請
【平澤】信濃

家康甲信を
定む

九月、少將、依田信蕃をして昌幸を招き降さしめ、兵を合せて碓氷嶺に屯し、關東の糧道を絶つ。正直、酒井忠次に因りて來り降る。高遠の兵を以て箕輪を取り、諸城を招きて我に屬せしむ。氏直、益窘しむ。十月、氏政、乃氏規をして來りて和を請はしめて曰く、「公は甲斐、信濃を取れ。我は上野を取らん。且請ふ、氏直の爲に少將の女を娶らん」と。少將、之を許す。十一月、氏直、兵を撤して平澤の砦を修む。少將、人をして之を請めしめて曰く、「我れ初め上野を取らんと欲し、和に遇ひて止む。今既に和して築く。是れ偽和なり」と。諸將をして兵を發して之に赴かしむ。北條氏の兵懼れ、砦を毀ちて去る。是の時、上杉景勝、既に河中島を取り、砦を四外に築く。少將、依田信蕃、柴田康忠、菅沼大膳等を遣し、前山、高棚、小田井の諸砦を攻めて之を抜く。是に於て、甲斐、信濃の豪傑、盡く我が部下に屬す。少將、其采邑を檢し、或は舊に依り、或は之を削り、平岩親吉をして甲斐を鎮せしめ、大久保忠世をして信濃を鎮せしむ。務めて武田氏の舊制に因り、更變ある所なし。猶其厚斂苛刑を除き、寺を田野に建てて勝頼を弔ふ。小宮山内膳の忠節を嘉し、其弟又七を召して之を祿し、其季弟の僧となれる者を以て田野の寺主と爲し、山縣、土屋、原、一條の四族の兵を收めて、井伊直政に屬せしむ。軍裝皆赤色を用ふる。井伊氏の兵はより勁し。

十一年

【岩尾】信州

松平康國

故將柴田勝家も亦、使をして平定を賀せしむ。十一年、閏正月、松平康親の功を賞し、河東二郡を賜ふ。二月、依田信蕃、攻めて岩尾を抜き、而して之に死す。少將、其子を祿し、姓名を松平康國と賜ふ。康親の例に依るなり。乃大久保忠世に命じて康國を助けしめ、攻めて小室を抜き、守將宇佐美定行を走らす。景勝敢て援けず。七月、北條氏、女を迎ふ。酒井忠次、之を護送す。八月、少將、甲斐に如きて法令を修め、眞田昌幸に賜ふに上田を以てす。昌幸、上野を侵し、沼田を取る。十月、少將、正四位下に進み、右近衛中將に遷る。

詠史十二首其十一

群雄逐鹿漫爭先
誰識驅除開大賢
晉國霸圖由一戰
漢家號令出三廬
建甌基跡尋常地
拜胙遠顔咫尺天
奕葉驩虞寧有限
金城春暖鬱祥烟

題新著通議後七首

傍觀時議添蛇足。 熟識宦途編虎鬚。 卻有世情灰不盡。
 著書猶欲擬潛夫。 肉食謀存誰置評。 自嘲多事老書生。 一窓風雪妻兒臥。
 奮筆燈前紙有聲。 陳編儘許口縱橫。 且憑筆墨鬪蛟鯨。 敢趁諸公贊太平。 未必語言當菽粟。
 藝苑鴻文錯典墳。 直據肝腸寫示君。 儒林閱議媿河汾。 吾無周禮橫胸裡。
 敬輿體體含流動。 學文亦似上青天。 和仲分篇見貫穿。 跛鼈自知千里隔。
 洪流日夜淺成深。 無入識得賈生心。 未缺金甌自古今。 策漢過秦同一意。
 半生歲月酒中消。 豈無身後李文饒。 落魄耽詩鬢欲凋。 小杜唯留二論在。

版改邦文日本外史卷之十九終

版改邦文日本外史卷之二十

德川氏正記

德川氏三

天正十二年
 信長の二孤
 柴田勝家滅ぶ
 織田信雄三將を誅す
 【星崎】尾張

天正十二年正月朔、參河、遠江、駿河、甲斐、信濃、五國の將士、盡く正を濱松に賀し、中將及び世子長丸に謁す。二月、中將、參議に遷り、從三位に進む。
 是の時に當りて、故織田信長の將羽柴秀吉、政を京畿に爲し、十餘國を略有し、威權獨熾なり。參義も亦之と好を通ず。信長の二孤、信雄、信孝、勢皆秀吉の下に出づ。信孝、兵を擧げて之を圖り、克たずして死す。其黨柴田勝家等、みな攻め滅さる。諸の宿將、豪傑、皆首を俯して秀吉に事ふ。
 信雄、孤立して援なし。秀吉、復激して之を除かんと欲す。故に之を遇すること亡狀なり。其隣將岡田重善、津川義冬、淺井多富を誘ひ、叛きて已に降らしむ。信雄怒り、三月、三將を召して之を誅し、兵を分ちて其邑を攻め、遂に秀吉と絶つ。
 池田信輝、二婿森長可、堀秀政と、美濃に在り。信雄、秀吉並に之を招く。秀吉特に啗はすに利を以てす。乃秀吉に附く。瀧川一益、稻葉通朝、蒲生氏郷等、みな之に黨す。信雄益窘む。乃來りて援を德川氏に乞ふ。參議曰く、「吾れ信長の厚誼を荷ふ。其孤の窮蹙を視て、これを援けずば、將何を以て天下に對へん」と。即之を諾す。石川數正、水野忠重、其子勝成を遣し、往きて信雄を助け、攻めて星崎を抜く。勝成先登

邦文日本外史卷之二十

【北面】上杉氏
【東面】北條氏
徳川家康濱松を發す

小牧山

小牧山の壘を修む

鬼武藏

長可を走らす

す。秀吉、陰に諸將を誘ふ。忠重、納れずして其書を獻す。忠重は故信元の弟なり。是に於て、四邊の域邑、交相攻撃し、迭に勝敗あり。參議、秀吉の大舉して且に東下せんとするを聞かば、親、將として信雄を援けんと欲す。北條、上杉、其後を窺ふを慮り、大久保忠世をして北面に備へしめ、松平康親、平岩親吉、鳥井元忠をして東面に備へしむ。十日、親、將として濱松を發す。酒井忠次、奥平信昌等、前軍を以て先發す。敵の城邑を攻むる者、之を開きて、往々圍を解きて去る。參議、四日にして清洲に至り、信雄を見る。信雄、之を謝す。參議曰く、「公之を安ぜよ。某こゝに在り。秀吉の兵百萬有りと雖、以て公を病ましむる能はざるなり」と。乃諸將を引きて戰守の策を議す。榊原康政曰く、「宜しく進みて小牧山を取り、以て國內を瞰ふべし。敵をして之に據らしむる莫れ」と。參議之を然りとす。本多康重曰く、「往年、勝頼敵を侮り、川を踏えて進み、終に以て敗を取る。今蓋ぞこれを鑑みざる」と。酒井忠次曰く、「勝頼の我に敵するは、我の秀吉に敵すると、比ふ可からざるなり」と。參議、遂に忠次に命じて、小牧山の故壘を修めしむ。十六日、自、信雄を携へ往きて軍をこゝに駐め、間使を發して南海に入り、雜賀、根來、及び阿波、土佐の諸豪を招き、並び起りて大坂を圍る。秀吉、之を患へ、未だ來るを果さず。遂に池田信輝をして犬山に據り、森長可をして羽黒に陣せしめ、以て我が軍を拒ぐ。長可、武藏守と稱し、驕勇を以て著る。鬼武藏の目あり。忠次、請ひて曰く、「嘗試に一たび鬼武藏を搏ち、京兵をして參河の技倆を知らしめん」と。乃諸將と進み火を縱ちて之を誘ふ。長可、軍を八幡林に出し、水を隔て、戰を挑む。奥平信昌、單騎にして先濟る。衆之に従ひ、撃ちて長可を走らす。斬首三百級、信輝、稻葉通朝と之を聞きて來り援く。或人之を止めて曰く、「敵兵勝に乗ず。未だ與に鋒を争ふ可からず。宜しく兵を按めて高に憑り、其來るを待ちて下り突くべし」と、信輝之に従ふ。參議、其謀を諜知し、諸將に兵を收めしめ、終に康政を小牧に留めて、自、清洲に入り、

秀吉犬山に軍す

家康小牧山に陣す
康政敵軍に撥す

秀吉書を遣守綱の答書

池田信輝

本多廣孝をして城を小幡に築かしめて、參河の往來に便にす。秀吉、羽黒の敗を聞き、大に忿り、成を南海に置きて、自、將として來り、犬山に軍す。兵凡十二萬五千人、分ちて十五隊と爲し、自、地形を按視し、仰ぎて小牧山を視て曰く、「吾れ後れたり」と。乃空濠二重を山前に穿ち、數千人をして之を守らしめ、壘を起し柵を植て、以て諸軍を頓す。軍營數十里に彌亘す。參議、之を聞きて内藤信成等を留め、清洲を守らしめて、自信雄を携へ、兵一萬八千を合せて、復小牧山に陣す。康政、信雄の爲に檄を敵軍に移して曰く、「秀吉、君恩を蔑棄し、鬼と爲り賊と爲り、兵を君の遺孤に加ふ。天下の人孰か切齒せざらん。汝將士、嘗て之と肩を比べて先君に事ふ。乃其れに驅役せらる。果して何の心ぞ。徳川公、依託を受けて征討を圖り、盡く五國の卒を發し、親將として此に至る。大義の臨む所、必豎子を梟せん。汝將士、苟も過を改めて順に歸せば、皆其自償ふことを聽さん。然らずば則併せて之を誅戮し、身首、處を異にせん。其れ悔ゆる勿れ」と。秀吉、之を覽て、乃康政の首を千金に贖ふ。參議、樓櫓に上り、壘柵を望見し、笑ひて信雄に謂て曰く、「彼れ尊公の長篠の策を襲ふ。豈我を以て勝頼に比するや」と。乃令を軍中に下し、擅に進むを禁す。秀吉、書を參議に遣りて戰を請ひて曰く、「且日、吾れ壘柵を背にして進み戦ひ、士をして退志無からしめんと欲す。公も亦蓋ぞ我が爲す所に倣はざる」と。渡邊守綱、銃長を以て前部に在り。私に答書して曰く、「來諭言ふ所、以て寡君に聞するに足らず。寡君、固より君と樂しみて戦はんと欲す。敢て約を奉ぜざらんや。斷後の備に至りては、君、自之を爲せ。弊邦の士は、進む有りて退くなし。必しも此を須るざるなり」と。秀吉、書を獲て大に悲り、進み戦はんと欲して敢てせず。乃邱に上りて罵る。四月、秀吉の兵、益に至りて山野に充滿す。而して我が兵、繼ぐものなし。四日、池田信輝、秀吉に説きて曰く、「敵、銃を悉して此に距ぐ。料るに參河必空虚ならん。我れ軍を潜めて敵背に出で、其窟穴を搦かば、則彼れ必、願て潰えん。因りて之を夾み撃ちて、其渠魁を獲べし」と。秀吉、沈吟して答へず。明日、復

秀吉の軍將

説きて曰く、「公、速に之を断ぜよ。二三日を遅らさば、敵も亦備を爲さん」と。秀吉、乃之を許す。信輝は前軍に將たり。森長可は二軍に將たり。堀秀政は三軍に將たり。長谷川秀一は四軍に將たり。秀吉の甥秀次は五軍に將たり。兵凡三萬。翌夜、潜に發す。秀吉戒めて曰く、「慎みて敵を侮る勿れ」と。信輝、諾ひて往く。篠木、柏井に至り、土寇を誘ひて參河に向ふ。

家康小牧を發す

織田氏の將丹羽氏次、岩崎の城主たり。時に從ひて小牧に在り。其弟氏重、居守す。信輝等、先岩崎を取り、以て岡崎に及ばんと欲す。岡崎の賈人警を聞き、走りて丸根に至り、之を守將酒井忠利に告ぐ。忠利、單騎小牧に來りて之を白す。參議、謀を發して之を覗ひ、悉く其實を得たり。

信輝岡崎に向ふ

八日、秀吉の陣に燒起る。參議曰く、「是れ號を爲すなり」と。乃密に諸將を戒めて、夜半に傳發せしめ、驍騎四千餘人を選び、自之を將る、皆旗を卷き馬衝を裏み、信輝の軍に尾して馳す。榊原康政、水野忠重等、先鋒たり小幡の砦に至り、斥兵五十を遣して、敵を調はしむ。敵の前軍、岩崎を襲ひ取り、氏重を斬る。信輝其首級を検して大に喜び、捷を後軍に報じ、遂に岡崎に向ふ。黎明、我が先鋒、稻葉に至れば、則敵の後軍東山の下に頓し、餐を傳へて坐す。我が兵、急に之を撃つ。秀次、倉皇起ちて闘ひ、終に大に敗れて秀政に走る。秀政、敗を前軍に報じて自回し撃つ。是の時に當りて、參議、信輝を携へて勝川に至り、其地名を問ひて之を喜び、其兵に謂て曰く、「吾れ勝てり」と。甲を擲して進み、途に捷間を得、遂に長湫に至る。來り告る者あり。曰く、「先鋒再戦ひて大に敗れたり」と。我が軍危惧す。已にして康政、還り調す。參議、其手を執りて泣きて曰く、「汝恙なきを得たるか」と。康政曰く、「臣等、一捷して兵疲れ、秀政に乗せらる。君の在すを以て、耻を忍びて此に至る」と。

勝川

秀政、已に信輝、長可と合し、北ぐるを追ひて來る。或人説きて曰く、「敵の大衆、勝に乗ず。勢抗す可からず。速に走りて岡崎を保つに若かず」と。參議、晒ひて答へず。渡部守綱、還り報じて曰く、「敵次を亂して北ぐるを追ふ。麾下を以て迎へ撃たば必克たん」と。高木清秀、敵の首を提げて還りて曰く、「勝機此に在

【長湫】尾張

り。急に撃ちて失ふ勿れ」と。本多正信、側侍す。進みて曰く、「是れ危を行ひて、幸を徴むるなり。蓋ぞ萬全の策をなさざる」と。清秀、守綱、怒りて曰く、「子、褥に坐し籌を握れば可なるのみ。何ぞ戦機を沮むや」と。參議曰く、「二人の言然り」と。乃幢主に命じて葵草の白旗、金扇の馬標を擎けしめ、遶りて山後に出つ。敵兵望み見て驚き沮む。參議、乃軍を麾きて進む。井伊直政、南山の下より銃手を以て横撃し、秀政の軍を敗り、其陣を奪ひて之に據る。長可、信輝、麾下と相挑む。勝敗未だ決せず。安藤直次、計を獻じ、左麓に循ひて銃を發す。長可、挺で進みて指揮し、丸に中りて斃る。其陣、大に亂る。參議、大に呼びて曰く、「二婿既に敗れぬ。蓋ぞ撃ちて阿翁を破らざる」と。我が兵、争ひ進みて池田氏の陣を陥る。永井直勝、信輝の胡床に據るを覩るや、槍を擧げて之を刺す。安藤直次、信輝の子之助を斬る。諸將、走るを追ふ。斬首一萬五千級、而して日已に午を加ふ。高木清秀、内藤正成、白して曰く、「我が兵疲れたり。卒に生兵と遇はば、必敗れん」と。參議曰く、「然り」と。即兵を收めて退き、小幡の砦に入る。

金扇の馬標

直政秀政の陣を奪ふ

二婿散る
【二婿】森長可、堀秀政
【阿翁】池田輝政

池田輝政を刺さんとする
（永井直勝）
直勝信輝を刺す
小幡

秀吉、敗を聞きて大に怒り、獨度りて以爲らく、「我が兵、勝を恃みて備を懈りしならん」と。數萬騎を以て疾く發す。酒井忠次、石川數正、本多忠勝、松平家忠、小牧を留守す。



本多平八

二魁一岩にあり
織田氏徳川氏
龍泉寺

赤鬼
秀吉西に還
家康清洲に
入る

忠次、虚に乗じて其營を襲はんと欲す。數正之を沮みて止む。忠勝曰く、「敵の大兵赴き援ふ。主公必危からん」と。自兵五百を率ゐ、追ひて秀吉に及び、之と並び行く。相距ること四百歩許り、秀吉問ひて曰く、「彼は誰なるか」と。左右曰く、「本多平八なり」と。秀吉曰く、「名虚からざるのみ」と。兩軍相近づく毎に忠勝、輒銃を發す。其騎、馬を逸し、追ひて敵中に入る。忠勝、獨騎、馳せて之を取り、騎に授けて共に還る。秀吉の兵、之を撃たんと請ふ。秀吉肯せず。遂に長湫に至れば、則ち僵尸野を蔽ひ、而して隻騎をも見ず。偵人に問ひて曰く、「敵安に之けりや」と。曰く、「小幡に入れり」と。秀吉、歎じて曰く、「家康は華實を具ふる者と謂ふ可きなり」と。乃遂に小幡を攻めんと欲す。日暮れ兵疲るゝを以て乃止む。令を下して曰く、「二魁一岩に在り。是れ天の予ふる所。且日、圍みて之を取らん」と。遂に龍泉寺に舍す。忠勝、參議に小幡に見え、説きて曰く、「臣、戰に與らず。人馬皆銳し。秀吉の兵衆くして整はず。臣、老兵を遣りて之を覗はせ、其撃つべきを悉にせり。願くば主公、臣に一隊の兵を益せ。夜、敵軍を襲ひて之を走らせ。必秀吉の首を大山以南に取り、之を麾下に致さん」と。參議曰く、「吾れ大勝を得たり。勝に狂る者は必危し。且秀吉未だ悔る可からざるなり」と。即夜、路を平戸に取りて小牧に歸る。且日、秀吉來り攻むれども及ばず。曰く「家康何ぞ神なる」と。乃兵を引きて樂田に還り、益壘柵を増す。堀秀政、蒲生氏郷等をして萬人を以て重壕を守らしむ。參議、出でて兵を壕前に勒す。氏郷等、使を中軍に馳せて、戰はんことを請ふ。秀吉曰く、「彼の來り攻むるを俟ち、隊を整へ之を防げ。然らずば、則ち出づる勿れ」と。參議も亦、令を下して曰く、「敵未だ壕を踰えずば戰ふこと勿れ」と。西軍、最井伊直政を畏る。其裝の赤色なるを以て、目けて赤鬼と曰ふ。五月、朔、秀吉、成を樂田に留め、軍を撤して西に還る。自度るゝ大舉して徒に歸らば恐らくは人の笑を取らん」と。乃攻めて美濃の二岩を取り、大垣に入る。六月、參議、酒井忠次をして、小牧を留守せしめ、而して收めて清洲に入る。信雄も亦、長島に歸る。是の

瀧川一益
山口重政

蟹江

一益降る

秀吉復尾張
に入る
金扇復至る

時、織田氏の故將瀧川一益、九鬼嘉隆、皆秀吉に黨す。一益、將略最著る。信雄の統内を侵し、蟹江及び下市、前田の三城を誘ひて之を降す。又大野を誘ふ。大野の守將山口重政、拒き戰ひて屈せず。一益、將に舟師を以て蟹江に入らんとす。城中烽を擧げて應を爲す。參議、之を望見し、急に兵を發して起き援けんとして、記室を呼びて檄を作らしむ。吾れ親往く可しの語あり。參議曰く、「可の字兵機を沮す」と。命じて之を刪らしむ。則ち絺衣鞍に上り、鞭を奮ひて馳す。井伊直政、成瀬正成、内藤宗成、水野勝成等、路に迫及す。信雄も亦來る。俱に蟹江に至れば、江湖方に落ち、一益の舟、膠して進む能はず。我が兵、急に之に迫る。一益の兵潰え、雁に身を以て城に入るを得たり。我が兵隨ひて之を攻め、別に石川數正、安倍信勝をして、攻めて前田を抜かしめ、其叛將岡部長盛を走らす。山口重政、又嘉隆を下市に撃ちて之を走らす。參議、信雄と、中軍を以て下市城に攻む。城、大澤を負ひ、澤に蘆葦多し。參議曰く、「蘆葦の蟻根或は踐みて行くべし」と。人をして、之を試しむるに、果して然り。乃澤を徑りて城に迫る。城兵備へず、因りて立どころに之を抜き、其守將を斬る。乃兵を合せて蟹江を圍む。榊原康政、土山に起り、城中を下射す。城中大に困しむ。嘉隆、大艦を以て來り援ふ。我が兵、迎へ撃ちて、復之を走らす。一益、終に降を乞ふ。參議曰く、「叛將を斬りて之を獻じ。盡く邑を信雄に致さば、則ち死を宥さん」と。一益、盡く其命の如くす。七月、城を出でて遁れ去る。秀吉、大垣に在り。蟹江の急報を得、軍を悉して來り援へども及ばず。乃桑名に屯す。參議、進みて神戸に至り。諸砦を修築す。秀吉の引き去りしを聞きて、乃清洲に還る。八月、秀吉、兵八萬を將りて復尾張に入り、前軍樂田に至る。參議は出でて岩倉に陣し。信雄は氷村に陣す。九月、秀吉、茂呂に至る。參議、信雄と、軍を抜きて之に赴き、親、出でて師を巡る。西軍、我が馬表を觀て曰く、「金扇復至る」と。相驚擾して定む可からず。大久保忠佐、騎を率ゐて之に乗ず。秀吉、夜、軍を退くこと二十餘里、大野、奈良に砦し、自大垣に入る。參議乃至る。

妻籠

この月、信濃の諸將妻籠を攻む。西軍來り援ふと聞きて解き還る。城兵追躡す。保科正直、殿戦して之を却く。

長曾我部元親

十月、参議、酒井忠次を留めて、清洲を守らしめ、榊原康政に小牧を守らしめ、松平家忠、菅沼定盈に小幡

秀吉降を信雄に乞ふ

徳川氏、羽柴氏、美濃、尾張の間に相持すること一歳に幾し、天下、徳川氏屢克ち、羽柴氏競はざるを聞き、

秀吉和を乞ふ

來りて款を通ずる者多し。南海の兵倍奮ひ、屢大阪を侵す。土佐の國主長曾我部元親、故の紀伊の國主畠

信雄

山貞政、皆我に應じ、期を刻し夾みて秀吉を撃たんとす。而れども未だ來りて約せざるなり。秀吉懼れ、十

秀吉和を乞ふ

一月、兵を將るて伊勢に入る。信雄、之と軍を對す。参議、之を聞き赴き援はんとなす。秀吉、遽に降を信雄

信雄

に乞ふ。信雄、之を許す。秀吉、面調して誓を獻じ、馳せて大阪に歸る。参議、清洲に至り、之を聞きて撫

信雄

然たり。石川數正をして和の成れるを賀せしむ。十六日、岡崎に還る。而して土佐、紀伊の書至る。参議、

信雄

慨然大息して曰く、「此書をして十日前に在らしめば、則秀吉生致す可かりしを、今已に後れたり」と。使

信雄

者を勞ひて之を遣る。南海の兵、所在皆解く。居ること六日、参議、濱松に凱旋し、長湫に戦功を論賞す。

信雄

秀吉、富田如信、津田信季を遣し、來りて和を請はしむ。信雄も亦、瀧川雄利を遣して之を介す。参議、召

信雄

して之を諸將に詢る。石川數正、嘗て秀吉の爲に誘れ、心竊に之に嚮ふ。進み説きて曰く、「主公の國、秀

信雄

吉の半に當る能はず。而して氏政、其背を劫し、景勝、其肩に迫り、三面敵を受く。事爲す可からず。宜

信雄

しく速に和を聽して國家の計を爲せ」と。参議怒りて曰く、「義の如何を問ふのみ。勝敗の數に至りては、則

信雄

乃公自之を計る」と。乃三使を遣歸す。

信雄

秀吉、復上方雄久をして數來り請はしむ。十二年、信雄、自濱松に來り、出援の勞を謝し、且謂て曰く、

信雄

「公と秀吉と素より仇怨なし。特我を援はんが爲に兵を構へしのみ。今我れ已に之と和す。公獨何ぞ自執る

信雄

や。宜しく其言ふ所を聽くべし。秀吉子無きを以て、公の子を養はんと欲す。公宜しく之に二人を予ふべし」

信雄

と。参議、已むを得ずして之を聽し、異父弟松平定勝を遣さんと欲す。母水野氏泣きて曰く、「渠の兄嚮に今

信雄

川、武田に質となり、已に艱楚を極む。其れ之を復するに忍びんや」と。参議、愍然乃止む。時に世子の

信雄

外に三庶子あり。秀康、忠吉、信吉と曰ふ。秀康は、即荻丸なり。忠吉は、東條松平氏を嗣ぎ、信吉は、穴

信雄

山氏を嗣ぐ。即荻丸を遣す。時に年十二なり。本多重次、石川數正、皆其子を以て之に従はしむ。秀吉大に

信雄

喜び、養ひて子となし、羽柴秀康と稱し、邑萬石を給す。後に参河守に任せらる。

信雄

是の月、織田氏の故將佐々成政、越中より來り、参議及び信雄に見え、力を戮せて秀吉を攻めんと請ふ。信

家康秀吉の和を聽す

荻丸

羽柴秀康

佐々成政

天正十三年
本多重次

重次誠を以て家康を諫む

政、謝して去る。

十三年二月、吉良に城く。三月、参議、疔を患へて危篤なり。臣民憂惧す。本多重次、枕に造り、請ひて曰

く、「臣嘗て此疾を患ふ。一醫あり。之を治して愈ゆ。君請ふ、これに命ぜよ」と。参議曰く、「爲す母れ。吾

れ已に死を決せり」と。重次、懣えて曰く、「君自命を絶つ。臣請ふ、先せん」と。乃趨り出づ。参議驚き、

左右に命じて之を止めしむ。重次、顧み、強て率ゐ至る。参議曰く、「汝何ぞ此言を爲す。吾れ汝が曹ある

に頼りて瞑するなり。汝が曹、宜しく軀を全くし、子弟を撫循し、以て我が家を保つべし」と。重次泣きて

曰く、「否々、臣は生を欲せざるなり。臣近ごろ甲斐の將士、其首領を喪ひ、腰を我が門に折るを視るに、情

状羞づべし。今臣、主公を喪はば、亦將に是の如くならん。臣幼少より軍に従ひ、面目創き、手足缺く。一

の疲癯翁のみ。特主公の眷顧を以て、頗人に畏れらる。主公一たび瞑せば、隣國四襲し、我が子弟沮喪して

支へざること知る可きなり。是の時に當りて、臣、彷徨支吾せば、人將に指して曰はん、「彼の疲癯翁、何ぞ

耻ぢざるの甚しき」と。臣故に寧速に死せん。生を欲せざるなり」と。参議曰く、「然り。吾れ能く汝が

根來部
眞田昌幸

大久保忠世
等上田城を
攻む
【二將】元忠
親吉

府中を修築

意に従はん。汝も亦能く吾が意に従ひ、吾が爲に耻を忍ぶや。否や」と。重次曰く、「君、苟も臣に聴く。臣豈敢て違はんや」と。乃其醫を召す。醫曰く、「宜しく灸すべし」と。重次手づから艾を灼き藥を進む。其夜、疔潰えて瘻の。重次、喜び極りて哭す。
是の月、秀吉、南紀伊を取る。根來の僧兵、來り奔る者二百人、乃根來部を置く。
五月、參議、甲斐を巡る。是より先、眞田昌幸、上野を侵し沼田を取る。北條氏直、之を還されんことを請ふ。參議、昌幸に諭して之を還さしめ。償を内地に取らしむ。昌幸、命を奉ぜず。終に上杉氏に屬し、因りて秀吉に降る。大久保忠世、鳥居元忠、平岩親吉、將士を率ゐて之を攻む。
八月、秀吉、北越中を取り、佐々成政を降す。上杉景勝、又越後を擧げて之に降る。秀吉、密に景勝と議し、昌幸を援けて我を圖らしむ。閏月、我が兵上田を攻むれども、利あらず。敵追ひて利川に至る。忠世、十餘騎を以て殿して濟り、南岸に陣して返り撃たんと欲す。二將肯かず。明日、忠世、筑摩川を濟り、八重原に陣す。昌幸、手白塚に陣す。忠世、柴田康忠をして還りて二將に告げしめて曰く、「公等、河を壓して陣し、我と夾み撃たば、必之を殲さん」と。二將曰く、「吾れ地理に暗し。持重するに若かず」と。忠世怒り、又謂はしめて曰く、「公等、敵を怖る、ならば、猶當に我が後に來りて聲援を爲すべし」と。亦肯かず。往復の間に昌幸已に退きて城下に陣す。忠世切齒して曰く、「籠禽を脱せり」と。是に於て、諸將、壁を列ねて相持す。昌幸、敢て出でず。參議、井伊直政等を遣して之を援けしむ。昌幸、兵を出して康忠の營を犯す、康忠撃ちて之を走らす。岡部長盛、其歸途を要して、又之を敗る。
九月、景勝、大擧して且に至らんとするを聞き、兵を解きて還る。直政、康忠、殿を爲す。昌幸の子幸村、之を追はんと請ふ。昌幸曰く、「將、勇にして陣整ふ。追ふ可からず」と。忠世、是に於て、留りて小室を守り、以て景勝、昌幸の來り襲ふに備ふ。
參議、國都を駿河に徙さんと欲し、諸將士に命じて府中を修築せしむ。

秀吉關白と
爲り豊臣氏
を賜はる

石川數正大
阪に出奔す
【深溝】三河

大久保忠世

秀吉和を議す

北條氏、景勝の秀吉と連衡するを聞き、大に惧る。十月、將士をして來りて盟を尋ねしめ、益従約を固くす。本多重次、自度りて曰く、「物情、恟々たり。而して我が兒は上國に在り。恐らくは携貳の疑を受けんと。乃使を大阪に遣して曰く、「兒の母、篤疾あり。請ふ。一訣せしめん」と。因りて其兒を取りて還る。石川數正、岡崎を守る。其兒も亦、大阪に在り、秀吉の資望日に隆なり。位、關白に至り、姓を豊臣と賜ふ。諸名族、大邦の入りて調する者、みな恩榮を被る。數正、竊に之を歎む。秀吉も亦、八萬石の邑を以て之を招く。數正、遂に款を送る。眞田昌幸、及び小笠原貞慶と謀を通ず。又其部將松平親正を誘ふ。近正怒り、肯せずして曰く、「使者再來らば之を斬らん」と。因りて其書を獻す。十一月、數正、家を擧げて大阪に出奔す。時に將士の怒、多くは岡崎に在り。松平家忠、深溝より馳せ至り、其四門を護る。酒井忠次も亦、吉田より至り、使を馳せて變を上る。中外動搖す。參議、行鷹を放ちて岡崎に至り、即日、忠次の第に臨み、命じて散榮を張らしむ。人心、即定る。乃大久保忠世を召す。忠世曰く、「景勝、日我が隙を伺ふ。而して貞慶、兵を擧げて之に應ず。又聞く、「昌幸、故信玄の孽子某を迎へて、將士を煽す」と。吾れ一たび動かば、則甲斐、信濃、皆覆没せん」と。弟忠教曰く、「敢て請ふ、代り守りて、生死、之を以てせん」と。忠世喜び、乃發す。大雪に會ひて歳を踰ゆ。景勝、昌幸、兵を出す能はず。忠教、代を得て歸る。參議、岡崎の壘壘を修め、厚く近正を褒め、數正の兵を以て、内藤家長に屬せしむ。是に於て、諸將みな質を獻す。參議、多く之を還す。秀吉、之を遇する甚薄し。或人、其門に榜して之を嗤ふ。數正、羞縮して出でず。秀吉、既に南海、北陸を定め、以爲へらく、「我れ已に徳川氏の左右の臂を奪ふ。景勝を嗾して之を脅さしめん。其國人又内訌あらん。是の時に於て、家康と和せば、和必成り、家康必來らん。天下復圖るに足る者なし」と。乃信雄と議し、羽柴勝雅、土方雄久をして、來りて和を議せしむ。使者を戒めて曰く、「徳川は數正の故を以て、意必不平ならん。汝が輩善く之に處せよ」と。二使、岡崎に來り、辭を卑くし禮を厚くして、秀吉、信雄の意を陳べ、參議の京師に入覲するを請ふ。參議、面諭して曰く、「長湫の獲は、皆秀吉の愛重する所、其我に甘心せん

【次郎】萩丸
即羽柴秀康
なり
岡崎は我が
墳墓の地
本多重次岡
崎を守る
天正十四年

羽柴勝雅、
家康を説く

家康怒る

と欲する久し。吾れ敢て往かず。旗鼓相見るに至りては、敢て努力せざらんや」と。二使乃去る。或人諫めて曰く、「主公往かずば、則次郎將に免れざらん」と。参議曰く、「羽柴秀康、其父に殺さるゝとも、我れ何ぞこれに與らん」と。遠近傳へて言く、「秀吉大舉して東下す」と。参議乃守備を修め、群臣に問ひて曰く、「岡崎は我が墳墓の地なり。敵の衝に當る。誰か守らしむべき者ぞ」と。本多正信曰く、「緩急能く妻兒を手及し、城を枕にして死する者にして而る後可なり」と。参議曰く、「作左衛門其人なり」と。乃精兵數百を以て本多重次に屬し、往きて之を守らしむ。重次、辭して出づ。意色甚決す。参議乃其子成重に封を襲かしめんことを約し、給するに手書を以てす。

十四年正月、参議、岡崎に適く。秀吉復羽柴勝雅をして來りて、固く入觀を請はしむ。信雄も亦、其叔父長益をして來り懲慙せしむ。参議肯かず。使者敢て去らず。其館に在りて之を候ふ。参議、吉良に獵す。使者、間を承けて來り見ゆ。参議、鷹を臂にして、顧て曰く、「一搏撃つべし。人の條制に就く能はず」と。明日、復見ゆ。参議曰く、「若未だ去らざるか。吾れ復若の説を聞くを欲せず」と。勝雅進みて曰く、「願くは君侯、且く之を容れて、臣をして其説を終ふるを得せしめよ。夫れ關白、百萬の兵を以て天子を翼く。令を出さば、西に毛利の援あり。東に上杉の助あり。俊雄、豪傑、争ひて之が用を爲す。復何を欲して致さざらん。而るに節を屈して君侯を招くに、使者三反せり。君侯、安危の決を思はず。徒に放鷹逐禽を以て事と爲す。臣、君侯の境内を視るに、城壘固からず。溝池浚からず。關白一たび趾を擧げなば、乃上田の南、鳴海以東は君侯の有に非ざらん。且竊に君侯の爲に之を危む」と。参議色を作して曰く、「何ぞ啖々するや。秀吉の兵衆しと雖、十萬に過ぎず。我が兵寡しと雖、三四萬を得べし。客兵を熱地に要し、險に邀へて之を撃たば、何の難きことか之有らん。歸りて秀吉に語れ。能く來らば則來れ。往く能はざるなり」と。勝雅、長益、大阪に返り、秀吉の怒を慮り、匍伏して復命す。秀吉徐に曰く、「家康の言、良に然り」と。堀秀政、蒲生氏鄉等、争ひて東伐を勸む。秀吉聽かず。沈思すること竟日、其夜四更、急に勝雅及び信雄を召し、衣を被

佐治日向自
殺す
秀吉婚を議
せしむ

浅野彈正

家康婚を許す

家康氏直と
盟ふ

て出でて曰く、「吾れ業已に家康をして來らしむ」と。二人驚きて故を問ふ。曰く、「彼れ室を亡ふ。吾れ我が妹を以て之に繼がん。寧そ來らざらんや。國人猶安せざる有らば、則我が大廳を以て質と爲さん」と。堀尾吉晴、生駒親正、侍坐す。問ひて曰く、「尊妹安に在る」と。曰く、「佐治の室、是なり」と。初秀吉、異父妹あり。佐治日向に適く。秀吉之を奪ひ、改めて我に適がしめんと欲するなり。明日、吉晴、親正をして佐治を諭告せしむ。佐治勉強して命を聽き、妻を遣して自殺す。

二月、乃長益、勝雅、及び富田知信、天野雄光をして、來りて婚を議せしむ。別に密旨を淺野彈正少弼に授け、繼ぎて發せしむ。四使至りて酒井忠次に因りて見えんことを求む。参議見ず。忠次、故を告げて固く請ふ。數日にして之を延見す。四使曰く、「嚮に關白子なし。君侯の子を養ふを得たり。聞く、君侯室を亡へり。關白の妹を進めんと欲す」と。参議曰く、「好意此に至る。吾豈之を拒まんや、獨三事あり。之を約して後婚せん」と。請ひ問ふ。答へず。使者曰く、「淺野彈正、密諭を帯びて清洲に在り」と。乃駟を以て召し至らしむ。参議、三事を書し、之に示して曰く、「新婦出あるも、嗣と爲す可からず。故の嗣子、出でて質たる可からず。吾れ或は蚤世するも、寸地を割く可からず」と。彈正少弼曰く、「某、關白の手書を袖にす。亦三條あり」と。出して之を視すに、皆これに暗合す。参議怡然として、遂に婚を許す。信雄來り賀す。北條氏、之を聞きて意頗危疑し、盟を請ふ。

三月、参議、氏直と黃瀬川に盟ひ、歡を極めて止む。遂に沼津の邪を毀ち、以て意を示す。

四月、幣を京都に納る。秀吉、彈正少弼をして女を送らしむ。参議、榊原康政をして往きて禮成るを告げしむ。富田氏に館す。秀吉、就きて見て曰く、「我れ子の面を見んと欲すること久し。小牧の役に我を醜詆せし者は、子に非ずや。吾れ嘗て子が頭を千金に贖へり。今、徳川、已に我が婿と爲る。我が婿に、材臣、子の如き者あるは、吾が喜ぶ所なり」と。

七月、参議、將に自將として上田に討たんとす。秀吉、之を聞きて使をして來り言はしむるやう、「關白

昌幸罪か謝す
秀長諫む

家康西上す
秀吉の母東下す
秀吉、家康と會す

昌幸の爲に請ふ、願くは之を釋せしと。八月、昌幸及び小笠原貞慶をして、來りて罪を謝せしむ。參議、遂に西上を議す。酒井忠次曰く、「彼れ婚すと雖、未だ輕しく信ず可からず。宜しく其情を確得して然る後往くべし」と。此の月、秀吉、親書を遣りて固く請ふ。九月、彈正少弼以下六輩をして來らしめ、大廳を送りて質と爲さんと約す。秀吉の弟秀長、諫めて曰く、「母を以て質と爲さば、天下後世之を何と謂はん。何ぞ之を征伐せざる」と。秀吉晒ひて曰く、「汝何ぞ狹中なる。是れ汝が知る所に非ざるなり」と。十月、詔して、參議を中納言に遷す。秀吉、奏して之を請ひしなり。中納言、遂に意を決して入朝す。諸將皆諫めて曰く、「秀吉の威力、此の如し。豈眞に其母を以て質と爲さんや。恐らくは詐謀あらん。吾れ其計中に陥らば、悔ゆと雖も追ふ可けんや。願くは君往く勿れ。秀吉怒りて來らば、臣等、當に死を以て之を拒ぐべし」と。中納言曰く、「吾も亦、其僞に非ざるを保せず。然りと雖、彼れ百方好を修め、母を以て質と爲すに至る。而して吾れ猶遲回せば、世、吾を怯と謂はん。且彼も亦、天命あり。吾れ當に之を助けて共に天下の亂を定むべし。今復與に兵を構へば、則亂曷ぞ止むことあらんや。我れ一人の命を捐て、億萬の生靈を救はば、亦多ならずや」と。乃世子をして留りて國を監せしめ、大久保忠世、石川家成、之を輔け、井伊直政に、本多重次を助けて岡崎を守らしむ。而して親士卒萬人を帥りて西上し、岡崎に至りて、秀吉の母の至るに遇ふ。夫人を迎へて之を見しむるに、信なり。秀吉、沿道の諸國に命じて橋梁を修め、供帳せしむ。二十七日、京師に至り、茶屋晴延に館す。秀吉、弟秀長、及び彈正少弼以下と來り見えて曰く、「長篠の役より、相面見せざること十二年、今、吾子、一たび天下の爲に節を屈す。吾が事成れり」と。遂に扈從の諸將を見、本多忠勝に謂て曰く、「小牧の役に、汝、我が軍と抗して行く。一騎當千の者と謂ふ可きなり」と。遂に酒饌を命じ、自嘗て進め、贈賄極めて厚し。是の如きこと連夜、因りて從容として問ひて曰く、「我れ微賤より起り、諸侯多く心服せず。奚爲れば則可ならん」と。中納言對て曰く、「公、第義に違ふ莫れ。義の在る所、天下之に従ふ」と。秀吉曰く、「善し」と。既にして曰く、「明日、子を聚樂に見ん。子、

家康聚樂第に入る

【作左】本多忠次

鬼作左

家康袍を乞ふ

藤堂高虎

家康正三位に進む

鳥居元忠

家康參河に歸る

意を枉けて我に降り、以て諸侯に視せしと。十一月二日、聚樂第に入る。秀吉、大に諸侯を會し、延見すること儀の如くす。中納言、拜跪甚恭し、諸侯、皆容を改む。其明日、大に饗す。是の時に當りて秀吉の母岡崎に在り。岡崎の役卒、日薪を其館外に積む。其侍婢、之を恠しみ、役卒を召して故を問ふ。對て曰く、「作左、中納言の歸を遅つ。曰く、「若し短長有らば、大廳を焚殺せんとす」と。此老、性急なり。今旦、已に火を縱たんと欲す。井伊公、之を留めて止む」と。婢、大に怖れ、相謂て曰く、「往年、參河の任子來りしに、關白、其一人を指して曰く、「彼れ鬼作左の兒なり」と。今其鬼、乃我が輩を殺さんと欲す」と。遂に之を大廳に白す。大廳、憂悸し、書を秀吉に馳せて、中納言の歸を促す。中納言、方に秀長の饗を受く。宴酣なるとき、秀吉至りて、楮袍にて茗を點じて曰く、「請ふ、聚樂に祖せん」と。乃與偕に出つ。諸侯、皆門外に在り。秀吉曰く、「吾れ我が母の早歸を欲す。故に我が婿をして趣して國に就かしむ」と。秀長、中納言の足に躡す。中納言、進みて其楮袍を乞ふ。秀吉曰く、「此れ戎衣なり」と。中納言曰く、「家康、こゝに在り。公をして復戎衣せしめ」と。秀吉笑ひて脱して之を附す。因りて左右に顧て曰く、「吾れ快き婿を得たり」と。衆、謹然たり。蓋し秀長をして豫中納言に教へしめしなり。秀吉遂に徳川氏の第を二條に起し、酒井忠次に宅を賜ひ、秀長の部將藤堂高虎に命じて役を監せしめ、近江の地三萬石を以て湯沐の邑と爲し、忠次に千石の邑を賜ふ。五日、中納言、正三位に進む。井伊直政は兵部大輔に任じ、榊原康政は式部大輔に任じ、皆從五位下に叙せらる。其餘の將領、官爵を受くること差あり。鳥居元忠以爲へらく、「是れ秀吉、朝爵を假りて我が輩に結納するなり」と。乃辭して曰く、「臣は關東の野人、創痍の餘、跪起に便ならず。豈衣冠に任へんや」と。後、秀吉、羽柴勝雅をして、女を以て元忠の子忠政に妻さしめ、因りて養ひて子と爲さしめんとす。元忠曰く、「臣の兒、二君あらしむ可からず」と。亦之を辭す。十四日、中納言、參河に歸る。重次以下迎へ賀す。乃直政をして大廳を還還せしむ。諸侍女、直政の禮あるを譽む。秀吉、喜ひて之を饗す。中納言の京師にあるや、秀吉、石川數正の謁

駿府城成る
板倉勝重

勝重其妻に
計る

天正十五年

家康大阪に
赴く

十六年
家康入朝す
天皇聚樂第

見を許さんと請ふ。直政を饗するに及びて、又數正をして接待せしむ。饗を終るまで、直政、言も交へず。數正を指して衆に謂て曰く、「彼れ人面にして獸心なる者」と。一坐、色を失ふ。大廳の侍女、又重次の亡狀を懇へ、罰を加へんと請ふ。秀吉笑ひて曰く、「家康は佳士多し。羨むべし」と。

十二月、駿府城成る。中納言、菅沼定政を留めて濱松を守らしめ、徙りて駿府に居る。板倉勝重を以て奉行と爲す。勝重、幼にして僧と爲り、喜ひて書を讀む。父好重、弟定重、皆事に死し、兄忠重卒して子なし。中納言乃勝重をして髪を蓄へて吏と爲さしめ、終に之を識拔す。勝重、固辭すれども許さず。乃請ひて曰く、「願くは家に歸り、妻と之を計るを得ん」と。中納言、晒ひて之を許す。妻欣び迎へて曰く、「人あり、夫婦に慶事ありと告ぐ。何ぞや」と。勝重、朝服を脱ぎて坐し、之に謂て曰く、「吾れ奉行の命を受く。汝と之を計らんと欲す。且く辭して歸る。願ふに汝、何と謂ふか」と。妻驚きて曰く、「是れ公事なり。妾何ぞ之を辨するを得ん」と。勝重曰く、「然らず。古より吏と爲る者、誰か内謁を以て事を敗らざる。今より以往、汝我が爲す所に於て、一も議すること有る無く、外人の苞直に於て、一も受くること有る無くば、則我れ命を拜せん」と。妻の曰く、「敢て唯命を是れ聽かざらんや」と。勝重、之と誓ひて、復朝服を被り袴を穿きて出づ。妻送りて其袴後の拗れたるを見て、呼び返して之を正さんと欲す。勝重怒りて曰く、「何ぞ誓に背くや」と。妻惶恐して謝す。是に於て、往きて命を拜して職に就く。訟獄平允にして、百事大に治る。

十五年二月、駿府の二城を作る。秀吉既に我と和し、東面を慮らず。是に於て、大舉して西伐す。中納言、本多廣孝を遣して師を勞はしむ。師、岩石城を攻む。廣孝、力戰して賞を受く。七月、秀吉、九州を定めて還る。中納言、大阪に赴きて之を賀す。八月、大納言に轉じ、從二位に進む。乃還る。十二月、左近衛大將、左馬寮御監を兼ね。

十六年二月、兩職を辭す。三月、大納言、京師に朝す。秀康、西征に功有りしを以て、左近衛少將に進む。我が諸臣、任を遷さるる者多し。四月、後陽成天皇、聚樂に幸す。大納言、内大臣信雄等と先驅を爲す。關

に行幸す

家康夫人と
京師に赴く
酒井忠次致
仕を請ふ

伊達氏、好
を通ず
十七年

【中泉】遠江

土屋忠直

羽柴秀康

結城晴朝

北條氏政

白秀吉、後乘たり。秀吉、大納言以下の盟辭を要す。特に大納言と、信雄、秀長、秀次、及び浮田秀家とに詔して、清華の上に班す。禮畢りて東に還る。

是に於て、秀吉、北條氏の未だ至らざるを以て、乃使を遣して其不庭を責む。北條氏遷延し、意に婚及び質を得て、徳川氏の如くせんことを欲す。而れども秀吉意を加へず。閏五月、氏政の使來り、我に因りて和を請ふ。

六月、大廳、疾あり。大納言、夫人と與に京師に赴きて之を問ふ。九月、夫人を留めて還る。十一月、酒井忠次、致仕を請ふ。大納言、優旨もて之に答ふ。固く請ふ。乃其第に蒞み、驢を盡して日を竟ふ。其子家次をして封を襲はしむ。

是の歳、陸奥の伊達氏、來りて好を通ず。

十七年正月、眞田昌幸、子信幸を以て我に質とす。

是の月、大納言、中泉に獵て清見寺に息ふ。一兒あり、若を捧けて出づ。其名を問ふ。僧曰く、「甲斐の人土屋惣藏の孤なり」と。惣藏は武田氏に事へ、天目山の難に死せしものなり。大納言、其胤を得たるを喜び、載せて歸る。世子に謂て曰く、「我れ汝に與ふるに、一口の護身刀を以てす」と。兒を拉して之を附す。後名を忠直と賜ひ、常に世子に侍せしむ。

時に少將秀康、京師に在り、益長じて英氣あり。嘗て騎を習ふ。秀吉の牙騎、禮を失ふ。秀康、馳せて之を斬る。秀吉問はず。是の時、關東の諸豪、往々、我に因りて降る。結城晴朝も亦降り、豊臣氏の旗を得て子と爲さんと請ふ。秀吉、乃秀康を遣す。三月、大納言、京師に如き、兩月にして還る。

是より先、北條氏政、我が侵地の沼田を得て而る後入朝せんと請ふ。秀吉憚らずして曰く、「吾れ北條氏を伐たんと欲すれども、其徳川の姻戚たるを以て姑く之を假すのみ」と。七月、秀吉、三使を發して來り請ふ。大納言、乃人をして眞田昌幸を諭して、沼田を致さしめ、而して内地に就きて之を償ふ。因りて氏政に説

家康大阪に如く
秀吉東伐
天正十八年
家康の夫人
卒す

【長筈】駿河
秀吉京師を發す
伊奈忠次
石田三成

く順逆を以てし、其入朝を勸む。亦伊達政宗に勸む。皆聽かず。沼田の守將も亦其傍地を侵す。十二月、大納言、大阪に如く。秀吉、入朝して東伐を請ふ。詔して之を許す。大納言を以て前鋒と爲す。秀吉、諸將に謂て曰く、「家康は前軍となり、秀吉後繼と爲る。萬國を横行すと雖可なり。況んや北條氏に於てをや」と。大納言をして國に還りて兵を治めしむ。十八年正月、夫人病みて京師に卒す。東事興るを以て、秘して喪を發せず。大納言、世子を遣して京師に如かしむ。井伊直政、内藤正成等、從ひて聚樂に至る。秀吉、喜び迎へて曰く、「佳兒なり」と。其手を執りて内に入り、夫人淺野氏をして其髪を結び衣袴を更へしめ、親、金筋の刀に取りて之を帯ばしめ、携へ出でて直政に謂て曰く、「野様を變して京様と爲す。大納言、之を見は、必驚喜せん。大納言は朴實なり。其幼兒を送るは、蓋し北條氏と姻あるを以て、故に之を以て質に擬するならん。吾れ豈疑ふ所あらんや。宜しく速に護り去るべし」と。世子還り至る。大納言曰く、「秀吉、我が兒を留めざるは、是れ我が諸城を借らんと欲すればなり」と。乃、本多重次、本多正信に命じて、海道諸城を掃除し、伊奈忠次に命じて、浮梁を富士川に造らしむ。居ること三日にして秀吉の使者至る。果して其言の如し。二月、大納言、兵二萬五千を發し、師に誓ひて發し、長窪に軍す。三月、秀吉、京師を發して岡崎に入る。本多重次、留守す。肯て出で迎へず。秀吉、召して之を見んとす。重次曰く、「我が君に非ず。何ぞ調することを爲さん」と。辭して入らず。秀吉、吉田に至る。伊奈忠次曰く、「天雨ふり河漲る。請ふ、露るるを待ちて行かん」と。秀吉曰く、「吾れ聞く、兵行、水に臨まば、宜しく亟に渉るべし。不らずんば、則後者これを病まん」と。對て曰く、「是れ寡兵を行る所以のみ。以て大衆を行らば、則溺れん」と。秀吉之に従ふ。留ること三日にして駿府に至り、將に入らんとす。石田三成、耳語して曰く、「徳川、北條と謀を通すと聞く。入る勿れ」と。秀吉猶豫す。彈正少弼曰く、「浮言、信する勿れ」と。乃入る。三成、童年より面首を以て寵を受け、長ずるに及びて慧巧人

重次主公を罵る

秀吉敵寨を巡る

兩將策を講す

【二城】葦山
山中
小田原攻落
の方法を議す

に過ぐ。秀吉、以て奉行と爲す。治部少輔に任せらる。少弼と同僚なり。是より寢覺隙あり。大納言、秀吉至ると聞きて、兵を留めて來り會す。上國の諸將と皆其次に在り。本田重次、事を以て來り謁す。後より罵りて曰く、「咄、主公、此の大恠事を爲す。國の主たる者、豈其城を空しくして人に假すこと有らんや。是の如くば、則人或は夫人を借らんと欲するも、亦之を許すか」と。且罵り且出づ。諸將、相視て嘻す。大納言諸將に謂て曰く、「彼は本多重次と云ふ者、僕の舊臣なり。僕の幼時より從ひて百戰す。僕も亦之を愛敬するなり。然れども天質頑縦、老に及びて益甚し。今、稠人中に於て、僕を詭ること此の如し。諸公以て其平時を想ふべし」と。衆、謝して曰く、「老の名を聞くこと久し。今乃見るを得たり。臣あること此の如し。眞に倚頼す可し」と。已にして大納言、復其軍に至る。秀吉沼津に至る。二十八日、親敵寨を巡り、我が營に就きて諮ひて曰く、「諸將みな我に説きて曰く、「氏政父子、數萬の精甲を擁して出で戦はず。是れ我を險に誘ひて之を四襲せんと欲するなり」と。卿以て何如と爲す」と。大納言、對て曰く、「某を以て之を觀るに、是れ我を畏るゝのみ。今宜しく三軍と爲し、一は葦山を攻め、一は山中を攻め、彼れ或は來り援はゞ、則一軍を以て之を邀へ撃つべし」と。秀吉曰く、「彼れ果して來らば、卿を煩して邀へ撃たしめん」と。對て曰く、「諾、某嘗て一萬に將として、彼の四萬と甲斐、信濃に戦ひ、十合して九勝せり。固より與し易きのみ。然りと雖、今彼れ險に據りて死を決す。某若し利あらざば、公幸に之を繼げ」と。秀吉曰く、「諾、是れ必勝の計なり。然りと雖、彼れ肯て出でずば、則奚を爲さん」と。曰く、「二城、必一を取り、某は、則手軍を以て古道より酒匂驛に出で、早川に陣し、以て八州の援路を扼せん。而して公は、大軍を以て直に小田原を撞かば、敵必支ふる能はざらん」と。曰く、「酒匂の道、城寨無きを得んや」と。曰く、「鷹巢、足柄、新莊の三城あり」と。曰く、「何を以て之を踰えん」と。曰く、「彼れ守る能はざるなり。武田信玄、嘗て二萬を以て小田原に入る。無人の地を行くが如し。今、兵、信玄に什倍す。其守る能はざること必せり」と。曰く、「焉ぞ鯁將の我

秀次、一氏、山中を抜く鷹巢、足柄

秀忠

【宮城野】相摸家康酒匂に至る

本多忠政【總社】上野

伊達政宗來り見【甘索】相摸

を拒く者無きを知らんや」と。曰く「能く然らば、我が欲する所なり。某當に攻めて之を滅べし」と。
 秀吉乃其軍に還り、夜、令を發して、旦日、二城を攻む。豊臣秀次、中村一氏、攻めて山中を抜く。北條氏出でず。大納言、則別軍を以て古道に出づ。松平康重、本多忠勝等、先鋒たり。鷹巢を攻めて之を陥る。足柄城、潰れ、進みて新莊を攻む。守將拒ぎ戦ひ、克たずして走る。秀吉繼ぎて至り、諸將と湯本に見る。戰袍三領を出し、大納言をして其一を取らしむ。且其一を以て秀次に授けしむ。因りて秀次を戒めて曰く、「汝宜しく徳川を學ぶべきなり」と。又大納言をして世子を駿府より召さしめ、秀吉自甲を取りて之を被せて曰く、「宜しく我に類すべきなり」と。自其偏名を取り、名づけて秀忠と曰ふ。秀吉、蓋し事勢未だ定らざるを以て、務めて我に結納するなり。

四月、松平康重等、宮城野を攻めて之を破る。湯本、竹浦、解走す。三日、大納言、諸軍に先だちて酒匂に至る。城中、豊怖す。我が兵、復衛路に伏し、敵の援兵を要撃して、俘斬する所多し。秀吉、大に喜び、我に約するに、「事平がば盡く北條氏の地を領せしめん」と。

我が將、松平康國、鳥居元忠、平岩親吉等、前田、上杉氏を助けて、上野、武藏に入り、諸城を下す。本多忠勝、酒井家次等、淺野、木村氏を助けて前の三將に會し、上總、下總を徇へ、還りて武藏に入り、岩築を攻めて之を陥る。本多忠勝の子忠政、手づから首級を斬る。五月、康國、總社に次し、降將に戕さる。弟康貞、手づから十餘人を斬りて之を定む。大納言、康貞を以て嗣と爲す。

是の月、小田原の城兵、夜、出でて蒲生氏の陣を襲ひ、轉じて我が陣に赴く。陣堅くして動かさず。乃收めて入る。

六月、大納言、伊達政宗を召して來り見えしむ。
 甘索の城主北條氏勝、初め山中を守り、敗れて其邑を保つ。秀吉、黒田孝高を遣し、説きて之を降さんとす。聽かず。大納言、本多忠勝をして之を諭さしむ。乃降る。

江戸城を取

加藤嘉明 八王子を屠

荻山を攻む 小笠原廣勝 戦死

江戸の城主遠山景佐、初め新莊を守り、我が兵の爲に敗られて、走りて小田原に入る。其弟川村兵部、其姪遠山丹波、眞田信尹と、江戸に處りて守る。丹波、信尹、款を我に納る。大納言、兵を遣して、兵部を逐ひて其城を取る。

石田三成、大谷吉隆、館林を攻むれども抜けず。氏勝、城兵を諭す。乃降る。三成等、轉じて忍城を攻む。彈正少弼、助け攻め、將に諭して之を降さんとす。三成、其功多きを忌み、給きて曰く「城兵已に内應する者あり。請ふ陣を分ちて之を攻めん」と。城兵怒りて戦ふ。三成曰く「内應敗れたり」と。遂に水を引きて之に灌ぐ。地利を得ずして罷む。

前田、上杉氏、降附萬餘を以て來り調す。秀吉、賞せずして曰く「彼れ血刃の功なし。或は之を屠り、或は之を降して可なり」と。西將加藤嘉明、竊に言て曰く「是れ豈天下に主たる者の言ならんや」と。二將、遂に攻めて八王子を屠る。守將中山家範、狩野一庵等、之に死す。大納言、一庵の子主膳、家範の二子昭守、信吉を索めて之に祿す。

時に小田原、固守すること數月、兩軍戰を禁じ、徒に弓銃を以て相挑む。是より先、我が軍築地に徙り、地道を鑿りて城に入らんとす。未だ達せず。井伊氏の營前に敵の別堡あり。一橋、城に通ず。城兵、時に出で、堡を成る。直政私に計り、部下の子弟を以て之を襲ふ。暴雨に會ひて地道壞れ、城樓崩れ陥る。直政、伏を壘外に設けて進み攻め、輒く堡を取る。直政、橋に至りて自銃を發す。銃、炸して手を傷けども進みて已まず。士卒力戦し、斬首四百。火を城に縱つ。城兵益出づ。然して我が兵繼ぐものなし。乃兵を收めて卻く。城兵追躡し、伏に遇ひて敗れ還る。我が中軍、火を望みて愕く。松平家忠曰く「少年輩、雨に乗じて城に入るのみ」と。捷聞至る。秀吉、大に喜びて之を賞す。是の役に城中の首級を得しは、是を始と爲す。織田信雄、及び西將數人、荻山を攻めて、數利あらず。大納言、小笠原廣勝を遣して之を視しむ。廣勝、諸將の逗撓するを怒り、自進みて其門を奪ひ、繼ぐ者なくして死す。

氏直降を乞ふ

氏政自殺す

氏直を高野に縦つ
徳川氏關東八州を領す

信雄を放つ

蒲生氏郷

江戸に營す

功を論じ地
つを將士に分
【忍】二萬石
【私部】二萬石

七月、大納言、又内藤信成を遣し、城將北條氏規を諭して之を降す。五日、氏直、遂に出で、我營に就きて、降を乞ひて城を致す。大納言、井伊、本多、榊原の三將を遣し、西將二人と、入りて城を受け、嚴に抄掠を禁じ、盡く氏政以下を出す。我が叛將小笠原長忠、甲斐より亡けて小田原に依る。是に於て、執へて之を誅す。十日、大納言、城に入る。其明、氏政自殺す。秀吉に四使を遣し、大納言は榊原康政を遣してこれに蒞ましむ。氏直を高野に縦ちて、厚く之に給す。徳川氏、是に於て、關東八州を領す。近江の地九萬石を朝宿の邑と爲し、海道の地萬石を田獵の邑と爲す。凡二百五十五萬七千石なり。秀吉、我が國の京畿に逼りて、人心の固結すること日久しきを害とするや、乃事に乗じて之に徙し、八國の名を以て其心を壓かしめ、其實は武藏、相模、伊豆、上總、下總、上野の六州のみ。安房には里見氏あり。下野には宇都宮氏あり。其他結城、佐野、皆川の諸族、方隅に割據する者頗る多し。而して北條氏の餘黨、所在に潜伏し、兵燹之餘、城邑荒廢す。乃我を趣してこゝに徙り居らしむ。而して駿河、甲斐、信濃、遠江、參河を以て、親臣、宿將に割き予ふ。織田信雄を放ちて、尾張、伊勢を奪ひ、之を甥秀次に予へ、以て我を距塞す。陸奥の會津は、蘆名氏の故國なり。伊達氏の爲に侵され、之を復せんと請ふ。秀吉許さず。之を蒲生氏郷に予へ、以て我を鎮壓せしむ。五國の士民、大に望を失ひ、諸將も亦、怏々として樂しまず。大納言曰く、「可なり。關八州も亦、我が宗の故國なり。古より武を用ゐる地と稱す。士を養ひ民を撫し、以て天下の變を觀るに足れり」と。乃兵を發して四出し、諸城邑の未だ服せざる者を伐ちて盡く之を定め、遂に地を相して都を建つ。將士以爲へらく、「小田原に非ずば則鎌倉ならん」と。大納言乃秀吉と議して江戸に營み、八月、朔、振旅して入る。

矢造を鳥居元忠に、其古河を小笠原秀政に、其關宿を松平康元に、其相馬を土岐定政に、其蘆戸を木曾義就に、上總の緒瀧を本田忠勝に、其久留里を大須賀忠正に、其鳴渡を石川康通に、其佐貫を内藤家長に、上野の碓氷を酒井家次に、其既橋を平岩親吉に、其大胡を牧野康成に、其吉井を菅沼定利に、其阿布を菅沼定盈に、其那波を松平家乗に、其宮崎を奥平信昌に、其藤岡を松平康貞に、其白井を本多廣孝に、其館林を榊原康政に、其箕輪を井伊直政に賜ふ。直政、康政、忠勝は皆十萬石を食み、忠世、元忠、康元は四萬石を食む。其餘は差あり。内外の士人を總べ、分ちて五隊と爲し、直政、忠勝、康政、康通、親吉を以て、之を領し、京師に更番せしむ。北條、三浦、木曾、保科、久能、岡部の諸族、皆邑封を給し、乃促して封に就かしむ。更に命じて遠近輕重を度りて、資用を給す。衆皆其遷徙の勞を忘る。十月、使を京師に遣し、五州の地を致す。秀吉、其神速なるに服す。

石【岩築】二萬石
【東方】一萬石
【松山】一萬石
【羽生】二萬石
【河越】一萬石
【本莊】一萬石
【幡山】一萬石
【小田原】一萬石
【甘四萬石】一萬石
【索】一萬石
【山】一萬石
【矢造】四萬石
【古河】一萬石
【關宿】四萬石
【相馬】一萬石
【蘆戸】一萬石
【緒瀧】一萬石
【久留里】三萬石
【鳴渡】三萬石
【佐貫】二萬石
【碓氷】二萬石
【大胡】三萬石
【吉井】二萬石
【阿布】一萬石
【那波】一萬石
【宮崎】一萬石
【藤岡】一萬石
【箕輪】一萬石
【白井】三萬石
【館林】一萬石
【箕輪】一萬石
【館林】一萬石
【白井】三萬石
【館林】一萬石
【箕輪】一萬石

江戸の地は、東は隅田川を帶び、南は海灣は控へ、西北を武藏野に接す。上杉氏の將太田道灌といふ者、始めて之を城く。而して平河沼沚、蘆葦叢生し、城郭隘陋、船板を用ゐて階と爲すに至る。本多正信白して曰く、「是れ以て外賓を視す可からず。請ふ、之を更へん」と。大納言晒ひて曰く、「汝乃此婦女のを見を執るか。土木の事、徐に之を議せんのみ」と。乃地勢に因りて土民を區處し、大番士に賜ふに西北の地を以てし、高きを鏝り卑きを填め、以て第宅を置く。東南に渠を鑿り、淤を疏し、泥土を輦き、街市を起して、運漕の道を通す。復板倉勝重を以て奉行と爲し、諸の制度、盡く北條氏の舊に因り、而して其煩苛なる者を除く。國內大に服す。秀吉の東下するや、人ありて佐藤忠信の冑を獻す。曰く、「今日當に之を被るべき者は、本多忠勝なり」と。乃之を忠勝に賜ふ。忠勝の長子忠政、其父に謂て曰く、「忠信は源九郎の從僕のみ。大人、徳川氏の將領を以て、其冑を被りて榮と爲すか。亟に之を還せ」と。秀吉の西に還るや、本多重次の無禮を銜み、我に諷して之を罰せしめんとす。大納言、已むを得ずして之を

五州を致す
板倉勝重奉
行と偽る
佐藤忠信の
本多重次卒

天正十九年
八國の將士
正を江戸に
賀す

陸奥を征す
【岩手】陸奥
最上義光

秀吉愛兒を
失ひ兵を朝
鮮に用ゐん
秀吉關白を
太閤と稱す

上總の小原に置き、潜に三千石を給し、時々人をして之を慰問せしむ。尋いで病みて卒す。
是の月、陸奥、出羽、寇起る。伊達氏、陰に之を助く。蒲生氏郷等、來りて援を我に乞ふ。彈正少弼、西に還り、途に變を聞きて亦來り乞ふ。乃結城秀康、榊原康政を遣して之に赴かしむ。
十二月、秀吉、甥秀次を遣して東伐し、石田三成をして來りて親出を請はしむ。是の歲、世子、從四位下に叙し、侍從に任ぜらる。秀康、封を襲ぎて十萬石を食む。忠吉、從五位下に叙し、下野守に任ぜらる。信吉、下總の小金に封ぜられ、三萬石を食む。故世子信康の女を以て、小笠原秀政に妻す。秀政は貞慶の子なり。
十九年正月、八國の將士、皆正を江戸に賀す。
大納言、親出で、岩築に至り、亂平ぐと聞きて乃還る。伊達氏に勸めて入謝せしむ。
閏月、京師に如く。二月、天子、之に御香を賜ひ、敕して、入朝して花を禁園に觀しむ。三月、東に歸る。
五月、陸奥、復亂る。六月、秀吉、復人をして來り請ひて、東北の諸將を節度せしむ。七月、親征す。井伊、本多、榊原、各一軍に將として從ふ。八月、岩手に軍し、九月、盡く陸奥を定め、十月、江戸に還る。最上義光、世出羽の山形に主たり。織田、豊臣氏に通ず。大納言、輒爲に其名家なるを説き、善く之を遇せしむ。義光、深く之を徳とす。是に於て、其次子を以て我の臣とせんと請ふ。乃名を家親と賜ひて、之を侍從に屬せしむ。
是の月、侍從左近衛少將に轉じ、武藏守を兼ぬ。尋いで右近衛中將に遷る。
是に於て、海内、盡く定り、將に無爲に休息せんとす。而して秀吉、汰修事を喜ぶ。諸の輕銳の小人、旨を承けて進み説く。其愛兒の死するに會ひ、兵を朝鮮に用ゐるに以て自遣らんと欲す。浮田秀家、首として之を德憑す。乃關白職を秀次に譲り、太閤と稱し、行營を肥前に建て、人をして來りて我に告げしめて、來り會せしむ。木を伊豆に伐りて舟艦を造る。海内騷然たり。諸將、皆心に其非を知れども、敢て匡拂する莫し。十一月、中將、參議に陞り、前職を帶ぶ。

文祿元年
家康西行

秀家等朝鮮
江戶城を修
拓す
秀忠京師に
行く
藤田肅

二年
黒田孝高
【新田公】家
康

肥後寇起る

秀頼生る

文祿元年、大納言、榊原康政に命じて、參議を輔けて處守せしめ、而して自兵萬五千に將として西行し、伊達、佐竹、南部、最上の諸將を率ゐて、肥前に會す。
是の月、松平家忠を下總の小美川に徙し、忍を以て下野守忠吉に封じ、三月、五郎信吉を下總の佐倉に徙し、各十萬石を食ましむ。尋いで外孫與平、忠明を上野の小幡に封ず。
四月、浮田秀家等、兵を將りて朝鮮に入る。
七月、大納言、遙に松平家忠に命じて、江戶城を修拓せしむ。參議、京師に如く。九月、參議、中納言に遷り、從三位に進む。十二月、江戶城に還る。
是より先、京師の儒人藤原肅、秀吉に忤ひ、之を肥前に避く。豊臣秀秋、之と故あり。迎へて之を客とす。
大納言、其名を聞き、時に之を幕中に延きて古道を諮詢す。

二年三月、江戸の土功、竣を告ぐ。
是より先、外征の諸將、朝鮮を取り、過ぐる所殘滅す。明氏、軍を出して之を援ひ、連戦すれども決せず。黒田孝高、行營に在り、議して以爲へらく、元帥其任に堪へず。其任に堪ふる者は新田公なり。不らずば、則前田利家、若くは孝高のみと。秀吉、又功成らずして内變あらんことを慮り、諸將を會して、宣告す、一自前田利家、蒲生氏郷と、三軍を將りて朝鮮に入り、而して大納言を留めて國を守らしめんと欲す。大納言、即辭色を奮ひて從ひ行かんを願ふ。彈正少弼、秀吉を極諫す。秀吉怒り、手づから之を斬らんと欲す。諸將救ひて止む。秀吉、少弼を斥けて見ゆるを許さず。肥後の寇起るに會ひ、秀吉、乃悟る。大納言少弼を携へて、入りて謝せしむ。少弼の長子左京大夫をして寇を討たしめ、本多忠勝を以て助けしめて之を平ぐ。淺野氏、嘗て其臣の金幣を偽造するに坐し、罪を獲たり。大納言、潜に其家に往き、實を審にして爲之を白す。事、以て寢むを得たり。日に益親善なり。
八月、秀吉の庶子秀頼生る。秀吉、大に喜び、東に歸る。大納言は西より、中納言は東より、皆往きて之を

伏見城を築く

永井直勝

家康の二女輝政に嫁す

大久保忠世

少将 秀康

土井利勝

大久保忠鄰

賀す。豊臣氏の將吏、朝鮮に在りて竊に歸志を懐く。秀吉を固蔽し、曲けて和議を成し、兵を弭めて還る。十月、大納言、江戸に歸り、藤原肅を聘し、待するに賓禮を以てし、講論益力む。三年春、秀吉大に伏見に築き、諸國に課して役を助けしむ。大納言、榊原康政をして管内の將士を諭し、徭錢を貸し、役丁を出さしむ。尋いで自西上して監視す。秀吉、之を要して共に吉野に遊ぶ。四月、永井直勝、五位に叙し、右近大夫と爲る。大納言の肥前に在るや、秀吉、其營を過りて與に語る。直勝出で、茗を進む。秀吉問ひて其名を知る。曰く、「是れ往年、池田を獲し者か」と。因りて大納言に問ひて曰く、「爾時、吾れ卿と壘を對す。卿、何を以て我が重壕の兵を攻めざりしか」と。對へて曰く、「樂田の兵、夾みて之を撃たんと慮りしなり。抑公も亦、何を以て來り戦はざりしか」と。秀吉掌を拊ちて曰く、「吾れ誠に御兵を壕に置き、卿の來るのを俟ち、夾みて之を殲さんと欲せしなり。故に往きて戦はざりしのみ」と。諸將の傍に聴く者、皆悦服す。秀吉、是に於て、來りて直勝に言さしむるに、豊臣氏を以てせんと請ふ。遂に斯命あり。大納言の二女、北條氏に適きて寡なり。秀吉自媒し、再池田信輝の子輝政に嫁がしめて、其憾を釋く。次年又三女を以て蒲生氏郷の子秀行に嫁がしむ。

九月、大久保忠世卒す。子忠鄰嗣ぎ、小田原を守りて世子の傳を兼ねぬ。四年、大納言、中納言、少将、共に京師に在り。大に秀吉を饗す。秀吉、既に秀頼を生み、秀次を廢せんと欲す。秀次、素より淫虐なり。石田三成、増田長盛等、從ひて之を構ふ。五月、大納言、東に還り、中納言を京師に留め、之を戒めて曰く、「秀次、將に禍に及ばんとす。即來り誘はん。慎みて之に應ずる勿れ」と。七月、秀吉、伏見より使を京師に使し、聚樂第に就きて秀次を詰らしむ。秀次、誓ひて之を遣る。事已に迫るを以て、我が中納言を取りて質と爲し、因りて我が兵を擄きて自援はんと欲す。即夜五更、人をして來り告げしめて曰く、「關白、朝餐を供せんと欲す。請ふ、速に來れ」と。土井利勝答へて曰く、「世子未だ起きず。當に起くるを俟ちて之を告ぐべし」と。使者去る。利勝、大久保忠鄰に告ぐ。忠鄰、之をして奉じて伏

見に奔らしむ。從者六人、間道を取らんと議す。利勝、直に大路より南に馳す。使者、復來り促す。忠鄰、故に之を留め、中納言已に遠きを度り、乃出で、見えて曰く、「世子、早に茶會の約ありて伏見に赴けり」と。秀次、之を聞き大に悔ゆ。秀吉、中納言の來るを見、悦びて曰く、「眞に新田公の子なり」と。乃書を以て變を江戸に告ぐ。大納言、即發す。途に秀次已に殺されたるを聞き、程を兼ねて至る。秀吉大に喜ぶ。秀吉、素より刑殺を嗜む。老に及びて喜怒測られず。秀次を獄に治すに至りては、尤慘酷を極む。三成、既に秀次を陥れ、遂に諸將の己に異なる者を連累せんと欲し、伊達政宗を反黨たりと誣ふ。秀吉、大に怒り、政宗を伊豫に徙さんと欲す。政宗、京師の第に在り。人をして伏見に往かしめ、大納言の營に就きて救を請ふ。大納言答へず。使者食を賜はる。食を終りて對を請ふ。大納言罵りて曰く、「而が主は怯懦にして、與に言ふに足らざるなり。且若が輩、伊豫に徙りて魚に餒れんと欲するか、京中に死して狗に餒れんか。必一に居らん」と。因りて召して之を前め、對を授けて遣歸す。既にして伊達氏の兵、皆甲を衷して諫ぐ。京師、大に擾る。秀吉、之を聞き大に驚き、使をして政宗を詰問せしむ。政宗便服にて出で迎へ、言て曰く、「臣が僕從皆曰く、「累世の國を失ひ、客土に漂泊せんよりは、死するに若かざるなり」と。臣、之を制止すれば、輒斥けて怯夫と爲す。目下に在る者猶此の如し。留りて國に在る者、其何の狀たるを審にせず」と。使者還り報す。秀吉、之を思ふ。大納言、親往きて申雪するに會ひ、事遂に釋くるを得たり。最上義光の女、嘗て秀次に侍す。敗るゝに及びて、併せ殺さる。三成、又義光を誣ふ。亦大納言に救はる。衆、みな三成を睚眦す。而れども秀吉、之を寵すること益甚し。三成權を專にして、復忌憚するなし。

秀次殺さる

三成政宗を誣ふ

三成義光を誣ふ

三成徳川氏を畏る
秀忠淺井氏を娶る
北廳

獨徳川氏を畏る。九月、我が中納言、秀吉の旨を以て、淺井氏を娶る。淺井氏、二姉あり。秀吉自其長者を取りて、秀頼を生む。淀君と稱す。少者は、京極高次に嫁し、後に常光と稱す。皆故織田信長の外姪なり。秀吉の夫人淺野氏を北廳と稱す。淀君の寵を專にするに及びて、北廳、勢を失ふ。石田三成、増田長盛、小西行長

慶長元年

明の使者來る

酒井忠次卒

大番頭

【二人】康親家乗

慶長三年

【豊面翁】徳川家康を試みる

大野治長等、皆淀君に附く。加藤清正、福島正則等、北、廳の親屬たり。敢て附かず。清正、行長と並に外征の將となり。功を争ひて相惡し。内旨各助くる所あり。秀頼の生るゝに及びて、諸將益、淀君に黨す。大納言、亦之と姻戚あり。而れども獨、北、廳を禮す。慶長元年五月、詔して大納言を以て内大臣と爲し、正二位に叙す。後二日入朝す。是の日、秀吉も亦、秀頼を以て入朝す。從三位に叙し、中將に任ぜらる。九月、明及び朝鮮の使者來り謁す。秀吉、來辭の其望む所に非ざるを以て、復大に兵を徵し、明春を以て海を渡らんとして、吏を行營に置きて復親出でず。十月、酒井忠次、卒す。

十二月、松平康親、松平家乗を以て、大番頭と爲す。初め内大臣、大番五隊を置き、内藤、永井、粟生、三家の子弟を以て頭と爲す。皆萬石に滿たざる者なり。是に於て、二人に諭して曰く、「吾れ此職を以て子を累す。子必心に厭がざらん。然りと雖、世事未だ定らず。中軍の鋒、子に非ずば不可なり」と。又井伊、本多、榊原、石川、平岩の五將をして、伏見を更番せしめ、藤杜に頓して、非常に備ふ。三年正月二日、内大臣、吉夢に感じ、潛に石清水祠に詣つ。是の時に當りて、内大臣、及び前田利家、毛利輝元、上杉景勝、浮田秀家等、巨藩の大老たり。秀吉嘗て諸侯を會し、秀頼を抱きて室中より關心視て、問ひて曰く、「彼の列坐の者、誰か最長る可き」と。輝元の状貌尤魁偉なり。秀頼、之を指して曰く、「彼れ最長る可し」と。秀吉晒ひて曰く、「否、首坐の豊面翁長るべきのみ」と。秀吉、内大臣を試んと欲し、從容として諸將に語りて曰く、「弓箭の事、方今乃公に及ぶ者莫し」と。諸將皆伏して曰く、「誰か敢て殿下を望まんや」と。内大臣、色を作して跪きて曰く、「某此に在り。殿下未だ此言を出す可からず。殿下獨小牧の事を記せざるか」と。諸將相顧て駭栗す。秀吉默然、起ちて内に入る。諸將交、内大臣に謂て曰く、「適聞く所、公戲に之を言へるか」と。内大臣曰く、「否否、太閤天下を保つと雖、弓箭の道に至りては、僕肯て

朝鮮再征

方廣寺

秀吉疾篤し

【沖子】秀頼

諸雄忿諍す

家康劔を按じて叱す

一步も譲らず。譴怒に觸ると雖、避けざる所なり」と。頃くして、秀吉復出で、他事を談じて罷む。諸將、みな内大臣は直言を善くすと謂へり。

秀家等、再朝鮮を伐ち、明人と戦ひて決せず。外師の興りてより此に至るまで、前後七年なり、丁壯は軍旅に苦しみ、老弱は轉漕に罷る。秀吉も亦、自ら倦み、乃軍事を度外に置き、獨秀頼及び諸姫侍と、日に宴樂を爲し、奢侈を窮め極し、媼も快を一時に取る。性、素より土木を喜む。天下未だ定まらざる時に、方廣寺を建て、大佛を造る。材を諸道に索め、費、鉅萬金を累ぬ。震に遇ひて崩る。是の年五月、復更に之を造らんと欲し、疾に罹りて止む。

是に於て、豊臣氏の紀綱、寢く弛む。其中軍の將士、諸牧伯と互に相離視す。

六月、秀吉疾篤し。奉行淺野彈正少弼、石田三成、増田長盛、長束正家、前田玄以を召して曰く、「聞くが如くば、諸侯、麾下と卻ありと。是れ大亂の本なり。宜しく相協和し、以て沖子を翼けしむべし」と。十六日、五人、乃大に内外の牧伯、將吏を會して旨を傳ふ。衆對へて曰く、「心を協せて嗣君を奉ずるは、則敢て命を奉ぜざらんや。私の憾に至りては、各由る所あり。輒聽從する能はず」と。告諭すること再三。終に肯せず。秀吉乃内大臣を召し、之に告げて曰く、「願くは以て卿を煩はさん」と。内大臣乃出で、之を諭す。衆對ふること初の如し。内大臣色を作し聲を勵して曰く、「公等、已に心を協せて上を奉ぜんと言ふ。心を協せて上を奉ずる者、猶私怨を挾むか。果して私怨を挾まば、是れ貳を懷くなり。安ぞ其れ上を奉ずるに在らんや」と。衆、屈服頓首して曰く、「唯々、謹みて命を奉ぜん」と。内大臣入りて報す。秀吉大に喜び、五人に命じて大に衆を饗せしむ。衆復坐位を争ひ、雜席して食ふ。酒行るに及びて皆次を離れて忿り諍ふ。中村一氏、生駒親正、旨を傳へて周旋すれども、定むる能はず。復入りて内大臣に告ぐ。内大臣復出で、跪き劔を按じて曰く、「公等、家康を賣るか。家康、公等の旨を以て太閤に報す。太閤乃喜ひて此饗を賜ふ。公等、猶尙此の如し。賣るに非ずして何ぞや。擧坐みな我が仇敵なり。我れ誓ひて一人を縱さず」と。因り

秀吉後事を
家康に托す

五大老、三
中老、五奉
行

水野勝成

秀吉薨す、
喪を秘す

【大故】秀吉
の死

て五人を顧み、趣して諸門を關さしむ。一坐、靈服し、敢て聲を出す莫し。淺野、中村、傍より之を慰藉し、衆をして罪を謝せしめ、更に獻酬し、歡を爲して罷む。明日、秀吉之を聞き、内大臣を召して曰く、「昔の事、古の名將と雖、これに過ぐる能はじ。卿の威信、素より衆に著るるに非ずば、則安ぞ能く此の如くならんや」と。涕を垂れて之を謝す。

秀吉、已に内難を憂へ、又外征を悔い、師を班して國を鎮めんと欲す。而れども兵連に解けず。又、明、朝鮮の喪に乗じて來り侵さんことを恐れ、計出づる所を知らず。七月、内大臣を召し、盡く後事を以て、之に委託して曰く、「秀頼の當に立つべきと否とは、一に卿の心に在り」と。内大臣、敢て當らずと謝す。秀吉曰く、「天下、卿の如く者莫し。故に卿を煩さざるを得ず」と。内大臣固く辭して退く。秀吉、石田三成、増田長盛を召して之を議す。二人素より異謀あり。因りて大に諫む、「以爲ふに、專徳川に託する勿れ」と。秀吉之を然りとし、乃五大老、三中老、五奉行を定め、前田利家をして秀頼を輔けしむ。已にして伏見の城下、一夕、大に擾る。井伊直政、藤杜より馳せ至る。内大臣、直政と天野康景とに、出で、之を誦はしむ。還り報じて曰く、「石田、大野氏に甲あり。諸第相告げて自備ふ。故に此の騷擾を致すなり」と。已にして事定まる。人其故を知る者莫し。水野勝成、父忠重に逐はれ、西國に歴遊す。警を聞きて來り歸し、自効さんと請ふ。内大臣及び、忠重に諭して之を宥さしむ。八月五日、秀吉、内大臣を召して曰く、「卿、固辭するを以て、列老、奉行を置く。今則之を悔ゆ。而して令已に布けり。然りと雖、雄武強任、誰か卿に若く者ぞ。卿、當に諸人に冠して軍國の事を統ぶべし」と。乃諸將の盟誓を要し、旬餘にして城中に薨す。彈正少弼石田三成に遺命して、秘して喪を發せざらしむ。三成、素より少弼の内大臣に善きを惡み、乃之を結きて曰く、「喪を秘するに、當に計を以てすべし。吾れ子と魚を内府に貽り、以て外人に視さん」と。少弼之に従ふ。其明、内大臣、中納言を以て城に入りて疾を問ふ。途に三成に遇ふ。三成、人をして密に之に計せしむ。内大臣還り、嘆じて曰く、「治部は我に疎き者なり。猶大故を告ぐ。彈正何を以て我を外にするか。人心固より

外師還る

測り易からざるなり」と。即夜、世子に命じて行を治めしめ、旦日、江戸に遣歸し、以て本國を鎮せしむ。九月、少弼及び三成に命じ、遺令を以て那古耶に赴き、外師を班さしむ。徳永壽昌を遣して海を濟り、密に諸將に令せしむ。十月、訛言あり、「明、大舉して我が歸路を扼す」と。内大臣曰く、「我れ親往かすばある可らず」と。前田利家、疾に寝ね、之を聞きて曰く、「内府一たび動かば、則海内搖かん。我れ當に疾に興して肥前に往き、諸將を指揮すべし」と。衆皆之を止む。藤堂高虎、外事を習ふを以て之を遣らんと請ふ。内大臣曰く、「然り」と。乃高虎をして代り往かしむ。外師、已に大に克ちて還り、十一月、盡く伏見に至る。内大臣、諸老と俱に之を慰勞す。

前兵兒謠

衣至、肝袖至腕。腰間、秋水鐵可斷。人觸斬、人馬觸斬馬。
十八結、交健兒社。北客能來、何以酬。彈丸硝藥是、膳羞。
客猶不屬、後兵兒謠。好以寶刀、加渠頭。
蕉衫如雪、不受塵。長袖緩帶、學都人。怪來健兒語言好。
一操南音、官長嘖。蜂黃落蝶、粉褪。倡優巧鐵劍鈍。
以馬換妾、腓生肉。眉斧解剖、壯士腹。

書朱舜水楠公碑陰贊後

碑面題學延陵墓。碑陰字類多寶塔。忠孝日月詞感奮。
 頌贊非由臭味合。亡國之臣附驥尾。有脚東海不枉蹋。
 包胥淚盡和墨汁。扶桑萬紙空傳揚。回頭緬甸落日紫。
 應羨芳山延五紀。猶勝能書張瑞圖。會碑生祠媚閹奴。

大鹽士起索吾外史答以其佩刀

刀名工所造。陋撰不足以當之。慙悚之餘賦此奉謝。
 吾書三十餘萬字。博得君家兩尺鐵。廉明所佩可避妖。
 服之護身長。君刀疑經斬姦邪。魚腸紋雜血痕黓。
 吾書字々頗類此。此是千古英雄血。血有新陳用意同。
 素心相照兩氷雪。又如發硃附吾藏。紙未覆瓶情君閱。
 君觀吾心吾佩君心。百歲不蠹又不折。

改邦文日本外史卷之二十終

改邦文日本外史卷之二十一

徳川氏正記

徳川氏四

慶長四年 外征の功を論ず 島津義弘 三成、長盛の奸策

慶長四年正月、内大臣、伏見に在り。豊臣秀吉に代りて、權に天下の事を決す。大納言前田利家、中納言毛利輝元、中納言上杉景勝、參議浮田秀家、式部少輔中村一氏、雅樂頭生駒親正、帶刀堀尾吉晴、彈正少弼淺野某、治部少輔石田三成、右衛門尉増田長盛、大藏少輔長束正家、法印前田玄以と、俱に外征諸將の功を論じ、天朝に奏請す。島津義弘、我が國の兵を全くせし功最大なるを以て、參議に任じ、其子忠恒、左近衛少將に任じ、封四萬石を加へ、刀劍を賜ふ。其餘、賞を行ふこと差あり。豊臣秀吉の薨するや、嗣子秀頼、猶幼し。内外疑惧し、口耳相屬す。石田三成、増田長盛、相與に謀りて曰く、「徳川、前田と、心を協せて、政を出す。我が輩、徒に其の爲に驅役せらる。方今の計、二家を離すに若くはなし。二家已に離れば、乃以て逞しくすべし」と。二人乃相惡む者の爲して、長盛は我に事へ、三成は利家に事ふ。利家、嘗て内大臣を饗せんと欲す。期已に定る。長盛、遽に來り警めて曰く、「大納言將に公に利あらざらんとす」と。乃疾に託して餐を辭す。他日、長盛、利家に謂て曰く、「曩に流言あり。内府是を以て辭す。今事已に白なり。公復之を請へ」と。利家曰く、「前日の事、吾が辱しめらるゝこと已に甚し。再れ再辱を被るに堪へず」と。長盛固く請ひて曰く、「内府來らざるを悔ゆ。苟も之を請はゞ、必欣然

細川忠興

秀頼大阪に在り

三家私婚
京畿騒然

として来らん」と。利家之に従ふ。長盛、馳せて内大臣に見えて曰く、「利家、奸計既に成る。公憤みて往く勿れ」と。内大臣曰く、「吾れ再之を辱しむるに忍びず」と。期に及びて將に駕せんとす。長盛復至り、密移を袖より出して之を示す。内大臣、驚き怪しみ、乃事に託して往かず。利家慙憤す。細川忠興、利家と姻あり。利家、召して之に語りて曰く、「我れ衰老して人に侮らる。何の面目ありて世に立たんや。吾れ將に國に歸らんとするなり」と。忠興曰く、「公の憤、固に宜なり。然れども遺命を廢し、冲子を棄て、自引きて國に之くは、是れ自威權を捨て、噴を人に取るなり」と。利家乃止む。而して終に我と隙あり。是の月、利家、秀頼を奉じ、徙りて大阪に居る。内大臣、之を送りて歸り、舟平瀨に至りて、岸上兵あるを見る。衆、色を失ふ。以爲へらく、「大阪の人追躡するなり」と。或人曰く、「井伊の兵來り迎ふるに非ざるを得んや」と。近づけば則果して然り。乃殿せしめて歸る。是の時に當りて、天下の牧長豪傑、人々自立の志あり。而して槩皆徳川氏を思み、相與に之を圖らんと欲す。一日、内大臣、散樂を有馬氏に觀る。井伊直政來り、間を請ひて曰く、「今日、外間騷擾す。變あらんを恐る。宜しく未だ昏れざるに及びて還るべし」と。藤堂高虎、繼ぎ至り、密語之を久しくし、共に扶けて出づ。關東の士民の京畿に在る者、更相告げて曰く、「我が君、將に難あらんとす。盍ぞ往きて之を護らざる」と。來りて第を護る者數百人なり。是より先、伊達政宗は、上總介忠輝を以て女婿と爲し、福島正則は、松平康元の女を以て婦と爲し、蜂須賀至鎮は、自小笠原秀政の女を娶る。康元は、内大臣の異父弟の子なり。秀政は、故世子信康の婿なり。諸老奉行、人をして三家の私に婚して遺令に背くを護めしむ。三家、分疏して服せず。諸老、奉行、遂に連署して來り請めて、政柄を解かしむ。内大臣曰く、「我れ固より政を執るを欲せざるなり。諸公我を厭ふ。我れ當に引き去るべし」と。是に於て、我が諸將、前日の變故の皆蹤跡あるを以て、之を反詰す。京畿騒然たり。

黒田孝高、其子長政、福島正則、池田輝政、藤堂高虎、細川忠興、京極高次、織田長益、加藤清正、加藤嘉

康政の謀

【黨人】三成
長盛等

前田利長

忠興利家を諫む

明、蜂須賀家政、森忠政、有馬則頼、金森長近、山岡景友、新莊直親等、獨心を我に歸し、毎夜來り護りて事を議す。或は京極氏の天津城に入るを勸む。内大臣、肯せずして曰く、「是の際に當りて、一步を進めば勢を得、一步を退げば勢を失ふ」と。乃止む。榊原康政、更番を以て勢田に至り、警を聞き、疾く馳せて天津に至り、故に止りて進まず。關を塞ぎて行人を塞む。行人嗔咽す。乃關を開きて之を通す。京師以て東兵大に至ると爲す。黨人の計、故を以て大に沮す。本多正信、伊奈忠次等、適税を監して西上し、亦程を兼ねて至る。内大臣、正信を延きて謀を問ひ、且曰く、「三中老、調停して盟を尋ぎ、我を大阪に要す。往く可きや否や」と。正信曰く、「不可なり」と。因りて問ひて曰く、「淺野彈正は近ごろ何の状爲るや」と。曰く、「亦平生に負きて、久しく此に來らず」と。正信即淺野氏に赴き、與偕に來る。内大臣讓めて曰く、「吾れ子と親昵すること日久し。太閤の喪、治部猶我に計す。子何ぞ獨我を欺くや」と。彈正少弼、始めて三成の賣る所なるを知り、流涕して陳謝す。是より益心を傾く。而して三成等、務めて前田氏を推戴し、徳川氏を除かんことを勸む。利家の嗣子利長、密に之を細川忠興に告ぐ。忠興曰く、「吁、子も亦治部の爲に欺かるなり」と。利長色變ず。忠興曰く、「子、我に告ぐるを侮ゆるか。前田氏の存亡、將に此に決せんとす。敢て忠謀せずばあらず。生死必子と俱にせん。子、憂ふる勿れ」と。利長、大に悟りて曰く、「子、微りせば、我れ殆ど免れじ。請ふ、子を煩さん。家君を諫めよ」と。忠興、乃入りて利家を諫めて曰く、「治部、公を推戴す。公、其情を知るか。彼れ事權を專にせんと欲す。而して内府と公とを憚る。乃公の力を假りて徳川氏を除かんと欲す。今日徳川を除かば、明日前田に及ばん。公、獨此に暗きか。公、其姦を稔知せよ。今乃其計中に在りて自知らざるなり。夫れ内府の雄資智略、諸將、其右に出づる者なし。彼の輩、百計之を圖るとも、適に竟に自禍せんのみ。公、彼の輩と共に其禍を被らんよりは、自内府に結びて、子孫の計を爲すに若かざるなり」と。利家領きて曰く、「然り。唯子、我が爲に之を計れ」と。忠興、即夜、伏見に赴き、曉の比、來りて我が第に入り、具に告ぐるに故を以てす。

忠興兩府に往來す
利家康に面す

三成の流言

家康大阪に到る
藤堂高虎
家康、利家前田利政諸奉行の密

是より忠興、數兩府に往來す。而して外人の指目を憚り、蓑笠を被りて自舟を操る。時に利家疾あり。忠興淺野、加藤等と、俱に其疾を力めて伏見に赴き、内大臣に面せん事を勸む。利家之に従ふ。内大臣、輕舟に乗り、迎へて第に入り、手づから褥を設けて坐せしむ。利家、悉く諸奉行の密謀を語り、我に勸めて向島の第に徙り、以て覬覦を絶たしむ。曰く、「吾れ百歳の後、公、幸に善く我が兒を視よ」と。内大臣許諾す。利家喜ひて去る。忠興、又我に請ひて往きて之に答せしむ。内大臣之を許す。

三月、内大臣、大阪に赴かんと欲す。三成、故に流言を縦ちて其行を沮み、利家をして之を忿らしめんと欲す。福島正則、又諫めて曰く、「大阪は姦人の巢窟たり。輕しく入る可からず」と。内大臣曰く、「亞相來る答せざる可けんや。吾れ警備あり。奴輩、何ぞ、能く爲さん」と。十一日遂に行き、少將秀康留守す。加藤、池田、細川、福島、黒田、淺野の諸將、皆從ひ、弓銃を以て水陸を護る。細川忠興、利家と姻あるを以て、又藤孝を遣し、舟中に侍せしむ。其實は之を質とするなり。舟、大阪に至る。岸に女輿あり。一人、輿中より出づ。之を視れば、藤堂高虎なり。進みて曰く、「道路變あるを恐る。宜しく此に御して行くべし」と。内大臣之に従ふ。高虎の中島の第に入り、終に利家に詣る。利家喜ひ、扶けられて起き、迎へ謝す。利家の次子利政、異心あり。兄利長の爲に制せられて止む。饗に及びて、諸將皆侍す。利政、利双を佩びて將に内大臣に近づかんとす。利家之を目攝す、利政敢て發せず。其夜、内大臣復高虎の第に宿る。諸奉行小西行長の宅に會す。獨、彈正、少弼、我が館伴たるを以て辭して往かず。三成、議して曰く、「内府、亞相、復協へり。我が輩、將に嚙類なからんとす。之を爲す如何」と。行長、策を建てて曰く、「吾れ請ふ、今夜、藤堂氏を襲ひ、火を縱ちて之を攻めん。不らずば則ち之を歸途に要して以て志を獲べし」と。前田玄以、素より心を我に歸す。因りて之を沮みて曰く、「嗣君未だ長せず。我が輩、諸老の令を受くるは、固より其分なり。今私に兵を動かし、天下の約に背かば、縱使、志を得とも、豈能く晏然たらんや。且諸宿將、みな内府を護る。輒く志を得可からず。交戦決せずして、結城秀康、東兵を以て來り援はば、必大に敗れん」と。増田長盛

忠興と三成

向島を修築す

七將三成を誅せんとす

も亦、之を然りとす。長束正家曰く、「且之を謀せん」と。謀還り報じて曰く、「中島、炬を列ぬること星の如し」と。乃止む。明日、内大臣、北に還る。榊原康政、前驅となり、井伊直政、後扨となり、遂に伏見の第に歸る。

三成等、悔恨し、又襲ひて我が第を撃たんと謀る。以爲へらく、「忠興を捜くに非ずば、則事成る可からざるなり」と。乃玄以に因りて忠興を請じ、略はすに大封を以てす。忠興、密に之を諸將に告ぐ。諸將曰く、「且伴り聽き、以て其謀を探るべし」と。忠興、乃三成と、長束氏に會し、三成に問ひて曰く、「内府を除かんと欲するに、何の策か有る」と。三成曰く、「我れ其邸を謀するに、邸兵僅に二千。邸側の宮部氏、福原氏は皆我が黨なり。而して其宅頗る高し。我れ衆を率て之に據り、臨みて火箭を放たん。其火を避くるを俟ちて迫るに鳥銃を以てし、以て之を盛にすべし」と。其期を問ふ。曰く、「今夜なり」と。忠興之を憂ふ。而れども辭色を動かさず。徐に曰く、「内府、素より其兵を訓練す。二千人、死を決して出で闘はば、公必しも之に勝つことを保せんや。且火箭を放つに、何ぞ地の高卑を論ぜん。彼れ苟も謀して我が計を知らば、則我れ能く之を放つも、彼も亦能く之を放たん。是れ策の得たる者に非ざるなり。我れ一策あり。我れ吾が兵二千を以て、子が爲に先鋒と爲り、突入して死戦せん。而して公等、大衆を以て其弊を承ければ、之に克たんこと必せり」と。三成等肯かず。忠興、力め争ふ。議未だ決せずして、天明く。忠興走りて之を加藤清正に告げ、並に馳せ來りて白す。内大臣曰く、「吾も亦、之を覺らざるに非ざるなり。奴輩、來り攻めば則吾れ自第を焚き、東北の廣地に出で、戦を決せんのみ」と。忠興等、促して向島に徙らしむ。向島は、伏見の故城址なり。乃之を修築し、二十六日を以てこれに徙り居る。郡奉行、事泄れたるを知り、皆僧服を着て豊後橋に要謁し、以て其罪を謝す。物情稍定る。

池田、黒田、淺野、細川、福島、兩加藤の七將、皆三成と仇隙あり。是に於て、遂に連署して之を誅せんと請ふ。内大臣許さず。時に三成、利家に依る。七將遂に大阪に赴きて之を請ふ。利家も亦許さず。閏月、利

利家卒す

治部命を乞ふ
本多正信

家康七將を諭す

家康三成を諭す

上杉景勝

家病みて卒す。七將、三成の出づるを伺ひ、之を要撃せんと議す。毛利、上杉、浮田、島津、佐竹の五家、素より三成と善し。三成、是に於て、乃聞行して、浮田氏の備前島の第に入る。而して五家の兵を以て自衛る。秀吉の在時、佐竹義宣、嘗て三成に略ひて、其國を兼并するを得て、深く之を徳とす。義宣、是の時、伏見に在り。三成の急を聞き、馳せて之に見えて曰く、「衆の怒、犯す可らず。能く之を制する者は、獨徳川翁なり。治部、寧自これに歸せよ」と。乃女裝して往き、自入りて命を乞ふ。内大臣、之を許す。七將追ひ至り、夜、兵を各第に治めて、固くこれを請ふ。内大臣、心に自之を計り、寢て寐ねす。本多正信入りて、諷して曰く、「何ぞ亟に寢に就くや」と。内大臣、中より呼びて誰なるかを問ふ。曰く、「正信事を稟す」と。曰く、「稟す所は何事ぞ」と。正信曰く、「治部を何と謂ふか」と。内大臣曰く、「吾れ方に之を思ふ」と。正信曰く、「主公、己に之を思ふ。思へば則ちこれを得ん。臣必しも言はざるなり」と。趨りて出づ。旦日、内大臣、伊奈圖書をして、出で、七將を諭さしめて曰く、「治部窮し來りて我に投ず。我れ之を諸君に與ふるに忍びず。且諸君、私の憾を以て重臣を戮せんと欲す。吾れ何ぞ之を許すを得んや。諸君、必其意を逞しくせんことを求めば、吾れ當に治部を助けて諸君と決戦すべし」と。七將、大に驚き、勉めて之に従ふ。乃中村一氏、酒井重忠をして、三成を諭さしめて曰く、「衆情恟恟たり。子、蓋そ職を解きて國に就かざる。是れ幼主の爲に躬を屈して、國家の亂を靖んするなり」と。三成謝して曰く、「當に熱慮して答ふべし」と。三成乃潛に使を大坂に馳せて、之を上杉景勝に謀る。景勝、大に諸藩主を會して之を議し、謀りて曰く、「治部宜しく命を聽きて邑に就き、退きて世變を伺ひ、然して後、上杉、佐竹、皆藩に歸りて兵を聚め、復來觀せず、兵を八州に下して、其根本を撼かさば、則ち内府必自將として赴き討たん。毛利、浮田以下、乃其後に群起し、内府を裏みて東西より之を撃たば、從征の諸將、質を大坂に置く、必此を棄て、彼に黨せざらん。内府、孤立して、腹背に敵を受けば、勇智ありと雖、復施す所なからん。竟に寤覺して降を乞はん。天下の事、皆圖る可きな

三成、澤山に就く
家康伏見に
諸將國に就

三成、彈正
等を護す

り」と。乃使者に還りて、密に之を三成に報せしむ。七日、三成、命を聽き、十一日、其邑澤山に就く。内大臣、七將の之を要撃せんことを慮り、少將秀康をして之を護送せしむ。七將發する能はず。三成、既に擯けられて、諸奉行、皆自安せず。三中老に因りて、内大臣の伏見城に入りて、京畿を鎮せん事を請ふ。之を許す。六月十三日、向島よりこれに徙る。諸藩主、皆來り賀す。威望益重し。七月、諸奉行に命じて、征韓の諸將をして皆罷めて國に就かしむ。上杉景勝、請ひて曰く、「去歲、封を徙され、未だ政を施すに及はず。奥地の服し難きは、君の悉しき所なり。請ふ、一たび往きてこれを措置せん」と。佐竹義宣、請ひて曰く、「統内に寇起る。請ふ、往きて之を定めん」と。前田利長も亦、封を襲きて後、未だ國政を視ざるを以て、調して歸る。皆之を許す。是に於て、前田氏は加賀に歸り、佐竹氏は常陸に歸り、上杉氏は陸奥に歸り、毛利氏は安藝に歸り、浮田氏は備前に歸り、而して黒田氏は豊前に歸り、加藤氏は肥後に歸り、細川氏は丹後に歸る。其餘の諸將、皆國に就く。是の歳春、島津氏の重臣、伊集院忠棟、罪あり。島津忠恒、之を伏見の邸に誅す。衆其擅殺を尤む。忠恒懼れ、高雄に屏居して、罪を俟つ。内大臣、伊奈圖書を遣し、兵數十を率ひ、迎へて其邸に還らしむ。忠棟の子久直、國に在りて兵を擧ぐと聞き、忠恒をして歸りて之を討たしむ。是に至りて、又山口直友を遣して之を勞ひ、贈るに衣物を以てす。尋いで寺澤廣孝を遣し、諭して久直を降す。八月、内大臣、京師に入朝す。九月七日、大阪に赴き、重陽節を以て秀頼に見えんと欲す。三成、澤山に在りて之を聞き、遂に計を増田長盛、長東正家に授く。長盛、正家、乃館に就き、内大臣に告げて曰く、「加賀黃門、淺野彈正と、謀を通じて曰く、「内府城に入らば、則ち彈正伴りて之と博し、囚りて其手を拉り、大野治長、土方雄久をして、之を刺せしめんとす」と。内大臣、從者と議す。本多正信曰く、「宜しく疾と稱して、入らずして兵を伏見に徵し、以て歸るべし」と。井伊直政、本多忠勝、榊原康政曰く、「入らずば則ち曲我に在り。臣等、これに従ひ、死を以て之を衛らん」と。内大臣之を兩ながら用ゐ、乃兵を徵す。

家康大阪の
西城に入る

家康、前田
氏を撃つ

利長の母を
質とす
秀家四將を
誅せんとす

島勝猛

慶長五年
【牙騎】王將
の乗馬

兵來る者三千八百なり。九日、率て城に入り、堂に升る。從ひて升る者十餘人。衛士止めて納れざらんと欲す。直政、聲を厲して曰く、「内府戒心あり。關東の野人、復禮節を知らず」と。内大臣、入りて秀頼の母子に見ゆ。直政、忠勝、康政、障を隔て、座す。彈正少弼、讒言ありと聞き、疾と稱して出でず。内大臣中廚に至り、託言して曰く、「厨下の大紙燈は、東國に無き所なり。當に從者をして觀しむべし」と。酒井忠利出で、從兵を招き、護衛して館に歸る。内大臣曰く、「沖子此に在り。而して我れ伏見に居る。其勢隔絶す。姦の入り易き所以なり。吾れ將に徙り居て之と密邇せんとす」と。長盛、正家、西城を以て之を奉せんと請ふ。秀頼の嫡母北廳、時に來りて西城に寓す。是に於て、去りて京師に歸る。内大臣、代りてこれに入り、秀康をして伏見を留守せしむ。

十月、正信と議して、治長、雄久を放ち、彈正少弼をして國に就かしむ。敢て就かず。武藏の府中に赴き、以て其子に依る。内大臣、遂に令を下して前田氏を撃つ。前田氏、金澤を治む。丹羽長重請ひて曰く、「臣が呂小松は、金澤と鄰す。北伐の役、願くは先鋒と爲らん」と。許して之を遣す。細川忠興、聞きて來り見え、利長の爲に冤を白す。因りて書を加賀に馳せ、其老横山長知をして來り謝せしむ。内大臣、命じて利長の母を以て質と爲さしむ。利長命を聽く。

是の月、浮田秀家の將阪崎、戸川、岡、花房の四人、計りて駿臣長船某を攻む。秀家、四人を誅せんと欲す。内大臣、之を制止し、四人を以て吏に附す。時に關東喧傳す、「上杉氏、異圖あり。石田氏も亦、四方有名の士を招く」と。島勝猛と云ふ者、嘗て甲斐の山縣氏に仕へ、稱して兵を知ると爲す。三成、延きて謀主と爲し、守備を修め繕ふ。内大臣、人をしに之を詰らしむ。答へて曰く、「澤山は衢路に當る。其荒廢修めずばある可からず」と。

五年正月、内大臣、大阪に在りて諸將の參賀を受く。二月、中納言の牙騎、鼠ありて其馬尾に巢く。人之を異しむ。或人、文治の故事を引きて亂兆と爲す。

景勝叛形あり
直江兼續

堀直政

家康大阪を
發す
鳥居元忠伏
見に留守た
り

【四將】元忠
近正、家長、
家忠

【十二歳】元
忠を云ふ

是の月、内大臣、増田長盛、大谷吉隆をして、景勝の入觀を促さしむ。景勝、疾と稱して來らず。而して東北の諸國争ひて變を上り、景勝叛形ありと告ぐ。乃伊奈圖書をして、再往きて之を詰らしむ。景勝、枝梧して服せず。四月、復僧承兌をして書を以て景勝の老直江兼續を諭さしむ。五月、兼續、復書す。書辭悖慢なり。内大臣、大に怒り、遂に親將として東征せんと欲す。中老、奉行、並に將に命じて代り往かしめんことを請ふ。聽さず。乃大に軍事を議し、東國の地圖を按へ、諸將の嚮ふ所を部署す。伊達氏は信夫より、佐竹氏は仙道より、最上氏は米澤より、前田、堀、村上、溝口氏は津川より、自餘の侯伯は内大臣に從ひて、白河より進む。堀氏の老堀直政、進言して曰く、「白河の道は絶險なり。所謂、一夫關に當れば、千夫過ぎざる者。恐らくは進む難からん。宜しく之が計を爲すべし」と。内大臣曰く、「彼れ一鎗を執れば、我も亦鎗を執る。何の難きことか之有らん」と。乃令を諸侯伯に下し、兵を治め、來月を以て江戸に會せしむ。石田三成、伴りて自從はんと請ふ。許さず。乃前田氏の質を江戸に徙し、保科正直の女を養ひて黒田長政に妻す。

十五日、秀頼來りて祖す。

明日、内大臣、佐野正吉を西城に留めて、自伏見に至り、鳥居元忠を以て留守と爲し、松平近正、内藤家長、松平家忠を以て、之を副けしむ。元忠、嘗て三形原の役に從ひ、股を傷けて跛たり。老に及びて、益步履に難む。是に於て、堂上に杖を用ゐることを聽さる。翌夜、入りて謝して曰く、「留守の任は、臣と近正とにて足れり。會津の事、勢重大なり。家長、家忠、みな宜しく扈從すべし」と。内大臣曰く、「京畿變なきを保せず。四將すら吾れ猶以て少しと爲す」と。元忠曰く、「變無くば則已む。苟も變あらば、則此城先兵を被らんと。而して四に應援なし。臣當に死して國に報すべし。他の將帥は、宜しく留めて敵に貽るべからざるなり」と。内大臣、之を慰勞して曰く、「吾れ童時、駿河に質たり。汝、參河より來り侍す。蓋し十二歳なり。今何ぞ老いたるや」と。留りて與に談る。夜已に三鼓なり。元忠曰く、「明朝は早發なり。君少しく寢に就け」と。

家康、元忠を勞りて別

中村一榮、家康江戸に到る

軍令十三條、大谷吉隆

【中手】重手、【國手】名手不可なる者

因りて辭して曰く、臣、此を以て永訣と爲るやも、亦知る可らざるなり」と。將に起たんとす。足益痺る。内大臣、侍者に命じて扶け出さしめ、目送し涕を攪りて入る。且日、駕、伏見を發す。譜第の將帥、在る者盡く従ふ。大津に至り、京極高次に見えて物を賜ひ、其諸臣に及ぶ。其弟高知を以て行き、石部に及ぶ。水口の城主長東正家、之を饗せんと請ふ。會其異謀を告ぐる者あり。乃婦人の輿に乗りて、夜、城下を過ぐ。正家驚き、土山に追及して罪を謝す。内大臣、濫言して遣歸す。諸侯伯相踵ぎて來り従ひ、兵五萬を得たり。沿道の將士、次を以て之を饗す。駿府に至る。府主中村一氏、篤疾にて死に瀕す。其子一榮をして、軍に従はしむ。軍、箱根に至る。中納言、大久保忠鄰、本多正信をして、來り迎へしむ。七月二日、江戸に至る。七日、大に内外の諸將を饗し、士馬を休むること數日。軍令十三條を下し、前部をして先發せしむ。

三成、内大臣の東するを候ひて曰く、吾が計申れり」と。乃事を舉げんと議す。會大谷吉隆、其邑敦賀より將に東師に會せんとす。三成、其老榎原某をして之を垂井に要せしむ。吉隆、問ひて其故を知り、榎原に語りて曰く、治部才ありと雖、而も衆の喜ぶ所ならず。今大事を舉げば、誠に能く輝元、秀家を推して自之に下り、其軍を合せて景勝に應ぜば、或は萬一を微幸すべし。然りと雖、我が軍未だ合はずして、内府旆を反さば、則嚮ふ所、魚潰せん。予將に此を以て治部を諫めんとするなり」と。乃澤山に至り、三成に問ひて曰く、子、何を以て内府に克つか」と。三成曰く、西道の豪傑、皆嗣君の令に應ず。當に日ならずして大阪に會すべし。而して東北の諸國、概、景勝に通ず。景勝、内府を廢ぐこと數月にして、我れ西の諸侯を舉げ、長驅して箱根を踰え、一舉にして克つ可し。是れ諸老の議を定めたる所なり」と。吉隆曰く、是も善計と謂ふ可し。而れども吾れ、其中るを保せざるなり。子、獨夫の突棋する者を見ずや。中手相對せば、算の成る者勝つ。即し國手に遇へば、其爲す所みな我が意表に出づ。内府は國棋なり、吾れ其子の意表に出でんことを恐るゝなり。且、子の事を舉ぐるに、不可なる者五あり。内府は少小より、武田、北條の諸豪と角べ、兵

立花宗茂、小野和泉、立花増時、清正と孝高

機に老す。故太閤の英略を以てす。終にこれに加ふる能はず。況や今人に於てをや。其不可なる一なり。内府は國富みて兵強し。諸大國の較ぶべき者なし。其不可なる二なり。内府は資望、諸侯に重し。而して子は、卑位微力を以て事を首む。其不可なる三なり。内府は熊虎の將多し。在昔、織田右府、諸家の將帥を選み、其像を圖繪す。時に徳川氏は參河一國を有つ。而して圖に上る者十九人、今又其幾倍なるを知らず。我が將士に之に類する者あらんや。其不可なる四なり。徳川氏の士を撫すること一日に非ざるなり。部屬の精銳、義、國と終始する者、數ふるに勝ふ可からず。即事に死する有れば、其孤を襁褓に祿す。士の親附すること膠漆の如く然り。我れ乃瓦合の師を以て之に抗す。其不可なる五なり。五の不可あり。子、必これを止めよ」と。三成曰く、我れ已に約を定む。其れ止む可けんや。且諸大國みな内府を仇とす。内府畏るゝに足らざるなり」と。吉隆、大息して曰く、呵、子にして此謀あり。盍ぞ蚤く我に告げざるや。我れ内府を送るに託して、兵を率ゐて之に従ひ、長東大藏と之を夾み撃たば、一撃にして獲べし。今已に東せり。是れ虎を放ちて山に還せるなり」と。乃辭して出づ。既にして之を棄つるに忍びず。遂に還りて其謀を佐け、與俱に大阪に至り、書を遠近に移し、内大臣は秀頼に不利なりと誣ひ、西の諸侯の江戸に赴く者を抑留す。立花宗茂、柳川に在りて、大阪の檄を得たり。其老小野某曰く、内府、兵を握ると雖、西軍の衆に較ぶる能はず。前跡後窺、箱根の險を保守するに過ぎじ。而して天下みな豊臣氏に歸せん。速に大阪に就くに若かず」と。衆皆之を是とす。立花増時曰く、公等の言ふ所は皆其形なり。吾れ聞く、智將は無形に勝つと。内府の東する、必豫め西の變あるを知らん。變を聞く日、即軍を還さん。且黒田孝高、加藤清正、我が近地に在り。而して素より諸奉行と善からず。必内府に應せん。我れ宜しく之と俱に進退すべし」と。宗茂終に小野の言ふ所に従ふ。孝高、清正、果して大阪の徵に従はず。曰く、三成、口を幼主に藉り、以て私權を樹つ。與す可らざるなり」と。乃島津義弘に勸めて、東軍に歸せしめんとす。而して三成、急に義弘を促す。義弘終に西軍に應ず。

小早川秀秋

孝高、清正、又小早川秀秋を諫す。秀秋、嘗て三成の爲に讒せられ、罪を秀吉に獲たり。内大臣、之を救ひしを以て、乃、死るゝことを得たり。常に報効を思ふ。其従母、北廳氏、又内府に負く勿れと戒む。而して諸奉行、陽に之を推奉す。秀秋も亦、陽に之に應ず。

細川氏の室

三成、議して諸將の孥を城内に收めて質と爲さんとし、兵を諸邸に遣して之を取る。池田輝政の妻は、内大臣の女たり。加藤清正、水野忠重の女を娶る。黒田長政の妻と、並に内大臣の養女たり。其族人の留守する者、皆計を以て之を脱れしむ。細川忠興の妻明智氏、其婦前田氏をして先づ遁れしむ。而して圍已に合す。乃、令を下して、鬪を禁じ、火を縦ちて自裁す。三成、懼れて兵を敢め、人をして西城に入りて、佐野正吉を諫さしむ。十四日、正吉、諸姫侍を出し、自伏見に奔る。毛利輝元、入りて西城に居る。

西軍東下す

【三將】近正家長、家忠

元忠變を關東に告ぐ

是に於て、侯伯の大阪に會する者四十餘人。應援を爲す者三十六國。乃、議して軍を引きて東下す。増田長盛をして使を伏見に遣し、鳥居元忠に諫さしめて曰く、「大兵東下し、將に先伏見城を攻めんとす。城は本豊臣氏の有なり。子、棄て、東するとも、誰か誹議するを得ん。吾れ内府の眷顧を受け、又子と親善なり。故に相告ぐ。子、速に計を決せよ」と。元忠、三將と答へて曰く、「我れ君命を受けて守るを知る。他人の令を聽きて走るを知らず。足下、誠に寡君の顧を念はば、則當に勉勵せらるべし。今乃、示すに走路を以てす。殊に望む所に非ず。徳川氏、人に乏しからず。而るに我が輩、特に此任を受く。固より志を死に決せり。百萬の敵ありと雖、敢て逃れ避けざるなり。請ふ、速に來りて我鋒を試よ。使者再至らば、刀有るのみ」と。乃、使を關東に馳せて變事を告ぐ。

上林政重

大阪の兵、田邊を攻む【小山】下野

井伊直政進言

諸侯を小山に會す

福島正則

「我れ日に大阪を棄てしは、諸姫の故を以てのみ。我れ將に此に死して、我が志を明にせんとす」と。乃、之を納る。茶商上林政重、素より我が眷顧を受く。亦請ひて城に入り、茶筌を以て號と爲す。秀秋、義弘、款を元忠に送り、城に入りて俱に守らんと請ふ。元忠納れず。諸軍乃、城を圍む。松平家忠、出で戦へども利あらず。乃、兵を收めて固く守る。大阪の兵、乃、別に細川藤孝を田邊に攻む。伏見の圍を受くる前日、中納言、江戸を發し、其明日、内大臣、繼ぎて發す。行くこと四日にして小山に至る。而して伏見の使者至り、内外大に驚く。中納言は宇都宮より還り、少將秀康は結城より來る。親信の將士、皆會す。本多正信曰く、「從征の諸侯、其質盡く大阪に在り。必我が用を爲さじ。今の計を爲さんには、宜しく盡く之を罷め歸して、獨諸舊臣と四疆を固く守るべし」と。衆多く之を然りとす。井伊直政進みて曰く、「徳川氏の天下を取るは、正に今日に在り。臣聞く、「天の與を取らずば、反りて其殃を受く」と。蓋ぞ速に大旗を反して群雄を掃蕩せざる。區々として一隅を保つは、臣の知らざる所なり」と。色を作して出づ。秀康曰く、「直政の言是なり。宜しく一の要將を留め、軍を擧げて西上すべし」と。内大臣曰く、「然りと。秀康をして出で、直政を迎へ、入りて前議を畢へしむ。且日、令を下して盡く諸侯を小山に會す。」

【滿酌】西征の議決
徳永壽昌

馬【驪馬】栗毛
馬【驪馬】黒毛

留守の任を
擇ぶ

秀康宇都宮
佐竹義宣

せんか 抑西を先にせんか」と。諸將答へて曰く、「西なる哉」と。正則満を引きて長政に屬して曰く、「近日必三成 行長の頭を以て下物と爲さん」と。内大臣、出で、諸將に面謝し、諭して曰く、「公等、先行け。我も亦當に繼ぎて往くべし」と。因りて徳永壽昌に謂て曰く、「子、兵を知れり。今日の事、勝敗如何」と。壽永曰く、「諸侯伯擧りて足下に敵すと雖、而も各自威を争ひて號令一ならず、敗形已に觀る」と。内大臣曰く、「然り、凡勝敗の決は元帥に在り。我れ無似と雖、又事に更る者、諸君、苟も我が約束を聽かば、吾れ天下を平にすること、五六十日に出でじ」と。即、壽昌に驪馬を賜ひ、以て嚮導と爲し、正則に驪馬を賜ひ、以て先鋒と爲す。直政、忠勝、間を請ひて曰く、「諸客將の意、未だ測る可からざるなり。藉第他無からしむるも、此輩をして手を下ださしめ、以て功を成すを得ば、異日必曰はん、『我が輩、天下を取りて、徳川氏に授く』と。臣、主公の爲に之を差つ、請ふ、臣等を以て監軍に充てよ。當にこれを率ゐて往くべし」と。乃、之を許す。諸將、將に發せんとし、誓書を獻じて質を納る。是に於て、留守の任を擇ぶ。本多正信、秀康を薦む。乃召して之に命ず、秀康曰く、「兒應くは力を西討に効さん。何ぞ留守を爲さん」と。内大臣曰く、「汝、年少し、留守の任の重きを知らざるのみ。且諸侯、質を江戸に置く。汝に非ずば以て群心を撃ぐこと莫し」と。秀康猶肯せず。内大臣、叱して曰く、「汝、景勝を畏るゝか」と。秀康乃、頓首して曰く、「兒留らん。苟も兒に許すに大將を以てせば、則景勝をして白河を出づること一步ならしめず。大人復憂ふる勿れ」と。正信、進みて其膝を拊ちて曰く、「壯なる哉、郎君。大將爲るを論ずる無れ」と。内大臣、泣を濺ぎ、一甲を取りて之を授けて曰く、「是れ我が少小のとき被りしもの、未だ嘗て背を敵に視せず。今以て汝に附するなり」と。秀康拜辭し、萬人を以て宇都宮に陣す。東北の豪傑をして、皆其節度を受けしむ。初め佐竹義宣、兩端を顧望し、陰に梟將、車猛虎を遣し、兵を率ゐて景勝を救はしむ。西事起るに及びて、益、守備を修む。内大臣、人をして之を詰らしめて曰く、「子、四萬の衆を撫して、一人の東馳する者なし。我れ疑無き能はず。苟も他心を懷かずば、則速に會津を撃ち、日質を納れよ」と。答へて曰く、「僕の足

親吉、信一

政宗白石を
取る

大崎に歸る
最上義光
東國の處置
定る
小山を發す

下に於ける、素より怨仇なし。何ぞ他心あらんや。妻子の若きに至りては、盡く大阪に在れば、復納るべき者なし」と。諸將、之を討たんと請ふ。内大臣曰く、「且くこれを置け。上國は本なり。東部は末なり。苟も其本を覆さば、末は靡かざるを患へず」と。乃平岩親吉、松平信一をして、下總の諸豪を統べ、以て事に備へしむ。初め伊達政宗、大阪に在り。先馳せ歸りて會津に備へんと請ふ。内大臣笑ひて曰く、「子、又故態を破るか。事平がば、當に賞するに地を以てすべし。慎みて遽に戦ふ勿れ」と。政宗、國に歸り、即襲ひて白石を取る。内大臣、中澤主税をして、往きて西事を告げ、其去就を問はしむ。政宗、貳あらざるを誓ふ。主税曰く、「内府別命あり。公をして君臣熱議すること三日にして、後に之を告げしめよ」と。政宗、速に之を聞かんと請ふ。答へず。明日固く請ふ。乃答へて曰く、「内府、公に謂はしめて曰く、『吾れ兵を宇都宮に留めて西上す』。公、兵を收め退て其疆を守れ。彼れ其後を慮り、敢て我を尾せじ。我れ西軍に捷ちて、來り夾みて之を熾すべし」と。政宗曰く、「吾れ力戰して此城を取る。曷ぞ遽に之を棄つべけんや。宜しく勢に乗じて會津に入るべし」と。主税曰く、「是れ内府の丁寧にする所以なり。勝敗は必ず可からず。苟も敗衄あらば、適に敵勢を張り、四近皆叛き、翼して西に響はん。其鋒豈邊め易からんや。願くは之を熟思せよ。公、苟も聽從せば、寡君、更に密旨有り」と。政宗、沈思すること、之を久しくし、乃問て曰く、「密旨何如」と。主税、其耳に附し語りて曰く、「事平がば、會津百萬石を以て公に附せん」と。政宗、大に喜び、人をして送てて小山に至り、印信を乞はしめ、兵を收めて大崎に歸る。最上義光、素より内大臣を戴く。則首として會津を攻め、東陸の諸侯を率ゐて米澤口に臨む。堀直政、其子直寄、溝口、村上氏と、數越後の人の會津に應ずる者を撃つ。内大臣、命を下して、戦を禁ず。是に於て、東事の處置盡く定る。乃西征の諸將をして、二十八日を以て小山を發せしむ。是の時に當りて、天下の將士、東西に嚮背し、來往織るが如し。而して父子兄弟、兩地に分處する者、迭に危脆を懷き、訛言沸騰す。

黒田長政

山内一豊の室

一豊掛川城堀尾吉晴

東海道の諸將城を納る

東山道

【沼田】上野

内大臣、黒田長政を召し還さしめ、之に謂て曰く、「卿、正則の心を如何と謂ふか」と。答へて曰く、「臣、其
他なきを保す。即し他有らば、臣、之を控掣せん」と。乃長政に鎧冑を賜ひて之を遣る。
生駒一正、蜂須賀至鎮、九鬼守隆、其父皆西軍に在り。内大臣、之を留めて遣らす。已にして一正の父近正、
至鎮の父家政、皆款を送る。守隆も亦固く請ひて志摩に歸り、其父嘉隆を招く。乃皆之を遣る。
山内一豊の室、大阪より使を馳せて事を告ぐ。敵中を経るを以て、書を襲みて笠紉と爲す。一豊、之を
得て、解かずして獻す。内大臣、之を還して曰く、「猶觀たるが如し」と。一豊、又堀尾忠氏に諮りて曰く、
「子、何を以て志を表すか」と。忠氏曰く、「城を納れんと欲す」と。一豊曰く、「善し」と。乃自其掛川
城を納る。

是より先、忠氏の父吉晴、内大臣の命を受けて、濱松より越前に赴き、將に其別邑府中を守らんとす。途に
知る所の利井重茂と云ふ者に遇ひて、與俱に刈谷に至る。刈谷の城主水野忠重、之を襲う。卒に重茂の爲に
刺さる。吉晴、驚きて立所に重茂を斬る。重茂は石田氏の使ふ所なり。報、小山に至る。曰く、「吉晴二人を
殺す」と。内大臣憚はず。衆、忠氏を執へんと欲す。中納言曰く、「吾れ彼の父子の人と爲りを識る。是れ必
謬傳ならん」と。已にして實を得たり。忠重の子勝成を遣し、還りて其衆を撫せしむ。而して忠氏、首とし
て城を納るゝ議を發す。
一豊、既に掛川を納る。忠氏も亦濱松を納る。中村一榮は駿府を納れ、有馬豊氏は横須賀を納れ、池田輝政
は吉田を納れ、田中吉政は岡崎を納れ、福島正則は清洲を納る。乃諸舊臣をして、代りてこれを守らしむ
海道是に於て闢く。而して山道未だ闢けず。本多正信、策を建つ、木曾氏の遺臣山村良勝、千村吉晴を擢ぎ、
歸りて木曾を徇へ、盡く西吏を逐はしめ、遠山友次に命じて、東美濃を徇へ、其故邑を取らしめん」と。西
尾光教は美濃の兵を以て來り歸す。眞田昌幸、信濃の兵を以て叛き去る。昌幸の長子信幸、素より我が眷顧
を受く。固く之を諫む。昌幸之をして小山に赴かしめ、自次子幸村と西に走り、夜沼田を過ぐ。沼田は信幸

信幸の室本多氏

兵を二分し西上す

孝高秀秋を諭す

松平家忠、近正戦死す

内藤家長等戦死す

の邑なり。入りて其婦を見んと欲す。婦本多氏は、忠勝の女なり。辭して曰く、「良人同じく歸らず。是れ必
故あらん。妾取て私に門を開かず」と。其子を見んと欲す。曰く、「公、孫を抱かんと欲せば、何ぞ必しも今
日のみならん」と。遂に士卒に命じて陣に乘らしむ。昌幸強ふること能はず。去りて上田に歸り、兵を勵し
て我軍を竣つ。
我が軍を分ちて二と爲し、内大臣は海道よりし、中納言は山道よりす。令定りて未だ發せず。内大臣、乃淺
野、大野、土方の三人を赦す。土方雄久は前田利長と姻あるを以て、之を北陸に遣し、利長と兵を發して越
前を扼せしむ。富田知信、稻葉道通等をして、封伊勢に就き、各自守を爲さしむ。又間使を發して、書を黒
田孝高、加藤清正に予へ、遙に方略を授け、西海の將士を統べ、以て西軍の後を撓さしむ。謝して曰く、「僕
孝高、益書を以て小早川秀秋を諭し、款を我に歸せしむ。秀秋、伏見より書を小山に送り、謝して曰く、「僕
筑前を發して上國に來るは本將に、東征に會せんとす。圖らざりき、賊の爲に要せられて、共に伏見を攻め
んとは、勢、獨、異なる可からず。請ふ、大軍の來るを俟ちて戈を倒にして前罪を償はん」と。
初め西軍、伏見に向ひて、以爲へらく、當に一鼓して取るべきなりと。已にして我が諸將捍禦して屈せず。
敵益、大礮巨煩を用ゐ、攻撃すること十晝夜なり。城中、甲賀の人あり。長束正家の部兵、之と相識る。浮
田秀家、命じて書を城上に射て、其内應を誘はしむ。曰く、「聽かずば、則汝が孥を斃せん」と。
八月、朔、甲賀の人、火を松城に縱つ。西軍争ひ登る。秀秋、名越の堡に遁る。松平家忠、松平近正、力戦
して之に死す。島津義弘、西堡に逼る。内藤家長、門を開き、射て十餘人を虜し、創を被りて退き入る。書
を作り、一卒に附して曰く、「汝圍を潰して之を關東に達せよ」と。遂に火を縱ちて自殺す。其子小一郎、安
藤定次、佐野正吉、山岡甫安と、皆之に死す。外城、已に陥る。鳥居元忠の卒、其自殺を勸む。元忠曰く、
「未だし、敵一人を殺すも、亦國に報ゆるに非ずや」と。乃壁に嬰りて亂射す。殺傷過當す。敵、火箭を發
して樓櫓を焚く。隨ひて撲てば、隨ひて燎く。元忠、守る可からざるを知り、兵二百を麾きて門を開きて血

雑賀重次
鳥居元忠自
殺す

伏見の報、
江戸に至る

杉原親憲

采配

三成、昌幸
に書を致す

戦す。七合七克、敵衆群り進み、我が兵皆斃る。厮養の卒に至るまで戦死せざるは無し。元忠、薙刀を杖つき階に躍きて息ふ。敵人雑賀重次、進みて之を撃たんと欲す。元忠曰く、「吾は本城の大將なり。汝に首を授けん」と。重次、鎧を横たへ揮して曰く、「僕豈に敢てせんや。君請ふ、自刃せよ」と。元忠、乃重次をして己が鎧を釋かしめ、自腹を割きて死す。年六十二、重次、斃ねて之を裏み、諸將の首を併せて大阪に傳ふ。賈人某、元忠の首を竊みて之を知恩院に葬る。

是の日、我が前軍、江戸を發す。内大臣、小山を發し、四日、江戸に至り、伏見の報を得て哀慟す。戦死の者の子を恤み、皆封を襲かしむ。米澤口の諸侯、伏見陥りて、内大臣、江戸に歸ると聞かば、疑懼して引き還る。越後の諸侯も亦、兵を收めて自保つ。越後の人の景勝に應ずる者、亦收めて津川に入る。

上杉氏の將士、内大臣を尾撃せんと請ふ。景勝、敢て許さず。其將士、竊に相賀して曰く、「内府、西顧し、狼狽して回る。我が勝必せり」と。獨杉原親憲、憂色あり。曰く、「内府の軍を回すは已むを得ざるに非ざるなり。内府、若し勝たば則我が公、何を以て獨立せんや」と。初め内大臣の小山に赴くや、其軍塵を遣れ、中路に之を覺る。從騎馳せ歸りて之を取らんと欲す。内大臣曰く、「以て爲す無かれ」と。命じて道傍の竹篠を伐りて塵柄と爲し、紙を取りて手づから之を裂き、柄端に束ねて、試に之を揮ふこと再す。曰く、「景勝の如き者には、此を用ゐて足れり」と。小山を發するに及びて之を地に擲ちて曰く、「此も亦用ゐる母れ」と。

石田三成、書を眞田昌幸に遺りて、上國の捷を報知し、轉じて會津に致さしむ。且曰く、「内府、兵を分ちて管内十餘城を守り、上杉、佐竹と相持す。焉ぞ能く二十日の行程を歴て上國に來らんや。即し能く來らば、之を海道に邀へ撃ちて之を擒にせんのみ。子、善く山道を守らば、諸老、皆、子を賞するに信濃を以てせんと欲するなり」と。昌幸喜ひ、益兵を治む。三成等、又書を北陸に遺り、數前田利長を招く。利長應ぜず。大谷吉隆、京極高次、及び脇阪、朽木、赤坐、小川の諸將を導きて越前に入る。長束正家、毛利秀元、及び長曾我部等を導きて伊勢に入る。

織田秀信

三成大垣に
入る

家康の前軍
清洲に至る

富田知信

【二監】直政
忠勝
村越吉直

中納言織田秀信、美濃の岐阜に在り。東西要衝の地に介居す。西人誘ふに大封を以てす。秀信應ぜんと欲す。其臣諫めて曰く、「豊臣氏、嘗て我に負く。徳川氏、嘗て我を助く。宜しく今日を以て去就を決すべし」と。

前田玄以、京師の所司代たり。亦其東軍に歸するを教ふ。秀信聽かず。終に西人の爲に城を守る。氏家行廣は桑名を以てし、羽柴勝雅は神戸を以てし、九鬼嘉隆は鳥羽を以てし、岡部某は龜山を以てし、西羽長重は小松を以てし、青木一矩は北莊を以てし、山口正弘は大正寺を以てし、皆西軍に應ず。西軍總て十八萬騎、其伏見を圍みし者、引きて東下し、美濃に入り、大垣城を修めて根據と爲し、四近の將士をして犬山に砦し、以て岐阜を援けしむ。十一日、三成、先大垣に入りて諸將を迎ふ。

警聞の江戸に至るもの、項背相望む。内大臣曰く、「我れ己に之を處置せり」と。舉動常の如し。

十三日、我が監軍井伊直政、本多忠勝、前軍二十七將、騎卒五萬を引きて清洲に至る。大垣を距ること七里、相持して未だ戦はず。

毛利氏の前部、阿濃津城を攻む。城主富田知信、東命を受け固く守りて下らず。夜出で、敵將長束正家を撃ちて之を走らす。

我が將徳永壽昌、市橋長勝と福東、高須の二砦を攻めて之を取り、以て大垣、桑名の糧道を絶つ。而れども大垣の兵、日に加はる。我が軍流言あり、「前軍の諸將、敵に款を通ず」と。二監、數使を江戸に返し、内大臣の親出を促し、以て軍情を鎮めんと欲すれども命を獲ず。十九日、村越吉直、命を銜みて至る。二監、迎へて其旨を問ふ。吉直曰く、「疾と稱して出でざるのみ」と。二人大に驚きて曰く、「子、慎みて此命を將ふこと勿れ。果して將は、則諸將解體せん」と。因りて私に其命を改めて之を援く。且日、諸將を會して吉直を引く。吉直心竊に謂ふ、「二監の言ふ所、主公、豈知らざる有らんや。我れ素より率直を以て名あり。而して特に此命を受くるは、我が其言を枉げざるを取らなり」と。乃諸將に言て曰く、「内府言ふ、諸公久しく屯して良に苦しむ。吾れ寒疾あり。速に出づべからず」と。二監色を失ふ。諸將默然たり。加藤嘉明曰く、

東軍岐阜城を攻む
 淺野右近
 秀信降る
 正則輝政と功を争ふ
 犬山東軍に歸す

臣、命を聴けり」と。福島正則曰く、「何の謂ぞや」と。嘉明曰く、「吾が曹敵と壘を對して未だ嘗て出で戦はず。大旗の西上せざるも亦宜ならずや」と。正則掌を拍ちて曰く、「然り」と。衆、遂に進取を議す。正則曰く、「岐阜は兵衆くして、木曾川を阻つ。未だ攻め易からず。我れ犬山を攻むと聲言せば、則彼れ必兵を分ちて之を援けん。我れ則岐阜に逼らん。岐阜陥らば、則犬山は自潰えん」と。二監之に従ふ。織田秀信、果して兵を分ちて來り援ふ。二監、乃諸將を部署し、藤堂高虎、黒田長政等を留めて、大垣、犬山に備へ福島正則をして尾越川を涉り、其面に出で、池田輝政をして河田渡を亂りて其背に出でしむ。諸將分れて之に隸す。兵、各萬餘なり。正則、河田の上流、路捷きを以て、自之に赴きて、諸軍に先だんと欲す。輝政又敵背に出づるを以て耻と爲す。二監、正則を諭して曰く、「公已に先鋒の任を受く。誰か能く之を争はん。但公は本州に主たり。舟筏辨すべし。池田は然らざるなり」と。輝政に諭して曰く、「公は徳川氏の婿なり。當に務めて其翁を利すべし。何ぞ悻悻然として衆人と尺寸を争はんや」と。二人乃服す。岐阜の人、警を聞き、壁を堅くして大垣の援を俟たんと請ふ。秀信聽かず。兵を出して水を阻つ。二十二日、輝政、流を亂り、敵に米野に遇ひて之を破り、北門を攻む。正則、攻めて竹鼻の砦を陥れ、南門を攻む。城兵、善く拒ぐ。拔く可からず。淺野左京大夫、一柳直盛等と其別堡を攻む。堡峻にして階く、左右は泥濘なり。大夫の老臣を亡ふべからず」と。馬上鎗を揮ひて、身、士卒に先だつ。士卒皆奮ひ、壁を奪ひて入る。城將南部、遠山以下五百人を斬る。餘兵城に走る。城中、驚き擾る。諸將因りて争ひ登る。秀信、遂に降を乞ひ、逃れて高野に奔る。正則、輝政と、功を争ひて鬪はんと欲す。二監、之を折して曰く、「私忿を以て公事を忘る。誓辭の實安にか在る」と。二人服して罷む。犬山の敵、敗を開きて惧る。成將加藤貞泰、竹中重門、關一政と、皆援けて我が軍に歸す。自餘の諸將みな遁る。

合渡の戦

秀家伏見より至る
 三成、秀秋を疑ふ
 【上野】伊賀知信の妻
 【興山】木食上人
 毛利秀元東軍に質を送る

して進みて合渡に至る。長政、高虎等、謀して之を知り、相謂て曰く、「是れ我が輩の任なり」と。乃道を分ちて渡る。天方に霧ふる。敵兵覺らず。諸將、急に撃ちて之を敗り、北ぐるを追ひて呂久川に至る。義弘曰く、「前軍敗ると雖、吾れ子と兵を整へ、横撃せば則勝たん」と。三成曰く、「敵兵鋭く進む。岐阜蓋し陥らん。我れ已に援ふ能はず。何ぞ新勝の報に當る可けんや」と。敗兵を收めて俱に大垣に還る。高虎の族高政、進みて赤阪に至り、居民を諭して安堵せしむ。諸將繼ぎ至りて止舎す。定めて領軍の地と爲し、南大垣と對す。會、浮田秀家、伏見より至る。三成迎へて之を犒ひ、推して元帥と爲す。秀家曰く、「敵兵戦ひ疲れて深く客地に入る。吾れ夜に乗じて之を襲ひ、逸を以て勞を撃たば、必大利を得ん」と。三成曰く、「當に島津、小西と議すべし」と。秀家曰く、「兵は神速を貴ぶ。何ぞ議するを之爲さん。吾れ獨出で、戦を決せんのみ」と。三成、之を止めて曰く、「島津、小西、みな以爲へらく、地勢沮洳、夜戦は便ならず。且夜戦は寡を以て衆を撃つ者なり。今衆を以て寡を撃つ。何ぞ必しも此に於てせん。今、毛利參議伊勢に在り。安藝中納言、大阪に在り。其盡く至るを俟ち軍を合せて勝を決せん」と。秀家曰く、「我が軍盡く至らば、則敵軍も亦盡く至らん。勝其れ決す可けんや。然りと雖、子は老輩の言を稱す。吾は後生なり。敢てこれに違はず。唯、子之を悔ゆる勿れ」と。乃大垣に入る。小早川秀秋、伏見より高宮に至り、疾と稱して前まず。三成等、之を疑ひ、人をして往きて事を議し、因りて之を刺さしむ。秀秋、覺りて見えす。是に於て、疾癒ゆと稱し、來りて美濃に至る。敢て大垣に入らず。

大垣の群帥、岐阜陥りしを以て、伊勢、越前の軍を召す。毛利秀元、長束正家等再び富田知信を攻む。知信堅く守ること累日、上野の城主分部光嘉、城を棄て、來り歸し、與俱に守る。知信の妻、勇あり、夫を翼けて戦ふ。其郭已に陥り、内城に嬰りて守る。是に於て、敵、僧興山をして、入りて諭して城を致さしむ。聽かず。強ひて而る後聽く。秀元、正家等、乃美濃に入る。秀元の族將、秀元を勸めて東軍に歸せしめ、遂に陰に質を送る。

脇阪疑を東軍に通ず

秀忠山道より出づ

家康江戸を發す

【忠吉】家康の庶子

大谷吉隆、數前田利長を誘ふ。利長應ぜず。弟利政と、攻めて大正寺を抜き、進みて細呂木に至り、北莊を攻めんと欲す。東軍、海道に敗ると謬り聞きて、乃退く。小松の兵に淺井噉に遇ひ、力戰して還る。吉隆、京極高次等と、大正寺の府中を取る。是に於て、亦美濃に入らんとす。高次、素より心を我に歸し、大津に城守せんと欲し、故に遅回して發せず。脇阪以下、先發す。亦已に款を通ず。而して吉隆知らざるなり。之をして陰に秀秋に備しむ。

秀元、南宮山に屯す。秀秋、松尾山に屯す。みな大垣の城西に在り。島津義弘、城東に屯す。城北に長松の砦あり。砦將某、西軍の爲に守る。我軍、赤阪に至るに及びて守を棄て、遁る。二監、一柳直盛を遣し、之を守らしめ、旗幟を益して疑兵を張る。永野勝成を遣し、曾根の砦を守り、其警援を爲さしむ。西軍、聚議決せず。我軍、亦敵兵の衆盛なるを以て、敢て出で戰はず。日々内大臣の至るを俟つ。

内大臣、村越吉直の報を得て大に喜び、乃、榊原康政に命じて中納言を輔け、兵三萬を以て西上せしむ。二、十四日を以て下野を發し、直に山道に出づ。間日、岐阜の捷報を得て、人をして東陲の諸國に轉告せしめ、書を正則、輝政以下に賜ひ、之を賞して曰く、「且く戰ふ勿れ。以て我が出づるを待て」と。異父弟松平康元及び石川家成に命じて、江戸を留守せしめ、五郎信吉、及び松平康直に、其西城を留守せしめ、遂に諸城の留守を命ず。

九月、朔、内大臣、親將として江戸を發す。酒井某、村串某、金扇の馬表、葵章の白旗を擎けて馬前に在り、近藤秀用、大久保忠教、槍を掌り、渡部守綱、伊奈今成、成瀬正成、安藤直次等十五人、弓銃の險長と爲る。下野守忠吉以下親族の將領三十餘人。兵凡二萬五千なり。石川家成白して曰く、「臣、生家の言を聞く、今歳は西方塞ると。請ふ、方を避けて發せん」と。内大臣曰く、「西方塞らば、則我れ撃ちて之を開かん」と。遂に發し、東海道より鼓行して西す。近畿、西國の將士、争ひて使者を發し、狀を馬首に上る者、絡繹として道に屬す。

秀康使か景勝に送る

堀秀治

前田利長

京極高次

細川藤高

如藤清正

黒田孝高

家康諸將と赤阪に至る

赤阪白旗多し

而して東北は空虚なり。宇都宮の軍中、訛言あり、「會津、甲を悉して南下す」と。少將秀康、人をして景勝に言はしめて曰く、「小子、父の命を受けて此に居守し、上國の軍に従ふこと能はず。甚無事に苦しむ。願くは公と一戦せん。公能く來らんか。抑小子當に往くべきかと。景勝辭す。願て兵を遣し北山形を攻めしむ。最上義光、伊達政宗、之を對守す。堀秀治は、岐阜陥り、大軍西上すと聞き、乃攻めて津川を取る。

前田利長、將に大軍に會せんとして、兵を發して復小松を攻む。小松既に款を通ず。乃大正寺を攻めて敵の守兵を逐ひ、遂に北莊を招く。會前田利政、能登を以て叛く。乃敢て進まず。京極高次、大津を守る。西軍三萬にて、之を攻むれども抜く能はず。細川藤孝、田邊を守り、西軍二萬と相持すること兩月。加藤忠明、迎へて毛利氏の軍を伊豫に撃つ。加藤清正、小西氏を肥後に攻む。黒田孝高、大友氏を豊後に攻む。迭に勝敗あり。

十一日、内大臣、清洲に至り、直政、忠勝を赤阪より召して、其功勞を賞す。軍を止むること二日、以て山道の軍を發す。軍至らず。内大臣、策を決して獨發す。十三日、岐阜に至る。或人、巨柿の實を獻す。内大臣、戯れて曰く、「大垣、我が手に落つ」と。之を地に擲ち、近士をして争ひて之を取らしむ。蓋し垣と柿と國音相通するを以てなり。十四日、岐阜を發す。前軍の諸將、迎へて呂久川の上に謁す。内大臣、而して岐阜の戦功を褒め、遂に諸將を率ゐて赤阪に至る。

是の時に當りて天下の兵、美濃以東の者は、概我が軍に屬し、美濃以西の者は、概敵軍に屬す。四方の豪傑、方隅に割據する者、みな其成敗を觀望す。而して東軍は内大臣の來れるを以て、士氣、大に振ふ。

西軍の偵騎、走りて大垣に報じて曰く、「赤阪に白旗多し。内府の來るに非ざるを得んや」と。秀家、三成等、陽に大言して曰く、「彼れ方に上杉、佐竹を憂へ、踏阻して進まず。焉ぞ遽に此に來ることを得んや」と。

我が諸將、機に乗じて大垣を攻めんと請ふ。内大臣曰く、「大垣は、城壘壯固にして、兵食皆足る。秀家、少しと雖、暗者に非ず。而して義弘、行長、正家、吉隆、心を一にし力を戮せ、持重して出でず。之を攻めば

鳥勝猛、中村一榮の陣を犯す

【式部】一榮

大垣の諸將會議す

三成、吉隆、正家等、軍議合はす

必我が兵を損せん。獨三成輕んじて衆を恃む。若し誘ひて之を外に出し、秀秋、秀元をして其後を撓さしめば、則一戰に盡にす可し。我れ且に軍を動かして之を誘ふ」と。日午、大將の旗鼓を岡山に建て、諸將をして少しく陣を移して前ましむ。三成、秀家を邀へて、丘に登りて望みて曰く、「東軍に壘の升るは何ぞや」と。偵騎争ひ報じて曰く、「内府來り」と。諸軍、之を聞きて恟懼す。鳥勝猛曰く、「是れ聲勢を張りて我を驚すのみ。我れ當に其動搖に乗じて之を撃つべし」と。秀家曰く、「然り。藉内府來るとも、亦吾が期する所なり。吾れ治部と嘗に先鋒を以て戰を挑まん」と。勝猛、策を建て、伏を一色村に設け、而して輕銳を遣し、株瀬を涉りて中村一榮の陣を犯す。一榮迎へ戰ふ。有馬豊氏、其傍に在り。兵を分ちて之を援く。西軍走る。一榮左右の翼を張りて之を追ふ。内大臣、中軍より望み見て、侍臣に謂て曰く、「式部、嘗て兵を鍊る。隊伍觀る可きなり」と。追ふ者渡りて進む。内大臣曰く、「嘻、敗れん」と。果して伏に遇ふ。走る者みな還る。我が兵退くを得ず。内大臣、直政、忠勝に命じ往きて之を收めしむ。二人即馳す。左右に指揮し自殿して退く。敵兵尾する能はず。收めて大垣に入る。

大垣の諸將會議して曰く、「内府の來れること確なり、何を以て勝を決せん」と。秀家曰く、「彼れ必銳を悉して來り攻めん。我が守備既に具る。以て之を待つに足る。田邊、大津の兵、將に日に來り會せんとす。安藝黃門も亦、當に繼ぎて至るべし。我れ敵を堅城の下に疲れしめ、内外より之を撃たば、其勢、鷹鷲の鳥雀を搏つが如し。是れ全勝の策なり」と。三成曰く、「然らず。今、敵兵我に半す。吾れ倍なれば則戰ふと聞く。未だ倍にして則守るを聞かず。我が輩、大兵を擁して關東を征伐す。坐ながら孤城を守り、敢て出で戰はずば、天下の我を望む者、みな沮喪せん。往年、小牧の役に、太閤、過慮し、當に戰ふべくして戰はず。終に内府の名を成せり。今豈過を貳す可けんや」と。諸將の勇を負者、多く其議を右く。吉隆、正家、之を争ひて曰く、「當今の世、誰か内府と勝を野戰に決する者ぞ。獨持重して之を疲らすに有るのみ。中納言の謀慮深長なり。宜しく之に聽從すべし」と。議未だ決せざるに、内大臣之を掃り知りて、乃宣言して曰く、

【備前中納言】浮田秀家
【安藝宰相】毛利秀元
【薩摩參議】島津義弘
【三國の軍】備前、安藝、薩摩
義弘夜襲を説く

大垣の諸將發す

關原の役

秀秋松尾山に屯す
秀元南宮山に屯す

「敵敢て出でず。我れ將に兵を置きて西し、直に大阪を取るべし」と。皆束裝す。大垣の諸將、之を聞き、終に議を決して出で戰はんとす。曰く、「備前中納言は出でて關原に陣し、安藝宰相は前軍を以て敵を邀へ、薩摩參議は菩提山より赤阪の北に起き、遶りて敵背に出で、三成以下は分れて三軍に屬し、機を啗て合撃し、東軍を呂久、合渡に擠さん」と。乃令を下して兵を治め、人をして出でて三國の軍を戒めしむ。即夜、島津義弘、族家久をして入りて説かして曰く、「東兵遠く來り、衆心未だ定らず。請ふ、今夜、兵を潜めて襲撃せん。吾れ先鋒と爲りて其麾下を衝かば、必利あらん。利あらざば、乃關原に赴くも、未だ晩しと爲さざると。鳥勝猛曰く、「詰旦の事、吾れ將に再徳川の甲背を見んとす。何ぞ必しも草々に爲さんや」と。三成曰く、「然り」と。家久、勝猛を應て曰く、「子、嘗て徳川の甲背を見しか」と。對へて曰く、「僕少きとき甲斐に仕へ、嘗て之を遠江に追ふ」と。家久曰く、「今の徳川は舊の徳川に非ず。子、同じく之を視る。飯七を矩と爲すと謂ふ可きなり」と。辭せずして出づ。

毛利秀元、素より我に通ず。乃秀家の先驅と爲るを欲せずと託言す。三成、親往きて之を諭す。肯かず。三成、乃約して曰く、「吾れ浮田君を輔け、敵と鋒を交へん。然して公、横さまに之を撃て。吾れ其時を啗て、鋒を擧げて號を爲さん」と。秀元、伴り諾す。三成、乃筑前の軍に起き、秀秋を見て之を勗め、遂に北小關村に赴く。大垣の諸將相繼ぎて發し、栗原山に設けて路を燎す。路隘くして隊伍整はず。又雨に遇ふ。衣甲皆濕ふ。五更にして達す。

浮田秀家、島津義弘、天満山を背にし、東向して陣す。小西行長、其左に陣す。石田三成、又其左に陣す。有馬、河尻、糟屋、石河、布施、玉置氏、其右に陣す。大谷吉隆、平塚爲廣、戸田重政と、又其右に陣す。小早川秀秋、松尾山に屯す。協阪安治、小川祐忠、朽木元綱、赤坐久兵衛は麓に在り。毛利秀元、南宮山に屯す。鍋島勝茂、長束正家、長曾我部盛親、安國寺惠瓊、麓に在り。みな北に嚮ひて陣す。騎卒凡十二萬八千なり。

候吏法齋
【馬矢】馬糞
諸軍を部署す

毛谷主水

【南宮山の敵】毛利秀元 三國驥

東西の軍關原に會す

【下野公子】忠吉

福島氏の候吏法齋と云ふ者、走り報じて曰く、「敵出づ」と。正則問ふ、「何を以て之を知る」と。曰く、「臣、馬矢を撮ひしに皆温なり。是を以て之を知る」と。正則乃人をして岡山に赴きて之を告げしむ。既にして長松、會根の諸砦、みな狀を上る。内大臣、晒ひて曰く、「敵我が術中に墮つ」と。乃令を軍中に下し、諸將を部署す。福島正則を以て先驅と爲し、下野守忠吉、井伊直政、本多忠勝とを申驅と爲し、黒田長政、加藤嘉明、細川忠興、田中吉政、生駒一正、竹中重門、戸川達安等、右軍たり。藤堂高虎、山内一豊、織田長益、津田信成、京極高知等、左軍たり。蜂須賀至鎮、筒井定次、稻葉貞道、遠藤嘉隆、小出秀家、鍋井敏矩、寺澤廣高等、游軍たり。淺野左京大夫、池田輝政、中村、徳永、市橋、有馬、金森等と、南宮山に備へ、水野勝成、松平康長、一柳、松下、西尾、津輕等と、大垣に備ふ。内大臣、自麾下を以て中軍たり。酒井家次、前に居り、本多康重、大須賀忠政は後に居る。騎卒凡七萬五千なり。奥平貞治を遣して潛に松尾山に赴き、秀秋の軍を監視せしめ、戰酣なるを俟ちて内應を爲さしむ。黒田氏の將毛谷主水、使して中軍に至る。召して敵の數を問ふ。對へて曰く、「三萬」と。曰く、「我が候騎皆十萬を以て告ぐ。汝は何の見る所ぞ」と。對へて曰く、「臣は其闘士を算ふるのみ」と。内大臣、大に悦ぶ。十五日、黎明、親、甲を授し、宵せずして中し、馬上上りて諸軍を率ゐ、進みて桃配野に至り、忠勝を召して曰く、「南宮山の敵疑ふ可し」と。忠勝曰く、「彼れ若し詐を挾まば、當に山を下りて陣すべし」今猶頂に在り。是れ慮る無きなり」と。内大臣曰く、「然り」と。忠勝に賜ふに、名馬の三國驥と云ふを以てし、之を遣りて、自軍を進むる半里可り。家次、白旗十二流を以て先づ行くこと三百歩。會天天大に霧ふり、咫尺辨す可からず。東西の軍、關原に遇ふ。日、辰を加へて天霧る。敵の諸將、我が軍の已に近づくを觀て、誘致して之を夾み撃たんと欲す。未だ敢て戰を挑まず。忠吉、時に年十九。直政と兵三百を以て、正則の陣を踰えて前む。正則の臣可兒才藏之を誰かす。答へて曰く、「下野公子、井伊侍從、自斥候を爲すなり」と。曰く、「候騎は多かる可からず」と。直政

本多忠朝

島勝猛驚る

秀秋山を下

我軍吉隆を獲三成等敗走
西軍大敗

乃兵を其老木保右京に附して、十餘騎を以て馳す。既にして中軍に鼓螺起り、諸隊大に關す。弓銃已に交る。忠吉、親義弘の陣を冒し、一驍騎と搏ちて馬より墮し、從兵に命じて之を斬らしめ、復進みて創を被る。直政、拵戰ふ。右京、尋ぎ至る。忠勝、三國驥に乗り、横さまに敵陣を衝く。陣みな披靡く。其子忠朝手づから二騎を斬る。義弘、行長、戰甚だ力む。秀家も亦、正則を撃つ。殺傷數百。我が衆、將に卻かんとす。正則、叱咤して督戰す。游軍來り援くるに會し、兵を合せて疾く撃つ。我が右軍、菩提山の南より、麓に循ひて進む。長政、豫め死士十餘を揀びて自ら從へ、必三成を撃たんと欲し、諸將に先だちて其柵に迫り、三成の將島勝猛を斃す。吉政、一正は、三成の將蒲生備中、北川十郎と戰ひて利あらず。嘉明、忠興は其横を撃つ。吉政等、之に返る。左軍の諸將、道南より進み、直に吉隆を撃つ。吉隆、爲廣、重政と、健闘す。我が兵進む可からず。時に日將に午ならずとす。兩軍迭に進み、互に退き、勝敗未だ決せず。西軍、數烽を擧ぐ。秀元敢て動かす。秀秋も亦、敢て東軍に應ぜず。東軍、礮を松尾山に發して之を試る。奥平貞治も亦之を促す。秀秋、乃兵八千を以て山を下る。平岡重定、稻葉正成、先鋒と爲り、吉隆の右に迫る。利あらず。貞治戰死す。脇阪、朽木、小川、赤坐の諸將、我が左軍と相翼けて進む。信成、長益、重政を斬る。小川氏の部兵、爲廣を斬る。秀秋、返り戰ひて、三面より合撃す。是に於て、内大臣、令を諸軍に傳へ。鼓噪して齊しく進む。聲、天地に震ふ。西軍、大に動く。我が先驅、之に乗じ、撃ちて秀家を走らす。我が左軍、既に吉隆を獲、進みて右軍と夾み撃ちて三成を走らせ、十郎、備中を斬る。行長の軍、望見して擾亂す。卻きて整へんと欲す。我が申驅迫り撃ちて之を走らす。義弘、一軍を以て南軍に走る。正家、盛親等、みな潰え、西軍、遂に大に敗る。我が軍、勝に乗じて北ぐるを追ふ。斬首四萬級。原草、之が爲に赤し。未の時に戰罷む。我が士卒の死傷四千に滿たす。將帥に一人も死する者なし。盡く中軍に赴きて首虜を効す。内大臣、胡床に據り、左右を顧て胃を取らしむ。左右怪みて故を問ふ。内大臣、笑ひて曰く、「諺に所謂勝らて胃を肅する者なり」と。乃忠勝を以て撰と爲し、諸將を延見す。忠勝實して曰く、「列侯の今日の戰、皆

秀秋來り謁す

天下徳川氏に服す津城と大

絶類離群なり」と。正則曰く、「中務の兵を用ゐること、乃聞く所に過ぐ」と。忠勝曰く、「敵脆弱、較ぶるに足らざるなり」と。忠朝來り謁す。刀反りて室に入らざること數寸。衆、これを壯なりとす。忠吉、直政、創を裏みて至る。内大臣、起ちて直政の創を視て、手づから藥を注ぎ、其餘を以て忠吉に賜ふ。直政、忠吉の戰狀を告げて曰く、「鄙語に言ふ『鷹の俊なる者は、其雛も亦俊なり』と。臣、四郎に於て之を見る」と。内大臣曰く、「發縱する者は宜しきを得るのみ」と。秀秋、秀元、疑懼して未だ至らず。内大臣、人をして秀秋を召さしむ。乃脇阪安治等と來り謁し、膝行して前み敢て仰ぎ視る莫し。正則、長政に耳語して曰く、「黃門何ぞ醜きや」と。長政曰く、「雉にして鷹に遇ふ。固より此の如くなるべし」と。内大臣、秀秋をして澤山を攻め、自効さしむ。小川、赤坐、罪あるを以て、邑を奪ひて之を放つ。秀元、使をして捷を賀せしむ。其父輝元、大阪に在るを以て、敢て先謁せずと。引きて西に歸る。池田、淺野等も亦、備を撤て、上謁す。正則進みて言て曰く、「足下天下の勝敗を一日に決す。振古無き所なり」と。岡江雪曰く、「之を警ふるに、猶昏夜の明に向ふが如きなり。蓋ぞ凱せざる」と。内大臣曰く、「諸君我が爲に努力し、以て此大捷を取るを得たり。而して諸君の家室、皆大阪に在り。吾が心未だ降らざるなり。數日を出でずして、取りて之を諸君に附し、然る後凱せんのみ」と。諸將之を聞きて感泣する者あり。是に於て、使者を發して捷を東、中納言、及び少將秀康に報す。直政、忠勝をして西、今須に次せしめ、自諸軍を以て藤川に止舎す。内大臣、既に大に捷ち、西軍崩潰し、散じて四方に之く。四方の豪傑、震懼せざるは莫し。旬日の間に、六十餘國盡く徳川氏に服す。

大捷より先だつこと四日、田邊の圍解け、細川藤孝、龜山に徙る。大捷より先だつこと一日、大津陥り、京極高次、高野に之く。敵の二城を圍ひし者、或は奔り、或は降る。大捷の後一日、内大臣、進みて磨針嶺を踰えて正法山に陣し、直政、忠勝をして、小早川、脇阪以下を率ゐ、澤山を攻めしむ。澤山の兵已に逃れ、殘黨死守す。明日、直政、城後の水道より入り、火を縱ちて之を焚く。

石田氏を族誅す

天垣城陥る

慶長五年に幕す

北廳氏不問の嫡夫人輝元降を乞ふ

山道の軍

戸田一西

諸軍繼ぎて入り、石田氏を族誅し、遂に徙りて永原に陣す。明日、又八幡山に徙り、令を懸けて大に諸の渠率を素む。我が軍の留りて、大垣に備ふる者、關原の戰作ると聞き、進みて其陣に薄る。城將福原某は、石田氏の戚屬なり。熊谷、垣見、相良、秋月、高橋等と、固く守りて下らず。松平康良、銃卒をして銃を以て楯に代へ、陣を破りて入り、其外郭を奪ふ。議して曰く、「大陣既に捷つ。是れ何ぞ我が次を損するに足らん」と。乃緩く之を攻むること四日。相良以下素より款を通ず。是に於て、熊谷、垣見を斬りて降る。福原髪を削りて遁る。尋いで死を賜ふ。

我が軍の留りて南營に備ふる者、命を奉じて、追撃し、斬獲する所多し。池田長吉、龜井茲矩、水口に逼り、正家を獲て還り報す。城内の貨財を以て、之に賞賜す。近江の人、行長を捕へて之を獻す。田中吉政、三成を伊吹山中に捕へて、之を獻す。

慶長五年九月十九日、内大臣、草津に幕す。天皇、使をして之を勞はしむ。内大臣、拜謝して曰く、「姦人、事に託して天下を攘亂す。臣家康の諸將吏の力に頼りて、之を攘除することを得たり。四方の殘黨、當に不日に來り降るべし。幸に聖慮を勞すること勿れ」と。乃池田左衛門尉、福島左衛門大夫、淺野左京大夫に命じて、先京師に入りて士民を鎮撫せしめ、且北廳氏を慰問せしむ。

大阪、敗を聞きて内外色を失ふ。輝元、長盛、使を馳せて降を乞ふ。内大臣、答へず。大野治長をして、往きて秀頼の母子を諭さしめて曰く、「近日の事、吾れ明に沖子に出でざるを知る。今や亂人既に獲たり。宜しく安堵故の如くすべし」と。是に於て、衆情大に安し。京畿帖服す。

而して山道の軍、亦至る。山道の軍、是の月二日を以て小室に至る。眞田信幸をして其父昌幸を招かしむ。昌幸肯せず。榊原康政曰く、「彼れ必夜來らん」と。備を嚴にして待つ。昌幸果して至り、敢て逼らず。本多正信、勸めて之を攻む。戸田一西、之を争ふ。聽かず。六日、之を攻む。利あらず。乃小室の城主、仙石秀久、河中の城主、森忠政をして、之に備へしめて西す。十七日、妻籠に至り、捷を報する使者に遇ひ、程を兼

家康秀忠を怒る 酒井忠利

本多正純

家康、秀忠を見る

浅野長政

前田利長

ねて至る。内大臣、其期を怒れるを怒り、疾と稱して見す。中納言泣を垂れて出づ。康政、正信と、大久保忠鄰、酒井忠利と、見えんことを請ふ。亦井伊直政をして、之を辭せしむ。直政素より寵任を受く。又公子忠吉の婦翁なり。是に於て、出でて命を傳ふ。因りて颺言して曰く、「儲君返擄して大事に及ばず。公等も亦焉ぞ責を分たざるを得んや」と。諸將惶恐して退く。獨り忠利留り、之に謂ひて曰く、「儲君の期、後れしは上田を攻めしを以てのみ。主公、必しも深く尤めじ。子、何ぞ遽に之を詔ることを爲す」と。直政曰く、「吾れ儲君の爲に、歎恨して言はざる能はず」と。忠利色を作して曰く、「藉令、儲君をして驢を主公に失はしむるも、子は勳威なり。宜しく之を彌縫すべきに、今乃衆に其過を彰す。果して何の意ぞや。願くは其説を聞くことを得ん」と。刀を叩へて進む。牧野康成、本多成重、救解して止む。衆、忠利を指して曰く、「彼れ今日の舌戰、往年の武功に過ぐることを萬々なり」と。本多正純入りて白して曰く、「期を怒れるは、正信に由るなり。願くは正信を罰して、以て儲君の過無きを著さん」と。内大臣、意稍解く。

二十日、大津に至り、中納言を召見し、之に謂て曰く、「天下を爲むるは、猶突碁の如し。既に其全局に勝たば、則敵子の存する者有り」と雖、何ぞ輸贏を較ぶるに足らんや。汝未だ若き説を聞かざるか」と。中納言曰く、「爾時、戸田左門、兒を諫む、「小を以て大を失ふ勿れ」と。誠に大人の言ふ所の如し」と。曰く、「彼れは微者なり。故に其言行はれざるのみ」と。乃一西を召し、之を褒めて曰く、「我れ汝が言をして行ふ可からしめん」と。命じて大津の留守と爲す。

浅野彈正少弼、命を奉じて中納言に従ひて至る。内大臣に召して之に謂て曰く、「西面の事、我れ秀忠と能く之を辨せん。東面は獨り秀康あり。子往きて之を助け、以て奥羽を經理せよ」と。彈正少弼、乃東す。

是に於て、兩道の軍盡く大津に萃る。侯伯、將士、來り謁する者雲の如し。前田利長、青木一矩を越前に圍む。數日にして捷聞至る。一矩懼れ降り、質及び賂を納る。利長、質を受けて賂を卻け、來りて謁す。内大臣、之を慰勞し、問ひて曰く、「令弟如何」と。利長嘖嘖して敢て對へず。内大臣曰く、「子、之を安せよ。

山岡景友

奥平信昌

家康大阪に三成等を六條磯に斬る

長盛を高野に放つ六國を削る 輝元、備前、備後、安藝、備前、伯耆、出雲、美作、出雲、浮田秀家、島津義久、大友義統

尊公、嘗て子の兄弟を以て我に託す。我れ豈之を忘れんや」と。罷りて命を埃たしむ。山岡景友、命を奉じて伊勢を徇へ、福島正則を援けて長島を守る。捷聞至るに及びて、兵を出して南宮の敗兵を要し、撃ちて之を走らせ、桑名、龜山、神戸の諸城を取りて來り謁す。

内大臣、乃奥平信昌を遣し、京師に入り、板倉勝重、加藤正次、大久保長安を以て副と爲し。所司代の事を行はしむ。僧惠瓊を捕ふ。

二十二日、直政、忠勝を遣し、列侯を率ゐて大阪に臨ましむ。輝元、長政、復降を乞ふ。答へず。

二十四日、中納言、京師に入る。

二十七日、内大臣、大阪に入る。遠近屏息す。

十月朔、奥平信昌に命じて、石田三成、小西行長、僧惠瓊を徇へて、六條河原に斬り、長束正家の首を併せて三條に梟し、伏見城中にて敵に應ぜし者十八人を粟田口に磔す。

遂に令を下して、西南の諸國の未だ定らざる者を伐つ。中納言を以て大將と爲し、期を刻して軍を發す。

十九日、中納言、大阪に入る。輝元、長盛、降を乞ふこと益力む。乃長盛を高野に放ち、藤堂高虎をして其郡山を收めしめ、其留守渡邊了を釋し、高虎に屬せしむ。輝元の六國を削り、浮田秀家の三國を收む。浮田氏の臣某、來りて秀家既に死せりと告ぐ。而して潛に秀家をして、奔りて島津氏に依らしむ。

島津義弘、關原より歸るや、其兄義久、之を囚へて降を乞ふ。内大臣曰く、「我れ初め義弘の父子を遇する甚厚し。何の負む所ありて、亂人に黨するや。是れ固に許されざる所あり。然りと雖、吾れ復兵を勞するに忍びず」と。乃其降を許す。義久來り謝せんと欲す。會疾作る。伊集院の族、亦亂を爲す。故を以て未だ來る能はざるなり。

初め豊後の故主大友義統、西軍に應じて其舊國を復せんと欲し、首として杵築に遁る。杵築、急を黒田加藤氏に告ぐ。黒田孝高、方に募兵萬人を以て、中津を發して南伐す。之を聞きて起き援け、杵築の兵と合撃

孝高豊後を定む

し、破りて之を降し、轉じて熊谷、垣見氏の邑を攻む。偶關原の逃卒を得、縦ちて其城に入らしむ。城皆降る。遂に中川氏を助け、攻めて太田氏を下し、盡く豊後を定む。還りて豊前に入り、香春、小倉を攻め、月を踰えて皆之を下し、轉じて筑前に入る。

清正肥後を定む

加藤清正、杵築を援へども及ばず。乃宇土、八代を攻む。肥前の大村氏、始より西軍に應ぜず。是に於て、兵を發して清正を助く。清正も亦、關原の逃卒をして入りてこれを諭さしむ。二城皆降る。薩摩の兵、八代を援け、水股に至りて遁れ去る。清正乃孝高と、筑後を夾み攻めんことを約す。鍋島直茂、兵を擧げて之に應じ、立花宗茂を撃つ。宗茂既に東軍に降る。孝高、清正、之を和解す。立花増時を召して成を行ふ。宗茂乃出でて而して曰く、「公等、豫め内府の必勝を知る。我が及ぶ所に非ざるなり」と。清正、之を熊本に置き、遂に孝高と與に毛利秀包、筑紫廣門の邑を徇へ下す。

九國を定む

十一月、二肥、二豊の兵を合せて、薩摩の境上に臨む。日向の伊東氏、世薩摩と仇す。攻めて宮崎、佐土原を取り、兵を引きて來り會す。内大臣、之を聞き、令を下して、島津氏既に下るを告げ、其兵を弭めて九國を定めしむ。

加藤忠明

初め毛利氏、將を遣して伊豫を徇へ、眞崎を攻む。加藤忠明、兄嘉明の爲に留守し、其將佃一成と方に隣ひて防禦し、大に之を破る。長曾我部盛親、關原より還り、井伊氏に因りて降を乞ふ。之を許す。盛親、兄あり。藤堂氏と善し。盛親、其己に代るを恐れ、迫りて自殺せしむ。

四國を定む
波細野木重勝
小野木重勝
石川頼明
藤孝、田邊
籠城



内大臣怒り、井伊氏の將鈴木重好を遣して其封を奪ひて四國を定めしむ。初め福知山の城主小野木重勝、田邊の城を圍むに與る。既に解きて其邑に據る。大捷に及びて、細川忠興、其父の仇なるを以て、請ひて之を討つ。重勝自殺す。石川頼明、大津を圍むに與る。捷に及びて降る。其父數正は、我が叛臣たり。故を以て許さず、斬に當つ。重勝の首を并せて之を梟す。細川藤孝の田邊を守るや死を以て自矢ふ。藤孝、詞

前田玄以

學に長じ、古今集を西三條氏に受く。敵將谷衛友等、其弟子なり。陰に款を通じて、銃に丸せず。朝廷、其學の傳を絶たんことを恐れ廷臣を遣し、諭して成を行はしむ。捷を聞くに及びて、藤孝自愧ちて高野に遁る。

一矩、長重

京極高次も亦愧ちて、敢て來り調せず。内大臣、人をして高次を諭さしめて曰く、「子、孤城を守り、數萬の敵衆をして事に及ばざらしむ。功も亦多し」と。乃召して之を見る。前田玄以は、田邊、大津の難を坐視せしを以て、之を黜け、尋いで封を丹波の八上に徙す。

九鬼嘉隆自
眞田親子

青木一矩、丹羽長重等、亦觀望に坐して邑を失ふ。九鬼守隆、初め其父嘉隆を招く。嘉隆肯かず。守隆乃止りて畔乘に陣す。大軍西上に及びて罪を獲るを恐れ、乃進みて戦ひ、首級を途に効す。内大臣憚ばず。大捷に及びて、嘉隆懼れて新宮に奔る。守隆爲に命を乞ひて、允さるゝを得、使を馳せて之を迎ふ。未だ至らざるに嘉隆自殺す。眞田昌幸、少子幸村と來りて命を乞ふ。許さず。長子信幸、井伊、榊原の二氏に因りて固く請ふ。内大臣、之を中納言に言はしむ。中納言曰く、「我れ關原の期を失ひしは、實に終身の憾なり。而して之を致す者は昌幸なり。必之を死に處せん」と。信幸固く請ひて曰く、「嚮には、臣寧父に負くも、君に負く能はず。今は寧死して父に徇し、生きて君に事へざらん」と。榊原康政入りて申す。兩公之を嘉し、爲に死一等を有して高野に放つ。

東北定まる

是より先、關原の報、陸奥に至る。上杉景勝、大に驚き、急に山形の軍を召し還す。佐竹義宣も亦、懼れて降を議す。東北亦稍定る。

關東八州を
根本地とな
諸將を賞し
封國を定む

十二月、内大臣、中納言、及び諸の親信と議して曰く、「禍亂略定る。當に天下を裂きて有功を賞すべし」と。乃關東八州を以て、立て、根本の地と爲し、江戸城に居ること故の如し。越前、尾張、近江、伊勢を以て宗族の舊臣を封じ、其餘は盡く外藩と爲す。加賀、能登、越中を前田利長に賜ひ、一百萬石と爲す。肥後を加藤清正に賜ひ、七十萬石と爲す。備前、美作を小早川秀秋に、安藝、備後を福島正則に、筑前を黒田長

政に、播磨を池田輝政に賜ひ、並に五十萬石と爲す。豊前を細川忠興に賜ひ、四十萬石と爲す。紀伊を淺野左京大夫に、筑後を田中吉政に賜ひ、並に三十萬石と爲す。丹後、若狹を京極高知に、因幡、伯耆を中村忠一に、出雲、隱岐を堀尾吉晴に、土佐を山内一豊に、阿波を蜂須賀至鎮に、讃岐を生駒一正に、伊豫を加藤嘉明、藤堂高虎に賜ひ、並に二十萬石と爲す。飛騨を金森可重に、丹波の福知山を有馬豊氏に、美濃の高須を徳永壽昌に、伊勢の神戸を一柳直盛に、其阿濃津を富田知信に、其松阪を吉田重恒に、伊賀を筒井定次に、信濃の上田を眞田信幸に、因幡の鳥取を池田長吉に、備中の庭瀬を戸川達安に、豊後の日出を木下延俊に賜ひ、或は封を益し、或は舊に依る。肥前四萬石を寺澤廣高に、美濃二萬石を西尾光教に賜ひ、信濃の邑を以て木曾の諸士を賞す。諸の降附の國は、改めて其嗣を立つ。薩摩、大隅、日向を島津忠恒に賜ひ、七十萬石と爲す。長門、周防を毛利秀元に、肥前を鍋島勝茂に賜ひ、並に三十萬石と爲す。攝津、河内、和泉の六十餘萬石を以て大阪に隸す。越前を少將秀康に賜ひ、六十七萬石と爲す。尾張を下野守忠吉に賜ひ、二十萬石と爲す。近江の澤山を井伊直政に賜ひ、十八萬石と爲す。伊勢の桑名を本多忠勝に賜ひ、舊封を合せて十七萬石と爲す。美濃の加納を奥平信昌に、其大垣を石川康通に賜ひ、上野の高崎を酒井家次に、駿府を内藤信成に、濱松を松平忠頼に、岡崎を本多康重に賜ひ、酒井忠利の秩を増して萬石と爲す。餘は各差あり。外藩は今歳を以て命を發し、舊臣は明歳を以て命を發す。乃中納言をして入朝し、成事を告げしめ、諸の豊臣の氏を冒し、者をして、皆本姓に復せしむ。

豊臣氏、嘗て皇庶子良仁を立て、太子と爲す。而れども天子の意に非ざるなり。是に於て、皇嫡子政仁を立てんと欲し、内大臣に謀る。内大臣對へて曰く、「是れ臣が敢て議する所に非ざるなり。嫡庶の分は唯帝の心にて之を裁せよ」と。天子即政仁を以て皇太子と爲す。

六年正月、内大臣、大阪の西城に在り。中納言は一城に在り。入りて秀頼を牙城に見る。列侯、諸將、盡く西城に朝して正を賀す。是より先、伏見城を修む。三月成りて之に徙る。朝廷、内大臣の勳勞に酬いんと欲

秀忠入朝

立太子

慶長六年

し、擬するに大將軍を以てす。大將軍の拜は、足利氏亡びてより後、復其禮を擧ぐる莫し。内大臣、敢て當らず。且其天下を勞費するを恐れて固く辭す。乃中納言を以て大納言と爲し、從二位に陞され、下野守忠吉を從四位下に叙し、侍從に任せらる。舊臣、爵を進む者多し。

是に於て、西事已に平ぎしを以て、大納言をして、往きて關東の諸國を平けしむ。四月、伏見を發して江戸に歸る。佐竹義宣、討たるを懼れて、之を品川に迎へ、罪を謝して降を請ふ。伏見に往きて、之を内大臣に請はしむ。内大臣曰く、「時に乘じて事を擧ぐるは英雄の常なり。深く咎むるに足らず。獨爾端を觀望する者は、鄙しむ可きの甚しきなり。故に吾れ義宣を憎むこと景勝に過ぐ」と。乃見ゆるを許さず。第に就きて罪を誅たしむ。景勝、屢少將秀康に因りて罪を謝す。秀康以爲へらく、「景勝方に勢を失ふ。之に乗するは武に非ず」と。因りて爲に其降を納れんと請ふ。内大臣、之を許す。

七月、景勝、來りて伏見に謝す。八月、其會津一百萬石を收めて、米澤三十萬石を賜ひ、會津を以て蒲生秀行に賜ひ、六十萬石を食ましむ。伊達政宗、大捷の威を藉りて數上杉氏を侵し、密命に違ふ。又南部の叛臣和賀忠親を誘ひて亂を爲さしむ。事爲らざるに及びて、忠親を殺して口を滅す。乃前約を停め、上杉氏の地十二郡六十二萬石を割きて之を賜ふ。最上義光、堀秀治の封を加へ、二人に命じて南部、戸澤、本堂、村上溝口氏を率ゐて、撃ちて會津城邑の未だ服せざる者を平けしむ。會津の老直江兼續、初め石田三成と密謀を定む。本多正信、特に刑を加へんと請ふ。内大臣曰く、「此謀に與る者、豈獨一の兼續のみならんや。吾れ天下を蕩滌するに、何ぞ必しも介介たらんや」と。釋して問はず。

九月、前田利長の任子利常を召し、之に冠して遣歸し、大納言の女を以て之に妻す。

内大臣、方に銳意治を求む。時に藤原肅、益名あり。石田三成、嘗て之を聘せんと欲す。就かず。尋いで淺野氏の招に應ず。是に至りて、内大臣、數之を延き、太平の策を諮問す。後其門人林信勝を聘して博士と爲し、以て顧問に備ふ。

秀忠江戸に歸る

義宣降を請ふ

蒲生秀行

伊達政宗

直江兼續
藤原肅
【林信勝】雜山

供御の地

本願寺親鸞

兼壽顯如
光佐顯如

六條

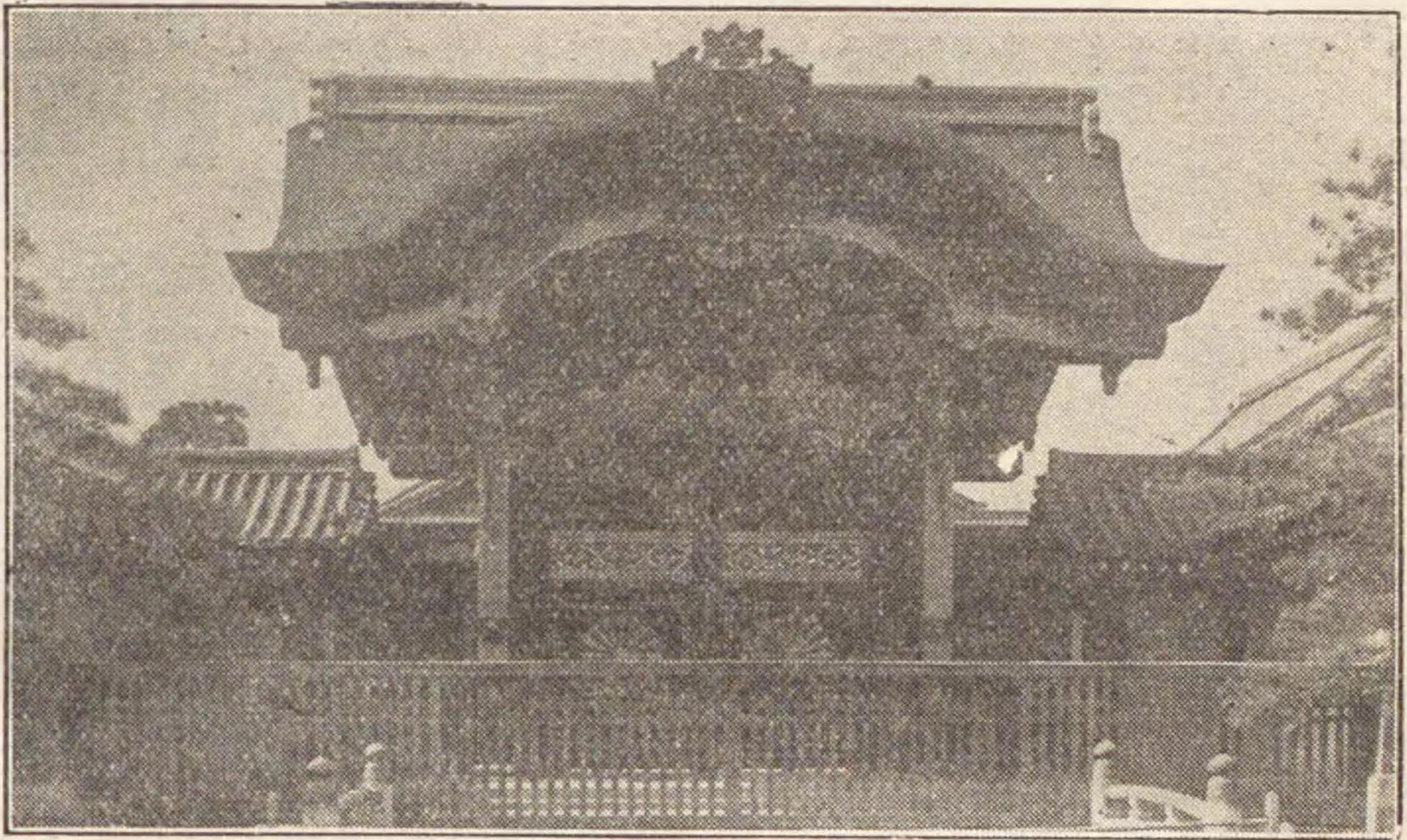
光壽と光昭
光昭准知

勅使門
西本願寺

板倉勝重

膳所城

二條城



其他大津、草津、界浦、尼崎等の地、皆吏を置く。更みな職に稱ふ。又膳所に城きて、戸田一西をして之を守らしむ。遂に關西の諸侯に命じ、京師の二條に城きて駕を駐むる地と爲す。大番士人を以て更之を成らしむ。

是の歳夏、奏して供御の地、及び廷臣の食邑を加へ、豊國廟に給するに萬石を以てし、其他の寺祠、みな采田を給す。

初め本願寺の祖、姓は藤原氏、親鸞と稱し、一向派を創め、妻を蓄へ肉を食ふ。八世の孫兼壽始めて寺を山科に建て、尋いで大阪に徙る。其曾孫光佐、織田信長と兵を構へ、所在の門徒争ひ戦ひて已まず。後に豊臣秀吉を助けて西伐し、其門徒を誘ひて、薩摩の道を通ず。功を以て寺を京師六條に建つ。光佐死す。二子光壽、光昭あり。光昭の母は美なり。秀吉之を納る。因りて光昭を立つ。内大臣の東伐するや、二人皆之を江戸に送る。石田氏に沮まれ、光壽獨間行して達し、歸りて京師に匿る。已にして大軍西上するや、黒田長政、門徒を誘ひて京畿を撓さしめんと請ふ。内大臣曰く、「吾れ武を以て天下を定む。何ぞ浮屠の力を借らんや」と。乃止む。大捷の後、光壽、迎へて大津に賀す。内大臣曰く、「光壽、本嗣に當る」と。乃爲に寺を六條の東に建て、天下の門徒をして分れて東西に屬せしむ。板倉勝重、加藤正次を以て京師の所司代と爲し、獄訟及び寺祠の事を掌らしむ。尋いで正次を罷め、専勝重に任ず。亂後、物情定らず、事務極めて繁し。勝重、詳雅強敏なり。人人、心に厭かざるなし。

家康江戸に歸る
關東奉行

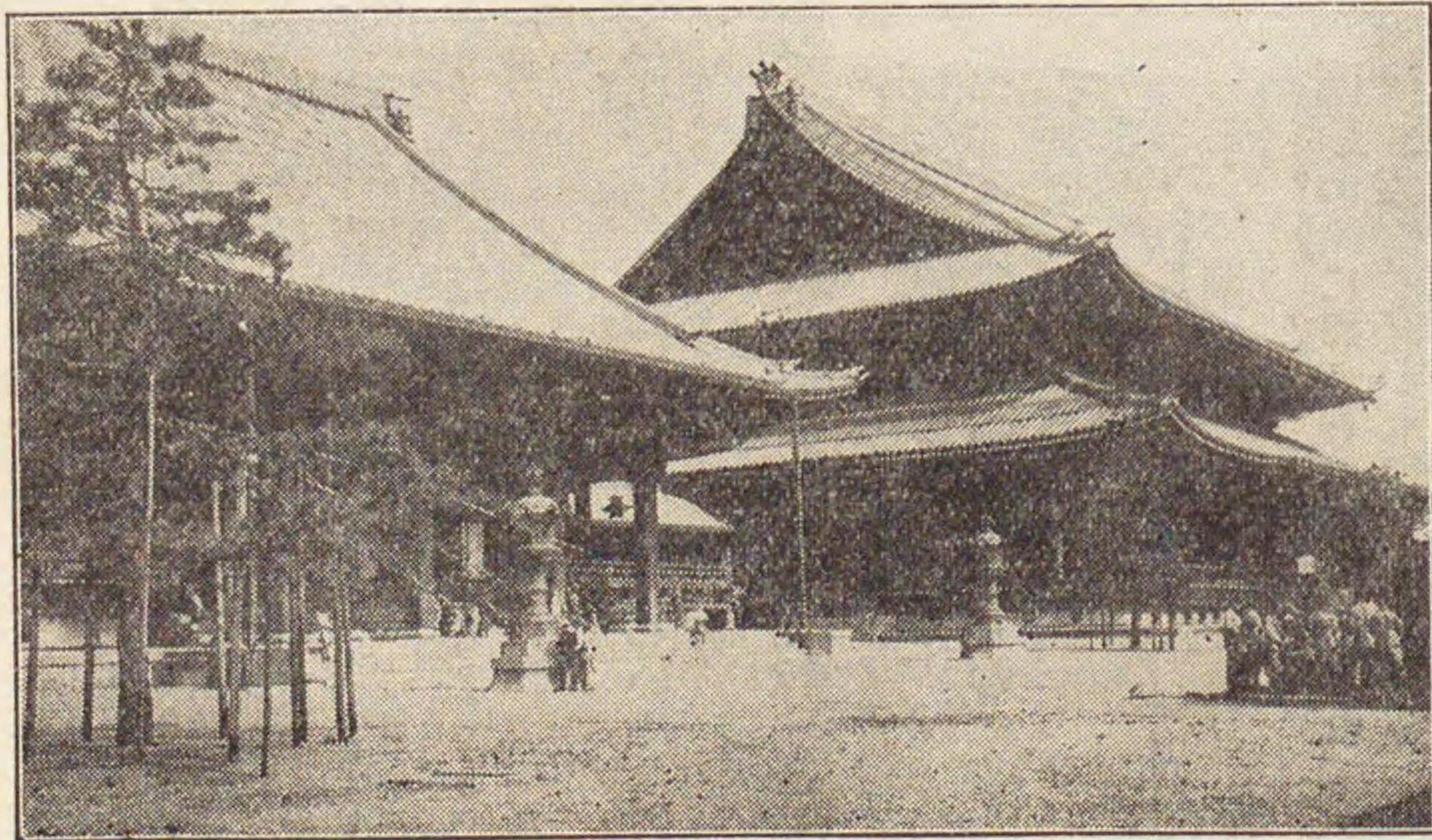
慶長七年
利長參勤す

(東本願寺
本堂

黄執香

十一月、内大臣、江戸に歸る。尋いで大納言をして牙城に居らしめ、而して自西城に居る。天下の牧長、江戸に朝せんと請ふ。辭して許さず。是より先、本多正信、内藤清成を以て、關東の奉行と爲し、以て庶務を綜べしむ。是に於て、青山忠茂に命じて副と爲す。奥平家昌に賜ふに宇都宮を以てし、十萬石を食ましむ。七年正月、内大臣は從一位に進み、大納言は正二位に進む。前田利長、請ひて江戸に朝し、以て天下の率と爲し、山道より東下す。内大臣、之を京師に避け、大納言を留めて之に當らしむ。利長至る。大納言親之を板橋に迎へ、待遇甚渥し。利長の喜、望外に出づ。乃第に就き名刀、馬、鷹、金百枚を獻す。且日、入りて調す。大納言出で、前殿に坐し、諸將、群臣、左右に驢列す。擯者出で、利長を延きて之を下坐に坐せしめ、尋いで饗禮を行ひ、名刀一口、金百枚、銀千枚、時服百領を賜ひて之を遣る。利長遂に伏見に赴き、内大臣に謁して去る。

三月、内大臣、大阪に適きて正を賀し、尋いで伏見に還る。後以て常と爲す。四月、島津氏に印信を賜ふ。島津義久、既に國內の反者を平け、疾を興して入りて謝せんと欲す。反者亦起りて果さず。五月、朔、内大臣入朝す。二日、皇太后に朝す。因りて止りて京師に在り。六月、奏請して南都の黄熟香を剪る。天使來り蒞む。本多正純、其事を掌る。



傳通院
島津忠恒
秀家の流罪
井伊直政卒
彦根城
佐竹義宣
車猛虎
小早川秀秋卒
神原康政
鳥居忠政
天下大に定

八月、生母水野氏卒す。爲に傳通院を建つ。
十月、内大臣、江戸に歸る。十一月、復伏見に赴く。
十二月、島津忠恒、盡く國內の亂を平け、來り謁し、其稽綏の罪を謝す。是より先、前田利長、浮田秀家未だ死せざるを告ぐ。乃浮田氏の臣の嘗て其死を告げし者を召して之を詰る。告げし者死を請ふ。内大臣、其忠を嘉して之を赦す。是に於て、忠恒白して曰く、「秀家は實に臣の所に在り。彼れ關原の渠率たり。天子の容れざる所なり。然りと雖、窮し來りて臣に投す。臣殺すに忍びず。願くば幕下拵けて之を包容せよ」と。
乃死一等を宥して、之を八丈島に流す。明年を以て配所に赴かしむ。
是の歳春、井伊直政卒す。直政、關原の功を以て、首として石田氏の故邑を賜ひ、澤山に居る。尋いで命を奉じて彦根に城く、未だ成らずして歿す。其子直勝封を襲ぐ。
最の歳夏、内大臣、佐竹義宣を廢して、庶人と爲さんと欲す。其父義重、哀を乞ふを以て、乃其常陸八十萬石を收めて、出羽の秋田二十萬石を賜ひ、其弟貞隆の岩城を收めて、出羽の龜田を賜ふ。秋田氏、關原の役に従はざりしを以て、其國を收めて、常陸の宍戸を賜ひ、松平康重に命じて、常陸の地を檢せしむ。佐竹氏の將軍猛虎、亂を作して水戸を襲ふ。康重、豫め之を知り、邀へ撃ちて猛虎を擒にす。
是の歳冬、小早川秀秋卒す。嗣なし。其備前を收め、其老稻葉、平岡氏、嘗て關原に功あるを以て、召して之を用ゐる。
内大臣、神原康政に賜ふに、水戸を以てせんと欲す。辭して曰く、「臣、關原の役に罪あり。罰を免がれて、賞を受くるは、臣の安ぜざる所なり。臣の邑は江戸に密邇す。緩急以て身を致すを得ん。徙る可からざるなり」と。遂に馳せて館林に還る。本多正信、人をして之を止めしむれども聽かず。是に於て、五男信吉を水戸二十萬石に封じ、其舊封佐倉を以て、七男忠輝を封じ、岩城を以て鳥居忠政に賜ひ、二十萬石を食ましめ、以て其父元忠の義に死せしに酬の。關原の役より此に至るまで、賞罰略畢り、天下大に定る。

八年

入朝拜命
【乃祖】源義家
室町の禮式
義直
秀頼、秀忠の女と婚す

八年二月、天皇、詔して、源家康を以て征夷大將軍と爲し、右大臣に進め、淳和狝學、兩院の別當を兼ね、源氏長者に補し、隨身兵仗を賜ふ。十二日、大納言藤原兼勝、參議藤原光豊、傳奏司を以て詔書を奉じ、伏見に就きて拜す。少將秀康、參議に進み、從三位に叙せらる。其餘の威屬、將吏、叙任差あり。二十二日、入朝して命を拜す、井伊直勝、本多忠勝等の十餘將、騎して輿傍に從ふ。參議徳川秀康、參議細川忠興、參議京極高次、少將池田輝政、少將福島正則、後乘たり。白金萬兩を獻す。皇后、皇太子、及び宗室、百官、皆贈遺あり。天皇、之に酒を賜はりて曰く、「天下の亂るゝこと久し。汝能く之を略定す。朕汝の功を勅し、乃祖の職を擧げしむ。宜しく我が師を統べ、以て王室を鎮護すべし」と。大將軍稽首して曰く、「家康、不才と雖、敢て王命を服膺せざらんや」と。禮畢りて出づ。文武庶僚、悉く二條城に詣りて之を賀す。
大將軍の初め關原に捷つや、即永井直勝をして、細川藤孝に就きて室町の禮式を諮はしむ。是に於て、又藤孝と禮を諮す。
是の歳春、七男忠輝を信濃の河中に封じ、八男義直を甲斐に封ず。義直、幼にして未だに之かず。平岩親吉をして其國事を攝せしむ。河中の城主森忠政を美作に徙し、其國封に加ふ。三月、西道の牧長、盡く江戸に朝す。
四日、大將軍、伏見に還る。時に豊臣秀頼、右大臣と爲る。年已に十一なり。大將軍、孫女を以て之に妻さんと欲す。六月、大納言、夫人淺井氏をして、女を携へて京師に赴かしむ。七月、大久保忠鄰をして女を大阪に送らしむ。黒田長政、弓銃手三百を以て之を衛る。大將軍、之を聽きて擇ばず。豊臣氏、素より奢華を尙ぶ。是に於て、白綾を以て城内の道途を覆はんと欲す。片桐且元曰く、「徳川公、之等の事を喜ばず」と。趣して之を撤せしむ。婚既に成る。秀頼之を妻視せず。淀君之を婦視せず。福島正則をして、密に西の諸侯の誓書を徴せしむ。十月、大將軍、右大臣を辭す。尋いで江戸に歸る。十一月、大納言、右近衛大將を兼ね、右馬寮御監に補せらる。

頼宣
直孝
一里塚
家光生る
邸及び質を
江戸に置く
黒田孝高卒
紅毛・安南
松前慶廣
宗義智
朝鮮
孫文成
十年
韓人を見る

是より先、水戸の城主信吉卒す。嗣なし。九男頼宣を水戸に封ず。是の歳、井伊直政の遺腹の子直孝を江戸に召す。
九年二月、東北の三道をして道程を定め、塚樹を置き、三十六町を以て一里と爲す。織田氏の故法を用ふる。既にして西南の四道皆之に倣ふ。
三月、大將軍、京師に入る。六月、入朝す。七月、大納言の夫人淺井氏、男家光を江戸に生む。大將軍、其幼字を授けて竹千代と呼ぶ。
是の歳、藤堂高虎、議を倡へて、諸侯をして邸及び質を江戸に置かしむ。相良氏、首として其母を納る。衆之に繼ぐ。是の歳、黒田孝高卒す。關原の事、孝高の計多きに居る。其九州を定むるや、妄に一人を戮せず。既にして老を告げ、世事を謝絶す。大納言、比するに漢の張良を以てす。卒するに及びて、殊に之を悼惜す。關原の捷より、徳川氏の威海外に溢る。紅毛、安南の諸國、皆來貢す。而して松前慶廣、教旨を奉じ、蝦夷を約束す。是より先、大將軍、對馬守宗義智に謂て曰く、「豊臣氏の朝鮮を伐つは、我が知る所に非ず。我れ彼と皆怨仇なし。彼れ苟も入貢せんと欲せば、我れ當に之を許すべし。然れども我より和を求むるに非ず。子其意を體し、往きて試に之を計れ」と。義智、國に往き、使を遣して之を朝鮮に諷す。朝鮮、明人の來り成るに苦しみ、遂に和を成さんと欲す。然して喜懼相半す。是の歳、孫文成等をして、對馬に來りて入見を請はしめ、且其俘囚を還さんことを索む。義智、使を馳せて之を報ず。大將軍答へて曰く、「明春、吾が父子將に入朝せんとす。卿、率ゐて京師に詣りて候て」と。義智、其教の如くす。板倉勝重、旨を受けて之を大徳寺に館せしむ。
十年正月、大將軍、京師に入る。二月、韓人を伏見に見る。諸道をして韓俘を檢して返し予へしむ。義智に謂て曰く、「吾れ將に、老せんとす。貢使來らば之を江戸に致せ」と。又曰く、「吾れ鎌倉の禮を擧げて、右大將をして拜賀せしめんと欲す。期、近に在り。宜しく韓人を留めて、其儀衛を觀しむべし」と。乃義智、邑

秀忠入朝
征夷大將軍
大御所
島津、淺野
と婚す
【方金】一分
大久保長安
鑄錢
十一年
延を修拓す

を肥前に賜ふ。
三月、大納言、上杉、佐竹、伊達、最上氏を率ゐて西上す。特に島居忠政に命じて、後殿と爲す。仗戦途に載つること十有七日。先伏見に入り、遂に入朝して、大將の命を拜す。四月、大將軍、奏して職を辭せんと請ふ。優詔して、之を許し且遷して左大臣と爲さんと欲す。固く辭して還る。十六日、詔して、源秀忠を以て征夷大將軍と爲し、内大臣に遷し、正二位に陞さる。仍舊職を帶ぶ。弟忠吉、三位中将に進み、弟忠輝四位少將に任ぜらる。十日、入朝して命を拜す。東の諸侯、及び前田、毛利、島津氏、盡く従ふ。是より世前大將軍を號して大御所と曰ふ。
五月、前將軍、豊臣秀頼に諷して、入朝せしむ。淀君、性猜忌なり。固執して遣らず。
少將忠輝、命を奉じて往き、職を襲ぐことを告ぐ。六月、大將軍、江戸に歸る。
七月、諸侯、餘名に課して、重ねて伏見城を修めしむ。
十月、前將軍、江戸に歸る。
十二月、榊原康政の女を養ひて池田利隆に妻す。又異父弟松平定勝に謂て曰く、「島津、淺野、みな我と婚を結ぶを冀ふ。汝が二男みな已に室あるべし。宜しく長男をして島津に娶り、次男をして淺野に娶らしむべし」と。定勝命を奉ず。
是の歳、金工光次をして、更に方金を造らしむ。初め上杉氏、佐渡を有し、毛利氏、石見を有して、皆白金を出す。然れども多く鑄造する能はず。豊臣氏、佐渡を收るも亦大利なし。前將軍の二國を收むるに及びて、甲斐の人、大久保長安をして、之を掌らしむ。居る事二歳にして數萬斤を得たり。長安又伊豆を探る。其利も亦等し。乃豊臣氏の故制に因りて、金幣を造る。次年、又新錢を鑄る。民皆之を便とす。
十一年春、前將軍、建白す、「禁廷狹隘にして、朝議を行ふ可からず」と。遂に天下の侯伯に課して、之を修拓



江戸城を修む
 榊原康政卒
 江戸城成る
 頼房
 十二年駿府に城く
 忠吉卒す
 義直尾張に徒る
 秀康卒す
 韓人、入貢

し、各名を礎に刻す。参議秀康、其事を掌る。秀康次いで中納言に遷る。又大に江戸城を修め、藤堂高虎をして、池田、福島、加藤、黒田、浅野、細川等の十五姓を卒るて工を助けしむ。

三月、前將軍、京師に赴く。五月、榊原康政卒す。子康勝に命じて封を襲がしむ。

九月、島津忠垣に松平の氏及び偏諱を賜ひ、名を家久と改む。是より諸藩多く氏を賜ふ。

是の月、江戸城成る。宏壯なること天下第一と稱す。藤堂氏、功を以て備中の地萬石を賜ふ。其餘差あり。

十月、前將軍江戸に還る。

是の歳、十男頼房を常陸の下妻に封じ、五萬石を食ましむ。少將忠輝の爲に伊達氏に娶る。内藤清成、青山忠成、奉行職を罷む。安藤重信を以て之に代ふ。駿府の城主内藤信成を長濱に徙す。

十二年正月、海道及び畿西の諸國に課して、駿府に城く。前將軍、疾に嬰りて昏倒す。概にして癒ゆ。訛言あり。二月、乃、四部の散樂を張り、令を下して縦觀せしむ。前將軍、將軍、諸侯を率るてこれに臨む。訛言立所に止む。

是より先、中將忠吉、疾あり。少間あり。江戸に來りて大久保氏に寓す。三月、忠吉卒す。嗣なし。義直を尾張に徙し、六十萬石を食ましめ、平岩親吉をして犬山に居らしむ。

中納言秀康、伏見の留守たり。是の月、疾を以て調して歸る。兩月にして卒す。秀康、武にして政を善くす。内外之を惜しむ。其子忠直、封を襲ぐ。後、少將に任ぜらる。次子直基、結城氏を繼ぐ。

三月、前將軍駿府に老す。

松平定勝を以て伏見の留守と爲し、井伊直孝を以て之に副とす。

是より先、韓囚、其國に歸りて我が新政を説く。韓主、心、之に嚮ふ。五月、使者呂祐吉等を遣して入貢し、兩府に詣らしむ。是より將軍禪代毎に輒來り、永く我が屬國と爲る。兩將軍、宗義智の功を奏して、四位

林信勝
 天主閣
 十三年
 定次、利宗の封を收む
 十四年
 高虎阿濃津に徙る
 頼房水戸に徙る
 造艦を禁す
 島津家久琉球を討つ

侍従と爲し、十萬石に比ふ。前代は、外國の書信を皆僧侶に委ぬ。是に於て、博士林信勝に命じて之を掌らしむ。是の夏、東北の諸侯に課して、江戸に天主閣を作る。

十月、前將軍、江戸に之き、西域の府藏を擧げて將軍に賜ひ、又茶會を設けて將軍を招く。上杉景勝、佐竹義宣、伊達政宗を以て接伴と爲し、皆手づから茶を賜ふ。是の時に當りて、兩公數諸侯の邸に臨み、毎に歡を極む。十二月、前將軍、駿府に還る。府城、災あり。

十三年、再之を城く。三月成る。九月、將軍、諸侯を率る、往きてこれを賀す。

是より兩公、二府に往來す。而して豊臣氏以下、歳使を駿府に遣して正を賀す。

是の歳、筒井定次は淫虐を以て、前田利宗は喪心を以て、並に封を收め、利宗の呂八上を以て、松平康重を徙封す。其地形の山陰を扼するに足らざるを以て、乃改めて篠山に城き、藤堂、及び池田、福島、加藤、浅野氏に課す。

十四年正月、義直、國に之く。前將軍、之を送り、二月、歸る。九月、脇阪安治を大洲に、富田知信を宇和島に徙し、伊賀、伊勢の二十三萬石を以て、藤堂高虎に賜ひ、阿濃津を治めしめ、勳舊の臣に比す。是より先、廷臣、伴を結びて姦淫する者あり。前將軍、勅を奉じ、板倉勝重に命じて之を按治せしむ。十一月、其首罪一人を誅し、其餘を流竄す。十二月、頼宣を駿河、遠江の五十萬石に封じ、濱松を治めしめ、頼房を水戸に徙す。

是の歳、諸侯の妻子盡く江戸に至る。其會同する者は留ること期年にして去らしむ。著して永制と爲す。西の諸侯の多く戦艦を造るを禁す。

是より先、島津家久、教を奉じて琉球を招く。琉球至らず。請ひて之を討つ。是の歳、春、其將新納一氏を遣し、八千人を將るて南伐せしむ。樺山久高、先鋒たり。東求島に抵り、琉球の戍兵三百を執ふ。夏、難巴津を攻む。虜、鐵鎖を以て船を聯ね、津口を扼守す。而して津の傍に山あり。險にして蛇蝎多し。虜持みて兵を

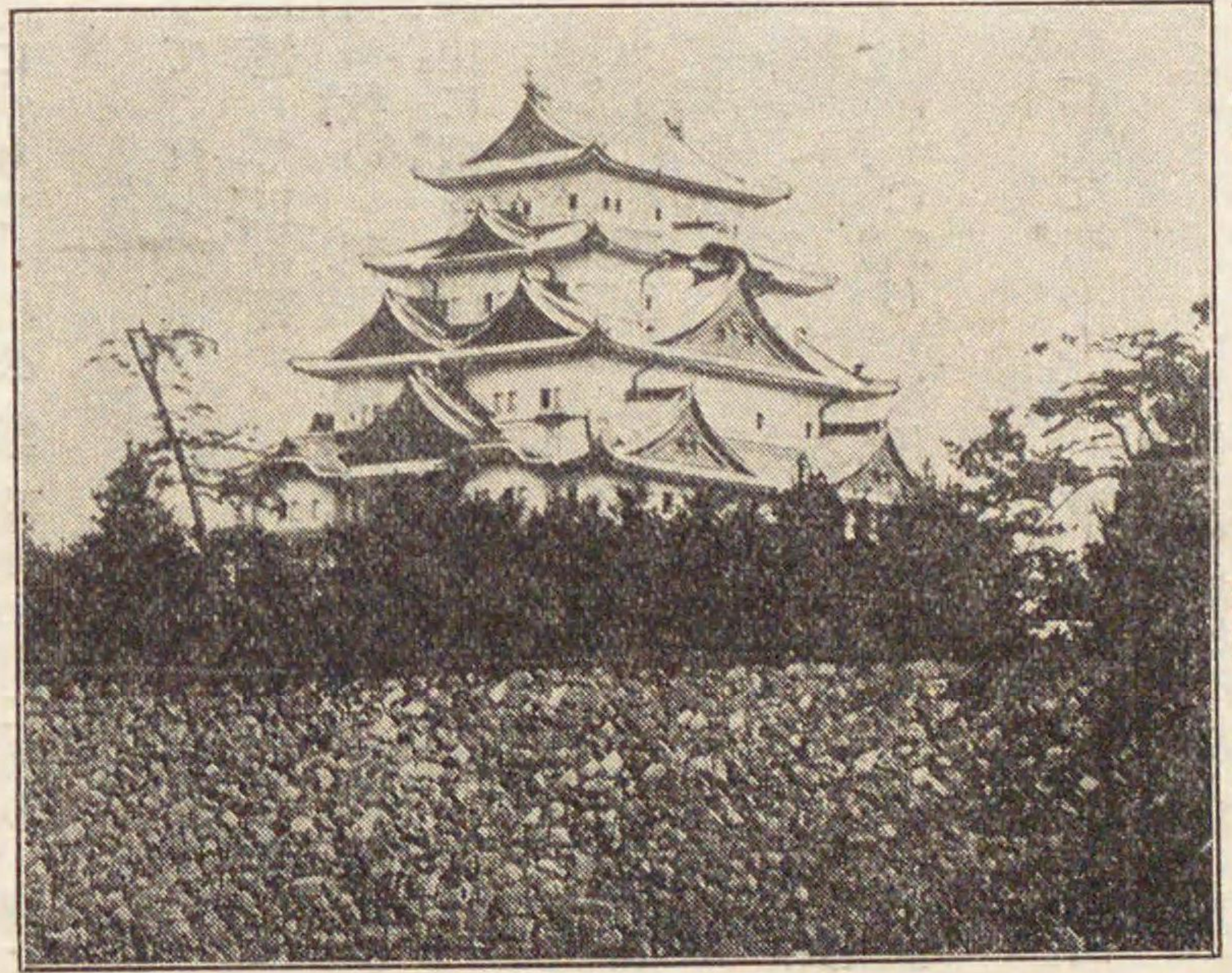
琉球王尙寧
琉球を定む
阿媽港
名護屋城
十五年
堀直寄
遠江に獵す
名護屋に城

置かず。我軍、火を放ちて山を緒にして上り、進みて楊腰灘を奪ひ、千里山に戦ふ。利あらず。轉じて朝築城を攻めて、之を抜く。琉球王尙寧、其弟具志をして來りて降を乞はしむ。許さず。五戦して國都に至り尙寧、及び王子、大臣數十人を擒へて、嚴しく抄掠を禁じ、國民を按撫す。六十日を以て琉球を定む。秋、幕議、琉球を以て島津氏に賜ひ、其臣隸と爲す。是より先、我が賈船、阿媽港に至り、皆誘殺せらる。其三人、潜に逃れ、歸りて之を告ぐ。是の歳、港人二百、長崎に至る。幕府、原の城主有馬晴信に命じ、長崎奉行長谷川藤廣を助け、撃ちて港人を盡にす。後二歳、其大人來り謝す。乃印信を給して互市を許す。

十五年正月、將軍、内藤忠重を以て嗣子の傳と爲す。松平正綱の子信綱、阿部正次の子正秋、侍臣と爲る。二月、將軍、駿府に適く。是より先、堀忠俊の宰堀直清、政を專にし、庶兄直寄を讒して之を逐ふ。直寄、走りて之を駿府に訴ふ。閏二月、兩公、親之を聽く。直清、辭、屈す。之を山形に放ち、忠俊を山城に放ち、直寄を信濃の飯山に封す。越後を以て少將忠輝を封じ、舊封を併せて五十萬石と爲し、福島を治めしむ。尋いで高田に遷る。

是の月、將軍、大に遠江に獵す。本多忠勝、桑名より來り謁して曰く、「往年老僕、太公に従ひ、武田信玄を茲に拒ぐ。爾時、信玄の兵を以て衆盛當る可からずと爲せり。今郎君の衆、信玄に什倍せり」と。

是の春、義直の爲に名護屋に城く。前田氏以下十七國に課して役を助けしむ。諸侯の篠山の役を助くる者、



正則
清正
琉球王來る
本多忠勝卒
(淺野長政肖像)
十六年
後水尾天皇
秀頼二條城に詣る
淺野長政卒



竣を告ぐ。命じて名護屋を助けしむ。福島正則、池田輝政に謂て曰く、「土木荐に興り、我が輩、困敝す。夫の兩府の若きは敢て辭せざる所なり。此等の私役に、復我が輩を驅使するは何ぞや。子は駿府の愛婿たり。盍ぞ我が輩の爲に之を説かざる」と。清正、髻を奮ひて曰く、「左衛門、何ぞ此言を出す。役を助くるを欲せずば、則速に反くに如かず。反く能はずば、則何ぞ此言を出すや」と。輝政大に笑ひて止む。前將軍之を聞き、輝政をして諸侯に言はしめて曰く、「土木を厭ふ者は、宜しく速に國に就き、壘を高くし溝を深くして、我が旃を映つべし」と。諸侯大に懼れ、力を併せて役に就く。數月にして成る。

八月、島津家久、琉球王を携へて駿府に來謁し、方物を獻じ、遂に江戸に造る。

九月、將軍、王を釋して其國に復らしめ、島津氏に命じて俘虜を歸さしむ。

十月、本多忠勝卒す。忠勝十四歳より軍に従ひ、大小五十餘戰、戰ふ毎に皆勝つ。而れども未だ嘗て創を被らさず。前將軍、殊に之を悼み、長子忠政をして封を襲かしむ。是より藤堂高虎、忠勝に代りて伊勢を鎮す。

十六年三月、前將軍、京師に如く。是より先、朝旨、以て太政大臣と爲さんと欲す。固く辭して拜せず。是の月、皇太子禪を受く。是を後水尾天皇と爲す。前將軍、諸侯に命じて上皇の宮を修めしめ、多く供御の地を置く。

前將軍、人をして豊臣秀頼に謂はしめて曰く、「婿を結びてより未だ相見ず。恐らくは物議を生ぜん。願くは一たび來りて衆情を定めよ」と。秀頼、年十九なり。驕逸にして外事を知らず。事みな淀君に決す。淀君遣らざらんと欲す。嫡母淺野氏、使をして再命に違ふ可からざるを諭さしむ。乃之を遣る。四月、二條城に詣る。前將軍、饗して之を還し、義直、頼宣を遣し、大阪に往きて之を謝せしめ、白金一萬三千兩を遣る。乃駿府に歸る。

是の月、淺野彈正少弼卒す。前將軍、最少弼と親み善し。常陸の眞壁五萬石を以て、其湯沐の邑と爲す。

加藤清正卒
角倉了以
勸合印
長崎
耶璵子
外教を禁ず
有馬晴信
十七年
平岩親吉卒
春日神を修
む
伊勢大廟に
准す
蒲生秀行卒

而して時に召見して與に碁を圍む。其没するに及びて、復奕せず。乃眞壁を其季子長重に賜ふ。
五月、加藤清正卒す。嗣子忠廣、猶幼なり。幕議、藤堂高虎をして、往きて國事を視しむ。
十一月、兩公、偕に上野に獵す。是より先、京師の富人角倉某、上書して便宜を言ひ、丹波の漕を通せんと請ふ。之を許す。尋いで甲斐、駿河の漕を通するを命ず。是の歳、又鴨川を引きて伏見に通せんことを請ふ。又之を許す。
是の時に當りて、夷蕃の入貢、若しくは互市を乞ふ者二十餘國。前將軍、吏に命じて、書を明の福建の守に贈る。故事に因りて勘合の印を請ふ。守、疑懼して答へず。而して其商舶の來る者益衆し。乃長崎を以て互市の地と爲し、他に依泊することを禁ず。初め豊臣氏、耶蘇教を禁ず。既にして禁弛む。是に至りて蠻人耶璵子、變を上り、蠻教を倡ふる者は、みな非望を覬覦す」と告ぐ。乃海内に令して蠻人を檢せしめ、盡く之を逐ふ。我が民の其教を奉ずる者は、僧に命じて之を諭さしめ、聽かざる者は流斬に處す。耶璵子を江戸の東郭に置き、厚く之を視る。又有馬晴信、蠻教を修むと告ぐる者あり。次年、晴信を甲斐に放ち、尋いで死を賜ふ。其子は前將軍の義女孫の婿たり。因りて封を襲ぐを得たり。
十七年正月、平岩親吉卒す。子なし。親吉は義直の假父たり。故を以て敢て後を立てず。前將軍、尾張に適き、二月、歸る。六月、京畿の豪商を江戸に徙す。七月、春日祠を修む。是より先、祠樹折る。朝議、以て凶兆と爲し、來りて諮る。前將軍對へて、曰く、「是れ神以て祠を修めんと欲するのみ。乃是の命あり」と。因りて穀祿を給し、伊勢の大廟に准す。又嘗て朝臣と議じ、天下の寺祠修造の節を制し、嚴に新立を禁ず。是の時、越前の列宰、權を争ひて來りて懇ふ。十一月、兩公、江戸に在りて之を聽く。一人は不直に坐して流に處し、一人は愧耻して自殺す。前將軍、本多成重を遣して宰と爲し、舊宰と並に國事を視しむ。成重は重次の子なり。幼にして秀康に侍せし者なり。是の歳、蒲生秀行卒す。子忠明、我が外孫なるを以て、嗣ぎて會津を鎮す。

十八年
皇宮を修む
池田輝政卒
淺野左京大
夫卒す
【岐阜】秀信
長安の姦覺
る
（池田輝政
肖像）
老中職
【中原】相模
馬場忠時
山口重政
大久保忠鄰
を彦根に放



十八年正月、三十七藩に命じて、皇宮を修めしむ。是の月、池田輝政卒す。池田氏、實は楠氏なり。楠正行の節に死するや、遺腹の子教正、攝津の池田氏に育はる。其裔恒利、始めて尾張に徙る。恒利の孫を輝政と爲す。輝政、徳川氏を助けて禍亂を定む。人以て其祖を辱しめずと爲す。長子利隆、封を播磨に襲ぐ。二弟忠繼、忠雄、並に我が外孫なるを以て、分れて備前、淡路を領せしむ。
八月、淺野左京大夫卒す。關原の役に、大夫、首として岐阜を破り、功最大なり。而して豊臣氏を保護すること衰へず。前將軍、心に深く之を戀とし、遂に其女を以て義直に妻さんと約す。未だ婚成らずして卒す。子なし。二弟あり。仲は成晟、但馬守と稱す。少より大阪に在り。國人、嫌を避け長重を立てんと請ふ。前將軍、命じて仲を立てて封を襲がしむ。
是の歳、大久保長安の奸利の事覺る。會病みて死す。其七子を誅す。故石川數正の子康長、連坐して邑を奪はる。康長の邑深志を以て、小笠原秀政に賜ひ、其舊封に復す。是の歳冬、富田知信、高橋元種、皆罪ありて封を收む。
是の時、大久保忠鄰、本多正信、土井利勝、安藤重信、酒井忠世、江戸の老中と爲り、本多正純、成瀬正成、安藤直次、駿府の老中と爲り、分れて天下の諸政を執る。是の歳秋、前將軍、江戸に適く。十二月、將に駿府に還らんとす。中原に次す。甲斐の老中、馬場忠時、變事を上りて曰く、「大久保忠鄰不軌を謀る」と。馬場嘗て讒を蒙り、小田原に放たる。忠鄰に申雪を請ふ。省られず。怨望す。是より先、忠鄰、其子忠常を喪ひ、乃疾と稱して歸る。又山口重政と婚す。吏、其告げざるを劾して、重政の封を奪ふ。忠鄰罪を謝すれども報ぜず。乃門を杜じて出でず。馬場之を時とするなり。又正信、忠鄰と卻ありと聞き、遂に本多氏に因りて誣告す。前將軍、驚き還りて江戸に入り、忠鄰をして京師に如きて耶蘇教を檢せしむ。歳を踰ゆ。正信、命を京師に傳へて、忠鄰を彦根に放ち、小田原の外郭を毀ち、其士臣を逐ひて兵備を箱根に設く。前將軍、乃駿府に還る。板倉勝重、命を奉

天海
大久保忠季
經籍を刊行す

じて忠鄰に詣る。館人走り報ず。忠鄰方に客と突す。徐に局を斂めて出で、命を聴く。京師驚擾す。忠鄰乃
鎧仗を縛し、之を板倉氏に送りて、終に彦根に赴く。其族皆連坐す。叔父忠佐卒す。亦國を除き、城を毀
つ。安房の里見氏、忠鄰と交り通するに坐して、國を奪はる。忠鄰、配所より書を駿府に上りて曰く、「臣、
縦、誅に伏すとも、反心なきを明にせん」と。有司敢て通ぜず。獨成瀬正成、爲に之を通す。僧天海、密教
を以て親近せらる、亦從容として申救す。將軍の怒、釋けざるを以て乃止む。井伊直孝、彦根を領するに及
びて、忠鄰に勸めて再訴せしむ。辭して曰く、「是れ君の惡を顯すなり」と。亦止む。兩將軍、大久保氏の舊
勳を思ひ、忠常の子忠季をして其封二萬石を襲がしめ、後畢に其舊に復す。
前將軍、素より意を學術留む。關原に捷ちし年、即經籍の未だ刊行を経ざるものを取りて、盡く之を木に
上せ、禮文を修むるを以て志と爲す。職を讓りてより以來、益天下に令して、遺書を購求し、廷臣の典故
を語する者を引き、林信勝等と、前に購究せしめ、日夕倦まず。又文學の士を招き、縑素と無く皆之を禮重
す。是の歳、親、試るに、政を爲すに徳を以てするの頌を以てす。將軍も亦、草之に風を尙ふれば必偃
すの賦を試る。

版改邦文日本外史卷之二十一終

版改邦文日本外史卷之二十二

徳川氏正記

徳川氏五

十九年
秀忠右大臣
となる
【孫女】和子
大野治長
織田長益
【兩府】駿府
江戸
片桐且元
方廣寺

慶長十九年三月、大將軍、從一位に陞り、右大臣に遷る。天使、就きて拜す。四月、天使、江戸より歸り、駿
府に過りて、内旨を諭し、前將軍を以て太政大臣と爲し、三宮に准す。辭して敢て當らず。又、孫女を納れ
て中宮と爲さんことを諭す。乃、詔を奉す。
是の時に當りて、豊臣秀頼已に長じ、其臣大野治長等、陰に兵を擧げて其舊業を復せんことを謀る。治長、
姿容あり、密に淀君と通す。言ふ所聽かれざる莫し。淀君の季父織田長益と議して、書を前田利長に遣りて
曰く、「先君、遺命あり。君益ぞ來りて嗣君を輔けざる。城内、甲仗豊足す。福島正則等の貯へし所の穀粟、積
みて數萬石に至る。以て爲す有るに足る」と。利長、疾を以て之を辭す。其書を以て來り、兩府に獻す。五
月、利長、卒す。子利光に命じて封を襲がしむ。秀頼の傳片桐且元、常に秀頼を誡めて曰く、「徳川太公は、
義元の誼を失はずして、氏眞を納れ、信長の好を遺れずして、信雄を助けたり。先公、其然るを知る。故に
終に臨みて孤を託す。君、務めて其驩心を失はずば、則以て長久なる可し。不らずば則、禍將に測られ
ざらんとす」と。秀頼頗る悟る。而れども群臣悦ばず。且元、數關東に使用するを以て、其私有るを意ひ、
稍これを猜防す。是より先、秀頼、方廣寺を造りて、先志を繼ぐ。是に至りて、功を畢る。又巨鐘を鑄る。

高山友祥
【海西】阿媽
港等の地

鐘の銘

大阪の女使
到る

本多正純
三策

且元茨木に
【孺子】秀頼
高田城

乃且元をして來り告げしめて、之を慶せんことを請ふ。期するに七月を以てし、秀頼親往かんとす。是の
歳、高山友祥、内藤如安等、蠻教を奉ずるを以て、京師の獄に下る。前將軍、吏二名を遣し、往きて板倉勝
重と議せしめ、友祥等を海西に放ち、餘黨を流す。是に於て、界浦に犯人あり。二吏、卒を率ゐ、往きて
之を按ず。途に大阪を經。訛言あり、曰く、「且元、秀頼の出づるを候ひ、東吏を導きて城を取らんとす」と。
秀頼、懼れて出でず。二吏、既に界浦を按じ、遂に長崎に之く。
訛言乃止む。將に之を慶せんとなす。其鐘銘忌諱に觸れ、呪咀する者に類す。上棟牌も亦、式の如くならず。
林信勝、僧天海等、交之を言ふ。前將軍怒り、乃使を馳せて其慶を停めしむ。
八月、且元、治長等來り謝す。女使二人、又淀君の命を奉じて至る。前將軍、二女使を召して之に謂て曰く、
「右府は吾が孫女の婿なり。淀君も亦吾が婦の姉なり。吾れ豈相負かんや。吾れ右府を視ること猶子の如し。
而れども右府の我を視ること猶仇讎の如し。聞かば如くは『大阪、日々士を招き、甲を繕め、多く糧餉を時
む』と。吾れ未だ其何の謂なるを知らざるなり。今吾れ在れども、猶此の如し。況や後世をや、然りと雖
是れ右府母子より出づるに非ず。蓋し奸人に誑誤せらるゝのみ。苟も非を悔め誠を輸さば、則國家無事なら
ん」と。復銘詞を問はず。二女大に喜び、遂に江戸に赴き、夫人に候す。
九月、本多正純、僧天海をして且元を責め、誠を輸すの實を以てせしむ。且元、其旨を請ふ。答へず。且元
乃二女と偕に辭し去り、行之を思ひて、三策を得たり。曰く、「淀君を納れて質と爲さん」と。秀頼をし
て江戸に居らしめん。曰く、「大阪を避けて他に徙らん」と。因りて密に啓して曰く、「母を徳川氏に質とする
者は、先公の嘗て爲し、所なり。是を上策と爲す」と。或人、且元は君を賣ると譖る。淀君大に悲り、群臣
と議を決し、且元を誅して兵を擧げんとす。且元、其邑茨木に奔る。遠近騒然たり。板倉勝重、書を飛ばせ
て來り報ず。十月朔、報、駿府に至る。前將軍方に諸子と散樂を觀る。報を得て曰く、「孺子終に悟らざる
か。之を除かざるを得ず」と。乃樂を撤し、之を江戸に報けしむ。是の春、東の諸侯に課して、高田に城く。

秀頼兵を募
十萬人
【城下】大阪

【淀】山城
【葛葉】河内

秀頼諸侯を
招く
島津家久
淺野但馬守

大阪陣
東軍發令

是の秋、西の諸侯に課して、江戸を修む。是に於て、皆罷めて國に就きて、大阪に備へしむ。
秀頼も亦、益金を散じて兵を募る。關原の餘黨、若くは諸藩の亡命の者、大阪に四集す。號して十萬人と稱
す。又、四に出で抄掠して軍須を貯ふ。東府の穀五萬石、其城下に在り。板倉勝重、人をして大野治長に謂
はしめて曰く、「之を道路に聞く」諸公、將に旗鼓の事有らんとす」と。不腆弊邑の穀、敢て從者を犒はんと。
治長、辭して敢て取らず。勝重乃賈人をして京師に漕送せしめて、一兵をも勞せず。伏見の留守松平定勝
井伊直孝、勝重と議して、謀を大阪に遣し、悉く消息を知り、輒之を東府に報ず。關を淀、葛葉に置きて、
兵士の往來を檢す。尼崎の城主建部某は、關原の降將なり。池田氏と姻あり。前將軍、池田利隆に命じて、其
威屬下間重景を遣し、兵を將りて援け守らしむ。片桐且元、已に降を我に納れ、將に茨木より界浦に赴かん
とし、大阪の兵と尼崎の下に戦ひ、救を重景に求む。重景、其僞ならんことを疑ひ、肯て救はず。且元、
敗走す。大阪の兵、始合にして捷ち、氣倍壯なり。大に守備を議す。其城は故秀吉の築きし所にして、天下
の力を窮め、壘壘壯固にして匹なし。西北に水を帶び、東南に池澤多し。是に於て、益壘寨を設けて守兵を
置き、遂に間吏を發して、諸侯を招く。伊達政宗、之に小山に遇ひ、縛して江戸に送る。島津家久、其幣を
卻け、馳せて駿府に告げ、且、師の期を請ふ。淺野但馬守は國富み兵強し。而して大阪と腹背を相爲す。議
者以て大患と爲す。已にして大阪果して數使を遣し、其君臣を誘ふに利を以てす。但馬守答へて曰く、「我
が父兄故太閤に報ゆる所以は是れなり。吾が東府に於ける恩誼輕きに非ず。今故無くして之に反きて、亂人に
黨せば、不義孰かこれより大ならん」と。使者、猶來りて百計勸め説く。但馬守、乃其使を斬らんと欲す。
懼れて止む。

前將軍、諸の報告を得て、乃軍令を下して曰く、「伊勢、近江、美濃、尾張、越前等の兵は、急に淀勢多
を扼し、大和の兵は、自其地を守り、北陸諸國の兵は、大津、阪本に陣し、中國の兵は、池田に陣し、南海
西海の兵は、和泉の海濱に泊して、並に大軍を俟ち、輕しく戰ふ勿れ」と。東海、東山の將帥は、皆前將

前將軍
將軍

前將軍駿府を發す
大阪の刺客

直孝、高虎
松平忠明

伊奈忠政

【大仙陵】和泉仁德帝陵と稱す
薄田兼相
澤野但馬守

池田利隆
長柄川

軍に隸し、關八州、及び陸奥、出羽の將帥は、皆將軍に隸す。而して世子家光は、少將忠輝、及び酒井忠重、其弟忠利等と、江戸を居守す。蒲生、最上氏以下、之に隸す。頼房は、其傳中山信吉と、駿府を留守す。義直は、其傳成瀬正成と、頼宣は、其傳安藤直次と、皆軍に従ふ。義直は、初め右兵衛督たり。頼宣は常陸介たり。並に從四位下に叙せらる。後並に從三位に進み、參議に任ぜられ、右近衛中將を兼ね。頼房は、初め左衛門督たり。後、從四位下に叙し、右近衛少將に任ぜらる。是に於て、白旗を義直、頼宣に分賜す。諸の嘗て豊臣氏の特恩を受けし者は、從ふを許さず。

十一日、前將軍、數百騎を以て駿府を發す。大阪、刺客を發し、京師に入りて駕を狙ひ、且に二條城を焚かんと欲す。板倉勝重之を覺り、盡く捕へて獄に下す。

二十二日、駕京師に至る。傳奏司、勅を傳へて勞問す。少將忠直は、二萬人を以て、前田利常は三萬人を以て、皆これに會す。居ること三日にして、諸將を召し、大阪の圖を開き、戰を議して曰く、西南の兵未だ至らず。宜しく先鋒を以て戰を挑むべし」と。井伊直孝、藤堂高虎、先鋒たり。松平忠明、本多忠政之に繼ぐ。忠明は、奥平信昌の少子なり。外孫の故を以て、氏を賜ひて龜山に封せらる。是の歳、其兄忠正卒す。

代りて其衆を領し、美濃の將士を統ぶ。是に於て、先鋒は南面より進み、北面は濟り難きを以て、伊奈忠政をして、淀川を長柄に壅ぎ、大和川を鳥飼に壅がしめ、尋いで毛利、福島氏をして、之を助けしむ。

十一日、高虎、大仙陵に至る。時に城將薄田兼相、山口弘定、平野を掠む。之を望みて走る。城將大野道見、天王寺を焚き、以て我軍を撓す。高虎、動かす。終に直孝と進みて住吉に陣す。城將堀氏弘、界浦を掠む。之を聞きて走り、高虎の軍前を過ぐ。前部渡部了、其伏あるを慮り、敢て撃たず。淺野但馬守、兵を將りて紀伊を發し、行士兵の大阪に應ずる者を撃ち、來りて高虎と事を議し、還りて大島に陣す。

池田利隆、二弟忠繼、忠雄と神崎川に至る。城昌茂、命を奉じて其軍を監す。二弟は下流を亂り、利隆は上流を涉り、進みて長柄川に至る。城將織田長益等、萬人を以て、天滿、中島を守る。利隆、濟らんと欲す。

將軍江戸を發す

住吉
平野

【二魁】家康
秀忠

高虎
跡して秀頼と曰ふ

久世廣宣
高部廣勝

磯多崎
鶴野、今福の戰

昌茂、之を止む。其夜、二弟復下流を渡り、守兵を逐ひて中島を取る。將軍は、前將軍の京師に入る日を以て、江戸を發し、程を兼ねて進み、十日にして伏見に至り、其明、二條に詣りて事を議す。

十七日、前將軍は住吉に陣し、將軍は平野に陣し、義直、頼宣は住吉の北に陣し、少將忠直、前田利常は岡山に陣し、井伊直孝、藤堂高虎は天王寺に陣し、上杉、佐竹、相馬、秋田、堀尾、京極の諸將は平野の西に陣し、伊達、金森の諸將は今宮に陣し、淺野、蜂須賀、鍋島の諸將は今宮の北に陣し、池田、加藤、山内、森、有馬の諸將は中島に陣す。九鬼、向井の諸將は兵艦を以て傳法口に泊す。兵總て五十萬人。城の四面を環りて尺地を遺さず。前將軍、城中必悔ゆるを度り、人をして和を議せしむれども肯かず。已にして住吉の選騎、夜一卒を捕ふ。曰く、藤堂の陣に適かんと欲して、誤りて此に至るなり」と。其懷を検して、秀頼の書を得たり。書に曰く、二魁深く我が地に入る。子の計中れり。宜しく速に東國の款を歸れる諸將をし

て其歸路を斷たしむべし。事成らば、則封を加ふること約の如くせん」と。前將軍、書を覽て晒ひて曰く、「彼れ、我を離間せんと欲す。謀何ぞ淺きや」と。高虎を召して、書及び卒を賜ふ。高虎訊ひて其實を得、乃其手足の指を斬り、額に黥して秀頼と曰ひ、縦ちて之を歸す。城兵、又池田利隆を誘ひて曰く、「事成らば、封するに備前、播磨、美作を以てせん」と。利隆、使者を縛して之を獻す。

兩將軍、終に進み取らんことを議す。阿部正之、安藤直次、永井直勝、小栗忠正等の數十人、巡使たり。大須賀氏の部下久世廣宣、阪部廣勝、罪を獲て出亡す。兵事に老するを以て、收録せられ、是の役に皆巡使となり。令を諸軍に傳ふ。進退操縦、意の如くならざる莫し。

蜂須賀至鎮、攻めて磯多崎を取る。九鬼守隆、向井忠勝、水軍を以て敵の候船數十艘を奪ふ。上杉景勝、鶴野を攻め、佐竹義宣、今福を攻め、みな其柵を破る。城兵、道を分ち出で、拒ぐ。船に銃手を載せて、其中間に出で、力戰して交綏く。已にして城兵、柵の守り難きを以て、之を棄て、退く。將軍、片桐且元をし

石川忠總

花房職之

城昌茂

福島

阿部正之

道頓港

城兵諸橋を
焼く

て代りて入り、備前島に屯せしむ。其最城に近きを以て、屬にするに礙手を以てす。諸將、將に博勞洲の二寨を攻めんとす。北寨の下に洲あり。蘆葦を生ず。皆銃卒を以て之を守る。我軍先蘆洲を取らんと欲す。洲、多く兵を容れず。兵寡ければ、又守る可からず。石川忠總は、實に大久保忠鄰の子なり。功を以て父を贖はんと欲し、乃請ひて、兵を以て往き、舟二隻を得て、鎗を以て棹と爲して濟る。敵の洲を守る者、皆走りて寨に上りて銃を發つ。忠總、仰ぎ攻むること連晝夜、九鬼氏、舟數十を給し、之を助けて北寨を抜く。又蜂須賀氏の援兵を得て、遂に南寨を抜き、進みて土佐港、阿波坐港を取り、還りて首虜を効す。前將軍曰く、「忠總の孫に愧ぢず」と。

是に於て、諸將争ひ進む。池田忠繼、鯉川に臨みて陣す。部將花房職之、野田、福島の一寨を望みて曰く、「旗植ちて烟なし。是れ已に逃れしなり」と。人を以て之を伺はしむるに、一人をも見ず。乃濟る。中島の諸將、繼ぎ濟らんと欲す。城昌茂、之を止めて曰く、「太公、我に命じて軍を護らしめ、其持重を戒む。公等我が言に違ふは、乃太公の言に違ふなり」と。諸將乃止む。已にして中軍、令を傳へて諸將の逗留するを責む。諸將答ふるに昌茂を以てす。前將軍昌茂を召し、林信勝をして孫武の傳を讀ましむ。將の軍に在りては、君命も受けざる所ありしに至りて、乃昌茂を願て曰く、「汝、我が命に拘り、機を見て進まざるは何ぞや」と。因りて之を逐ふ。諸將に令し、進みて福島に入らしむ。淺野氏、船兵を以て海口に至り、其聲援を爲す。阿部正之白して曰く、「西北の諸將、相踵ぎて陥没す。川場、天満の二寨は、脆薄にして水を背にす。必、通れん」と。其夜果して寨を焚きて退く。城將大野治房、道頓港を守る。亦驚き走りて城に入る。蜂須賀氏の兵、追ひて其旗幕を獲たり。十二月、忠總、忠繼、淺野、鍋島、九鬼の諸將と、進みて川場に入り、利隆等は進みて天満に入る。

東南の諸將も亦、進みて城に逼る。伊達政宗は川場に至り、井伊直孝、藤堂高虎は生玉に至り、空濠に臨みて陣す。城兵、外城の諸橋を焼き、獨淡路、本街、高麗の三橋を存す。石川忠總、城兵と高麗橋に戦ひ、

金工光次

南條光明

玉造

安藤直次

横田尹松

水野勝成
後藤基次

敵をして焼くを得ざらしめんと欲す。諸巡使、之を救はんと請ふ。前將軍、叱して曰く、「止めよ。我が軍の城に登らんと欲するに、何ぞ橋を恃まんや。彼れ、自出路を斷つのみ」と。忠總をして退舍せしめ、遂に諸將に令して曰く、「垣を設け牌を列ね、令を發ちて進み、妄に闘ひて一卒を損する勿れ」と。又天寒きを以て糧食を増す。本多正純、命を受けて、金工光次を以て介と爲し、書を城中に遣り、織田長益、大野治長をして和を議せしむ。將軍、之を聞き、來り請はしめて曰く、「圍合へり。請ふ、諸軍に令し、四面より齊しく登らん。天下の兵を以て、一城を攻む。何の抜き難きことか之有らん。和議若し成らば及ぶ可からざるのみ」と。前將軍曰く、「未だし」と。將軍、憚ばす。本多正信曰く、「太公、必、神算あらん。願くは少く之を發て」と。

藤堂高虎、私に書を城上に射て、南條光明を誘ひ、内應を爲さしむ。光明、期を約す。事覺れて殺さる。藤堂氏の兵、知らずして進み、井伊氏の兵、之に繼ぐ。加賀、越前の子弟も亦進み、玉造の貳城に逼る。故秀康の庶子直正先登し、幟を濠の上に建つ。而して城將眞田幸村、善く拒ぎ、我が兵の死傷頗る多し。前將軍烟を望み、怒りて曰く、「奴輩、敢て我が令を破る」と。安藤直次を願て、往きて之を收めしむ。將軍、令を破る者を罰せんと請ふ。前將軍曰く、「令を破る者も亦、得可からざるなり」と。兩公屢諸營を巡視す。前將軍、未だ嘗て甲を衷せず。葵號の戰袍を被て馬に上り、十餘騎を從へて生玉口に至る。城兵望み觀て之を識り、銃を叢めて雨注す。衆争ひて之を避けんと請ふ。前將軍、響を按じて徐行す。横田尹松、後れて至り、衆を排して進みて曰く、「此公、矢石に當るを喜ぶ。矢石の來る、川場より甚しきは莫し。請ふ、往かん」と。乃馬を控へて西し、城を去りて遠ざからしむ。他日、將軍、巡りて天満に至り、有馬氏の壘樓に登る。城兵狙ひて大煩を發す。從者去らんと請へども肯かず。水野勝成曰く、「元帥の師を巡るに、斥兵と異なり。當に專一處を觀るべからず」と。乃肯ひて去る。城將後藤基次曰く、「兩帥みな天授なり。豈微倖す可けんや」と。衆を止めて、妄に銃を發する勿らしむ。

茶臼山

前將軍再び和を議す

三事を約し和す

六日、前將軍、徒りて茶臼山に陣し、將軍、徒りて岡山に陣し、連珠砦を築きて相接す。壑河の功既に竣り、墮水多く涸る。城兵大に驚く。我軍士隊を以て墮を填め、竹牌を列ねて鐵楯を排し、距堙を起し、地道を鑿り、而して銃を發して鼓譟すること、毎夜三次、城兵をして休止するを得ざらしむ。前將軍諸將に令し、書を射しめて曰く、「降る者は賞あり」と。城中の人人相疑ふ。將軍、復城を凌ぎて齊しく登らんと請ふ。前將軍曰く、「吾れ聞く、良將は戦はずして勝つ」と。且兵を損じて城を得るは、吾れ取る無し」と。復金工光次をして城に入りて和を議せしむ。城中衆議して決せず。和を願ふ者多し。大野治長等、議を建てて曰く、「徳川翁は旦夕の人なり。明歳は西吉にして東凶なり。且く和を約して以後圖を爲さん」と。乃秀頼を勸めて和を請はしむ。前將軍曰く、「右府、誠に自艾めば、則吾れ復意を介する莫し。城内の客兵は、皆釋して問はず」と。因りて三事を約す。曰く、「周地を填めん」と。曰く、「大和に徙さん」と。曰く、「淀君を以て質と爲さん。必ず一に居れ」と。數日にして周地を填むるを聽かんと答ふ。而しに客兵の爲に食邑を加へんと請ふ。前將軍怒りて曰く、「之を釋すべし已に多し。奚ぞ之を養ふに勝へんや」と。議、乃輟む。乃工に命じて益攻具を造る。

或人、井伊直孝に詣りて事を議す。直孝、方に睡りて起き、目を擗りて出づ。或人曰く、「子、何ぞ懈るや」と。曰く、「我れ敵の出で、襲ふを慮り、夜は睫を交へず唯晝間、睡るを得るのみ」と。城將大野治房、道頓港の敗を愧ぢて、之に報いんこと有らんと欲す。時に阿波の兵、本街橋の西に陣す。治房、夜、出で、之を襲ふ。阿波の兵亂れ、死傷頗多し。人乃直孝に服す。

是より先、天皇、大納言藤原兼勝、大納言藤原實隆をして、來り勞はしむ。是に於て、復來りて詔旨を傳へて曰く、「卿、養老を以て風雪を我間に冒す。宜しく事を諸將に委ね。還りて京師に息ふべし。即和議を欲せば、將に秀頼に詔して之を成さしめんとす」と。前將軍稽首して曰く、「臣、少より軍旅に慣ふ。且職分の存する所、獨逸す可からず。聖慮を勞する勿れ。和議に至りては、臣、自之を修めん。以て天詔を辱くする

阿茶局

天主閣より東軍を臨む

治長質を獻す

和成る板倉重昌

島津氏

壑を填む

に足らず。秀頼をして詔を奉せしめば、則可なり。若し詔を奉せずば、適に其罪を増さん。臣、則之を誅夷せざるを得ず。是を以て敢て辭す」と。乃女監阿茶をして京師に如かしめ、常光氏を迎ふ。常光氏は京極忠高の母にして淀君の妹なり。之をして城に入りて和を勸めしむ。工場を経て往く。工人千百、群を成して、諸の攻具を造る。飛橋、輜輶、みな千を以て數ふ。常光、城に入りて、具に淀君に説く。淀君、初め秀頼と俱に城内を巡視す。守兵の頗壯銳なるを見るや、大に喜ぶ。遂に天主閣に上りて東軍を望めば、則極目みな兵なり。旌旗、天に際す。淀君、動色く。已にして備前島の軍、大煩を發し、閣の第二層に中つ。二女震死す。淀君、始めて大に驚き、秀頼に勸めて和を成さしむ。而して會常光至る。則喜懼交集る。常光命を傳へて曰く、「右府、必大坂に居らんと欲せば、則其舊封に於て、一も闕くる處無からん。特諸客兵を逐ひ、東軍をして外城を毀ち、周池を填めしめ、以て和親の實を著せ」と。秀頼母子、諸將を召して議す。議未だ決せず。本多正純、人をして治長、長益に言はしめて曰く、「公上の議已に成れり。子等遲疑せば、罪將に至らんとす」と。二人大に懼れ、急に後藤光次に因りて質を獻す。治長、其幼子を遣らんと欲す。光次之を斥けて曰く、「稚弱なる者何ぞ用らん」と。乃其家子を率ゐて還る。十九日、和成る。約して周池を填め、客兵を逐ふ。二十日、板倉重昌、入りて秀頼の誓書を監す。秀頼問ひて曰く、「兩公の何に呈す可きか」と。重昌私に對へて曰く、「太公に呈せよ」と。書を持ちて歸る。前將軍、目逆して問ひて曰く、「嚮に汝を遣すに、其呈する所を命ぜず。如何」と。重昌、狀を告ぐ。前將軍喜びて曰く、「汝に非ずば辨する能はざるなり」と。城將、我が和を恃みて懈るを度り、茶臼、山岡を襲はんと欲し、夜、人をして候ひ視しむ。其嚴備を見て乃止む。

初め西藩、島津氏未だ來り會せず。二豊、二筑の將帥、密命を受けて亦發せず。是に於て、舟艦三千餘艘を以て兵庫に至る。則和成りて已に四日なり。前將軍、人をして勞ひて之を罷めしむ。遂に圍を撤し、殊勳舊の七將を留めて、壑を填めしむ。本多正純、安藤直次、成瀬正成を以て、之を掌らしむ。諸將争ひて役を

家康京師に

入る典籍

五山の僧徒

朝廷の爵を

正す

番氏明

【國人】馬丁

伊達秀宗

筒井定次死

助く、伊達政宗、藤堂高虎等、請ひて曰く、「秀頼、命を聴くも終に保す可からず。恐らくは後患を遺さん。今に及びて之を除くに若かず」と。前將軍曰く、「吾れ豊臣氏と、義を以て合ふ者なり。長湫の捷後、和を聴して京師に入り、始めて征伐を助け。終に委託を受く。關原の役に、勢に乗じて大阪を壓する事、固より難きに非ず。今彼れ乃怨を以て恩に報ゆ。吾れ苟も之を除かんと欲せば、豈卿等の言を踐たんや。特に太閤の舊好を念ひ、以て之を保全するのみ。彼れ復我に負き、敢て不義を行はば、則自亡を取らるなり。卿等且言ふ勿れ」と。大阪の諸將、前將軍を要撃せんと欲す。二十四日、前將軍、數十騎と、夜、行營を發し、曉に比びて京師に入る。衆以て神と爲す。

初め前將軍の京師を出づるや、林信勝等に命じて、御府、及び公卿の家の典籍を案めて、五山の徒に命じ、局を開きて校寫せしむ。大阪城中に在りても遙に其役を督す。使者往來して絶えず。是に至りて功を畢へ、二本を爲り、其一を獻納し、二を駿府、江戸に置く。二十八日、入朝す。上皇、天皇、慰勞すること懇至なり。命じて朝廷の爵位を正し、諸の節會を興さんことを議す。

時に京師、流言あり、「池田利隆、觀望を懷き、中島に逗留す。故に其尼崎の成將且元を救はず」と。前將軍怒り、其封を奪ひて、其弟忠繼に與へんと欲す。利隆の老番氏明、來りて之を陳謝す。聽さずして入る。氏明裾を牽きて號哭し、死を以て之を争ふ。初め氏明の父大膳、國人たり。長湫の役に池田輝政、父兄の沒せしを見て、戰死せんと欲す。大膳、馬を控へて之を遏む。輝政怒り、鎧を以て其項を踢る。血、面に被れども縦たず。遂に其祀を存す。前將軍之を記す。其世忠節なるを嘉し、乃利隆を釋す。次年、忠繼母子みな卒す。利隆に命じて備前の國事を攝せしむ。

伊達政宗の長子秀宗、幼にして大阪に質たり。關東の役に、始めて放還せらるるを得たり。政宗、嫌を避け少子忠宗を立てて嗣と爲す。是に於て、秀宗、軍に従ふ。前將軍、之を慰み、封するに富田氏の舊邑宇和島を以てし、十萬石を食ましむ。筒井定次の遺臣、多く募に應ず。故を以て定次死を配所に賜ふ。

論功を賞す

直孝

元和元年

小幡景憲

將軍 岡山に在りて、又諸將士の功を論賞す。是の役に、井伊直孝の兄直勝、癘疾にして事に勝へざるを以て、代りて其軍を攝して功あり。將軍、遂に命じて其國を領せしむ。直孝辭して曰く、「直勝、瀛と雖先臣の養士在るあり。君の事ある毎に、臣これを攝して従ひて可なり。今庶孽を以て嫡長に先だつは、臣の安せざる所なり」と。又安藤直次に因りて力めて請ふ。將軍嘉賞す。而れども許さず。乃彦根十五萬石を賜ひ、別に呂を直勝に賜ふ。初め直孝故ありて民間に育はる。十一歳の比、強盜數十ありて、其家に入る。輒刀を抜きて一人を斫る、父直政、密に召見し、常に執る所の軍麾を以て之に授けて卒す。長ずるに及びて、召し用ゐて書院番頭と爲す。稍大番頭に進む。是に於て、既に命を拜す。次日、入りて謝す。徐に進みて、執政本多正信の上に座す。坐者、洒然として色を變ず。既に罷む。正信に謂て曰く、「今日の狀、不恭に類するなり。然れども已に故侍従の後を承く。然らざる能はず」と。正信曰く、「公、唯能く然り。是の命ある所以なり。吾れ竊に郎君の人を知るを慶ぶなり」と。

是時に當りて、諸工卒已に外隍を填め、遂に内隍に及ぶ。城中、之を詰りて曰く、「初め周池を填めんと約せしは、西南の外濠を謂ふなり。今此に及ぶは、何ぞや」と。成瀬正成對へて曰く、「之を周と謂ふは内外を周くするなり。且利親已に成る。何ぞ隍を用ゐることを爲さん。今内隍を存せんと欲するは、其意如何」と。城中争ふ能はず。遂に晨夜、役を督し、歳を超えて畢り、獨牙城の一隍を餘す。

元和元年正月三日、前將軍、京師を發す。九日、將軍京師に入り、盡く諸侯を罷めて國に就かしめ、安藤直次をして岡崎に追及せしめ、功の竣りしを告げ、且大阪再舉の計有るを告げしむ。居ること五日にして入朝し、又五日にして、東す。二月、前將軍に中泉に會し、密議して往く。十四日、前將軍は駿府に歸り、將軍は江戸に歸る。

江戸の士小幡景憲と云ふもの罪あり。出亡して前田氏に仕へ、玉造の戰に衆に先だつて奮闘す。城將大野治房之を識る。和成るに及びて潛に誘ふに厚利を以てす。景憲、伴り應じ、夜入りて治房に見ゆ。治房大

大阪客兵を募集す

大阪兵を聚む十四五萬人

勝重便服
山口重政
渡邊了

に喜び、遂に再舉の計を告ぐ。因りて期を約して遣歸す。景憲歸りて、板倉勝重、松平定勝に因りて之を將軍に啓す。將軍、前將軍と議し、知らざる者の爲して、其動息を候はしむ。大阪益客兵を召集し、間使を以て景憲を招く。勝重、定勝、これに謂て曰く、「兩公、再來り、諸軍復集ること五十日を出でじ、其間城兵或は京師を侵し、至尊を挟みて東に擧はば、則恐らくは力を費やさん。汝、勗めて之を沮め」と。景憲諾して往く。城中の諸將、師を出さんと議する者あり。治房兄弟、固執して聽かず。景憲の説を信するなり。人、治房に説きて曰く、「景憲は謀賊なり。請ふ、之を驗問せよ」と。治房驚き、甲を發して其舎を圍む。景憲笑語自如たり。治房、即を召す。即一奴を従へて入る。治房曰く、「人言果して聽く可からざるなり」と。乃之を界浦に置き、時來り見えしむ。

兩將軍、已に敵情を熟知す。而れども秀頼未だ之を知らず。三月、青木一重、及び二女使をして來り請はしめて曰く、「兵荒の後、食祿給せず。請ふ、之を賑貸せよ」と。時に參議義直、將に故淺野左京大夫の女を娶らんとす。前將軍、二女使に謂て曰く、「右兵衛督、婚を成すこと近きに在り。吾れ亦將に往かんとす。東國の女子、禮節に嫻はず。汝等幸に往きて之を相けよ。婚畢らば則吾れ自京師に適きて、賑給の事を計らん」と。乃之を尾張に遣る。已にして京師の報至る。曰く、「募兵大阪に聚る者十四五萬。兵勢前役に什倍す」と。前將軍笑ひて曰く、「多益敗るべし。必之を禁ぜざれ」と。終に令を諸侯に下す。皆前役の如し。先井伊直孝、藤堂高虎に命じて、兵を率る往きて京師を護らしむ。京師方に訛言あり、「大阪の兵來る」と。負擔して四走し、或は關門及び公卿の宅に入る。板倉氏の僚屬兵備を爲さんと請ふ。勝重曰く、「之を置け」と。乃便服して巡行し、平日に異ならず。上下倚安す。而して諸將至る。直孝は東寺に陣し、高虎は淀に陣す。去歲の役に山口重政、功を以て自ら價はんと欲し、箱根に至りて出づるを得ず。是に於て、間行して井伊氏に屬す。藤堂氏の將渡部了、敵を住吉に縱つ。高虎自疑はるゝを恐れ、甚了を請む。舊臣も亦了の新に進みて人に傲るを忿る。了、去らんと請ふ。許さず。

將軍江戸を發す

正信
高虎
攻城の法定
まる

【高槻】攝津
水野勝成

四月九日、前將軍、尾張に至り、大阪の使者を召して曰く、「吾れ聞く、「右府復兵を募る」と。兵多ければ則食乏し、固より其當のみ。吾れ將に往きて其虚實を驗せんとするなり」と。因りて使者を留めて遣らす。常光氏を遣して再び兵を弭めんことを諭さしむ。居ること三日にして、義直の婚を成し、又三日にして、尾張を發し、十八日、京師に至る。常光氏、來りて秀頼の命を聽かざるを報ぐ。又後藤光次をして往かしむ。亦答へず。乃畿内、大阪の募に應ずる者を徇へ、其妻子を收め、降る者は之を宥す。將軍、前將軍の尾張に至る日を以て、江戸を發す。少將忠輝、黒田長政、加藤嘉明と、皆自請ひて従ふ。二十一日、伏見に至る。明日、來りて二條城に謁す。前將軍、二十八日を以て師を出ださんと欲す。將軍、兵未だ全く集らざるを以て少く之を俟たんと請ふ。前將軍曰く、「此役、當に野戰に決すべし。野戰は多きを用ゐず。乃公、見兵を以て先往かん。汝、大衆を合せて之に繼げ」と。將軍曰く、「兒、此に在りて、大人をして先だ、しめば、世之を何と謂はんや」と。前將軍曰く、「吾れ老いたり。復事に遣ふ可からず。必衆に先だちて一たび樂戰せん」と。本多正信、側に侍して曰く、「臣聞く、「軍の先後は地の遠近に在り」と。太公は京にあり。耶君は伏見に在り。其次已に定めり。太公甚道理なし」と。前將軍、乃止む。藤堂高虎を召して、攻城の方略を諮る。高虎對へて曰く、「遠に利あり。近に利あらず。輕兵もて戰を挑み、其遠く出づるを俟ちて之、撃たば、則敗、馭の餘、復志なからん」と。前將軍、掌を撫して曰く、「子が言、我が口より出づるが如し」と。遂に諸軍の郷ふ所を定む。

石川忠總は高槻を守り、池田利隆、池田忠雄は尼崎を守る。其餘の山陽、山陰の將士は神崎より進み淺野、蜂須賀以下、南海の將士は和泉より進む。而して大和、伊勢、美濃の諸部は大和口より先進む。少將忠雄、伊達政宗、其帥たり。水野勝成、其先鋒たり。前將軍、勝成を召して曰く、「我が大和口の先鋒は、汝に非ずして可なる者なし。汝大和の將士を統べ、命を用ゐざる者あらば、先斬りて後聞せよ。直孝、高虎と、策應を相爲し、其全勝を期し、慎みて一條槍の故態を作す勿れ」と。勝成感謝して出づ。井伊直孝、藤堂高虎、

法隆寺
郡山
【長池】山城

龜田高綱
治房

龜背嶺

前將軍發す
將軍發す

近江、伊勢の兵を以て中軍の先鋒たり。榊原康勝、松平康重、小笠原、仙石、諏訪、保科、丹羽の諸將と之に繼ぎ河内口より進む。是より先、城兵、大和を侵す。大和の法隆寺に工夫中井正次と云ふものあり。前役に東軍の爲に攻具を造る。城兵之を怨み、法隆寺を圍みて之を焚く。二十六日、大野治房も亦、郡山に寇す。守將筒井定慶、守を棄てて遁る。水野勝成、進みて長池に至りて之を聞き、部下に謂て曰く、「敵若し南都を焚かば、我が耻たらん」と。疾く驅せて之に赴く。治房、至れども敢て進まず。遂に退き走る。勝成、追躡して法隆寺に至る。淺野但馬守、兵五千を以て、北和泉に赴き、佐野に至るに會す。治房等、紀伊の土寇を誘ひ、其後に起らしむ。而して兵二萬を以てこれを逆ふ。紀伊の將龜田高綱曰く、「平地の戦は、寡き者必敗る。宜しく退きて榎井に至り、林を蔽ひ蹊を塞ぎて陣すべし」と。但馬守、之に従ふ。明日黎明、治房の先鋒高直次、岡部則綱、谷輪重政等、先を争ひて進む。高綱、銃手を以て要撃し、則綱を傷く。紀伊の將上田重安、直次と槍を接し、傷きて交退く。多胡某、射て直次を斃し、遂に則綱、重政を獲たり。治房、貝塚に在り。敗を聞きて走る。而して紀伊の土寇、亦平ぐ。但馬守、復進む。勝成、其部下を分ちて二隊と爲し、堀直寄、松倉重正を以て在右の隊將と爲す。重正、告げずして進む。直寄怒り、居民を召して捷路を問ふ。對へて曰く、「龜背嶺最捷し。然れども昔物部守屋、此路に由りて敗れ取りたり。武人相傳へて凶と爲すなり」と。直寄曰く、「吾れ既に軍に従ふ。凶は其分なり。且守屋以て敗る。安ぞ吾れ以て勝たざるを知らんや」と。遂に嶺を躡え、重正に先だちて國分嶺に至る。已にして勝成、諸軍を引きて踵ぎ至る。少將忠輝、猶南都に陣す。兩將軍、四方の兵漸集るを以て、遂に親出でんと議す。會大阪の細作、京師に入り、禁内及び二條を焚かんと欲す。板倉勝重、捕へて獄に下す。前將軍、故を以て行を停め、五月五日、乃發す。諸軍に令して、三日の糧食を持たしめ、米鹽酒漿一櫃を以て、自ら從はしめ、肩輿に駕して行く。將軍、伏見を發す。上杉景勝、京師を留守し、男山に陣す。前田利光、少將忠直以下、皆從ふ。即日、前將軍は星田に舍し、將

平野
後藤基次

道明寺口の
戦

萩又市
河村新八
眞田幸村
一柳直盛

軍は角南に舍す。城中、我が大軍の至るを聞き、乃戰を議す。後藤基次、薄田兼相、渡部尙、出でて平野に陣し、大野治房、眞田幸村、木村重成、長曾我部盛親、相繼ぎて出づ。兵各萬餘人。我が前鋒を邀へ撃たんと計る。基次夜に乘じ、甲を潜めて南す。勝成、嶺頭に在り。諸將に謂て曰く、「炬火の北より來る者、道明寺に至りて滅す。是れ敵の我が不意に出でんと欲するなり」と。乃備を嚴にして俟つ。而して使を馳せて之を中軍に告ぐ。直孝、高虎も亦、中軍に赴きて節度を取る。前將軍曰く、「事我が意の如し」と。六日味爽、將軍と俱に發して、平岡に至る。勝成、直寄、重正等を遣して、道明寺に赴かしむ。基次に片山に遇ふ。重正、利あらず、直寄進みて其横を撃つ。重正之に反る。兼相、尙、來りて基次を救ふ。勝成、尙を撃ちて之を破る。本多忠政、松平忠明、伊達氏の將片倉景綱と、基次、兼相を撃ちて亦之を破る。大野治房、眞田幸村等、道明寺より二萬騎を以て援ひ至る。景綱、幸村と戦ひて利あらず。陸奥の銃隊之を承く。幸村卻く。是に於て、勝成、諸將と齊しく進みて合撃す。伊達氏の銃手、萩又市、基次を射て之を斃す。水野氏の騎士河村新八、兼相を斃して亦之を斃す。本多、松平、丹羽氏、左右の翼を縦ちて大に治房を破る。治房、尙皆走る。幸村退きて南阜を保つ。勝成、使を馳せて伊達政宗を促して曰く、「公自中軍を進みて、幸村の横撃に備へよ。則吾れ其北ぐるを追ひ、隻騎も返さしめじ」と。本多忠政も亦、之を促す。政宗、兵疲れ丸盡くを以て辭す。一柳直盛、越後の部下に在り。進みて前軍を援げんと請ふ忠輝肯せず。幸村、尙と遂に更殿して退く。藤堂高虎、千塚より南道明寺に赴く。其二族將高刑、良勝、先進む。渡部了、自斥候を爲し。還り報じて曰く、「道明寺の器聲、漸西して漸微なり。是れ敵已に敗るなり」と。乃鞭を擧げて左指して曰く、「矢尾、若江に敵あり」と。高虎、人をして先部を攻め、旆を轉じて左せしむ。了曰く、「茲の地は沮洳たり。請ふ。別路に由らん」と。乃馳せて令を傳ふ。高刑、良勝、願はずして進む。矢尾堤に至りて、敵將盛親の堤下

木村重成

重成戦死

に伏するに遇ふ。二人、之に死す。盛親、愈進む。了等、力戦し兵を収めて高阜に據り、馳せて高虎を促す。高虎、其二將を救はざりしを怒りて肯せず。井伊直孝、道明寺に赴き、亦轉じて左し、木村重成と若江堤に戦ふ。其將長阪某曰く、「先堤を得る者は勝たん」と。銃隊を督し、堤を奪ひて之に據る。槍隊、進まんと欲す。老臣菴原某曰く、「亟に槍を用ふる勿れ。亟に槍を用るば、則敵近づきて勢竭きん」と。衆、冒して進む。利あらず。敵争ひて之を蹙す。菴原乃磨きて進む。山口重政、次子弘隆と、奮戦して創を被る。長子重信、深く入りて二騎を斬り、進みて重成と闘ひて死す。直孝の麾下繼ぎて進む。菴原、刺して重成を瘞す。安藤某、其首を取る。敵兵、みな潰ゆ。井伊氏の兵、北ぐるを追ふこと里餘、其游兵、盛親の轍を見て、横さまに之に迫る。渡部了も亦、赤隊の來るを見るや、乃奮撃して盛親を走らせ、進みて平野橋を扼す。復人をして高虎を促さしめ、道明寺の敗兵を邀へんと欲す。高虎曰く、「斯の奴、死處に死せず。今何ぞ曉曉たること、乃爾るや。歸師を遏むる勿れ。宜しく速に兵を收むべし」と。會一監使の至るあり。了、迎へて言て曰く、「陪臣、敢て請ふことあり。盛親遁ると雖、幸村等將に至らんとす。要撃して之を盡にせば、則大阪の陥ること今夜を出でじ。之をして城に入らしめば、則明日の戦、又將に力を費さんとす。臣之を策ること至熟す。和泉守の聽かざるを如何せん」と。監使之を然りとし、往きて高虎に説く。高虎、答へず。日に暮るを以て、益了を促して兵を收めしむ。了、遂に火を縦ちて退く。後、直孝、高虎の營に赴き、戰捷を賀す。高虎曰く、「我に怯夫あり。多く我が良を喪ふ。是を憾と爲すのみ」と。直孝曰く、「僕、若江より矢尾に赴き、貴部の一將の席職を樹て、敵を追ふを見たり。指揮甚觀る可し。斯人も亦死せりや否や」と。高虎默然たり。了、胃を免ぎ進みて曰く、「所謂、席職、即臣なり」と。因りて其屬兵を呼びて曰く、「掃部君、褒詞あり。我が輩、徒に勞せず」と。然れども了、終に傲讓を以て黜けらる。

是の日、神原康勝等、菅江に至り、敵將木村宗明を撃つ。康勝傷を患ふ。膿流れて鎧に至る。氣爲に撓ます。奮戦して之を破る。小笠原秀政等と進みて若江に赴く。監軍藤田信吉、之を扼めて止む。少將忠直、其老本

神原康勝

渡部了

千塚原道明寺

越前兵

小笠原秀政

本多忠朝

忠勝

將軍の部署

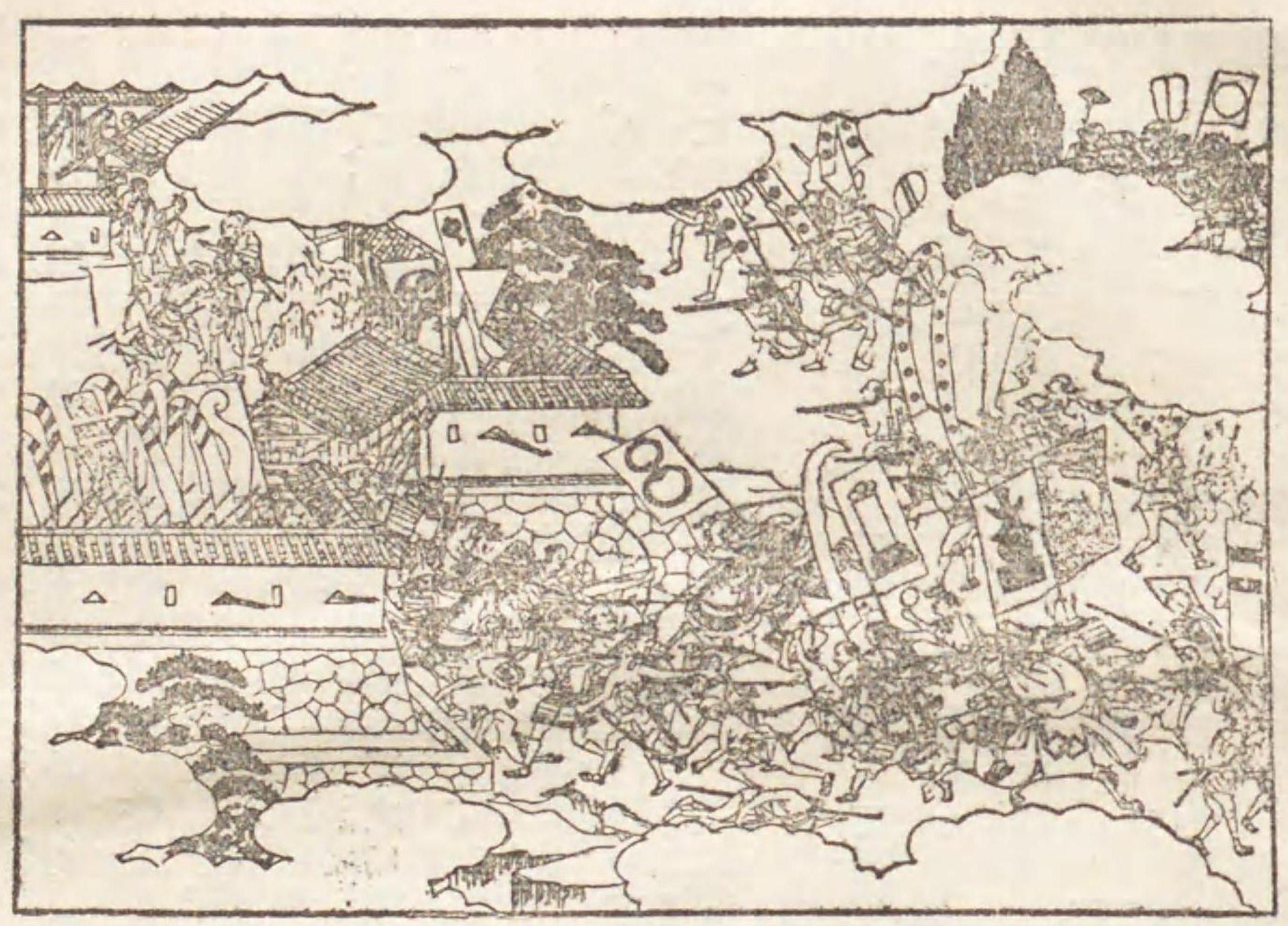
多成重等と、四條邊に陣し、井伊氏の後在りて、皆事に違はず。兩將軍、先鋒の戰、酣なるを聞き、中軍を以て之に繼がんと欲す。而して捷報累に至り、首虜を馬前に効す。日已に暮る。前將軍は千塚に次し、將軍は道明寺に次す。令を下して曰く、「詰朝、城を攻めん。先鋒は戦ひ疲る。當に他軍を以て之に易ふべし」と。忠輝、忠直、みな逗留を以て旨を失ふ。本多成重、直直の命を以て來り稟して曰く、「明日の戦、越前の兵は何れに陣するや」と。前將軍、罵りて曰く、「情夫、晏起して事に違はず。尙何を言ふか」と。成重等、惶恐して還り報す。且曰く、「君努力せよ」と。忠直、乃其士に徇へて曰く、「明日我れ先登せずば、則先死せん。死を怖る、者は此より去れ」と。小笠原秀政も亦、監軍に誤まらるゝを恨む。出雲守本多忠朝は、其戚屬なり。秀政、夜、往きて之に見えて曰く、「明日吾れ尺前ありて寸卻無けん」と。忠朝曰く、「子は我が心を得たり」と。初め忠朝の父忠勝、死に臨み、長子忠政に囑して、遺財を忠朝に分つ。忠朝曰く、「宗家は費用多し。吾れ已に分地を辱くす。敢て受けず」と。忠政固く之を予ふ。忠朝曰く、「且之を兄氏に實きて、以て我が需を瘞て」と。役に及びて、忠政、これを問ふ。答へて曰く、「既に之を辨ず」と。大阪に在るに及びて其營處の沮澤多きを病へ、之を易へんと請ふ。前將軍曰く、「乃父は戦を爲すに、未だ嘗て險易を問はず。若何ぞ肖ざるや」と。忠朝慙恨す。故を以て終に秀政と死を約す。

既にして前將軍、諸將を部署す。前田利光、右先鋒たり。本多康俊、本多康紀、遠藤、片桐、石川、時田等と、其右に在り。本多正信、土井利勝、酒井忠世、本多大隅、黒田長政、加藤嘉明、之に繼ぐ。少將忠直、左先鋒たり。本多忠朝、小笠原秀政、秋田、六郷、淺野、丹羽、仙石等と、其右に在り。神原康勝、松平康長、酒井家次、稻垣重種、之に繼ぐ。大將軍、親右軍に將たり。水野忠清、青山忠俊、松平定綱、書院番頭を以て、高木正成、阿部正次、内藤清次、大番頭を以て、並に其前に在り。安藤重信、其後に在り。前將軍、親左軍に將たり。本多正純、植村家次、板倉重昌、本多信勝、内藤掃部等、之を衛る。參議兼直、參議頼宣

城兵の部署
家康與を捨て行く
長政、嘉明
本多正純
佳癖と謂ふ

其後に在り。井伊直孝、藤堂高虎、細川忠興と右軍の左に在り。水野勝成、松平忠明、本多忠政、伊達政宗少將忠輝と、左軍の左に在り。處分既に定る。偵騎を遣して戦地を候はしむ。而して城中、未だ之を知らざるなり。大敗の後を以て、衆心恟惧す。會議して計を決す。曰く、「東軍來り逼ること三日を出でじ。之を南郊に誘ひて、西より横さまに之を撃たんと欲す」と。天未だ明けざるに、人をして出で、斥候を爲さしむ。候者、東南の聚落に常に無き所の如き者を望見し、或は以て曉霧と爲す。日出つるに及びて之を視れば、則皆軍隊なり。乃大に駭き、馳せ還りて急を告ぐ。乃命を諸將に傳ふ。眞田幸村は茶臼山に陣して我が左に當り、大野治房は岡山に陣して、我が右に當り、森勝永、竹田永應、大野治長、及び七隊長は其間に陣す。明石守重等は別軍を以て、今宮に出づ。而して秀頼、親、將として之に繼ぐ。鎧仗旌旗、皆極めて嚴整なり。城兵、銳を悉して出づ。其將帥、人人必兩將軍に當らんと欲す。將軍の候騎來る。左軍に白して曰く、「大兵出づ。請ふ速に旆を進めよ」と。前將軍叱して曰く、「敵、城を空しくして出づるも、七萬に過ぎじ。何ぞ大兵と謂はんや」と。住吉に及びて、乃輿を捨て、鞵を穿つ。左右、鎧を進む。之を斥けて曰く、「奴輩を誅するに、何ぞ鎧を以ることを爲さん」と。紵衣黃掛にして馬に上る。其騎と前軍の輜重と、相亂れて禁す可らず。顧て横田尹松に命す。尹松進み呼びて曰く、「騎は左し、重は右せよ」と。道闕けて行く。人をして返り馳せて義直、頼宣に告げしめて曰く、「速に來れ。戰將に作らんとす」と。已にして右軍傳呼す。將軍至れり」と。長政、嘉明、出で、道傍に諷す。將軍、甲して胃せず。單騎二十餘卒を從へて師を巡る。二人を見て、馬を立て、之に揖す。二人進みて其衝を執りて曰く、「嚆音は敵遠く出でて、其逃れ入りしを憾む。而して今は又大に出でて、齊しく其首を擧ぐ。幕下の事、意の如くならざる無し」と。將軍、首肯して曰く、「今日之を剪滅せん」と。本多正純、筭輿にて從ひ、柿蒂衣し、團扇を持ちて蠅を拂ひて過ぐ。長政嘆じて曰く、「何ぞ平日の威嚴に類せざるや」と。嘉明曰く、「常に重くして、變に輕きは、徳川氏の癖なり」と。長政曰く、「佳癖と謂ふ可し」と。

少將忠直
忠昌
(大阪夏陣之圖)
幸村敗走
西尾久作
忠朝、秀政
戦死
治房敗走



其首を争ふ。從騎大屋某、尸上に伏し。敵を拵ぎて死す。秀政も亦、躬自力戦して、終に之に死す。其長子忠修、檣槍の下に死す。少子忠眞、創を被りて死せんと欲す。其臣濞多見某、安積某、扶けて還る。右先鋒の隊將伴八彌、安見右近等、進みて治房の軍を衝く。書院番の三隊、繼ぎて進む。迭に勝敗あり。本多、遠

將軍、行きて前部に至り、令を布きて歸る。兩軍既に近づく。左先鋒の隊將本多成重、阜に上りて戰を候ふ。忠朝、秀政、は勝永、永應と、銃手を以て戰を挑む。戰少しく利ある。幸村、之に乗ず。成重、顧て我が軍を麾く。軍乃進む。忠直曰く、「吾れ此より直に閻羅廳に入るなり」と。因りて餐を呼び、立ちながら之を食ふ。一人は餐を捧げ、一人は胃を持つ。食ひ畢りて胃し、左右に謂て曰く、「我れ既に食へり。必餓鬼道に墮ちず」と。騎して直に前む。軍、開して之に従ふ。忠直、弟忠昌、手づから二人を斬る。成重、吉田修理、荻田主馬と、左右より縱撃す。幸村の軍、終に敗走す。追ひて安井に至る。西尾久作、幸村と闘ひて之を斬る。忠朝、其軍の卻くを見て、愛馬百里に乗りて、馳せ且呼びて曰く、「出雲守此にあり。盍ぞ回り戦はざる」と。敵之を開きて四集す。忠朝、鎗を執りて二人を燈す。一人、銃を以て之に迫り、射て其腹を洞す。忠朝跳りて馬より下り、刀を抜きて銃者を斬る。其圍、鐵櫃を進む。乃左に櫓を奮ひ、右に刀を揮ひて、八人を燈す。身も亦二十餘創を被り、溝を踰えて僵る。敵、

安藤直次

阿部正次

城兵敗走

忠直先登

藤の諸將、横さまに之を撃つ。治房敗走し、返りて稻荷に戦ひ、又敗る。纒に脱れて城に入る。右軍已に前み、左軍稍卻く。直孝、高虎、頼て左軍を助く。酒井、神原の諸將、方に敗を承けて進み、戦未だ決せず。直孝、高虎、横さまに森氏の軍後を断ちて之を破り、七隊長と遇ふ。利あらず。安藤直次、前將軍の令を以て至り、衆を督して返り撃ちて之を破る。勝成、所部を率る、命を奉じて住吉に赴く。左軍の戦作るを望み、轉じて天王寺に向ふ。行敵兵を破り、而して川場に趨き、明石守重と遇ふ。交綏きて北く。大番の三隊、將軍の令を以て、守重を勝曼に邀へ撃ちて之を走らす。時に兩軍酣戦して、埃塵、大に起る。彼此紛撃して辨す可らず。阿部正次、以爲へらく、東兵暑が胃して遠く来る。面目みな黒し、城兵は則否らずと。乃令して曰く、「面の白き者は敵兵なり」と。因りて物色して數十級を斬る。諸隊、相傳へて之に倣ふ。斬獲算なし。秀頼、親出でんと欲し、城中、反者ありと聞きて果さず。又前將軍、數人を遣して和を議するを以て、大野治長等を召還す。治長等走り還る。敵軍みな後を顧る。我が軍乃之に乗じ、遂に大に之を敗る。首を斬ること、萬五千級なり。前將軍は進みて茶臼山に上り、將軍は進みて岡山に上る。少將忠直は進みて川場に至り、火を市舎に縱つ。城中に内應を爲す者あり。忠直の兵、乃高麗橋より京口門を破りて入り、幟を城上に植つ。是を先登の第一と爲す。

吉田修理、天満より轉じて濟り、溺れて死す。水野勝成、忠直に繼ぎて入る。忠直、兵を分ちて、諸櫓を焚き、終に天主閣に及ぶ。烟焰天を衝く。諸軍齊しく呼びて、皆門を破りて入る。秀頼、火を觀月樓に避く。淀君、及び夫人徳川氏以下、みな之に従ふ。池田利隆、尼崎を發し、路にて其烟を望み、乃馳せて神崎を濟り、敗兵を要撃して、多く首級を得たり。石川忠總、京極忠高、高知と、高槻を發し、敵將仙石某と、備前島に戦ひて之を敗る。毛利秀元、及び加藤明成、水軍を以て傳法港口に至る。松平乘壽は森口より、金森可重は岸和田より至る。皆首級を獲たり。淺野氏、蜂須賀氏、最後れて至る。其他遠地の侯伯は皆及ばず。

頼宣

堀内氏久

阪崎成正

秀頼備倉中に在りて命を乞ふ

前將軍、胡牀に據りて火の起るを望見す。左右に關原の事を更る者あり。乃頼て之に謂て曰く、「吾れ復捷てり」と。已にして將軍來り賀す。前將軍曰く、「汝の功なり」と。歸りて本營に陣せしむ。忠直來り見ゆ。乃其手を執りて曰く、「乃公の孫と謂ふべきなり」と。忠輝見ゆ。頼宣、後軍より馳す。諸軍の輜重、途に屬して争ひ進むを見る。頼宣曰く、「是れ軍既に捷ちて且に舍せんとするなり」と。已にして天主に烟擧る。頼宣、咄嗟して進む。義直、之に従ふ。茶臼山に至れば、則諸將の賀する者大に聚る。頼宣、涕を攪りて曰く、「大人、兒を後軍に置き、事に及ばざらしむ」と。松平正綱曰く、「君は十四歳なり。前途修遠なれば、功を建てざるを患へざれ」と。頼宣、色を變じて曰く、「吾れ復十四歳あらんや」と。前將軍曰く、「汝が此の言、以て當に首功とすべきに足る」と。

時に秀頼、猶樓上に在り。大野治長、夫人を免れしめ、以て和を成さんと欲するや、諸姫侍をして擁して出ださしむ。葵章の衣を蒙り、亂兵中に窘歩す。城將堀内氏久、これを觀て、進みて其前に當り、人を辟けて出でしめ、我が將阪崎成正を呼びて之を護送せしむ。治長、木村某を遣して追及し、本多正信に因りて其意を言ふ。正信來りて前將軍に啓す。前將軍喜びて曰く、「吾れ且遂に其夫と姑とを免れしめん」と。正信又將軍に啓す。將軍叱して曰く、「益ぞ乃夫と俱に死せざる」と。秀頼、遂に備倉の中に入り、益使を發して命を乞ふ。而して日已に暮る。將軍、井伊直孝、及び安藤重信、石川正次等を遣し、備倉を守りて命を俟たしむ。八日、前將軍、本多正純及び加加爪某を遣し、往きて之を驗し、且言はしめて曰く、「事已に此に至る。復言ふ可きなし。太閤の舊好、吾れ竟に忘るゝ能はず。苟も母子皆出でんか、秀頼を高野に置き、淀君を給する萬石を以てせん」と。治長入りて告ぐ。出で答へて曰く、「謹みて命の辱きを拜す。當に往きて之を謝すべけれども、獨萬兵に目を注がる。願くは二輿を得て往かん」と。直孝、其詐なるを疑ひ、乃答へしめて曰く、「軍中唯一輿あるのみ。右府は、請ふ、騎せよ」と。往復して決せず。直孝、重信に謂て曰く、「大旨仁恕と雖、禍を遺すの道なり。是れ我が輩に在るのみ」と。乃銃を倉中に發すること二たび。秀頼

秀頼等自殺す
 前將軍歸る
 刻夜十時
 將軍伏見に凱旋す
 大野道見を斬る
 磯す
 古田重然を誅す
 細川忠興
 松平忠明
 賞罰を議す
 水野勝成

以下、絶を知りて、皆火を縱ちて自殺す。
 前將軍方に進みて櫻門に至り、以て秀頼の出づるを待つ。直孝等、來りて狀を告げて罪を請ふ。前將軍之を領く。即日、午時、遽に駕を命じて、獨板倉重昌を從へ、北して京師に歸る。曰く、「之を驅れ。大戦の後には當に雨ふるべし」と。從者信ぜず。已にして雨大に至る。上下沾濡す。淀に及びて、雨衣を取り、夜二鼓にして二條城に入る。而して大阪の諸軍一も之を知る者なし。
 將軍阿部、青山、水野、高木の四將に令して、天王寺、玉造、青屋、京橋の四門を守らしめ、又安藤重信に令し、西面四道の卒を留めて、以て城墟を修理せしむ。戸を岡山に收めて、軍神を祭る。九日、伏見に凱旋す。諸侯争ひて殘黨を捕へて來り獻す。十五日、長會我部盛親を京師に徇へ、六條磯に斬る。後二旬、大野道見を界浦に磯す。大阪の將伊東長實奔りて高野に在り。監使を得て自裁せんと請ふ。前將軍曰く、「治長等は國を誤り、盛親等は亂を煽す。皆有さざる所なり。其他豊臣氏の舊臣、忠を事ふる所に盡す者は、我れ皆之を假さんと。長實、及び青木一重、岩佐正壽等、圖を改めて仕ふる者數十人あり。古田重然、大阪に通ず。事覺れて誅に伏す。細川忠興の庶子、罪を父に獲て奔りて大阪に歸す。敗るゝに及びて捕へらる。幕旨、之を宥す。忠興、之に死を賜ふ。冬の役に忠興、薩摩に備へしを以て來り會せず。夏の役興に及びて、前將軍近臣に謂て曰く、「忠興、必衆に先だちて至らん」と。駕、星田に次するとき、忠興果して至る。七日の戦に與りて功あり。是に於て、西南の諸侯、後れ至る者相繼ぎて兩公に謁す。兩公、大阪の金を收め、井伊、藤堂氏に金馬の大銀千枚に直する者、各二を賜ふ。六月、大阪を松平忠明に賜ひて、十萬石を食ましむ。忠明、荒廢を修め田里を經し、期年にして殷實政の如し。
 十五日、前將軍入朝して成事を告げ、白金千兩を獻す。二十八日、將軍二條に來りて賞罰を議す。直孝、高虎に、各五萬石を加封す。後、並に三十萬石に至る。水野勝成、教旨に違ひて、輕しく自刃を接す。故に

本多政朝
 小笠原忠貞
 池田忠雄
 樂を觀る
 新式十三條
 朝廷式十七條
 織田氏
 豊臣廟

賞せず。後、郡山に封ぜられ、遂に備後の福山に徙り、十萬石を食む。本多忠朝、事に死す。子なし。兄忠政の子政朝を以て封を襲がしむ。小笠原忠貞、父秀政の封を襲ぐ。榊原康勝、虜劇しくして卒す。大須賀忠次は、實は康勝の兄の子なり。命じて本姓に復し、其封を襲がしめ、大須賀氏の衆を以て、頼宣に屬す。藤田信吉の軍機を失ひしを責めて、其邑を收む。池田忠雄に兄忠繼の封を襲がしめ、其舊封を以て、蜂須賀至鎮に賜ふ。少將忠直、從三位に遷り、參議に進む。前田、伊達、淺野氏、みな官爵を進む。前將軍の季女の蒲生氏に寡たりし者、再び淺野氏に嫁ぎ、次年に至りて婚を成す。
 閏月十一日、將軍諸侯を率ゐて入朝し、白金萬兩を獻す。二十七日、兩公、偕に樂を二條に觀る。振鈴、還城樂、延喜樂、太平樂の諸曲を奏す。天下、大に亂れて、伶官の耗散せしこと數百年。前將軍、招撫すること年あり、終に舊職に復す。朝廷の樂是より興る。
 是より先、前將軍貞永、建武の式目を參考し、林信勝等と議して、新式十三條を定め、七月七日、諸侯を伏見に會し、之を頒ちて曰く、「文武の道は修めざる勿れ。佚遊辭飲は禁ぜざる勿れ。法を犯す者は舍す勿れ。反を謀り若くは人を殺す者は告げざる勿れ。諸國の民は其所を移す勿れ。私に城郭を築く勿れ。異を立てて黨を結ぶ者は告げざる勿れ。私に婚姻を結ぶ勿れ。侯伯會同する、衛從、節に過ぐる勿れ。衣服の差を紊す勿れ。爵位なき者は輿に乗る勿れ。諸將士は儉約を厭ふ勿れ。國主の人を任ずるに、其器を擇ばざる勿れ」と。又關白藤原昭實等と議し、朝廷の式十七條を定む。其略に曰く、「天子は宜しく寛平の遺誠に因りて、專古道を學び、傍和歌を習ふべし。見任の三公は宜しく諸王の上に班すべし。武家の官位は宜しく公家の員外に在るべし。廷臣の繼嗣は宜しく異姓を取らべからず。諸の服章は宜しく等を踰べからず。才藝異等、若くは功勞を累ぬる者は、其超遷宜しく門地に拘らべからず。諸の僧官は宜しく濫授すべからず。諸の朝士の關白及び有司に違ふ者、諸の浮屠の妄に官達を冀ふ者は、皆宜しく流竄に處すべし」と。
 是の月、織田氏を大和、上野の諸邑に封す。本多正信、豊臣氏の祖廟を毀たんと請ふ。前將軍、敢て私斷せ

三家

家康薨す
久能山に就

榊原清政
榊原照久

三年
日光山
【既望】十六
東照親王
梶井親王

一代東照公
逸事

とも天下若し命に方ふ者あらば親戚動舊と雖、宜しく速に誅伐を加ふべし」と。將軍歎歎して退く。義直、頼宣、頼房を召し、誠むるに善く將軍に事ふるを以てす。其傳成瀬正成、安藤直次、中山信吉を召し、勗むるに輔導を以てす。十七日、疾革る。乃將軍を願て曰く、「吾れ將に死せんとす。汝天下を何と謂ふ」と。將軍答へて曰く、「將に大に亂れんとす」と。前將軍曰く、「善し。吾れ以て死す可きなり」と。嫡孫家光を召して曰く、「汝、他日天下を治むる者なり。天下を治むる道は慈に在り」と。乃薨す。壽七十有五。久能山に葬る。

天皇、卹典を賜ふこと甚厚し。頼宣、就きて廟を建つ。

初め榊原清政、兄清政、故世子信康を輔く。世子敗るゝに及びて、官を棄て、出亡す。晩に康政に依る。前將軍、召して祿を賜ひ久能を守らしむ。尋いで卒す。長子清定、留りて宗家に仕ふ。乃少子照久に父の職祿を襲がしめ、之を親近す。終に臨みて、其膝を枕にして絶つ。將軍、因りて照久をして祀事を掌らしむ。僧天海、請ひて廟を大権現と號す。

三年、將軍、遺命を以て下野の日光山に改葬し、就きて新廟を建つ。四月四日、事を畢ふ。既望、主を正殿に移す。天皇、廷臣三輩を遣して宣命し、正一位を贈り、號を賜ひて東照と曰ふ。是の日、將軍、江戸より來り、次日、こゝに祀る。梶井親王尊純、禮を掌る。後三世、益祠宇を修む。天下の侯伯、諸外夷に至るまで、皆器材を獻す。而して親王、更來り、廟を護るを以て常と爲す。後三十年、詔して、大権現を改めて宮と曰ふ。

東照公、人と爲り沈毅にして大略あり。兵を用ゐること神の如し。而して學を好み治を求む。人を愛して善く容る。事を處するには必百世の後を規る。其朝廷に事ふる恭順殊に至る。王國を鎮護するを以て己が任と爲し、自儉約を執り、敢て驕侈せず。最稼穡の事を重す。至りて微細と雖、暗知せざるは無し。屢遊政に託して、疾苦を問ふ。其政を爲すに、務めて士氣を養ひ、言路を開き、巧佞浮華の習を防ぐ。公、幼にして

百舌鳥を退く

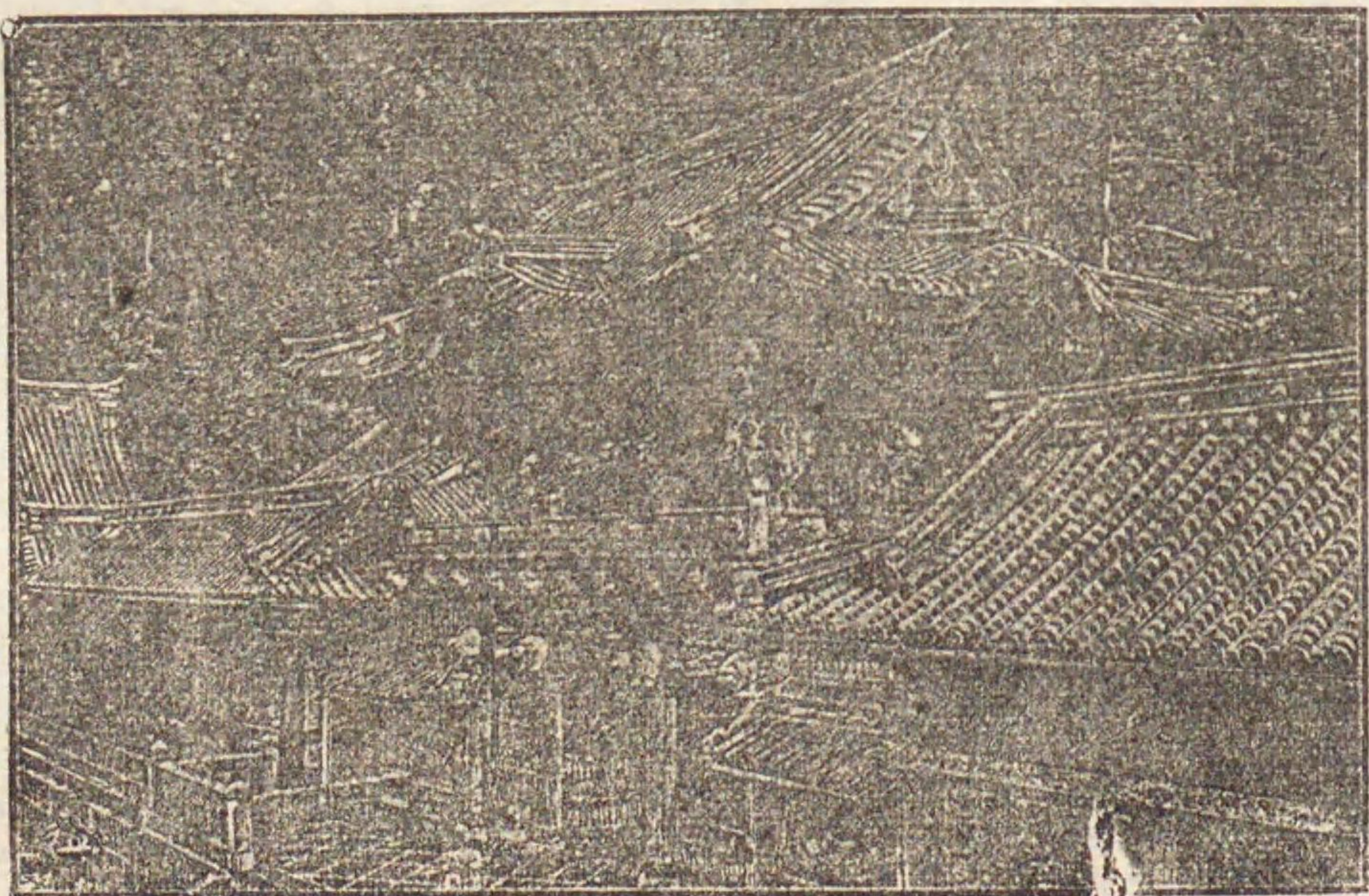
【面に支す】
鳥網
鈴木某

（日光東照宮陽明門）

三士人

土井利勝

尾張に買たり。百舌を獻する者あり。卻けて受けず。左右故を問ふ。公曰く、「吾れ聞く、主將は小慧なる者を取らず」と。其岡崎に在るとき、禁を犯す者二人あり。其一は面に支す。其一是濠に網す。皆拘繫せらる。牙兵鈴木某、之を諫めんと欲すれども、未だ路あらず。乃故に自令を矯め、池鑿の鯉を取りて、煮て之を食ふ。他日、公、池を懸て、守者に問ふ。守者、故を告ぐ。公、大に怒り、手づから鈴木を斬らんと欲す。鈴木入りて、目を強りて罵りて曰く、「噫、暗主、禽魚を以て人に易ふ。惡ぞ天下を爲むるを得んや」と。公大に悟り、刀を抛ちて入る。遂に前の二人を釋し、鈴木を召して之を褒む。後、人に語りて曰く、「直言の功は一番槍に愈る。敵を犯す者は、賞、俸す可し。君を犯す者は、罰、測る可からざるなり」と。公、濱松に在るとき、三士人を召して事を命す。其一人留りて請て曰く、「臣、間を承けて、敢て白すことあり」と。一疏を懷より出してこれを獻す。公、其疏を讀ましめて、之を聴く。毎條、輒善と稱す。讀み畢りて之に謂て曰く、「爾後、見る所あらば言ふを憚る勿れ」と。其人頓首して出づ。本多正信、侍坐し、啓して曰く、「彼れ何ぞ輕卒なる。且其言ふ所一も取る可きなし。君何ぞ之を褒むるや」と。公、曰く、「否、吾れ其志を褒むるなり。且取る可き者なきを褒めば、則取る可き者至る」と。公、嘗て一士を官せんと欲す。之を土井利勝に問ふ。利勝曰く、「彼れ常に臣の家に来らず。臣、未だ其如何



酒井正親

近臣を諭す

大賀彌四郎

政は舊法に
介冑衣纓

舊臣を愛せ
忠の説

を知らず」と。公憚ばずして曰く、「汝、我が家に幸たり。務は人材を訪ふに在り。材者豈肯て權勢に附かんや。汝の言ふ所の如くば、至恥を知り義を好む者、將に日に柔媚に趨らんとす。耻を知り義を好むは、國家の元氣なり。元氣消亡して國家衰老す。其れ能く久しからんや。昔、酒井正親、神谷某、己に禮せざるを以て、我に謂て曰く、「彼れ眞に用ゐる可き者」と。因りて請ひて其俸を倍す。正親は公の爲に私を忘れ、士風を奨勵す。汝が輩、何ぞ類せざる」と。又嘗て將軍の近臣を諭す。大意に謂く、「天下の安危は將軍の心に在り。宜しくこゝに思を留むべし。節義を奨め、輕薄を擯け、士民を愛し、賞罰を信にし、賜賚は濫なる勿れ。濫にすれば、則士怠る。人を用ゐるは偏る勿れ。偏れば、則國危し。國の臣あるは、猶木の枝あるが如きなり。枝偏大なれば、至其根を蹶す。猶鷲鳥の爪翼あるが如きなり。其爪翼を愛するは、搏撃を期する所以なり。臣の用舎重ぜざる可けんや。足利尊氏の高師直に任じ、豊臣秀吉の石田三成を用ゐるし、皆以て人の怨を取れり。我も亦誤りて大賀を用ゐて、殆危禍に陥らんとす。懲愆せざる可けんや。凡そ天下の亂は、主將の欲を縱にして、宰臣の權を專にするに起るなり。民の膏血を浚へて、之を府庫に盈つるを以て能臣と曰ふ。是れ君の爲に怨を蓄ふるのみ。且才能を恃む者は、必舊法を以て迂拙と爲し、動もすれば之を更改せんと欲す。武田、上杉、今川、大内氏の衰亡せし所以は、皆之に由るなり。凡そ政は其舊に因るに在り。我れ嘗て陸奥に赴き、源頼朝の榜牌を見たり。其辭に曰く、「國事みな泰衡の舊に因る」と。吾れ頼朝の能く東陸を定めしを信するなり。未れ介冑の習は鐵の如く、衣纓の習は金の如し。金は以て虚飾を爲す可く、鐵は以て實用を爲す可し。國家將に衰へんとすれば、必衣纓の習を喜ぶ者あり。新法を建立して、其華飾を務むるは、是れ大蠹なり。我が家の法度は、みな祖考、耆舊と議し、深く謀り遠く慮りて、其弊なきを期せり。變更する所ある勿れ。之を刀に譬ふれば、鍛錬一成して之を子孫に傳ふ。子孫、各好尚を異にし、數治行に附せば、則刀終に用ゐる可らず。凡故家に貴ぶ所は、其舊製を存し、舊臣を養ふを以てのみ。侯伯將士、皆我と苦勞を同じくする者なり。子孫も亦、宜しく與に富貴を同じくすべし。故なくして之

武臣
武田の法

今川の墓を
拜す
福島正則の
封を收む

頼宣紀伊に
徒る
三家

立花宗茂
城代
六年
伏見奉行
七年

を滅絶する勿きは、其祖先の忠に酬ゆる所以なり。凡所謂忠は、豈獨徳川氏にのみ忠ならんや。乃天に忠なり。我も亦天に忠する者なり。故に天、之に授くるに大柄を以てす。然れども、自其柄を有し、驕奢怠惰にして、生民を虐ぐれば、則天將に之を奪はんとす。故に吾れ岡崎に主たるときは、隣國の攻守を慮り、關東に主たるときは、三道の治亂を慮る。天下を定めて、四境の安危を慮る。未だ嘗て一日も懈怠あらす。夫れ折衝禦侮して、王國を守るは、武臣の職然りと爲す。武臣にして武を遺るゝは、是れ其職を窃むなり。懼れざる可けんや」と。公の少きとき、武田氏と兵を連ぬ。後に武備を講ずるに、多く其法を取る。或人説きて曰く、「武田の箭は、必其鏃を甘くす。人に中りて抜け難からしむるなり。請ふ。之に倣へ」と。公、鑿して曰く、「忍びんや。孰か天下の民に非ざる」と。因りて令して曰く、「徳川の箭は、必其鏃を固くす。人に中りて抜け易からしむるなり」と。公、幼時、今川氏に育はれたり。今川義元の墓、桶狭間に在り。公、過ぐる毎に、必下拜せらる。其仁、且義、蓋し天性なり。

將軍、職を襲ぎ、一に其訓誡を奉じて、天下を綏撫す。五年夏、將軍、入朝す。福島正則の封を收む。正則、關原の役に、功を貢みて驕横なり。嘗て公人伊奈今成を殺す。大阪の役に、陰に謀を城中に通じ、又擅に城郭を増築し、酷だ殺戮を嗜み、國民、生を聊せず。是に於て、將軍、井伊直孝と策を決し、鳥居忠政をして、正則に江戸の第に就き、命を傳へて之を津輕に放たしむ。其太僻なるを以て、改めて信濃に放ち、七萬石の邑を給し、其舊封を擧げて淺野氏に賜ふ。參議頼宣を紀伊に徙封す。食む所は故の如し。是より尾張、紀伊、水戸を稱して三家と爲す。諸侯、敢て抗禮するなし。義直は、慈仁なり。頼宣は雄豪なり。頼房は謙遜なり。頼房は特に國に之かず。譜第の將帥に冠として、幕府を護る。

是の歳立花宗茂を舊封に復し、松平忠明を郡山に徙す。大阪を以て鎮府と爲し、勳舊の一將を遣して之を守らしめ、稱して城代と爲す。六年、京橋、玉造の兩戌を置き、大番頭を遣して、部衆を率ゐて更成らしむ。二條城と同じ。是に於て、伏見城を毀ち、獨奉行を置き、界浦、奈良、長崎、佐渡に比す。七年、將軍、女

東福門院
八年
最上義俊
本多正純を
放つ

安藤直次

天野康景

九年
世子家光
參議忠直を
放つ

を禁内に納れ女御に備ふ。中宮に進み、東福門院と稱す。是の歳、田中氏、嗣なくして國除かる。八年秋、最上家親の後嗣義俊、族屬を統ぶる能はざるを以て國除かる。冬、本多正純、罪ありて、出羽に放たる。初め正純の父正信、老中たり。東照公嘗て其封を増さんと欲す。辭して曰く、「臣、恩眷を叨にして、矢石の勞なし。之に封土を加ふるは、誠に自安せず。願くは其臣に賜ふ者を以て、益材武を養ひて、以て天下を鎮平せよ。而して臣老を其間に送るを得ば、何の賜か之に若かんや」と。遂に二萬石を以て終ふ。東照公に後る、こと五旬にして没す。正純、嘗て關原の役に於て、父を斬りて將軍の過を解かんと請ひ、頗得色あり。安藤直次、人に語りて曰く、「倫を傷ひ、以て名を要む。必終を全くせざらん」と。駿府の執事と爲るに及びて、興國寺城の工卒、誤りて公邑の民を殺す。邑宰、償を城主天野康景に求む。康景肯はず。乃正純に因りて之を訴ふ。東照公、素より康景の忠良なるを知り、輒く決せず。正純、康景を誣ひて、速に卒を斬りて之を償はしむ。康景、不幸を殺すに忍びず。乃封を棄てて出亡す。東照公、之を復せんと欲す。其病みて卒するに會ひて止む。世、之を冤とす。有馬晴信の阿媽港人を誅せしとき、正純の僚吏岡本大八、晴信の賞希きを揣るや、誑きて其貨を取。事覺れて罪に抵り、獄中に在りて、晴信の陰事を告ぐ。晴信、故を以て敗る。大久保忠鄰の冤も、世、亦以て正純父子の爲す所と爲す。正純、時に小山三萬石を食む。將軍の時に及びて、宇都宮十五萬石を食む。安藤直次曰く、「正純、將に禍に及ばんとす」と。是の歳、使を奉じて山形に赴き、其壘を増し、擅に部屬を殺すを以て、封を收めて放たる。其子弟、前後してみな死す。獨叔父正重のみ後存せり。九年七月、世子家光、京師に觀す。將軍、因りて上書して事を致す。世子、時に正三位大納言たり。八月、入朝し、正二位に進み、内大臣に遷り、征夷大將軍に任ぜらる。是より先、參議忠直、功を負みて歎望し、數法を奉ぜず。又酒色を縱にして無辜を殺す。幕府、數密旨を以て、之を勗むれども悛めず。是の歳、之を豊後の萩原に放つ。髮を削りて一伯と號す。

寛永元年
光長

忠昌

三年
天皇二條城
に幸す
(芝増上寺
の靈廟)

淺井氏薨す

四年

七年
明正天皇

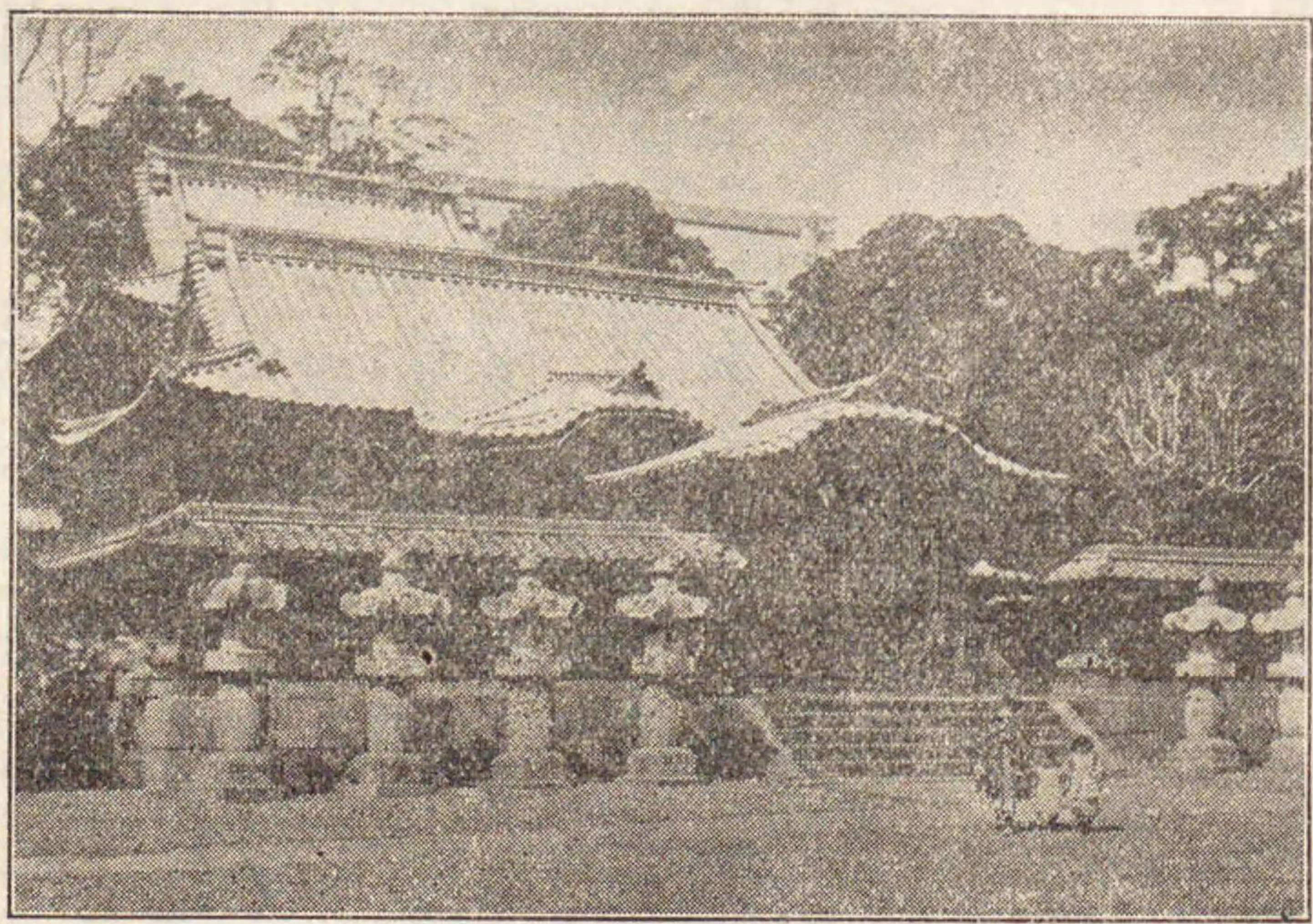
八年

寛永元年、其子光長を越後に徙封す。後三世に至りて、其下を馭する能はざるを以て、之を美作に徙し、五萬石を食ましむ。其弟忠昌、直正、みな大阪の役に功あり。忠昌、河中に封せられ、尋いで高田に徙さる。是に於て、之を越前に封じて、三十萬石を食ましむ。直正、初め大野に支封せられ、後出雲十八萬石に封ぜらる。一伯の敗に、本田成重、復幕府に歸り、列して諸侯と爲る。

三年八月、前將軍、將軍、共に入觀す。九月六日、天皇二條城に幸す。兩將軍、諸侯伯を率のて之を饗す。前將軍は太政大臣に遷り、將軍は右大臣に遷る。是に於て、義直、頼宣、忠長、並に大納言に遷り、頼房、及び前田利光、伊達政宗、島津家久、並に權中納言に累遷す。忠長は將軍の弟なり。是の歳、前將軍の夫人從二位淺井氏薨す。

四年、蒲生忠卿、卒す。嗣なし。國除かる。後數歳にして弟忠知、卒す。亦嗣なし。國除かる。白川十萬石を以て丹羽長重を封す。

七年九月、天皇、位を皇女に讓る。諱は興子、徳川氏の出なり。是、明正天皇と爲す。將軍、酒井忠勝、松平信綱を遣して之を賀す。詔して、忠勝を以て少將と爲し、信綱を侍從と爲す。皆敢て拜せず。幕府に告げて後受く。八年、始めて小老職を置き、老中を副け、諸の雜事を掌らしむ。



九年 秀忠薨す 二代臺徳公 逸事

守成の器

忠吉

秀康

三家を愛重

信を守る

九年正月二十四日、前將軍薨す。壽五十四。増上寺に葬る。前將軍、位、從一位に至り、官、太政大臣に至る。正一位大相國を贈らる。臺徳と諡す。臺徳公、人と爲り、勤謹和厚なり。朝廷、外舅の故を以て、禮秩、等を異にす。而して公、益小心なり。嘗て禁内に在りて、獨便室に休ふ。或人、之を闚ふ。公、衣冠肅然として情容ある莫し。其東照公に事ふるや、心を盡して權を承く。微細の事に至りても吝嗇せざるはなし。關原の役に、公、事に及ばず。而して兄秀康、弟忠吉、皆功あり。其歲、東照公、諸大臣を召し、問ひて曰く、「吾れ繼嗣を定めんと欲す。誰か可なる者ぞ」と。井伊直政は忠吉を右け、本多正信は秀康を右く。大久保忠鄰曰く、「冢子、資望已に定る。宜しく動搖すべからず。且今より以往、撥亂の才は、守成の器に若かざるなり」と。東照公之を頷く。公、之を聞きて、直政、正信に御ます。而して忠吉も亦、忠鄰を趨とし、益之と厚し。江戸に來る毎に、輒其第に館す。公、同母の故を以て、最忠吉を愛す。忠吉、疾病あり。公、親其館に往きて候ひ視る。使者、旦夕往來し、寢食は報に隨ひて加損す。又庶兄の故を以て、最秀康を重す。凡西の諸侯の會同する者、火器を齎すを得ず。秀康、嘗て江戸に赴くに、銃隊を具して碓氷關に入る。關吏、呵禁す。秀康曰く、「汝、越前宰相を知らざるか」と。公、聞きて驚き、吏に命じて問ふこと勿らしめ、自之を迎謝。其卒するに及びて、悼惜殊に至る。東照公、嘗て義直、頼宣、頼房を以て、公に屬て曰く、「我れ百歳の後、善く之を視よ」と。公、常に其言を念ふ。故に特に三家を愛重す。凡公、宗族、功臣の喪を聞かば、燕樂の時と雖、必容を變へ、涕を墮す。其出行するときは、即駕を戒めて止む。則親徒御に面して之を罷めしむ。嘗て行を戒む、漏刻、期を報す。公方に食す。箸を捨て、出づ。曰く、「信、失ふ可からざるなり」と。居常耽嗜する所なし。特に儒術を崇び、書及び歌を好む。諸の武技、みな皆其精を究む。而して臣下に傲らず。故を以て諸宿將、豪傑、皆馴服す。嘗て其下に謂て曰く、「織田、豊臣の二子は、喜びて人に事へられたり。家君は則喜びて人を使ふ。異なる所以なり」と。故を以て諸政事、みな東照公に倣ふ。而して最人を選むことを慎む。將軍の幼

忠世、利勝
忠俊
酒井忠勝
家光
伊達政宗
大目附
池田光政
加藤忠廣を放つ
忠長の封を収む
春日局
國松
竹千代

きとき、雅樂頭酒井忠世、大炊頭土井利勝、伯耆守青山忠俊を以て傳と爲す。忠世は嚴を以てし、利勝は和を以てし、忠俊は直を以てし、共に心を盡して輔導す。利勝、常に燕樂に侍す。間に乘じて説きて曰く、「願くは伯耆の言を聞き玉へ。不らずば則雅樂之を何と謂はん」と。將軍、輒悟る。酒井忠利の子忠勝、扈從より御用人と爲る公又以て傳と爲す。又大に職に稱ふ。公、既に薨す。諸臣、之を秘せんと欲す。忠勝、以て不可と爲し、即夜、喪を發す。是に於て、將軍、教を下して盡く諸侯伯を召し、親出で、之に面して曰く、「前將軍薨せり。諸君、或天下を冀望せば、則唯其欲する所のみ、然れども家光既に軍職に係る。當に弓箭を以て之を授受すべし」と。諸侯、愕然として未だ答へず。伊達政宗進みて言て曰く、「孰か徳川氏の恩澤を被らざらん。今日敢て異心を、挟む者あらば、政宗請ひて先往きて之を蹂躪せん」と。衆、聲を同じくして對て曰く、「誠に中納言の陳ぶる所の如し」と。乃退く。是の歲、始めて大目附を置く。専ら監察を掌る。六月、池田光政を備前に徙封す。初め光政の父利隆は播磨に封せられ、叔父忠雄は備前に封せらる。皆元和中に卒す。光政、嗣ぎて因幡、伯耆に徙る。是に至りて、忠雄の子光仲と封を易ふ。是より先、臺徳公の女、大阪に適ぎ、而して寡なり。改めて本多忠政の婦と爲す。女を生む。是に於て其女を以て光政に妻す。是の月、加藤忠廣、異圖あり。發覺して國除かれ、出羽に放たる。細川忠興を肥後に徙封し、忠興の舊封を割きて、小倉を小笠原忠貞に、中津を其兄の子長次に賜ふ。大阪の功を追賞するなり。後、幕府、加藤、福島二氏の遺胤を索め、召して之を祿し、以て其祀を存す。十月、大納言忠長の封を収む。忠長、將軍と同母なり。幼字を國松と曰ふ。母氏に鐘愛せらる。將軍、世子となる時、内外流言あり、「幕府嫡を易ふる意あり」と。世子の乳母春日局、駿府に往きて之を告ぐ。居ること數月。東照公、人をして將軍に言はしめて曰く、「久しく幼孫を見ず。盍ぞ來り見えしめざる」と。兩公子、乃來り見ゆ。公、世子を上坐に迎ふ。忠長踵ぎ昇らんと欲す。公曰く、「叱叱、汝敢て斯の坐に升らんと欲

安藤重長
忠長自殺
十年
十一年
十四年
島原の亂
所倉重昌
松平信綱
十五年
耶蘇を禁ず
大老職

するか」と。坐定りて饌を供す。公其一を取りて左右に命じて曰く、「竹千代に進めよ」と。其一を取りて忠長に投與して曰く、「阿國之を喫せよ」と。衆望、是に於て定る。世子、大納言と爲りて、西城に在り。城濠に覺多し。忠長手づから銃を發し、一覺を獲て夫人に示す。夫人、悦ぶこと甚し。命じて之を宰せしめ、臺徳公の入るを俟ちてこれを襲す。曰く、「阿國の獲る所なり」と。公、悦びて之を啖ひ、向ひて曰く、「且何の處にて之を得しか」と。具に對ふるに實を以てす。公、哺を吐き、怒りて曰く、「何ぞ此の大権事を得る。西城は誰の居る所と謂ふか」と。乃其從者を罪す。忠長、既に長じ、元和中、甲斐に封ぜられ、寛永中、駿河、遠江を増封せらる。既に驕恣なり。驪を臺徳公に失ふ。公、之を擯けて國に就かしむ。公、疾あるに及びて、敗獵して自如たり。將軍、爲に之を召見せんと請ふ。許さず。公薨するに及びて、忠長威容なく、殺を嗜み、喜怒常なし。是に於て、將軍既に服を除く。乃其封を收めて、之を高崎に置き、城主安藤重長に附す。忠長悛めず。次年、重長、命を受け諷して自殺せしむ。是より駿河、甲斐、直に征夷府に隸す。府兵は是の時、大番、及び書院、扈從の兩番あり。更駿府を成る。

十年、堀尾氏、嗣なし。國除かる。次年、京極氏を徙封す。後三年、亦嗣なし。封を收む。其胤子を召して、播磨の地六萬石を賜ふ。

十一年、將軍、入朝す。從一位に進み、右大臣に遷る。初めて京師に町奉行を置き、市人の訟獄を斷せしむ。

十四年、十月、故小西氏の餘黨、耶蘇教を以て民を煽し、肥前の島原に據りて亂を作す。將軍、教を西海の諸侯に下し、板倉重昌を遣して其軍を監し、之を討たしむ。尋いで松平信綱を遣し、水野勝成に命じて、謀を助けしむ。未だ至らず。

十五年、正月朔、重昌、戰死す。信綱、至るとき城陷る。賊の渠帥十餘人を誅す。斬首すること四萬。耶蘇の禁を海内に申ぶ。

十六年、始めて大老職を置き、土井利勝を以て之と爲す。老中の連署を免じて、猶大議に參す。

十七年
十八年
勘定奉行

二十年
後光明天皇
正保元年

慶安四年
家光薨す
三代大猷公
(徳川家光
肖像)

【三郎】信康

逸事
侯伯を集めて之を諭す



十七年、生駒氏、嗣なし。國除かる。

十八年、將軍、長子家綱を生む。是の歳、始めて勘定奉行數員を置き、錢穀を掌らしむ。松平正綱の老を告ぐるを以てなり。正綱は、實は郡吏大河内秀綱の子にして、松平氏を冒す。理財に長じ、三世に歴事す。常に度支たり。嗣子信綱な、秀綱の庶孫にして、正綱に養はる。

二十年九月、天皇、位を皇兄紹仁に讓る。是を後光明天皇と爲す。天皇の正保元年、將軍、次子綱重を生む。後、參議となり、甲斐に封ぜらる。二年、三子綱吉を生む。後、中將と爲り、館林に封ぜらる。

慶安四年四月三十日、將軍薨す。年四十八。日光山に葬る。官位を贈ること前代の如し。大猷と諡す。大猷公、幼にして英偉なり。東照公、之を器とす。臺徳公を戒めて曰く、「嫡を易ふるは亂の本なり。且竹千代後必明將とならん。宜しく速に儲貳に定むべし」と。其保傅を戒めて曰く、「父必其子の己に類するを求むるは、是れ協はざるの原なり。宜しく其器に因りて之を成就すべし。吾が三郎に於ける、終身の憾あり。汝が輩、將軍をして再憾みしむる勿れ」と。長ずるに及びて、聰明勇決にして、恩威並行はる。

東照、臺徳の世は、諸の巨藩、各自優蹇す。其會同する者、將軍或は之を郊迎す。禮分未だ定らず。大猷公の時及びて、嘗て盡く天下の侯伯を大城に召し、自之を諭して曰く、「我が祖考、卿等の力に因りて天下を定む。且其嘗て肩を比べ等を同じくするを以て、故に禮待を加ふ。敢て譜第の將士に比せず。家光に至りては、則 綱祿より己に天下に主たり。自祖考と異なる者あり。今己に統率の任に居て、事權を一にせざるは、宜しき所に非ざるなり。今より卿等を待すること、當に譜第と同じくすべし。若し心に厭かずば、其れ各國に之け。暇を給すること三歳、熟思して去就を決せよ」と。諸侯、みな逡巡して曰く、「敢て

徳川氏勢權
定まる

久世廣之

堀田正盛

世子家綱

酒井忠勝

新番

命を聴かざらんや」と。公乃起つ。入りて内廳に坐し、次を以て諸侯を延ぎ、佩刀を賜ふ。公、便服にて盤坐し、腰に佩ぶる所なし、諸侯、刀を受けて拜す。公曰く、「刀を檢せよ」と。諸侯悚息し、刀を抽くこと寸許、輒退く。是より徳川氏の權勢益々定まる。然れども其皇室に事へて恭順なること故の如し。其再入朝するとき、朝廷、以て太政大臣と爲さんと欲す。公、固辭して曰く、「先臣嘗て此職を叨にす。幸に首領を全くして没することを得たり。臣敢て復せんや」と。公甚だ祖先を敬す。諸老臣、燕に侍して、間言、東照公の事に及ぶ。公輒曰く、「少く之を俟て」と。乃衣帯を改め盟漱し、然る後之を聴く。善く臣下の是非を摘察して輕しく之を口に發せず。黜陟の議あるに遇へば、輒曰く「某の貌此の如く、性此の如し」と。其知る所、諸老に過ぐ。久世廣宣の三子廣之、側衆となりて、權寵あり。公一日、幸に之に問ひて曰く、「汝、今朝諸侯の贈遺を得しか」と。廣之拜して對へて曰く、「然り」と。贈者の姓名及び其物件を問ふ。廣之條對す。公曰く、「未だ盡さざるなり」と。廣之、簿記を懷より取りて之を檢するに果して然り。因りて惶汗して退く。更相告げて相警む。堀田正盛、太田資宗等、春日局の縁故を以て、皆寵任せらる。皆横邪に至らず。時に承平既に久しくし、麾下の風習漸奢侈に趨り、往々自給する能はず。臺徳公の薨する時、遺金を頒賜し、又周く其体を加ふ。婚嫁喪葬、槩皆官より貸るを得たり。而れども猶困乏を告ぐ。世子生れし明年、教あり。盡く麾下の士人、及び諸吏を召す。衆皆當に慶典あるべしと謂ふ。公此日頭痛を患ふ。手巾を以て額を約し、杖に扶けられて出づ。衆に諭して曰く「聞く『汝等困乏極る』と。即明日緩急をらんか。出でて品川に次せんとするも、亦能くす可からざらん。是の如くば、則汝等、吾を何の地に置かんと欲するか」と。因りて太息して泣を下す。衆、能く仰ぎ視るものなし。酒井忠勝、側に在りて賜言して曰く、「諸君、仁を恃み恩に狂れ、上を奉ずる道を忘る。今より以往假貸を容れず。各自量度りて、公上の念を勞しむる勿れ」と。衆、心服して罷む。已にして令を下す。諸士の子弟、年長けて用に堪ふる者は、擧げて番士に充つ」と。因りて俸を賜ふ。又新番を置き、大番の子弟を以て之に充つ。又使を諸道に遣し、

青山宗俊

大久保忠任

名臣朝に盈
つ

松平信綱

民の疾苦を問はしめ、數賑恤の典を擧ぐ。臺徳公の時、青山宗俊、罪を獲て遠江に放たる。公、政を親するに及びて、未だ之を復せらるるに及ばずして配所に死す。乃其子宗俊を召して用る。晩歲、邑を信濃に賜ふ。面諭して曰く、「吾が幼時より、汝の父、忠を盡し誠を輸す。吾れ駿にして意と爲さず。之をして配所に死せしむ。今悔ゆとも及ぶ無きなり。猶將に之を汝に報ぜん」と。庶幾くは其冤魂を慰めん。今より汝我が子に事ふること、猶汝が父の我に事へしが如くなれ」と。君臣、みな嗚咽す。又大久保忠任に肥前の地八萬石を賜ふ。其子忠任に及びて終に舊封に復し、再原小田を鎮せしめ、以て父祖の冤を白にす。天下悦服す。

公の時に當りて、名臣、朝に盈つ。肥後守松平正之、掃部頭井伊直孝、大炊頭土井利勝、讃岐守酒井忠勝、周防守板倉重宗、伊豆守松平信綱、豊後守阿部忠秋等、其最たり。公の世子たりし時より、信綱、忠秋、侍臣たり。公、嘗て屋上の乳雀を見、近臣に命じて往きて之を捕へしむ。屋、將軍の燕室に係る。衆、敢て往くなし。乃信綱を推めて曰く、「汝、年幼くて體輕し、宜しく往くべし」と。信綱、勉強して命に應じ、夜、潜に屋に緣りて之を索め、足を失して庭中に墮つ。譏然として聲あり。將軍、刀を提げ、夫人、燭を執りて出づ。信綱を見て、其來由を問ふ。對へて曰く、「臣、雀兒を覩て之を愛しみ、窺に來り捕ふるなり」と。將軍曰く、「否、是必主使する者あらん」と。窮詰すること再四。而れども告げず。將軍怒り、信綱を巨囊中に内れて、其口を緘し、之を柱に懸けて曰く、「汝、實を首けずば出するを許さず」と。信綱、囊中より之を争ひて且に徹す。且日、將軍出で、朝を視る。夫人、信綱の志を憫み、其飢を慮り、囊口を法き、餓を以て之を啗はしめ、復其口を緘すること初の如くす。日中、將軍、入りて復之を詰る。終に辭を改めず。夫人、固く請ひて之を縱す。將軍これを目送し、夫人に謂て曰く、「孺子、能く是の如し。後必我が兒の羽翼とならん」と。果して其言の如し。

信綱、警敏なること人に絶す。而して能く人に下る。公、嘗て急に一城樓を改造せんと欲す。信綱、工を督

土井利勝

し、一宵にして成る。白紙を以て壁に糊す。新聖の者の如し。利勝、之を譲めて曰く、「成らざれば則已む。是れ人主をして難を下に責めしむるなり」と。信綱謝して曰く、「僕請ふ。終身以て戒と爲さん」と。信綱、嘗て京師に如く。朝旨、徵求する所ありて、十餘條を疏す。信綱盡く其不可を辨じて還る。衆、其敏を稱す。忠勝、之を譲めて曰く、「列世恭順の旨、子、豈知らざるか。何ぞ必しも盡く之を拒むことを爲さん」と。信綱、驚悔して措くなし。

板倉勝重
板倉重宗

公の始めて政を親するや、教を下して曰く、「大小の事盡く東照公の約の如くす」と。伊達政宗、狀を上りて曰く、「東照公、曾て我を百萬石に封す。願くは約の如くせん」と。幕議、之を病ふ。利勝曰く、「掃部頭、能く之を辨ふ」と。乃直孝に命す。直孝、朝より退き、直に伊達氏に詣り、面のあたり政宗を見て曰く、「聞く、公、前代の約を擧げて封を請ふ」と。信なるか」と。曰く、「信なり」と。曰く、「所約は印信あるか」と。曰く、「有り」と。曰く、「蓋し偽ならん」と。政宗曰く、「何ぞ偽と謂ふを得んや。吾れ且之を示さん」と。即ち出して之を示す。直孝、受けて熱視して曰く、「是れ故紙のみ」と。乃扯裂して爐火中に投ず。政宗、色然として駭く。直孝笑ひて曰く、「此の約は、蓋し一時の權宜に出づ。且事既に往く。今乃持して利を要む。何ぞ計の淺きや」と。政宗曰く、「老夫誤れり」と。因りて笑ひて止む。福島氏の封を收むるとき、群議決せず。板倉勝重、直孝を薦めて曰く、「掃部頭は人の足跡を踐まざる者」と。乃直孝を召す。議遂に決を得。勝重、京尹たること年久し。元和中、老を以て職を辭す。臺徳公、優勞し、人を擧げて自代らしむ。勝重曰く、「臣の長兒に若くは莫し」と。乃重宗に命す。重宗、慎密廉平なり。世以て其父に愧ぢずと爲す。公、嘗て疾ありて困劇し、遠近疑懼す。既にして愈ゆ。使を京師に馳せて之を報す。重宗の答書至る。曰く、「臣、游獵すること數日にして歸る。以て奉答稽緩を致す」と。公之を覽て曰く、「京師の驚擾知る可きなり」と。明日、忠勝、入りて其書を覽て曰く、「京師の驚擾知る可きなり」と。侍者、其意を解するなし。忠勝の退くを俟ちて之を問ふ。對へて曰く、「周防守、務めて暇豫を示すは、衆情を鎮むるに非ずや」と。侍者乃服す。其

松平正之

世子家綱

明暦三年大

殉死を禁ず
家綱薨す
【寛永寺】江

上下一心なること、槩此の如し。忠勝、直孝相踵ぎて大老と爲る。信綱、忠秋、少老より老中に進む。而して正之、特に諸老の上に位す。正之は臺徳公の季子たり。公の侍婢孕めり有りて出で、男を其郷に生む。邦俗、端午の節に、男兒ある者は章職を門に樹つ。婢家の職に葵章を用ふる。吏詰りて其故を得たり。證左あり。遂に以聞す。保科正光、子なきを以て請ひて嗣と爲すを得て、名を正之と命す。大猷公、立ちて未だ達せざるなり。公、嘗て鷹を驅郷に放つ。群騎散じて自息ふ。公、近臣數人と微行して邑中の佛寺に入る。寺僧、誰何す。公曰く、「吾れ番衆なり。願くは少く此に息はしめよ」と。僧、與に坐して談る。公、其壁畫の頗雅なるを視て、之に謂て曰く、「貴寺、僻に在り。何を以て是の若きを得る。豈大檀越あるか」と。曰く、「有ること無し。唯、保科氏あるも、亦貧乏にして爲すこと有るに足らず。吾れ聞く、『保科君は將軍の親弟なり』と。小民猶兄弟を恤むを知る。貴人何ぞ情の薄きこと此の如き」と。公、色少しく變じ、從者を目して辭謝して出づ。頃して羣騎至りて將軍を索めて、之を僧に問ふ。僧曰く、「郷に數少年ありて來り息ふ」と。騎曰く、「是將軍のみ」と。僧大に驚き誅を懼る。居ること何も無くして、教あり。正之を山形二十萬石に増封し、松平氏を賜ふ。飄郷の寺に香火の邑を給ふ。後、正之、徙りて會津を鎮し、四位中將に累遷す。性敦實にして學を好む。公、特に之を親重す。公、終に臨みて、諸老を召し、世子家綱を屬す。世子、職を襲ぐ。甫めて十一。天資仁恕なり。時に利勝已に卒す。正之以下、遺命を受けて幼主を輔佐す。敢て慶讓を爲さずして、其長を俟つ。大納言義直、公に先だちて卒す。頼宣、頼房、猶健なり。國に流言多し。明暦三年、江戸に災あり。歳を踰えて滅せず。城郭第舍、延焼して略盡く。物情恟然たり。信綱、忠秋、内外を指揮し、事皆立所に辨ず。忠勝等、協議して盡く諸侯を罷めて國に就き、各其民を撫せしめ、土木を經理し、盡く舊觀に復す。天下復動搖せず。既にして親藩の老臣、前後みな卒す。而して將軍、政を親す。諸侯の質の城中に在る者を各第に還し、殉死を禁ず。職に在ること三十一年にして薨す。寛永寺に葬る。嚴有と諡す。

- 四代殿有公
- 寛永寺
- 増上寺
- 義重、廣忠に贈官
- 大光寺
- 大樹寺
- 五代常憲公
- 六代文昭公
- 七代有章公
- 八代有徳公
- 九代惇信公
- 十代俊明公

是より後、寛永、増上の二寺、徳川氏の塋域と爲る。初め東照公、祖先に事ふるに甚謹む。後陽成帝、嘗て公に賜ふに菊桐の章を以てせんと欲す。辭して曰く、「此れ已に足利氏に賜ふ。新田氏の榮に非ざるなり。臣自葵章あり。天恩、苟も微勞に酬いと欲せば、伏して願くは、臣の祖先を録し給へ」と。乃、詔して、上祖義重に従四位下鎮守府將軍を、父廣忠に正二位大納言を贈らる。其歳、臺徳公と偕に上野に獵し、土井利勝等をして新田、世良田、徳川の諸邑に如き、其父老に問はしめて義重、義貞の故址を得、一寺を建て、大光と曰ひ、以て詔書を奉じ、參河の大樹寺と與に皆勅願寺に准す。臺徳、大猷の二公、益祖先を敬す。故を以て後嗣、親、兩壘を拜するを以て常務と爲す。上野、三河の如きは、則使を遣して祀を修む。而して在職の中、必一たび日光廟に詣づるを以て重典と爲す。



弟、中將、諱は綱吉、館林より入りて職を紹ぐ。二十九年にして薨す。常憲と諡す。從子中納言、諱は家宣、甲斐より入りて職を紹ぐ。四年にして薨す。文昭と諡す。世子、諱は家繼、職を襲ぐ。四年にして薨す。有章と諡す。嗣なし。頼宣の孫中納言、諱は吉宗、紀伊より入りて職を紹ぐ。大に曾祖の政を修め、精勵して治を爲す。釐革する所多し。天下號して徳川氏中興の主と爲す。三十年にして職を辭し、後六年にして薨す。有徳と諡す。世子、諱は家重、職を襲ぐ。十七年にして薨す。惇信と諡す。世子、諱は家治、職を襲ぐ。二十五年にして薨す。俊明と諡す。俊明公以上、嚴有公に至るまで、官位に叙任すること、概常例あり。世子たる時は、正三位に叙し、大納言に任す。大將軍を襲ぐに及びて、正二位に進み、内大臣、右大臣に累遷し、右近衛大將を兼ね、薨するに及びて、正一位大相國を贈り、諡を賜ふ。其軍職帯ぶる所皆同じ。大納言以前の叙任は、源氏、足利氏の故事の如し。而して天使就きて拜す。天下に布告するは、大納言より始る。

- 田安
- 一橋
- 清水
- 省卿八省
- の長官、宗
- 武右衛門
- 督、宗尹は
- 刑部、卿重
- 好、宮内卿
- 十一、代家齊
- 將軍
- 世子家慶

徳川氏の天下を取るに在り

初め有徳公、後世の爲に深く慮り、世祿の中に就きて、官俸の増減法を立つ。其二子を祿するに及びて、復封土を建てず。慶長十萬石を給し、第を田安、一橋に賜ふ。惇信公、亦例に沿ひ、其一子を祿し、清水に第し、皆省卿と爲す。俊明公、嗣なきに及びて、今の公、一橋より入りて世子と爲る。名は家齊と曰ふ。實に有徳公の曾孫なり。職を襲ぐに及びて、復其政を修む。賢に任じ能を使ひ、百廢悉く舉る。在職最久し。左大臣に累遷し、終に太政大臣に拜す。固く辭すれども命を得ず。又世子家慶を以て從一位内大臣に進む。是に於て、掃部頭井伊直亮、越中守松平定永をして、入朝して恩を謝せしむ。源氏、足利氏以來、軍職に在りて太政の官を兼ねし者は、獨公のみ。蓋し武門の天下を平治すること、是に至りて其盛を極むと云ふ。

外史氏曰く、吾れ嘗て江戸に遊び、其城闕の壯、侯伯の邸第の夥しきを觀る。既にして東海を歴て、尾濃の間に彷徨し、北は信越の諸山の綿互重疊として來り、進に京畿に赴くを望む。而して其南は沃野洪濶、參遠と接す。眞に天下の衢路なり。千軍萬馬の馳驟せしを想見す。今、邸を布き第を列ぬる者、其初皆嚮背を此に決せしなり。蓋し、源氏以還、治ること少く、亂ること多し。群雄並峙し、分裂梗塞せしこと、其幾百歳を閲せしかを知らず。而して今吾れ緩帶垂囊、糧を齎さずして行くは、則誰の力ぞや。世の論者、或は大阪の事を病へて、東照公の徳を累すと爲す。此れ時勢を知らざる論なり。吾れ曰く、「公の天下を取りしは、大阪に在らずして關原に在り。關原に在らずして小牧に在り。夫れ公は織田氏の屬國なり。而して太閤は其將校なり。太閤は織田氏の將校を以て身を起し、乃其君の遺孤を欺き、之を加ふるに兵を以てせんと欲せり。諸同列、其力を畏れ、其惠を私し、遂巡して敢て争ふものなかりき。而るに公、獨毅然として弱を扶け、強に抗し、野次の一戦に其二驍將を得たりしは、固より以て英雄の膽を破りて天下の心を服するに足れり。是の時に當りて太閤、據れる所は近畿の諸州に過ぎず。互合烏集、人々觀望を懷けり。而して公は參遠膠漆の民を以てし、加

禍福一に決
を我に取る

天下を推し
徳川氏に
貽る

ふるに甲信精銳を以てす。勳舊忠義の士、雲の如く雨の如し。和親をして成らしめず、兩姓をして兵を構へしめば、天下の事未だ知る可らざるなり。

昔者、曹操、劉玄德に謂ふ、「天下の英雄は、唯君と我とのみ。袁本初の輩は論ずるに足らず」と。今太閤を以て柴田勝家等を視るは猶操の本初に於けるが如し。而して其公を憚かりしこと、當に玄德のみならず。宜なり、其辭を卑くして禮を厚くし。百方和を講ぜしは。是れ太閤の至計、以て速に天下を取りし所にして、天下の權は已に徳川氏に在り。何ぞや。我れ戰勝ちて、彼れ和を求む。求むる者は彼れに在り。許す者は我れに在り。我れ和せんと欲せば、則ち和し、戰はんと欲せば、則ち戰ふ。安危禍福一に決を我に取る。我れ已に天下の權を有たざらんや。

唯夫れ權我に在り。是を以て班爵の崇、封土の隆、之を天下侯伯の右に置かざるを得ず。太閤の末路、兵を外に連ね、士を内に亂る。而して之を能く定むること莫し。能く之を定めし者は公のみ。太閤一たび瞑して、天下を制馭する者は公に非ずして誰ぞ。是れ其勢智者を待ちて而して後知るにあらず。特に未だ釁有らざるのみ。

關原の事は、是れ群雄相聚り、天下を推して徳川氏に貽りし者なり。何となれば、則ち彼れ自釁を開きて我を以て之に乗せしめたるなり。我れ天下に辭あり。天下誰か能く之を禁せん。是に於て、朝廷之上將の任を授けて、天下の侯伯を統べしむ。會同朝聘、東に於てせざる莫し。則ち大阪は徒一侯國の坐食するのみ。公、既に織田氏の孤に忍びず。寧ろ復豊臣氏の孤に忍びんや。蓋し以て善く之を處せんこと有るを思ふ。而れども、彼に察せずして、專猜疑を挟み、再、自釁を開きて其覆滅を速にす。公に於て何ぞ累せん。公、雄武老練なる、太閤と雖、其畏るゝに所に非ず。況や當時の群雄に於てをや。直に之を見童視す。而して何ぞ驕婦駿孺に有らんや。而るを公、謀を蓄へ慮を積みて之を斃せりと謂ふは、皆事情を知らざる者なり。公、少小より隣國に轉質し、已に艱虞を極む。其國に主たるに及びて、又境を勁敵に接し、百戰して鋒を爭ふ。

三氏天下を
取るの異同

徳川氏盛業
の原因

寸攘尺取して纒に五州を定む。而して織田、豊臣氏は其間を以て近畿を奄有し、暴に強大を致す。蓋し公を以て遲鈍と爲さざる無し。天の公を成す所以は乃是に在るを知らず。二氏の天下に於ける、唯速に之を得たり。故に速に之を失へり。公未だ嘗て天下を取るに急ならずして、天下の釁毎に以て公を開くに足る。嗚呼。是れ其長く天下を有ちて、以て今日の盛業を基せし所以なるか。

外史氏。曰吾嘗遊三江戸。觀其城闕之壯。侯伯邸第之夥。既而歷三東海。徬徨尾濃之間。北望三信越諸山綿互重疊而來。迤赴三京畿。而其南沃野洪濶。與三參遠三接。眞天下之衢路。想見千軍萬馬之馳驟。今之布三邸列三第者。其初皆決三嚮背於此也。蓋源平以還。治少亂多。群雄基峙。分裂梗塞。不知其閱三幾百歲。而今吾緩帶垂橐。不齎糧而行焉。則誰之力邪。世論者或病三大阪之事。爲累三東照公之德。是不知三時勢之論也。吾曰。公之取三天下。不在三大阪。而在於三關原。不在三關原。而在於三小牧。夫公織田氏屬國也。而太閤其將校也。太閤以三織田氏將校一起身。乃欺三其君之遺孤。欲三加之以三兵。諸同列畏三其力。私三其惠。逡巡而莫三敢爭。而公獨毅然扶三弱而抗三強。野次一戰。獲三其二驍將。固足以破三姦雄之膽。而服三天下之心。當是之時。太閤所據不過三近畿諸州。瓦合烏集。人懷三觀望。而公以三參遠膠漆之民。加以三甲信之精銳。勳舊忠義。如雲如雨。使三和親不成。兩姓構三兵。天下之事。未可三知也。昔者曹操謂三劉玄德。天下英雄。唯君與三我。袁本初輩不足三論。今以三太閤視三柴田勝家等。猶三操之於三本初。而其憚三公也。不三管玄德。宜其卑三辭厚三禮。百方講三和。是太閤至計。所以速取三天下。而天下之權。已在於三徳川氏矣。何哉。我戰勝。而彼求三和。求者在三彼。許者在三我。我欲三和則和。欲三戰則戰。安危禍福。一取三決於三我。我不三已有三天下之權。也邪。唯夫權在於三我。是以班爵之崇。封土之隆。不三得三不